

---

# HEAVEN ~ 大いなる意思編 ~

散葉枯葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HEAVEN〜大いなる意思編〜

### 【Nコード】

N0539B

### 【作者名】

散葉枯葉

### 【あらすじ】

貴方は、運命を信じますか？人が予め定められた運命によって生かされているとすれば、それを覆すことは、不可能？貴方は、神の存在を信じますか？愚かな人々を統べ、この世を樂園とするには、神による絶対の支配が、不可欠？もしもそう問われれば、彼らは『否』と答えるでしょう。自分の運命に向き合い、仲間とともに世界を救った英雄の、歴史に残らぬ戦いが、今、幕開ける。【只今長期連載休止中です。再開まで今しばらくお待ちください】

## prologue 恒久の平和

太陽は燦々と頭上に輝き、風が心地よい若草の匂いを運んでくる。四百年前には狂った一人の人間の手により、そして十年前には魔物と呼ばれる異形の生物により、崩壊の危機に瀕したこの世界も、今ではその痛手を取り越え、人々はようやく手にした平和な時を生きていた。

それが、束の間のものだとも知らずに。

「ついに……ついに、この時が来たんですね……『大いなる意思』」

……」

茶色の長い髪を、緩やかに流れる風に遊ばせていた美しい女性が、中央に立つ白髪の男に声をかける。

「いよいよ始まるんだね、僕たちの戦いが。……ねえ、今どんな気持ち？」

左の背に純白の翼を持つ、桃色の髪の少年が言う。紫色の瞳を細めて、どこか楽しそうに、嬉しそうに。

「……時は、すでに動き出した。俺には、もう残る時間もあまりないからな……」

透けるような白い肌に尖った耳という珍しい外見の男が、鋭い琥珀色の瞳を遥か彼方へと向けた。

「……我々の戦いは、この世界を守るための戦いだ」

三人を従える男が、静かに告げた。白髪に、冷たい金色の瞳。降り注ぐ太陽の光の中、佇むその姿は、神々しい。

「……後戻りは、できん。それでも、私に従うか？ この世界の総てを敵に回したとしても……それでも、私とともに……歩む覚悟はあるか？」

男が振り返り、そう問えば。三人は、唇に微か、笑みを浮かべてみせた。なにを今更、とでも言いたげに。

「すでに覚悟はできております。この命の一欠片まで、貴方のため

……」

「それこそ愚問、だよ。僕の道は、もう決まってるんだから」

「……借りは、返すと約束したはずだ。そしてその時は、まだ来ていない」

それぞれの答えを聞き、白髪の男はふつと笑う。そしてまた三人に背を向け、男は眼下に広がる緑豊かな大地を眺めた。

「……この世界を……愛する者を守るためならば……たとえ悪魔と誹られ、蔑まれようと構うまい……」

詠うように。静かな決意の言葉を男は紡ぐ。

「……征くぞ」

その言葉とともに、男は歩き出した。

この世界に、恒久の平和を与えんがために。

## 第1話 三光の庭園で - 1 -

「……参ったな」

軽いため息とともに呟き、青年は木々に遮られ、光射さぬ空を仰いだ。

短く切られたワインレッドの髪、やや垂れ目な同色の瞳。銀色の鎧に、紅いラインの入った白いサーコートを身に纏っている。

それほど美形でもないし、目立った風貌でもないが、どこか印象的な青年だった。

青年の名は、レヒト。彼は、この世界で最も広大な領土を誇る連邦制の国家、魔界の評議会議長であるラグネス・クリスティーヌの護衛役を務めている。

そんな彼は現在、魔界の首都であるロイゼンハウエルの上空を浮遊する天上の楽園、天界にいた。正確には、天界城の東に位置する森の中に。

天界は魔界の遥か上空を浮遊する、世界の中心とも謳われる美しい空中都市だ。

彼がなぜ魔界から遠く離れた天界の、それも鬱蒼とした森の中を彷徨っているのかと言うと。

事の発端は、一時間ほど前に遡る。

「つまり……魔法研究所の所長をここまで連れて来いと、そういうことですね？」

レヒトの言葉は冷たかった。ついでに棘も生えていた。

彼の名誉のために訂正しておく、レヒトは決して無愛想な人間ではない。たった今、投げ捨てたのである。

冷たい眼差しを向けられながらも、目の前に座る男は動じた様子もなく、心底楽しそうに笑った。

「そういうことだ」

豪華な椅子にゆったりと腰掛け、レヒトを見下ろすこの男は、天魔大戦の英雄にして、現在の天界最高責任者でもある、レイ「クリスティー」又その人である。

世間では戦乱を終結に導いた、高潔な魂の持ち主で、聖人君主と誉れ高い人物……のはずなのだが。

「美化されすぎだ……！」

思わず声に出た。

「おい。今、なんか俺に失礼なこと言つたろ」

小声だったので聞こえないだろうと思つたが、ばつちり聞こえていたらしい。きつと、自分の悪口だけはどんなに小さな声でも聞き逃さないタイプだ。

「……なんでもございません」

軽く視線を逸らして答えると、レイはまあいいか、と笑つた。

微笑んだのではない。にやり、といった感じの笑い方だ。嫌味なほどに整つた顔に、悪戯を思いついた子供のような笑みが浮かぶ。

「重要会議を盗み聞いた罰にしちゃあ、優しいもんだろ。なあ？」

周りに座る重役——であろうおっさんたちに、レイは視線を投げかける。無論、明確な同意の言葉はなく、曖昧な笑みが返ってくるだけだが。

「俺、偶然廊下を通りかかっただけです。そもそも会議なんて盗み聞いてません」

天界で開かれる会議に出席する主に伴われ、レヒトはここ天界城へとやってきた。そして偶然、この部屋に面した廊下を一人歩いていたところを捕まつたのである。

周りのおっさんたちは、この人の悪い最高責任者に遊ばれる哀れな犠牲者に、同情と哀れみの視線を注いでいた。その瞳は皆一様に『諦める』と訴えている。

「研究所は城の北東にある森——『三光の庭園』を抜けた先だ。地図は……いらねえよな？　なくしちゃつたし」

聞く耳持たぬ様子のレイに、レヒトはこれでもかと盛大にため息

を吐いた。

「レイ様、拒否権という言葉をご存知でしょうか」

「知らね〜な」

レイはヒラヒラと手を振った。楽しくて仕方がない、といったように。

「なんでもいいから行って来いっての。これ以上駄々をこねるってんなら、命令違反ってことで会議にかけるぜ？」

そう宣言して、レイは天使のような笑顔を見せた。

もちろんレヒトにとっては、死神の微笑以外のなにものでもなかった。

——とまあ、半ば強制的に押し付けられ、こうして研究所に向かっているのである。

魔界評議会議長の護衛役であるレヒトが、主の指示を仰がずに違う国の最高責任者の命令に従うのか、疑問に思う方もいるかもしれない。だが、これは当然のことだったりするのだ。

この世界の中央に位置し、世界の象徴とも謳われる天界。大した戦力を保持していない魔界は、天界と同盟を結び、事実上、その保護下に入る形をとることにより自立を保っている。つまり、魔界評議会議長といえども、天界最高責任者には逆らえないのである。

実際にはもうひとつ理由があるのだが、それは後述することにする。

「はあ……なんでこんなことしてるんだか……」

愚痴を溢しつつ、行く手を遮る太い蔓を短剣で切り裂く。

その向こうに広がっていたのは、異様な光景だった。

（これは……石像？）

森の中に、突如として現れた石像群。

大地も、草木も——そこにあるもの全てが石で出来ていたのである。

人の手で作り上げたにしてはあまりにも精巧で、滑らかな石像。

細い枝に茂る葉の一枚一枚の、風にそよぐその動きまでも、忠実に再現されている。

まるで——そう、まるで森の一部を、そのまま石化してしまったかのように。

歩き出そうとしたレヒトの背後で、微かな物音がした。

それとほぼ同時に、背筋に冷たい感覚が走る。

（っ！？）

レヒトは反射的にその場を飛び退いた。その瞬間、眼を焼くような閃光が周囲に走る。

見れば、先程までレヒトが立っていた場所の大地や草木が、一瞬にして石と化していた。

「なっ……っ？」

そしてその向こう——木々の間に蠢く、怪しい影。

その正体を悟って、レヒトは思わず息を呑んだ。

「……冗談だろ？」

口を吐いた言葉に反応したように、影はゆっくりと木々の間からその姿を現わす。

「ゴーゴン……」

レヒトは呻いた。ゴーゴンとは『美しい女』という意味である。

その名の通り、人間の女性の上半身と、大蛇の下半身を持つ美しい魔物だ。彫像のような顔を彩る長い髪は、黒光りする鱗を持った無数の蛇。濡れた硬い鱗に覆われた肌は、鋭い刃をも寄せ付けない（この石像群はこいつの仕業か……）

ゴーゴンが恐るべき魔物と呼ばれるのは、その特殊能力、邪眼のためだ。額にある第三の瞳から放たれる光は、浴びたものの全てを石化させる。

初撃を避けられたのは、幸運というべきか。

ゴーゴンはその美しい顔をゆっくりとレヒトのほうへ向けた。

長い睫毛に縁取られた額の瞳が開き、血のような紅がレヒトを映す。

レヒトは全身が総毛立つのを感じ、とっさに近くの大樹の陰へと飛び込んだ。

見開かれた瞳から放たれた閃光——邪眼の直撃を受ければ、瞬時にして石像の仲間入りだ。

身を潜めた大樹の陰から、レヒトはゴーゴンの様子を探る。

（とにかく、あの眼を潰すことだ）

瞳を見開いてから邪眼を撃つまでに生じる、一瞬のタイムラグ。そして獲物に狙いを定めるその瞬間だけ、ゴーゴンの動きが止まる。（……それなら！）

レヒトは大地を蹴り、躊躇うことなくゴーゴンに向かって一直線に走り出す。

ゴーゴンは目の前の愚かな獲物に狙いを定め、その紅い瞳を見開いた。

（今だ！）

レヒトは懷に忍ばせた小さな短剣を、見開かれたゴーゴンの瞳めがけて投げつけた。

「ッギヤオオオオオ！」

至近距離から放たれた一撃は、狙い変わらずゴーゴンの瞳に突き刺さり、美しき魔物は絶叫を上げた。

「はあああっ！」

仰け反り、隙を見せたゴーゴンの胸に、大地を蹴り、その勢いを利用して、レヒトは渾身の力で剣を突き立てた。

急所を狙ったその一撃。しかし狙いは、わずかに逸れたようだった。

（まずい……逸れたか！）

空中で体勢を立て直し、着地したレヒトを、間髪入れずに鞭のよなな尾が襲う。

「ぐあっ！」

その凄まじい衝撃に、容易く弾き飛ばされる。

とっさに受身をとることも出来ず、邪眼で石化した大樹の幹へと、

強かに身体を打ちつけた。

「……………」

視界が歪み、意識が遠退く。立ち上がるうとするも、力の抜けた身体は言うことを聞かず。

怒りの咆哮を上げながら、ゆっくりと近づいてくる魔物を、焦点の定まらぬ眼で見上げながら、レヒトは死を覚悟した。

(……………ここまでか……………)

ゴーゴンの鋭い爪が、まさにレヒトに振り下ろされようとした、その時。

「いつくよお！」

底抜けに明るい——どこか楽しそうにも聞こえる声が響いた。食事を邪魔されたゴーゴンが、声の主の姿を確認するよりも、早く。

風が、変わった。

## 第2話 三光の庭園で - 2 -

「プチサイクロン！」

その声に、弾かれたように。

穏やかに周囲を流れていた風が、鋭い刃と化してゴーゴンに襲いかかった。

なにが起こったのか、理解する間もなく。

美しき魔物は、断末魔の悲鳴すら残せず塵と化す。

レヒトはただ、その情景に眼を奪われていた。

「やった、やったあ！ レイヴンの勝つちい！」

呆然とするレヒトの前に降り立った、小柄な人影。それはまだ、顔つきに幼さを残す子供だった。

年の頃は十代前半から半ばといったところか。長い銀の髪に猫のような金色の瞳の、なかなか可愛い子だ。神官のような白いローブを身に纏い、自身の身長よりも大きなスタッフを構えている。全体的に色素の薄い、どこか儚げな印象を与える外見だった。

「君が今のを……助かったよ、ありが」

レヒトが言い終える前に、目の前の子供はビシッとレヒトにスタッフを突き付けて言い放った。

「ここは関係者以外立ち入り禁止だよッ！ レイヴンが助けてあげなかったら、死んじゃってたとこなんだからねッ！」

少々、受ける印象とは違う性格のようだ。

呆氣にとられたレヒトを前に、レイヴンと名乗った子供は一気に捲くし立てた。

「ただでさえ、最近は変な魔物がいっぱい出てきて大変なのにさあ……。ま、あんなのレイヴンがいればよーだけどねー！」

一頻り喋り、レイヴンはえへんと自信満々に胸を張った。

「あ……ああ、うん、それはわかった。よくわかった」  
ようやく復活したレヒトが答える。

「君が来てくれなかったら、死んでいた」

レヒトの言葉に気を良くしたのか、レイヴンはにっこりと笑って見せた。

側に落ちていた剣を拾い上げて鞘に戻し、レヒトは立ち上がる。まだ多少身体は痛むが、幸い、大した怪我はないようだ。頑丈さはレヒトの取り柄である。

「……君は、なぜこんなところに？ 危険……まあ、あんな魔法の使える君は大丈夫なのかもしれないが、それでも一人では危ない」

子供なんだし、とレヒトは小声で付け加えた。

「ふふ〜ん、あんなのちつとも怖くないよ」  
レイヴンは鼻高々に言った。どうやらレヒトの呟きは聞こえなかったようだ。

「だって、レイヴン強いし。ほら〜、俗に言う天才ってやつ？ あんな魔物……」  
「待った」

レヒトはレイヴンの言葉を遮った。そのまま周囲に視線を走らせる。

「え？ なになに？ どうかしたの？」

レイヴンはなにも感じていないようだ。しかしレヒトの頭は激しく警鐘を鳴らしている。なにかがおかしい、油断はするな、と。

「いや……説明できるようなものじゃないんだ。けど、妙じゃないか？ 鳥のさえずりが聞こえないなんて……」

その言葉が終わらぬうちに、不意に生まれた殺気を感じし、二人はほぼ同時に飛んでいた。

レヒトは右に、レイヴンは左に。目標をなくした炎の弾はそのまま真っ直ぐに飛び、石化した大樹の幹に当たって爆発した。

衝撃で石の大樹は砕け散り、飛来する無数の破片を、レヒトは手で叩き落す。

森の静寂を破るのは、低い獣の唸り声。

レイヴンの掲げるスタッフの先に煌々と宿った魔法の光が、薄暗

い森の中に潜む獣の姿を映し出す。

シルエツトは、直立した狼にも見えるだろうか。その背にボロ雑巾のような闇色の翼を持つ魔物——ブロウ・デーモン。

大抵は群れで行動し、知能もそこそこにある。鋭い牙と爪、そして炎の弾を口から吐き出して攻撃する、最下級の魔物である。

最下級の魔物とは言っても、それは他の魔物——先程のゴーゴンなどと比較してのことであり、一般的な兵士や傭兵にとっては、その力はまさしく脅威。十年前の大異変などでは、このブロウ・デーモンの群れによって壊滅的な被害を受けた街も多かったという。

「……ここは、こんなに魔物が活動的なのか？」

「まあね、さつきもブロウ・デーモンの群れと遊んであげたところ」最近になって、再びヘヴンの各地に魔物が出没するようになったと主から聞かされてはいたが、これだけ短時間、そして狭い範囲内で何度も魔物に遭遇するほど、事態は深刻になっていたということか。

「おいおい……『三光の庭園』は三闘神に祝福された神聖な場所……のはずだよな」

遙か昔にヘヴンを創造したとされる三人の神々——三闘神。その三闘神が最初に降り立った場所と伝えられるのがこの地、『三光の庭園』なのである。

「そのはずなんだけどね……けど、つい最近だよ。こんなにいっぱい見かけるようになったのは」

スタツフで肩を軽く叩きながら、レイヴンが答えた。

「ま、だいじょーぶでしょ。そんなにいっぱいいいないしね」

なにを基準に『そんなにいっぱいいいない』との言葉が出てくるのかは不明だが、目の前にいるデーモンの群れは、軽く見積もって二十といったところだろうか。

「そんじゃ、頑張つてねえ」

いつの間にか、近くの大樹の枝に腰掛けたレイヴンが、にこにこ笑いながら告げた。

「……一応聞いておきたいんだが」

飛んできた火炎弾を、身を低くしてかわしながら、レヒトはレイヴンに声をかける。

「なあに？」

レイヴンは完全に観戦モードである。

「拒否権って知ってるか？」

「レイヴン、そんなムズカシイこと知らなあーい」

おどけた口調で返してくる。

なにか言い返してやろうかとも思ったが、百倍になって返ってきたのでやめておくことにした。

「……今日は厄日か？」

軽いため息とともに剣を抜き、レヒトは魔物の群れの中へと躍りこんだ。

「ま、こんなものだろう」

剣に付着した血を払い、鞘に収める。

周囲には物言わぬ肉塊と化した魔物が転がり、強烈な臭気を放っていた。

レヒトは魔法こそ使えないものの、その剣の腕は決して並ではない。

「すごい、すごい！」

あっさりと魔物の群れを撃破してみせたレヒトに、レイヴンは感嘆の声を上げた。

「やばそうだったら援護したげよっかなあって思ってたんだけど、見た目によらずすごいんだねー！」

笑いながらそう言って、ふわりと木の枝から飛び降りる。

「見た目によらずはお互い様だ」

今度は聞こえるように言っただけだったが、耳には入らなかったようだ。どうやら自分にとって都合の悪いことは一切聞こえないらしい。

(……似てる……)

先程会った性格破綻の最高責任者が思い出されて、レヒトの眉間に皺が寄った。

「な〜に怖い顔してんのお？」

顔を覗き込まれ、レヒトははつとした。猫のような金色の瞳。覗き込めば吸い込まれそうなほどに、深く、澄んだ眼差し。

「あ、いや……なんでもないんだ」

照れたようにレヒトは頬を掻き、軽く咳払いして続けた。

「それでもラグネス様の護衛をやってるんだ。腕には、それなりに自信がある」

「ラグネス？ ……それって、魔界評議会議長のラグネス・クリスティヌ？」

「ああ」

レヒトが頷くと、レイヴンは意外そうな顔をした。

「じゃあ、お迎えって……ふうん……そっかあ」

なにやら小声で呟く。

「そうすると、目的地は一緒みたいだね。案内したげるよ。レイヴンもそろそろ帰ろうと思ってたところだし」

それにきつと迷子になるから、と付け加える。

実はすでに迷子だったりしたのだが、それは黙っていることにした。こんな入り組んだ森に地図も持たずに入ったのはレヒトなのだが、そこはそれ、悪いのはすべて地図を紛失した拳句、なんの情報も与えずに放り出したレイである。

「ありがとう。けど、なんでわかったんだ？」

「なにが？」

「俺の目的地が魔法研究所だったことさ」

レイヴンは悪戯っ子のような笑顔を見せた。

「それは行けばわかるよ。早く行こう！」

そう言って、鼻歌交じりに歩き出すが。

「あー！」

なにかを思い出したように声をあげると振り返り、ぱたぱたと走り寄ってくる。

「そういえば、まだ名前、聞いてなかった」

レヒトもすっかり忘れていたが、まだお互いに名乗ることすらしていなかった。

「んつとね、レイヴン」カトレーヌだよ」

「俺はレヒト。よろしく、レイヴン」

そう答えて差し出したレヒトの手を、レイヴンはぎゅっと握り返して。

「よろしく！」

元気いっぱい、笑った。

### 第3話 魔法研究所の夜

「着いたよ」

たったかと軽やかに前を進んでいたレイヴンが立ち止まり、くりとレヒトのほうに向き直る。

元気いっぱいレイヴンとは対照的に、レヒトは肩で息をしている。

「情けないなあ」

楽しそうにそう言っ、呼吸を整えているレヒトの頭をぺしぺしと叩く。

「……お前が……おかしいんだって……」

ほとんど小走りに近いレイヴンの歩調に合わせて、半日近くも森の中を歩き続けたのだ。

途中で何度かブロウ・デーモンの群れとは遭遇するわ——もちろん、やる気のないレイヴンの代わりにすべてレヒトが撃退した——  
蔦やら木の根やらに足を取られるわで散々な目にあった。

城を出た頃には高かった日も、今では淡い光を放つ月へと変わっている。

「早く行こう！ レイヴン、お腹空いちゃった！」

レヒトの苦労もなんのその、レイヴンはぱたぱたと走っていった。

「……やれやれ……」

小さく呟き、レヒトは月明かりの中に佇む、巨大な建造物を見上げた。

壮麗な造りの天界城と違い、至ってシンプルな外観。  
もう真夜中だというのに、窓からは光が漏れている。

ここがレヒトの目的地である魔法研究所。

魔法とは、ヘヴンに満ちる『精霊』と呼ばれるエナジーを行使して発動させる技のことを言う。

そのため魔法は本来、精霊を感じることでできる限られた種族に

しか扱えない。

魔法について、一般的に知られているのはこれだけである。

というのも、魔法を扱える者が相対的に僅少なため、まだ魔法や精霊などについては謎が多く、ここ魔法研究所では、魔法と精霊にまつわる謎を解明するべく日夜研究が行われているのだ。

「なにやってるの？ ほら早く〜！」

「ああ、今行く」

レイヴンに促され、レヒトは後を追った。

「たっだいまぁ！」

勢いよく扉を開くレイヴン。研究所内が静かなのとも相まって、かなり派手な音がした。慣れているのか、はたまた研究に没頭しているのか――研究員たちは大した反応を示さなかった。

「おや、おかえりなさい」

奥から現れた男性が、優しい微笑を浮かべてレイヴンを出迎えた。

「……お邪魔、します」

遅れて現れたレヒトに視線を向け、男性は軽く会釈した。

「初めまして、ようこそ魔法研究所へ。私はガルヴァ「ロザイン」と申します。所長の補佐役を務めております」

そう言って、ガルヴァと名乗った男性は微笑んだ。

緩く三つ編みにされた長い水色の髪に、金色の瞳。年は三十に届くかどうか、といったところだろうか。眼鏡の奥の瞳は、穏やかな光を湛えている。

（この人……誰かに似てる……）

優しい、穏やかな眼差しが、誰かを彷彿とさせた。

「俺はレヒトです。ええと……なんというか、天界最高責任者の命令で……」

「ええ、知ってます。所長を説得してこいって無理難題を押し付けられたんでしょう？ 貴方でちょうど二十と五人目ですよ」

言葉を濁すレヒトに対し、ガルヴァはあっさりとそう言った。

「……はい？」

「いや、今度の犠牲者はどんな人なんだろうかと楽しみにしていたんですが、まさかレイヴンが自分から連れてくるなんて思いませんでしたよ」

これで老後の楽しみが減ってしまいますねえ、とガルヴァは大袈裟にハンカチで涙を拭う仕草をしてみせた。

「ちょ、ちょっと待って。どういう意味ですか？ その犠牲者っていうのは……」

「おや、違いました？」

ガルヴァは首を傾げた。

「レイヴンが連れてきたものですからてっきり……。あ、じゃあひょっとしてアレですか？ レイヴンを僕にくださいっていう。駄目ですよ、レイヴンは私のです。あげません」

「いや、だからそうじゃなくて……」

いまいち噛み合っていない会話。どうしたものかとレヒトが思い悩んでいると、話の種になっているレイヴンが欠伸交じりに突っ込みを入れた。

「レイヴン、ガルの子供じゃないし。しかも話が全然噛み合っていないし」

（……この人とじゃ、誰でも噛み合わない気がするけどな……）

レヒトはそつと心の中で呟いた。

「なんでもいいから、とりあえずご飯食べながら話そうよ。レイヴン、もうお腹ぺっこぺこ！」

レイヴンが言うと同時に、空腹を告げる虫がきゆるきゆると鳴いた。

「そうですね。だいぶ遅くなっちゃいましたがお夕飯にしましょうか。レイヴンの好物を用意しますよ」

「やったあ」

ばんざーい！ と両手を挙げるレイヴンに、ガルヴァは柔らかい笑みを見せる。まるで親子のようだとレヒトは思ったが、レイヴン

の言葉を聞く限り、血縁関係はないらしい。

「レヒトさんも、ご一緒にいかがですか？」

今日一日、朝からなにも口にしていないレヒトに、この申し出を断る理由などないわけで。

「遠慮なく頂きます」

しかし、この言葉を後に死ぬほど後悔するはめになることに、レヒトはまだ気付いてはいなかった。

「……」

やや引き攣った表情で、レヒトは皿の上に載せられた物体に視線を注いだ。

バターと蜂蜜とブルーベリーとイチゴのジャムが、これでもかとはばかりにかけられたパンケーキ。

「食べないの？」

この見るからに甘いパンケーキに、レイヴンはさらにクリームを載せて——断じて『かけて』ではない——食べていた。

「……」

レヒトは甘いものが嫌いなわけではないが、さすがにキツイものがある。

いや、好きだからこそまだ耐えられるわけで、嫌いな人間であればこの匂いだけで胸焼けを起こすこと間違いない。

「おや……甘いもの、お嫌いでしたか？」

「……決してそんなことは」

「ないはずなんですけどね……」と続く言葉は自信なさげに消えた。

しかし『出された食事は残さず食う』がレヒトの信条である。

とりあえず覚悟を決めて、皿の上のパンケーキに手を伸ばした。

「そういえば……ガルヴァさんは所長の補佐をお務めなんですよね？」

「ええ、そうですよ」

「それじゃあ、会わせて頂くわけにはいきませんか。なんでこんな

ことになってるのは、よくわからないんですけど……一応、任務なんで」

レヒトがそう言うと、ガルヴァとレイヴンは顔を見合わせて笑った。

「ふふ……そうですね、紹介しましょう」

ガルヴァは椅子から立ち上がり、レイヴンの横に立つ。

「こちらが、所長のレイヴンⅡカトレーヌ教授です」

「……は？」

しばし部屋に流れる沈黙。

その間、レヒトは相当に間の抜けた顔をしていたに違いない。

「……レイヴンⅡカトレーヌ……教授？」

「うん」

あっさりと。小さく切り分けてもらったパンケーキをフォークで突き刺しながら、レイヴンは答えた。

「さ、最初に会ったときに言ってくれば……」

レヒトが言うと、レイヴンは、え？ と頬を膨らませた。

「だって、それじゃあ楽しくないじゃん！」

「レヒトさんはなかなかいい反応でしたね、レイヴン」

「ね〜！」

楽しそうに笑い合う二人。

「……今までの苦勞は……」

ぱたりと机に突っ伏して、レヒトは涙ながらに呟いた。

「あ」

レイヴンのあげた声で、沈んでいたレヒトの意識が浮上した。

「どうした？」

「レイさんから通信」

「通信？」

聞きなれない単語に、レヒトが首を傾げると、レイヴンはまあ見てなよ、と笑う。

レイヴンがその小さな指に詰められていた指輪を外して机の上に置くと、指輪から淡い光が溢れ、それはゆっくりと人の姿を形作っていた。天界最高責任者レイ・クリスティーヌの姿を。だいぶ縮小されてはいたが。

「……これは……」

『よお、無事に辿り着けたみてえだな』

長い脚を優雅に組んで頬杖をつき、小さくなくても相変わらずの傲慢な態度。

「……地図をなくした挙句、なんの説明もなしに危険な森に放り出した誰かさんのおかげで、危うく死ぬところでしたが」

『まあまあ、無事に辿り着いたならいいじゃねーか』

「よくありませんよ……本当に」

レイは豪快に笑った。もちろんレヒトの呟きは無視である。

『つと、んな話するのにわざわざ通信してんじゃねーんだよ』

いつの間にか、レヒトのぶんのパンケーキにまで手をつけていたレイヴンが、パンケーキを頬張りながら答えた。

「レイヴンに用事でしょ？」

『おうよ、わかってんなら話が早い。どうすんだ、いい加減、今までみたいに無視してわけにやいかねーぞ』

「うん、今日はいっぱい魔物と遊んであげたからね」

『やっぱりな……ここんところ、魔物の数は急激に増加してる。兄上が心配してた通りになっただな……』

レイはいつになく真剣な様子で腕を組んだ。彼が考え込む時の癖だと、以前聞いたことがある。

「受けてあげてもいいよ」

てつきり断られると思っていただろうか、レイヴンがそう答えると、レイは安堵したように見えた。

『そうか、どういう風の吹き回し……と言いたいとこだが、やめとくぜ。明日、また会議があるからよ。間に合うように来てくれや』

「はいはい」

プツ……という微かな音とともに、レイの姿が掻き消えた。

「……消えた……」

「レイさんが通信切ったからね」

指輪を填めつつ、レイヴンが答える。

「レイヴン、その通信っていうのはなんなんだ？ その指輪も」

レヒトが尋ねると、レイヴンはバツの悪そうな顔をした。

「うーん……レイヴンも原理とかはよく知らないんだよね。この指輪とか、ヘヴンにある不思議なものはほとんどが三闘神が残してつたものらしいよ？」

「三闘神が……」

ヘヴンで知らぬ者はいないだろう、三人の大いなる神々。

四百年前の『天魔大戦』以来、いずこかへと姿を消したと伝えられる。

「ま、とにかく。明日はまた天界城に行かなきゃなんないんだし、疲れたでしょ？ 休んでいきなよ」

パンケーキを食べ終わったらしいレイヴンが、指についたクリームを舐めながら言った。

「ええ、それがいいですね。部屋を用意しますので、少し待っていてください」

「ありがとうございます」

ガルヴァは微笑み、上の階へと上がって行った。

「……ふう」

開け放たれた窓から流れる心地よい風に眼を細める。レヒトの長い長い一日が、ようやく終わろうとしていた。

## 第4話 二人の思惑

夜も終わりに近付き、そろそろ太陽が顔を出す時刻——天界城の最高責任者執務室では、部屋の主が机に積まれた大量の書類と戦っていた。

「ふう……」

最後の一枚に判を押し、レイは軽く伸びをする。

背に頂く三対六枚の翼を伸ばせば、純白の羽根が抜け落ち、ふわりと周囲に舞った。

天界人の証である純白の翼は、その身に秘められた力によって数が異なる。

三対六枚もの翼を持つのは、レイと、今は亡き彼の妹だけである。「お疲れ様です。これで本日の執務は、総て終了ですね」

傍に控えていた、レイの世話役兼補佐官のトゥールが、落ちた羽根を丁寧に取り集めながら言った。

「ああ、やっと終わったぜ。この書類整理が一番嫌いだな」

退屈だ、とレイが呟けば、トゥールは鉄面皮と称される顔に苦笑を浮かべた。

「最後にまとめて片付けるから、このような目に遭うのですよ」

「いい加減、いつもの小言は聞き飽きたぜ」

「それならいい加減、言われなくても実行できるようになってください」

「……うるせえよ」

拗ねたように机に突っ伏し、ぼそりと呟くレイ。子供のような仕事のレイを見て、トゥールの口元が笑みを形作る。

トゥールはレイが幼少の頃より彼の世話役を務めている。レイの苦しみも、悲しみも、総て見続けてきた人物だった。

そして、レイが気兼ねなく接することのできる、数少ない人物でもある。

「眠い……」

「いけませんよ、レイ様。そのまま寝ては翼が痛んでしまうでしょう」

「あー？ いいさ、別に……。こんなもの、ないほうがいい」

そう呟いたレイは、どこか悲しそうだった。四百年前のあの日、自分に与えられた純白の翼。それはどこまでも自由に飛べる『翼』ではなく——今も、彼の心を縛り続ける『鎖』だった。

「……レイ様……」

「ふん……」

そんな時、来訪者を告げるベルが鳴った。

執務を終え、ゆったりと過ごせるこの僅かな時間は、レイのお気に入りの時間であり、それを邪魔する来訪者は、辛辣な嫌味と皮肉の嵐に晒されることになるのだが、レイは逆に上機嫌で来訪者を迎え入れた。

というのも、それは彼のよく知る人物だったからだ。

「お邪魔するよ、レイ」

入ってきたのは、穏やかな眼差しの中年男性だった。なかなか美形で、少し長めのくすんだ金髪を紫色のリボンで纏め、優しそうな微笑みを湛えている。

彼こそが、レヒトの主である魔界評議会議長、ラグネス・クリスティヌであり、レイの実兄にもあたる人物である。外見だけを見れば、若いレイとは親子とも勘違いされそうだが、正真正銘、二人は実の兄弟だ。

これは天界人だけではなく、精霊族と呼ばれる人々も同様なのだが、彼らはある一定の年齢に達すると、肉体的な成長が止まる。

成長が止まる年齢は個々に異なるため、このようなことが起こり得るのだ。決して珍しい現象ではない。

「よお、兄上」

「ラグネス様、お久しゅうございます。お元気そうで、安心致しました」

「君も、元気そうだなによりだよ。レイが面倒をかけてすまないね」  
ラグネスの言葉に、トゥールは神妙な面持ちで頷いた。

「はい。レイ様のわがままっぷりときたら、それはもう……」

「……おい」

従者にあるまじき発言に、ジト目で睨むレイ。

「事実です。しかし、嫌ではありませんよ」

その言葉を聞き、ラグネスは柔らかな笑みを見せた。

「そうか。君がレイの傍にいてくれれば、私も安心だよ」

「くそっ……二人して俺のことガキ扱いしやがって……」

不貞腐れてそっぽを向いたレイの頭を、ラグネスはよしよしと撫でた。

「兄上！」

「ははは、すまない」

「……んで？俺のことからかいに来たわけじゃねーんだろ？」

レイの言葉に、ラグネスはぽんつと手を打った。

「うっかり忘れるところだったよ」

「……忘れんなよ……」

ガクツと肩を落とすレイに、ラグネスは悪戯っぽい笑みを浮かべる。そんな表情を見ると、やはり兄弟だからだろうか、レイに通じるものがある。

「いやあ、可愛い弟の顔見たら、つい……ね」

「ガキ扱いすんな！」

普段は人を小馬鹿にしたような態度をとるレイだが、側仕えのトゥールや兄のラグネスの前では、このように少年のような一面を見せることもある。

「そんなに怒らなくても」

「あんたのせいだろーが……」

もうどうでもいいとばかりに、レイはヒラヒラと手を振る。

ラグネスのほうが、どうやら一枚上手であるようだ。

しかし、レイを子供扱いして無事にいられるのは、彼とトゥール

くらいなものである。これが他の者であれば、二度と朝陽は拝めない。

「話っているのは他でもないよ。例の件、どうだった？」

「あんたのことだ。言わなくなつてわかつてんだろ？」

レイはにやりと笑った。

「さつき通信して話はしたけどな。あんたの言つた通りさ。あいつ、本当にレイヴンのこと説得しちまつたみてーだ。俺の部下を何度やつても首を縦に振らなかつたあのレイヴンを、だぜ？」

心底楽しそうに言う。ラグネスは、やはりね、と頷いた。

「そうだろうと思つたから、推薦したんだよ。まあ、急なことで驚いたかもしれないけどな」

どうせなんの説明もなしに放り出したんだろう、とラグネスが問えば、面倒だからな、とレイが返す。

「レヒトには、どこか人を惹きつける不思議な魅力があるからね。」

カリスマ性、とでも言うのかな」

「ま、おかげで俺は助かつたけどな。これであのジジィどもの相手しなくて済むぜ」

ジジィども、とは魔界評議会の議員たちのことである。

「あんな醜い顔、見るに耐えねえ」

端正な顔を思い切りしかめるレイ。ラグネスは思わず吹き出した。「仕方ない……」と言えば、仕方ないことかもしれないけどな。十年前の大異変で、だいぶ応えているようだから」

十年前、平和だつたヘヴンに、突如として魔物と呼ばれる異形の生物が姿を現した。

魔物はヘヴンの各地に深い爪痕を残したが、中でも深刻な被害を受けたのが、大した戦力を保持していなかつた魔界であつた。魔界人は魔物の弱点である魔法を扱うことができないため、対抗できなかったのだ。

天界をはじめ、各国が魔物の討伐に乗り出したが、被害は拡大の一途を辿つた。

人々が絶望に天を仰いだその時、魔物は現れたときと同様に、突然その姿を消したのだ。

三闘神の加護だと人々は喜んだが、原因は未だ不明のままである。そして最近になって、再び魔物が出没し始めた。それを聞き、評議会の議員たちは、天界を頼って押しかけてきたのだ。

「ヘヴンの危機に、自分の領地の心配ね……民あつての領地じゃねーか」

ヘヴンの中心とも謳われる天界に君臨し、他国にも強い影響力を持つレイは、意外なほどに純真だった。だからこそ、自身の保身しか考えず、民を省みない議員たちが許せないのかもしれない。

「あんな奴らのために動いてんじゃねえ。ヘヴンに生きる、民のためだ」

それは、自らに言い聞かせるかのような言葉だった。

「それで、あのジジイどもはレイヴンになにを頼むつもりなんだ？」

「普通の人間にも、魔法が使えるようになるような道具の制作を依頼するつもりらしいよ」

ラグネスがそう言うのと、レイは、なるほど、と頷いた。

「……ま、レイヴンならできるだろうが……」

「そうだねえ」

二人はほぼ同時に言葉を発した。

「無理だな」

「無理だね」

それを聞き、トゥールは首を傾げた。

「なぜ、そのように思われるのですか？ カトレーヌ教授といえば、『神の頭脳を持つ』と称されるほどの人物。教授にかかれば、不可能などないのでは？」

「レイヴンは他の奴と価値観が違うんだよ」

トゥールの疑問に、欠伸混じりにレイが答える。

「価値観、ですか……？」

「ああ、そうだ。レイヴンは引き受けない。面白くないからな」

レイは書類を退けた机の上で、その長い脚を優雅に組んだ。トゥールの眉間に皺が寄る。

「……レイ様、机の上に脚を載せてはいけませんと、何度申し上げればわかるのですか？」

言って聞くような性格であれば、彼も苦勞はしないのだ。トゥールは深いため息を吐いた。

トゥールの苦惱などどこ吹く風。レイは構わず、言葉が続ける。

「あいつは自分の興味のないものは、たとえなにがあつたって引き受けねーよ。ヘヴンの危機も、レイヴンにとっちゃ楽しい遊びに過ぎない」

「……言い過ぎな気もするけど、あながち外れてはいないかもね」

苦笑しつつ、ラグネスもレイの言葉に同意する。レイヴン本人をよく知らないトゥールは、ただ首を傾げるだけだ。

「はあ……よくはわかりませんが。しかし、それではカトレーヌ教授をお呼びしても無駄なのでは？ 評議会の議員たちが、それで諦めるとも思えません」

「大丈夫だよ」

そう答えたのはラグネスだった。

「カトレーヌ教授も、こちらの思惑には気付いているだろうからね。そして、乗ってくれるはずだよ。きつとね」

「はっ！ あんたも相当の策士だよ、兄上」

あんたに使われるあいつも可哀想だねえ、と。レイはおどけたように呟いた。

「褒め言葉として受け取っておくよ」

皮肉混じりのレイの言葉をさらりと流し、ラグネスはおっとりとした笑みを消すことなくそう答える。

「……つと、今日も徹夜かよ」

窓から差し込む光を見て、レイは苦笑した。ここところは連日徹夜だ。そういえば、まともに食事をとったのも、何日前のことだったか。

「レイ……身体を壊さないようにするんだよ?」

心配そうな兄に、レイは大丈夫さとウィンクした。

「さーて、お客さんが来るぜ。トゥール、会議室に関係書類、用意していてくれ」

「はい」

命を受けて一礼し、トゥールは執務室を出て行った。

それを見届け、レイは一人、バルコニーへと降り立った。ひんやりとした朝の冷気が、身体を撫でてゆく。

「頼むぜ。俺に楽しさせてくれよな?」

顔を覗かせた太陽を眺め、レイは楽しそうに、小さくそう呟いたのだった。

## side story 1 〈胎動〉

煙の充満する薄暗い通路を、男は走っていた。

立ち込める黒煙が視界を遮り、何かに脚をとられて転倒する。

身体を起こしながら、脚に絡みつくものを確認する。

それは白い腕だった。逃げ遅れたのだろう若い女性が、最期の力で男の脚を握り締め、救いを求めて虚ろな瞳を向けていた。

彼女の腕に抱かれた幼い少女は、もう息をしてはいないようだった。

男は少女を見つめた。虚空を彷徨うその瞳の向こうに見えたのは、男が愛してやまない、大切な少女の笑顔。

（アル……今、助けにいくからな）

心に誓い、男は周囲に視線を走らせる。そこで、男は初めて気が付いた。

女性だけではなく、周囲には何人も、逃げ遅れ力尽きた住人たちが転がっていたことに。

『……た……すけ……』

『悪い……急いでるんだ』

絡みつく女性の腕を掴んで引き剥がし、男は立ち上がった。

『守らなきゃならない連中がいる。急がないと、な』

引き剥がされた腕で、女性は少女の亡骸を強く抱き締めた。崩れ落ちる瓦礫から、少女を守るように。

『……すまない』

口を吐いた言葉。女性は静かに顔をあげた。

男を見上げたその瞳に、苦悶の色はない。

死に顔は、穏やかだった。

男は再び走り出す。その途端、背後で響いた爆発音と震動に、思わず振り返る。

先程まで男がいたあの場所は炎と瓦礫とに支配され、その向こう

側——女性や少女の姿を確認することは出来なかった。

『…………』

また、遠くで響く爆音。衝撃で、大地が大きく揺れた。

『時間がない……無事でいろよ……』

かつて人間だったものを視界の端に捉えながら、男はその間を駆け抜けて行った——。

## 第5話 序章の終幕 - 1 -

「おっはよぉー！ …… なぁに朝からぼけーっとしてんの？」

レヒトがあてがわれた部屋に飛び込んでくるやいなや、開口一番、これである。

「…… 妙な夢を見てな…… なんとなく寝た気がしない……」

「どんな夢？」

寝惚け眼を擦りつつ、欠伸をひとつ。

「薄暗い通路を、ひたすら走ってる夢だった。見たこともないような場所だったな……。爆発して、炎に巻かれそうになったり……」

「なにそれ、嫌な夢。夢を見る人ってさ、子供っぽいんだって聞いたことあるよ」

「…… 子供っぽいんじゃないくて、ロマンチストだって言ってくれ」

自分より遥かにお子様のレイヴンに子供扱いされたことが納得いかないのか、レヒトはわざわざ訂正した。

「ロマンの欠片もないような夢見たくせに」

「……」

レイヴンを口で言い負かすのは不可能である。レヒトはひとつ学んだ。

「……ところで、レイヴン」

「なぁに？」

レイヴンはレヒトが退いた後の寝台に寝転がっている。朝夕はだいぶ冷える季節になってきた。人の温もりの残る布団は心地よいのだろう。

「いつまでここにいるんだ？」

「なんで？」

「いや…… その、な……」

質問を質問で返してくる。今ので悟って欲しかったんだけどな、とレヒトは嘆息した。本当にわかっていないのか、それともからか

っているだけなのか、いまいち判断がつかない。

「……着替えたいんだが」

「だから？」

不思議そうに首を傾げられた。どうやらきっぱりはつきり言わないと伝わらないらしい。

「俺が着替え終わるまで、廊下で待っててくれないか？」

「えゝ！？　なんでなんで？　ガルは着替える時も出てけなんて言わないよ？」

「それは……だな……うゝん……」

レヒトが返答に詰まると、レイヴンはにこにこ笑って言った。

「今更恥ずかしがることないじゃん！　着替えるの手伝ってあげるゝ！」

「うわっ！　よせって…やめろゝゝゝっ！」

上の階から響く悲鳴と笑い声と凄まじい破壊音に、朝食をとっていたガルヴァが、仲良しですね、などと一人笑っていたのはまた別の話。

「ふあゝ、面白かったあゝ」

「……」

にこにこ笑顔のレイヴンと、やつれた様子のレヒトが降りてきたのは、大騒ぎが始まってから二十分ほど経った頃だった。

「レイヴンとレヒトさんはとっても仲良しなんですね」

優しい微笑を湛え、二人に温かなココアを手渡す。

「わゝ、ココアだ！」

「ありがとうございます」

レイヴンの味覚に合わせてあるからだろうか。普通より甘めのココアが、冷えた身体を温める。

「今日は天界城へ行くのでしょうか？　支度は大丈夫ですか？」

「ばっちりだよ！」

元気よく答えるレイヴン。この元気はどこから生えてくるのたる

う。

「天界城……またあの森を抜けるのか……」

うんざりと呟くレヒト。しかし、レイヴンが発したのは意外な言葉だった。

「あんな森抜けてくるのはレヒトくらいだと思うんだけど」

「……は？　だって、天界城からここに来るまでの道は……」

レイヴンとガルヴァは顔を見合わせた。

「きつと、レイですね」

「だね」

そう言つて笑う。おかしくて笑つたのではなく、苦笑したのだ。

「……まさか」

「ええ、おそらくご想像通りだと思いますよ」

「レヒトも可哀想だね」。とことんレイさんに遊ばれちゃって」

ガルヴァどころかレイヴンにまで同情されてしまい、レヒトはちよつぱり傷付いた。

「……」

「まあまあ、帰りは楽ですから」

「ははは……そうですね」

レヒトは力なく微笑んだ。

「そんじゃ、そろそろ行こっか」

ココアを飲み終えたらしいレイヴンが立ち上がった。

「ん？　……ああ、そうだな」

レイヴンに続いて、レヒトも立ち上がる。

「ガルヴァさん、どうもお世話になりました」

「こちらこそ、なんのお構いもできませんで。それとレイヴンのこ  
と、よろしく願いますね」

ガルヴァはそう言つて頭を下げた。

「はい、任せてください」

「じゃあ行ってくるね、ガル」

「ええ、行つてらっしゃい」

別れの挨拶を済ませると、レイヴンはレヒトの手をひいて地下へと降りていく。石造りの通路の先に、厳重に鍵のかけられた扉が見えてきた。

「ここは？」

「俗に言う空間移転装置つてやつ。レヒトも魔界から天界に来る時に似たようなの使ったでしょ？」

レイヴンは手際よく鍵を外すと扉を潜り、中へ入っていった。レヒトも後を追う。

その時、背筋をなにかが這うような、嫌な感覚に襲われた。

「レイヴン……？」

扉の向こうは一面の闇。一步先も見えぬ闇に、後ろを振り向けば入ったはずの扉はなく。

「レイヴン！」

『……ヒト……こつち……』

微かにだが、レイヴンの声が聞こえた。しかしどこから聞こえてくるのかはわからない。

「レイヴン、どこにいる！？」

『……こ……だよ……すぐ……そ……』

もう一度名を呼ぼうとしたその時だった。

突如、床が抜けたような感覚とともにレヒトを襲った落下感。

手足が千切れるのではないかと思うほどに凄まじい速度で落ちてゆく。

「これ……は……っ！？」

頭の奥——神経がピリピリと痺れるような感覚。

「くっ……なんだ……？」

痺れる頭を右手で押さえる。

『……え……は……』

頭の奥で、誰かの声が響いた。

『……お前……は……』

「誰だ……なんなんだ、一体……！」

痛みに顔を顰め、頭の奥に響く声に向かって問いかける。  
声は幻聴などではない。声が響くたびに、頭を締め付けられるような激しい痛みがレヒトを襲った。

『……お前は……私、か……？』

「なん……だつて……？」

いよいよ激しさを増す痛みに、レヒトの意識が遠退いた。

そして、眼の前——いや、遙か下方に現れた一条の光。それはレヒトの落下とともに徐々に近づき——レヒトはその光の中へと落ちていった。

「レヒト……レヒト！」

「ん……？」

開いたレヒトの眼に最初に飛び込んで来たのは、心配そうに覗き込むレイヴンの姿。

「ここは……」

そこでレヒトは、自分が寝台に寝かされていることに気付いた。

「天界城の救護室だ」

レヒトの問いに答えたのは、レイヴンではなかった。

「……レイ様……」

天界最高責任者、レイ・クリスティーヌ。

「おう、大丈夫かよ。こっちに着くなり、いきなりぶっ倒れたから心配したんだぜ」

「……倒れた？」

「そうだよッ！」

心配そうな顔をしたレイヴンが頷く。

「時空転移装置……あ、こっちに来るときに一緒に使ったあれね……あれ使ってこっちに来た後、急に倒れちゃったんだよ？」

ずっとうなされてたし……と、レイヴンは小声で呟いた。

（……あれは……夢だったのか……？）

まだ痛む頭が、夢ではなかったと告げるようで。

「ね、ねえ……まだ具合悪いの？　大丈夫？」

「もう大丈夫さ、心配かけてごめん」

起き上がり、心配そうに見上げるレイヴンの頭に手を置けば、安堵したのか、その顔にようやく笑みが戻る。

「失礼するよ、ドクター」

聞き覚えのある声が響いたのは、ちょうどそんなときだった。扉のほうへと視線を移せば、そこには。

「ラグネス様」

扉を背にして立っていたのは、穏やかな眼差しの中年男性、ラグネス・クリスティース。レイの実兄にしてレヒトの主、どこか茫洋とした雰囲気を持つが、魔界評議会の議長を務めるだけあり、相当の切れ者である。

「やあ、レヒト。急に倒れたと聞いて心配したよ。具合はいいのかい？」

「ご心配をおかけして申し訳ありません、もう大丈夫ですので」

レヒトが答えると、ラグネスはやりわりと微笑んだ。

「あ……」

「どうかしたかい？」

「いえ、なんでもないんです」

首を傾げて問うラグネス。レヒトは笑って誤魔化した。

（そうか……誰に似てるのかと思ったけど……）

レヒトの脳裏に浮かんだのは、ガルヴァの姿。どこかで見たように感じた優しい微笑——あれはラグネスに似ていたからだ。

「でもさ、でもさ。なんか、昨日の夜も変な夢見たって言ってたじゃない。なんかに憑かれてるんじゃないの？」

「まあ……」

軽くレイに視線を向けつつ、レヒトは続ける。

「確かに『疲れて』はいるな……いろんな意味で」

レヒトの視線に気付いたらしいレイが器用に片眉を跳ねあげた。

「……あんだよ、その眼は」

「いーえ、なんでもございません」

涼やかに返せば、ムツとしたような表情を見せる。

「お前もいい性格してやがるぜ」

「レイ様ほどでは」

「はっはっは！ 違いねえ！」

レイは豪快に笑った。

「研究所に行くために、わざわざ森の中を通らせたりするから、疲れがたまっていたんじゃないかい？」

「ええ、おかげで酷い目に遭いました」

ラグネスの言葉にレヒトが頷くと、レイは唇の端を持ち上げた。

「なんでわざわざあんな森の中通らせたりしたの？」

レイヴンが助けてあげなきゃ死んじゃったとこだよ、とレイヴンが続けると、レイはさも当然とばかりに言い放った。

「そのほうが面白そうだからに決まってるんだろ」

固まった三人を見渡して、レイは腕を組み、満足げに笑う。

「ま、終わりよければすべてよしってやつだな！」

「ちっともよくないです……」

ため息とともに、レヒトはそつと呟いた。

## 第6話 序章の終幕 - 2 -

それから、二人はラグネスとレイに案内されて会議室へと向かった。そこで待っていたのは――。

「おお、カトレー又教授！」

「お待ちしておりましたぞ！」

「いやいや、カトレー又教授のお力添えが頂けるとなれば、魔物どもなど恐れるにたりません！」

会議室にずらりと並んでいたおっさんたち――もとい、魔界評議会の議員たちは、口々にレイヴンを賞賛しながら立ち上がった。

気を良くするかと思われたレイヴンだが、おっさんたちを一瞥すると椅子に座った。齒の浮くようなお世辞は嫌いらしい。

「……それで？ わかつてはいるけど、一応聞いてあげるよ」

レイヴンを見るからに不機嫌なのだが、おっさん連中は気付かないらしい。上機嫌で口々に捲くし立てた。

「ご存知の通り、我々には魔物に対抗する術がありません」

「教授が魔法について精通されておられると、以前より聞き及んでおります」

「それゆえに、ぜひとも教授にご助力頂きたく……」

「やだ」

きつぱりと。不自然でない程度に低い声で、レイヴンは一蹴した。おっさん連中は啞然としている。

「……やつぱりなあ」

レイは楽しくて仕方がないといった様子だ。

「カ、カトレー又教授！」

「なぜでございますか！ 我々は……！」

レイヴンは退屈そうに欠伸した。

「だって、ちゃんと頼まれてないし。人にものを頼むんなら、それなりにすることがあるんじゃない？」

弾かれたように、おっさんたちは一斉に頭を下げた。

「し、失礼致しました!」

「お願い致します! この通りです!」

「どうか、どうかお願い致します!」

しかし、レイヴンが返した言葉は。

「しつこく頼まれるのは嫌いなんだ。それに……」

「そ、それに……?」

「面白くないからやっぱりやだ」

これである。完全におっさん連中で遊んでいる。

(……やっぱり似てるな……)

おろおろと狼狽するおっさんたちを見て、楽しそうに笑うレイとレイヴン。二人を見比べて、レヒトは素直にそう感じた。

「まあまあ、レイヴン。そのくらいにしておあげよ」

救いの手を差し伸べたのはラグネスだった。きつと、おっさんたちには神様のように見えたに違いない。

「断るには、理由があるんだろう?」

「まあね。できるにはできるよ。けど時間がかかる」

「どれくらいだ?」

レイの問いに、レイヴンは首を傾げた。

「一年か、二年か……もしかしたら十年かかるかもね」

「そ、そんなに……」

おっさんたちの一人が絶望的な声を上げた。無理もない。最後の手段として、彼らはレイヴンを頼ってきたのだから。

「魔法についての謎を解明するには、生まれついて魔法が使える人の協力が不可欠なんだよ」

「レ、レイ様はどうなんです? 魔法が扱えるんでしょう?」

レイはひよいと肩を竦めて見せた。

「俺の魔法は生まれついて使えるもんじゃねーんだよ」

いつもと同じ、人を食ったような笑みを浮かべていたが、レヒトの眼には、少し悲しそうな表情に映った。

「作って欲しいなら、精霊族か竜族でも連れて来るんだね」

「そ、そんなこと……不可能だ……」

また、誰かが声を上げた。

（そうだな、不可能だ）

精霊族と竜族は、ともにこのヘヴンに暮らす種族であるが、四百年前の天魔大戦以来、親交は途絶えたままになっている。

「他に、方法はねえのか？」

「ある……っていうか、レイさん、最初からそのつもりだったんじゃないの？」

レイとラグネスが密かに目配せし、微かに笑みを浮かべたのをレヒトは捉えた。

「ほ、他に方法があるのですか？」

藁をも掴む勢いのおっさんたちに、レイはああ、と頷いた。

「レイヴン本人が魔物出沒の原因調査に向かってくれるってことだ」

「本当ですか！」

「それはありがたい！」

「さすがはカトレー又教授だ！」

先程まで泣きそうな顔をしていたというのに、調子のいいことである。

「引き受けるのか？」

「うん」

意外にも、レイヴンはあっさりと頷いた。

「それが一番手っ取り早いでしょ」

「まあ……そうかもしれないが」

なににせよ、もう俺には無関係な話だ、などとレヒトが他人事のように考えていると。

「そーゆーことだから。頑張ろうね、レヒト！」

しばし、その言葉の意味を掴めずに沈黙する。

「……は？」

ややあって、かなり間の抜けた声をあげたレヒトの腕に、にこに

こと満面の笑みを浮かべたレイヴンが抱き付いた。

「ちよつと待て！ どうしてそうなるんだ！？」

「えー？ だつてほら、子供の一人歩きは危ないし」

「都合のいい時だけ子供になって……」

視線を移すと、レイはとても楽しそうな顔をしていた。最初からこういう魂胆だったということか。

「あのですね……」

レヒトが言葉を続ける前に、レイヴンが声をあげた。

「レイヴン可愛いから、誘拐とかされちゃうかもよ？」

「……あのな」

声は再び遮られた。おっさんたちにある。

「それは大変だ！」

「カトレー又教授をお一人で向かわせるわけにはいきませんしな！」

レイヴンだけでなく、どこまでも調子のいいおっさん連中にまで騒がれ、レヒトは重い頭痛を感じた。額に手を当ててこの状況をどう打開するかを悩んでいると、肩に手が置かれた。レイとラグネスである。

「んじゃ、頼むぜ」

「お土産よろしくね」

につこり笑顔で告げられる。

「……拒否権は」

あるわけありませんよね……と、続いた言葉に、その場にいた全員が頷いた。

「いや、これで安泰！ はっはっは！」

「今夜は宴会ですな」

「おお、それはいいですなあ」

おっさんたちは上機嫌で去って行った。

「けっ……いい気なもんだぜ」

その背を見送り、毒づくレイ。

「自分たちとこの民は、恐怖で眠れぬ日々を送ってるっていうのにな」

「けど、レイが天界の兵を魔界へ送ってくれたから、民も安心して  
いるはずだよ」

「……ま、気休め程度にでもなりやいいさ」

そう言ったレイの瞳は、とても優しくかった。

（なるほど……どおりでやけに静かだと思った）

レイは魔物に対抗する術を持たぬ魔界の民のために、天界の兵を派遣したのだ。天界人は魔法を扱うことができる。魔物が相手でも、十分に対処できるだろう。

（本当は、優しい人なんだな……。やっぱり『英雄』なんだ）

自身を守るための兵を、他国の民の身を案じて送ったレイ。彼がなぜ天魔大戦を終結に導き、今の平和を実現させることができたのか——レヒトにはなんとなく理解できる気がした。

「さて、んじゃそろそろ本題に入るぞ」

レイは机の上に地図を広げた。ヘヴン全域が記された詳細な地図である。

「お前たちにや、魔物出没の原因究明と、もうひとつ、やって欲しいことがある」

「やって欲しいこと？」

レヒトとレイヴンは同時に聞き返していた。

「ああ。他種族との同盟の実現だ」

レイは真剣な表情でそう告げた。

ヘヴンに生きる種族は大きくわけて人間族、精霊族、竜族。その中でも、人間族はさらに天界人、魔界人、そして精霊族は精霊人、魔精霊にわけられる。

このうち、天界人と魔界人は同じ人間族として同盟が結ばれているが、残る三種族とは、前述した通り、天魔大戦以来親交はない。「わかりました。しかし、なぜ今になって急に？」

「以前から、レイは他種族との親交に精力的だったんだよ。けれど、

歴史的なこともあるからね……なかなか、思うようにはいかなかったんだ」

レヒトの疑問に答えたラグネスは、微笑みを湛えてはいたが、それはどこか悲しそうな微笑だった。総ての元凶であるあの戦い——天魔大戦を、その身をもつて体験しているからだろっ。

「けどな、もう時間がねえ。今はまだ持ち堪えてるが、魔物が大挙して押し寄せてきたら、天界の勢力だけじゃどうにもならねえ」

確かに、強力な魔物が無数に現れれば、いかに魔法が使えるとはいえ、天界の勢力だけでなんとかできるとは思えなかった。強大な力を持つといわれる精霊族や竜族を味方につけたいという、レイの思惑はよくわかる。

「それに、ことは天界、魔界だけに限ったことじゃねえんだ」

そう言った後、これは俺の勘だがな、と前置きしてから、レイは言葉を続けた。

「ヘヴンに危機が迫ってる。一致団結してかかんねえと……ヘヴンは終わるぜ」

部屋に、沈黙が広がった。永遠に続くかのように思われた、重苦しい沈黙。それを破ったのは、レヒトだった。

「確かに……なにか、嫌な予感します。うまきは説明できませんが……」

「けど、それってただの予感なんですよ？」

不安げにレイヴンが返すと、ラグネスがおっとりした口調で首を振った。

「私は信じるよ。レヒトの予感が外れたことはないからね」

「例の『不思議な力』ってやつか」

そう、レヒトにはある不思議な能力があった。それは自身に降りかかる危険を、その少し前に察知するという能力である。

そして、まるで神の加護があるかのごとく、危機に陥るその度に、レヒトは大いなる力に守られてきたのだ。

「ヘヴンの危機を君が察知したということは、その危機から救える

のも……レヒト、君なんだろう。まるで……運命のようだね」

「ラグネス様……俺は、自分が世界を救えるなんて、思っていますよ」

瞳を閉じて、レヒトは答える。

「けれど、世界を救うために、自分にできることがあるのなら……精一杯やる。それだけです」

それを聞き、ラグネスはやりわりと、どこか満足げに微笑んだ。

「失礼致します」

扉の向こうから、控え目に声かけられた。レイが入るよう促すと、ゆつくりと扉が開く。

入ってきたのはレイの世話役兼補佐官のトゥールである。その手に、大きな包みを抱えていた。

「お、見付かったか！」

包みを見て嬉しそうに言ったレイに、トゥールは呆れたような表情を見せる。

「物置に乱雑に放られていましたよ。もう少し丁寧に扱ってはいかがです？」

「はいはい、いいから寄越せって」

トゥールから包みを受け取り、幾重にも巻かれた布を外していく。中から現れたのは、洗練された美しい装飾の施された大剣だった。

「ちつとばかり扱いにくいが、お前なら問題ねえだろ」

「レイ、それは……」

驚きの声を上げたラグネス。レイはとっておきの悪戯が成功した時のような笑みを見せた。

「三闘神は返せって言わなかったからな」

「え、それって三闘神に貰った剣なの？」

伝説の神々から与えられた剣だと聞き、レイヴンは興味津々な様子だ。

「まったく……三闘神様より頂いた大切な剣だというのに、物置に放りっぱなしにしておくとは。いつか神罰が下りますよ」

「うわゝっ、罰当たりいゝ」

「るせえ、小言は後だ」

どうせ聞かないくせに、と深いため息を吐くトウル。レヒトはちよっぴり彼に同情した。

「ほらよ。餞別だ、持っていけ」

レイはレヒトに剣を投げて寄越した。慌てて受け止めた腕に、ずっしりと感じる重み。剣は美しい、不思議な輝きを放っている。

「天魔大戦の時に、俺が振るった剣だ。三闘神の剣だからな。魔物どもとも渡り合えるだろ。銘は『セイクリッド・ティア』——その閃光は総てを切り裂く」

「ありがとうございます」

レヒトが礼を述べると、レイはヒラヒラと手を振った。

「いいってことよ。まずは魔界に下りろ。指示はレイヴンの指輪を通して送るが……目的を外れない程度には、自由に動いてもらって構わねえ」

「うん、わかった。任せてよ！」

「それじゃあ、行くか」

レヒトが声をかけると、レイヴンはピシッと敬礼して見せた。

「了解ッ！」

——こうして、二人は旅立つ。最初の目的地、魔界へと向かって。

## 第7話 首都ロイゼンハウエル

「うわー！　すごい！」

眼下に広がる街並みを眺め、レイヴンが感嘆の声をあげた。

天界から降りたことがなかったというレイヴンには、見るもの全てが新鮮に映るのだろう。

魔界首都、ロイゼンハウエル。

魔界の中心でもあり、天界への玄関口でもあるこの街は、魔物の脅威など微塵も感じさせないほど、普段と同じように活気付いていた。ただひとつ違うのは、街を行く人々の中に、純白の翼が見え隠れすること。

「レイヴン、一人で先に行くなよ？　大きな街は楽しいが、それと同じくらい危険も多い」

「うん」

レヒトが言うと、レイヴンは素直に頷いた。

「さて、どうするか。レイ様からの指示が入るまでは、街から出ないほうがいいな……」

懷から取り出した地図を眺める。

ここ魔界は、ヘヴンの中央に位置する連邦制の巨大な国家である。この首都ロイゼンハウエルの真上に天界があり、天界へ渡る道は、ここだけだ。

この魔界より東の森の中に精霊人が住まう精霊界が、そして北西に魔精霊の住む真魔界、遥か北東の切り立った山脈に竜人族の住む竜谷が存在する。

どこに向かうにせよ、かなり遠い道になる。

「この近くに、ラグネス様のお屋敷がある。とりあえず、そこで休むか？」

振り返り、レヒトは固まった。さっきまで側にいたはずの、レイヴンの姿がなかったからである。

「レイヴン!?」

呼んでみるが、答えはなく。この広い街中、一体どうやって探せばいいのか。

(迷子……ならまだいいが、人攫いなんか遭ってないだろうな……!)

とりあえず、街の警備兵に……レヒトがそう考えていると。

「レヒト!」

声がした。間違いなくレイヴンのものである。レヒトはほっと安堵した。

「……どこに行ってたんだ。勝手にいなくなるなって、あれほど言っただけじゃないか」

すると、レイヴンは頬を膨らませた。

「勝手にいなくなったのは、レイヴンじゃなくてレヒトのほうですよ!」

「……俺?」

周囲を見渡せば、確かに先程いた場所とは違っていた。どうやら地図を眺めつつ、足は自然とラグネスの屋敷へと向かっていたようだ。

「だって、気がついたらレヒトがいないんだもん。びっくりしちゃった」

「それは悪かった」

レヒトは素直に謝った。

「お詫びに、後でなにか甘いものでも買ってやるから、機嫌直せよな?」

「ほんと!?　じゃあ、特別に許してあげる!」

レイヴンはにこにこ笑った。

「あ、ねえ。あれなんだろう」

買ってもらった菓子を頬張りながら、レイヴンは前方を指差した。人だかりがきている。

「なんだ？ 喧嘩かなにかか？」

「行ってみようよ！」

言うが早いか、レイヴンはぱたぱたと走っていった。あの野次馬根性はきつと死んでも直らない。

「まったく……」

また見失っては大変と、レヒトも急いで後を追った。

「ちよつと失礼、すいません」

人の波を掻き分けて、ちよつかりと最前列に陣取っていたレイヴンの隣へと移動する。そこでは案の定、騒ぎが起きていた。

「よお、お姉ちゃん！ あんたとぶつかって、俺のダチが怪我しちまったんだよ。どーしてくれんだ？」

「うわっ、古うーい台詞！ ああいうのの頭の中に詰まってる単語って、せいぜい百個くらいだよね」

レイヴンは馬鹿にしたように言った。周囲はざわついていてるので、男たちの耳には入らなかったらしい。

「なによ、そつちからぶつかってきたくせに！」

凜とした女性の声が響いた。レヒトの位置からでは、男たちの影になって、女性の姿を見ることはできなかった。

「ふうん……女性に対する態度じゃないな。気に食わない」

「男相手なら、集団でタコ殴りにしていってわけでもないと思うんだけど」

小声で呟いたレヒトに対し、レイヴンはすかさず突っ込みを入れた。

「まあ、そこはそれ」

「どーなんだ？ 俺たちが優しくしてるうちに、へへへ……」

「俺たちとちよつとばかし遊んでくれたら許してやるよ」

下卑た笑みを浮かべる男の背には、純白の翼が。

「あれって天界の兵士？ レイさんに言いつけちゃおう」

レイヴンは右手に詰められた指輪でなにかしているようだった。後に聞いたところ、あれはその瞬間の映像を記録できる機能も備え

ているということだった。

「なあ、いいだろ？ 俺たちと遊ぼうぜ？」

男のうちの一人が、女性の腕を掴む。

「触らないでよ！」

女性が男の手を振り払うと、男たちの様子が一変した。

「てめえ！ こっちが優しくしてやりやつけあがりがつて！」

「泣いて謝っても許してやんねえからな！」

と、その時。

「待てよ」

響いた声に、男たちが一斉に振り返る。声の主はもちろん、レヒトである。

「それが女性に対する態度か？」

レヒトが言うと、男たちは馬鹿にしたように笑った。

「いいねえ、かつこいいねえ！」

「女助けて英雄気取りかもしんねえけどなあ。後悔すんなよ！ 気取り屋の兄ちゃん！」

その言葉とともに、レヒトの頬に微かな裂傷が走った。

「！」

男の周囲で、真空の刃が渦巻いていた。魔法まで使ってくるところを見ると、相手は本気らしい。

とは言うものの、こんな街中で抜刀するわけにはいかない。しかしこのままでは、周囲の群衆を巻き添えにしかねない。

（レイ様の命を受けて行動してる俺たちが、天界の兵士とやりあうわけにはいかないよなあ……）

そんなレヒトの思いを知ってか知らずか、群衆たちは今か今かと喧嘩騒ぎを待っていた。

しかし、対峙は長くは続かなかった。

「あゝあ、全然だめ！ 技術も魔力も問題外！」

「な、なんだとお！？」

意外なことに、言葉を発したのは、男たちに絡まれていた女性で

ある。

「舐めやがって！ 魔法の怖さを知らねえなら、教えてやるぜ！」  
再び男の周囲に真空の刃が渦巻いた。レヒトが声をあげる前に、  
女性の唇が、詠うように言葉を紡ぐ。

「風よ、切り裂け！」

なにが起こったのか。一瞬、その場にいた誰もが理解できなかった。

「う、うわぁ！」

情けない悲鳴があがった。見れば、男たちの衣服が細切れになっ  
て周囲に散っていた。

「に、逃げる！」

「くそう！ 覚えてろ！」

男たちは群衆に笑われ、パンツ一丁というなんとも情けない姿で  
逃げていった。

「まったく。こんな街中で魔法なんか使って、無関係な人に怪我で  
もさせたらどうするんだろ」

この時、レヒトは初めて女性の姿を眼にし——そして硬直した。

彼女は美しかった。

腰のあたりまであるだろう、深緑色の緩い巻き髪に、強い意志の  
光が宿る、大きな蒼穹色の瞳。極上の陶器のように滑らかな、瑞々  
しい肌。身に纏った真紅のドレスが、彼女の白い肌を彩っていた。

豊満な胸や、深いスリットから覗く太股は、彼女が成熟した大人  
の女性であることを物語っていたが、彼女の持つ雰囲気は、まるで  
童女のような可憐さだった。

彼女はゆっくりとレヒトに近寄ってくる。そして、先程の騒ぎで  
怪我をした頬にそつと触れた。

柔らかい光が傷を包むと、傷は跡形もなく消えた。痛みもない。

「大丈夫だった？ 急に飛び出してくるから驚いちゃったよ」

鈴の鳴るような声だ。

「お、俺は……大丈夫。怪我なんかは、慣れてるから」

少し上擦った声でレヒトが答えると、彼女はクスクスと笑う。可憐さと、そして妖艶さの交じり合った笑み。レヒトの胸は早鐘を打った。

「僕を助けてくれようとしたんでしょ？　ありがとね、嬉しいよ」  
言葉を返すこともできずに、レヒトはただ、彼女を見つめていた。  
「けど、気をつけないとだめだよ？」

次に彼女の口を吐いて出た一言は。

「坊や」

「……は？」

該当する方向にはもう一人いたわけだが、彼女が見ているのはレヒトのほうである。

「ちよつと待って、坊やってのは……」

レヒトが訂正しようとする、時計塔の鐘が鳴った。

「あ！　もうこんな時間！　それじゃあ、またね、坊や。縁があったら、また会いましょ！」

投げキッスを送り、彼女は人混みの向こうへと姿を消した。

「レヒト？　おーい！　……まったくもう……」

「……」

恍惚状態のレヒトに、レイヴンはやれやれとため息を吐いた。

「あゝ……気持ちいい」

柔らかな寝台に寝そべり、幸せそうに呟く。

「レヒトってば、こないだいい生活してたんだね」

「まあ、ラグネス様のおかげだな」

結局あの後、レイヴンたつての希望で街を散策し、ラグネスの屋敷に着いたときには、夕闇が空を染め上げる時刻になっていた。

「失礼致します」

扉の向こうから声がかかる。レヒトが入るように言葉をかけると、レヒトよりは年上だろう男性が姿を見せた。この屋敷の使用人の一人である。

「湯浴みの準備が整いました。お食事のほうは、いかがなさいますか？」

「そうだな……できあがったら、呼んでくれ」

「畏まりました。それでは失礼致します」

頭を下げ、男性は部屋を出て行った。

「レヒトってけっこう偉かったんだ」

「まあな」

意外そうな顔のレイヴンに、レヒトは苦笑を返した。

「先に、湯浴みに行ってきたらどうだ？ 俺は夕食まで、少し眠らせてもらうことにする」

「じゃあ、そうしよつかな。あ、覗いたら殺すよ？」

「あのなあ……」

楽しそうに笑い、レイヴンは浴室へと向かった。

「……ふう」

レヒトは寝台に横になった。

一人になって考えるのは、先程出逢った女性のことばかり。

（名前くらい、聞いておけばよかったな……）

この先、再び会える保障などないというのに。

「……なにを考えてるんだ、俺は」

思わず零れた苦笑。レヒトは眼を閉じ、心地よい睡魔に身を委ねた。

## side story 2 〈産声〉

男が扉の前に立つと、扉は音もなく開いた。部屋の中に、普段と変わった様子はなかった。廊下の惨状が、嘘のように。

転がるように中に駆け込み、愛する者の姿を探す。探し人は、すぐに見付かった。

目の前の大きな寝台に、眠るように倒れていたからである。紫色の髪の幼い少年と、純白の長い髪の幼い少女。そして、二人よりは少し年長だろう、緑色の髪の、賢そうな顔立ちの少年。

『ヴェン！ ミロ！ ……アル！』  
慌てて抱き起こす。

規則正しい呼吸を感じて、男はひとまず安堵した。眠る三人の頭には、特殊なヘッドギアが装着されていた。ヘッドギアから伸びたケーブルは、部屋にある巨大なコンピュータに繋がれている。コンピュータのディスプレイには『HEAVEN』の文字。

『こんな時に……！』  
男はすぐさま、自身も同じヘッドギアを装着し、コンピュータの前に座ってキーボードを叩く。

—— access ——  
『頼む、急いでくれ……！』  
遠くで、爆音が響く。大地が、大きく揺れた。  
『時間がないんだ……！』

—— password 『HEAVEN』 ——  
男の視界がぐらりと揺らぎ、吸い込まれるような感覚に襲われた。何度体験しても、これだけは慣れない。  
『もう少し……なんとか、間に合ったな』  
その瞬間だった。

天そのものが落ちてきたかのような、凄まじい衝撃。男の身体は、宙を舞っていた。揺らぐ視界から最後に見たのは、部屋を嘗め尽くす紅蓮の業火。

— g a t e   o p e n —

そこで、男の意識は途切れた。

## 第8話 眠れぬ夜に

「……………っ！」

声にならぬ悲鳴とともに、レヒトは起き上がった。

「はあっ……………はあっ……………」

心臓はまるで早鐘のように打ち鳴らされている。

「……………なんだったんだ……………あれは……………」

ひどく汗を掻いている。呼吸も荒い。

その時。小さな音を立てて部屋の扉が開いた。思わず肩が跳ねる。

「ふあ……………さっぱりしたあ」

湯あみに行ったレイヴンが戻ってきたのだ。尋常でない様子のレヒトに、レイヴンも驚いたようだった。

「ど、どうしたの？」

「……………夢を……………見た……………」

呼吸を整えながら、レヒトは答えた。

「また……………この間の夢？」

「違う。あの夢の……………続きのようだった……………」

「……………どんな夢？」

控えめに、レイヴンがそう問いかけてくる。

「……………嫌な夢だ。自分……………いや、あれは俺でない誰かだったが……………死ぬ夢だった」

レヒトは額に浮かんだ汗を拭った。そして寝台から立ち上がる。

「少し……………外を、歩いてくる」

「あ、うん……………わかった。気を付けてね」

「……………ああ」

答えて、部屋を後にする。背筋を伝う嫌な汗は、しばらく引きそっくなかった。

レヒトは夜の街へと繰り出した。この時間でも、街外れでは多く

の人々が眠らぬ夜を過ごしている。

どこかの店で酒でも呷ろうかと考えていたレヒトの眼に飛び込んできたのは、闇に映える真紅。

「君は……」

驚きの声をあげるレヒト。彼女は振り返ると微笑んで見せた。

「あ、昼間の坊や。こんな時間に出歩いちやだめだぞ」

そう言っ唇に指を当てる。本気で子供扱いである。

「……俺は、もう二十三だ」

きっぱりと告げる。女性は可愛らしく小首を傾げた。

「二十三？ それって大人なの？」

今度はレヒトが首を傾げる番だった。

「……大人だと思うけどな、俺は。第一、君と大して違わないはずだ」

間違いなく君より年上だと思っんだが、と続ければ、女性はムツとした様子で言い返す。

「僕は……えと、二十八歳だよ！」

「二十八歳!？」

目の前の女性は、どう見たって二十歳前後にしか見えなかった。

「……見えない」

「失礼だなあ」

レヒトの素直な感想に、女性は頬を膨らませた。そんな子供っぽい仕草が彼女をさらに幼く見せているのだが、どうやら本人は気付いていないようだ。

「まあ、いいけどね。慣れてるから」

（それはそうだろう……）

レヒトは素直にそう思った。

「自己紹介がまだだったな。俺はレヒト。旅人だ」

「レヒト、ね。僕は快、同じく旅人だよ。よろしくね」

そう言っ快はウィンクして見せる。レヒトは頬が熱くなるのを感じた。それを誤魔化すように、軽く咳払い。

「カイ……か。不思議な響きだな」

「そう？ 僕からすれば、君の名前のほうが不思議な感じだけど」  
快は少し考えてから言葉を続けた。

「もう大人なんだよね。じゃあ立ち話もなんだし、どっかでお酒飲みながら話そうよ」

もちろん、お断りする理由などない。

「ご一緒しましょう」

彼女は微笑んだ。今夜は遅くなるだろう。

レヒトは先を歩く快についていく。レイヴンへの言い訳を考えながら。

快が案内したのは、こぢんまりとした店だった。けっこうな賑わいを見せている。

扉を潜ると、一斉に視線が集まった。グラスを取り落とす者までいる。快は慣れているのか、特に気にした様子もない。

「はあい、マスター。今日も来たよ」

カウンターの向こうに手を振る。快に気付いたらしい店主は、隣にいるレヒトを見て口笛を吹いた。

「なんだい、今日は男連れかい？ こりや、世の男どもが悲しむぜ」  
俺も含めてな、と店主は豪快に笑った。

「やだなあ、そんな大袈裟な」

快も笑い返す。注文する前に、カウンターに酒瓶が置かれた。酒は嗜む程度にしか飲まないレヒトにはよくわからなかったが、快の嬉しそうな顔を見る限り、いい酒なのだろう。

「飲めるよね？ けっこうキツイけど」

二人分のグラスに酒を注ぐ。

「お手柔らかに」

手渡されたグラスの中で揺れる、琥珀色の液体。かなり香りの強い酒だ。

「眠らぬ夜に、乾杯」

快はひどく妖艶な微笑を浮かべた。スリットから覗く、組んだ白い脚が艶かしい。

「……乾杯」

グラスをあわせて、口付ける。ほとんど一気飲みになかったので、味はよくわからなかったが、舌に残る甘さは、上品なものだった。

「うーん、美味しい」

快はかなり速いピッチでグラスをあけてゆく。顔に似合わず、彼女は酒豪であるようだ。

反してレヒトはあまり酒に強いほうではない。カウンターに並べられていた瓶のほとんどを、快が一人で空けた。

（旅人、か……）

ぼんやりと快を見つめながら、レヒトは思った。

（そんな風には、見えないけどな……）

整った顔立ちには、どこか気品さえ漂う。貴族の令嬢だといつても通るだろう。身に纏っているものも、冒険者のそれではなく、人を惹く艶やかな真紅のドレス一枚である。

防具も着けずに出歩く旅人などまずいないし、そんな格好では盗賊たちに眼を付けられるだろう。仮に盗賊に見付からなかったとしても、ドレスの裾は道端の草などで擦れてボロボロになってしまう。（なにか事情があつて、隠してるってどこか？）

そこまで考え、レヒトはそれ以上の詮索をやめた。

「レヒトはなんで旅してるの？」

快の言葉を受けて、レヒトはしばし考えた。知り合ったばかりの女性に、馬鹿正直に話してしまつていいものか。

「……天界最高責任者の命を受けて、旅をしている」

そうとだけ言った。快は驚いたようだ。

「レヒトって偉い人だったんだ」

天界最高責任者、レイ・クリスティーヌに接触できるのは、ごく限られた者だけである。ここロイゼンハウエルから天界へ行くにも、厳しい審査と監視がなされる。最高責任者にはよほどのことがなけ

れば会えないのだ。

レヒトの場合は、彼の主がレイの実兄にあたるため、理由があれば会うことは可能である。

「彼に会えるのは血縁者とか、側仕えの人だけだもんね。どう？」

彼、元気？」

まるで、会ったことでもあるかのような快の言葉。

「会ったこと、あるみたいな言い方だな」

「まあ、色々だね。女の子には秘密がいっぱいあるのよ」

そう言ってウィンクひとつ。

興味はあったが、きつとなにを聞いても彼女は答えてはくれないだろう。レヒトは話題を変えた。

「……快は、なんで旅なんかを？ 女性の一人旅は危険だろう」

「ご忠告ありがとうございます」

快はグラスを傾けた。中で揺れる琥珀の液体を見つめる表情は、少し寂しげな微笑。

「僕には、やめられない理由があるの」

「……聞いても、いいか？」

「ん……。人を、探してるんだ。とても、大切な人」

グラスに向けられた瞳は、とても優しく——どこか悲しみを宿していた。

「同じ色……琥珀色の人をね」

「……恋人だった？」

快は答えなかった。けれど、その瞳は、それが答えだと、告げている。

レヒトの胸は、微かに痛んだ。

「そう、か……」

快はグラスを置き、どこか慌てたような仕草をした。

「やだなあ、僕ってば。なんかしんみりしちゃったね」

ごめんね？ と謝る彼女に、レヒトは気にするなと微笑んだ。

## 第9話 闇夜の襲撃

その後は他愛ない話をしながら酒を飲み交わしていると、ゴロツキ風の男たちがカウンターに近づいてきた。

「よお、兄ちゃん！ えらい別嬪さん連れてんじゃねーか！」

頭から髪の毛が絶滅している先頭の男は、値踏みするかのように上から下まで快を眺めた。

「こりやまたいいケツした姉ちゃんだな！ おい、姉ちゃん。そんな冴えない男放っておいて、俺たちと遊ぼうぜ？」

「なあに、たあんといいい目見せてやるよお」

酔っ払っているのだろっ男たちは、上機嫌で快を口説き始める。

無遠慮に触れようとした手を、快は慣れた様子でするりとかわした。本日二回目のナンパである。ひよつとしたら、レヒトと出会う前にも口説かれたりしているのかもしれないが。

「別嬪さんだなんて、なかなか正直な人たちだね」

快は嬉しそうに声をあげた。

「けど僕、気障とマツチョとナマモノ系は嫌いなんだ」

にこにこ笑顔で言い放つ。

ピシリ、と空気が凍り付いた。

（……俺は該当してないな）

レヒトは妙な安堵感を覚えた。

「そういうわけで悪いんだけど、君たちは僕の好みの対極に位置するタイプだから」

冷ややかにそう告げて、グラスの酒を一気に呷る。

たったそれだけの仕草にも、優美さが漂う。

「よ、よくも俺たちをコケにしてくれたなあ！」

声を荒げる男たちに、快はにつこりと笑みを浮かべて囁く。

「まゝ、お約束の古臭い台詞。女の子口説く前に、お勉強が必要みたいだね。坊や？」

店内にどつと笑いの渦が巻き起こった。

「な、な、な……」

怒りのあまり、うまく喋ることのできならしい男を尻目に、快はカウンターに酒代を置き、レヒトを促した。

「それじゃ、行こうか」

二人は店の扉を潜って外へ。夜の冷気が、火照った体に心地よい。「そういえばさ、レヒトの宿はどこなの？」

思いもよらぬ問いかけに、レヒトの心臓は跳ね上がった。

「どうして、そんなこと……」

真っ赤になったレヒトを見て、快は悪戯っ子のような笑顔を見せた。

「ん？ それはね」

「待ちなあ！」

快の言葉は途中で遮られた。店から出てきたのは、先程快に遊ばれた、ゴロツキ風の男たちだった。

「まーだなにか用？ お付き合いなら丁重にお断りしたはずだけど」口を尖らせた快に、男たちは、あれのどこが丁重にだ！ と突っ込みを入れた。けっこう律儀である。

「俺たちを散々コケにしてくれたんだ。落とし前はつけさせてもらうぜ」

凄みのある声で告げ、男はシミターを構えた。シミターは月明かりを反射して、不気味な輝きを放っている。

「あー、はいはい。わかったよ、相手してあげればいいんでしょ？」いかにも面倒、といった様子で、快は男たちに歩み寄っていく。傍にいたレヒトにも聞き取れないほどの小さな声で、なにかを呟きながら。

男のほうはにやりと気色悪い笑みを浮かべた。快が大人しく従う気になったとも思っただろう。

「風よ……！」

快は男たちから少し離れた場所で立ち止まり、彼らに右の掌を向

ける。

その時、レヒトの背筋を冷たい感覚が走った。

「危ない！」

レヒトはとつさに後ろから快を抱き締め、そのまま倒れるように大地に伏せていた。

その直後に凄まじい破壊音が響き、先程まで彼らがいた店が、土台から吹き飛んだ。

店の前に立っていた、ゴロツキ風の男たちを巻き込んで。

「な……なに！？」

「動くな！」

起き上がろうとした快を、レヒトは制する。

天から、元は店の部品だったと思われる瓦礫の雨が降り注ぐ。落ちてくるものの中には——飲んでいた客や、あの店主の姿もあった。

「っ……！」

降り注ぐ材木が、強かにレヒトの背を打つ。

「レヒト！？」

「大丈夫……だ。心配、するな」

痛みを堪え、微笑みかける。

「大丈夫なわけじゃない！ 僕なんか庇うから……！」

「……そんな言い方、するなよ」

快を腕の中に抱きつつ、レヒトは立ち上がる。

その目は真っ直ぐに、店へ——もとは店の中心部だったと思われる場所に存在する、異形のものへと向けられていた。

例えるなら、それは巨大な眼球だった。

大きさは、人の頭ほどあるだろうか。蝙蝠のような羽を持つ巨大な眼球が、ギョロギョロと視線を周囲に走らせている。なにかを探すように。

「魔物……！？ こんな街の中にまで……！」

二人に気付いたらしい魔物が、その邪悪な瞳を二人に向けた。

レヒトは快を抱え上げ、大きく後方に跳ぶ。二人が立っていた場所に、闇色の火柱があがった。

遠くのほうからは、別の魔物——おそらくブロウ・デーモンだろう——の咆哮が響いてくる。

「くっ……！」

着地の衝撃で、レヒトの背に重い痛みが走った。骨に異常はなさそうだが、問題は動く度に背中を襲うこの痛み。

たとえ命にかかわるような傷でなくとも、痛みは集中力を削ぎ、それは即ち死に繋がる。

レヒトは快の手を引き、少し離れた建物の陰へと連れて行った。

あの魔物は再びなにかを探すように、その視線を絶え間なく周囲に走らせている。

「快、君はここに隠れているんだ。あいつは俺が相手をする」

腰にさげた大剣、セイクリッド・ティアを抜き放ち、レヒトは走り出す。痛みなど、今は気にしていられない。

迫り来るレヒトに気付いた魔物が生み出す闇色の火柱を避けつつ、レヒトは肉薄する。

「はあっ！」

鋭い気合いとともに剣を一閃させ、魔物を一刀両断する。三闘神から授けられたという剣の切れ味は凄まじく、魔物は上下に断ち切られた。

「ギイイイイ！」

この世のものとも思えぬ絶叫。地に落ち、半分に断ち切られながらも、たうつ魔物にとどめをさそうと近付いたレヒトが眼にしたのは、驚くべき光景だった。

なんと、真つ二つに断ち切られた魔物の身体は切断面から再生し、二体に分裂してみせたのである。

「なっ！？」

そこに、一瞬の隙が生まれた。

再生した二体の魔物は、レヒトに向かって体当たりを仕掛けてき

ただ。

「くそっ！」

一体目は身を低くしてやり過ごし、続く二体目は起き上がりざまに斬りつける。

手応えはあった。しかし両断された魔物は、またもやあつという間に再生してしまった。今度は分裂せずに、両断された身体——この場合は眼球だが——が、くっついたただけだったが。

「どうすればいい……？」

レヒトは声に出して呟く。解決策は見付からず、背中痛みは増している。状況は、最悪だった。

ふと、背後に気配を感じて振り返る。

立っていたのは快だった。

「快……！ 隠れてろって言ったじゃないか！」

半ば怒鳴るようにして言ったレヒトに、快は微笑みかけた。

「……嬉しかったの。僕のこと、守ってくれて」

快は一步前に入る。

「ちよつと、思い出しちゃった」

そして振り向き、快はレヒトに向かってにっこりと笑って見せた。

「後は僕に任せて」

そう言つて、快は魔物に向き合う。二体の魔物の血走った眼球が、快を捉えた。

「ちよつとおいたが過ぎるみたいだね。そういう悪い子には……」

快は胸に光る十字架のペンダントを外す。すると、それは淡い光を発し、瞬時に巨大な銃へと変化した。

「お仕置きだよ！」

## 第10話 精霊に愛された娘 - 1 -

快の構える銃は、今までレヒトが目にしたどんな銃とも違っていった。どこか、不思議な輝きを放っている。

一体の魔物に狙いを定め、乱撃を浴びせる。しかし、やはり魔物はあっさりと再生した。

「もう！ あんまりしつこいと嫌われるよ！」

快がそう言うと同時に、手にした銃が変化した。先程の銃よりも銃身が太く、華奢な快の腕では構えるのも大変そうだ。

「砕け散れ！」

体当たり攻撃を容易く避け、反転したところに照準をあわせ、撃ち抜く。直撃を受けた魔物は哀れ、木っ端微塵になった——のだが。

「嘘！」

驚愕の声をあげる快。魔物はまたまた、あっさり再生して見せた。

「うーん……」

銃をもとの形態に戻し、快は小首を傾げた。

「どうしよっか？」

「……それは、こっちの台詞だ」

小さくため息を吐くレヒト。こつもしつこい魔物など、聞いたこともない。

「ねえ、あれって二匹以上には分裂しないんだね」

魔物を指差しつつ、快は言った。

「ああ、さっき俺も何度か斬ったが、あれ以上は増えないらしい」

「ふうん……」

快はなにか思い付いたように、再び銃を変化させた。今度は小型の銃を、両手に二挺構えている。

「あの魔物って、ひよつとすると……」

二体の魔物に、快は同時に銃弾の雨を叩き込む。

魔物はばたばたとのたうち、先程よりはゆっくりとだが、やはり

再生した。

「やっぱりね。レヒト、わかった？」

「……なにがなんだか」

首を傾げるレヒトに、快は指を振りつつ答えた。

「あの魔物はね、分裂したわけじゃなくて、最初から二匹だったんだよ。二匹で一匹つてわけ。最初出てきたときに一匹だったから、誤解してたけどね」

分裂したわけではなく、あれを合図にどこから呼び出された、とでもいったところか。

「なるほどな……」

片方が傷付けば、もう片方が瞬時に再生させる。二体同時に屠るしかない。

（魔物だけに限ったことじゃないが、戦いの基本は各個撃破……うまくやられたな）

レヒトは密かに舌打ちした。

「それなら、二匹一緒にまとめて始末すればいい。再生する暇なんか与えずにね」

さも簡単に快は言ってみせるが、少しでもタイミングがずれば瞬時に再生してしまう魔物相手に、実際にやるのは至難の技である。快の二挺銃では少々威力が足りず、一撃粉碎や連撃可能なあの銃では、二体同時に葬るのは難しい。

かといって、レヒト一人で倒すのは不可能に近く、レヒトと快の付け焼刃のコンビネーションで、なんとかできるとも思えない。

「そうは言っけどな……勝算はあるのか？」

「もちろん！」

快は自信満々といった様子だ。

「こういう戦いこそ、僕の得意分野だよ」

そう言つと、快は銃をペンダントに戻して付け直す。

そして、右手を魔物に向けた。

「防御壁は張っておくから、安心して」

快の唇が紡ぐのは、レヒトには聞き取ることでできない、まるで詠うように不思議な言葉。

聞き返す前に、レヒトの身体を淡い光が包み込んだ。

「精霊よ！」

その言葉とともに、快の周囲の温度が、急激に下がっていく。彼女の足元の大地は、凍り付いていた。

防御壁を張る、と快が言っていた通り、すぐ側にいるレヒトには、なんの影響もなかった。

快の周囲を浮遊する淡い氷色の光が、魔物に向かって解き放たれる。

「氷よ、砕け！」

言葉に弾かれ、辺りの大地を絶対零度の氷が覆い尽くす。二体の魔物も一瞬にして凍り付き、大地に落ちて砕け——それきり、二度と再生しなかった。

「はい、おしまい！」

振り返り、快はレヒトに向かってウィンクして見せた。

レヒトは今更ながらに気が付いた。彼女の太股に、紋様状の『印』があったことに。

「……快、君は……」

「バレちゃった？」

快は小さく舌を出した。あれだけ派手な魔法を使っておいて、バレちゃった、はないだろうに。

「僕は精霊人だよ。驚いた？」

外見は人間に近く、紋様状の印と長く尖った耳が特徴的な、不老長寿の種族といわれる精霊人。

人間族の前から姿を消した古の種族が、今、レヒトの前で微笑んでいる。

「……けど、耳が……」

「ああ、これにはちょっとした事情があつてね。僕は人間と大差ない外見のおかげで、こうして人間の街を出歩けるってわけ」

精霊人が、人間の前から姿を消したのには理由がある。

一つ目には、あの悲しい戦い——四百年前の天魔大戦において生まれた種族、天界人——その製造に、多くの精霊人が捕われ、犠牲となったこと。もう一つが、十年前の精霊狩りである。

十年前の大異変の時、魔物の恐怖に晒された人間たちの目には、自分たちに理解できない不可思議な技、魔法を扱う精霊人も、魔物と同じように映ってしまった。

そして始まった精霊狩り。捕われた精霊人たちは皆、惨いやり方で殺されるか、美しい容姿を金持ちに買われ、愛玩奴隷のごとき扱いを受けたという。

その後、天界最高責任者のレイ・クリスティーヌが、精霊狩りを厳しく禁じ、また魔物が消え去ったこともあり、精霊狩りは収まった。

そうして——精霊人は人間の前から姿を消した。

『人は己に理解できぬものを見ると……ひどく冷たい眼になるからね』——レヒトの主、ラグネス・クリスティーヌは悲しそうにそう語った。

「……こんなに、綺麗なのに……」

怖がることなんて、なにもない。こんなに美しくて、こんなにも儚くて。

「こんなに、恋焦がれる。」

「ありがとう」

快は蕩けるような微笑を見せた。

「そうだ！ こんなことしてる場合じゃなかった！ まだ魔物が残ってたんだ！」

「ああ、急ごう！」

二人は走り出した。先ほど、魔物の咆哮が響いた方へと向かって。

「ふう。これでおしまいっ！」

ブロウ・デーモンの群れの最後の一匹を始末して、レイヴンは額

の汗を拭った。

倒した数は、もはや数え切れない。

「こんな街の真っ只中じゃ、レイヴンのすっごくい魔法が使えないもんね」

というわけでちまちまとした戦いを強いられ、余計に時間を食ってしまったのだ。

「それにしても、レヒトってばだいじょーぶだったかなあ。食べられちゃったりしてないよね？」

それはそれで面白いかも、とレイヴンが呟くと、背後から不機嫌な声が響いた。

「残念ながら無事だ」

「わあっ！」

声に驚き、レイヴンは振り向いた。

腕を組み、仁王立ちしているレヒトと、その背後で二人のやりとりに笑っている快。

「あ、昼間のお姉さん。うわー！レヒト、やるじゃん！」

レイヴンに肘で小突かれ、レヒトは耳まで真っ赤に染まった。

「なっ……！」

「レヒトってば真っ赤。かわいー！」

「かつ、かつ、可愛いとか言うんじゃない！」

お前にだけは言われたくない！ときっぱり告げると、レイヴンはむう、と唇を尖らせた。

「レイヴンのこと、置き去りにしたくせにい」

「そ、それは……」

今度はわたたと慌てるレヒトを見て、耐えきれなくなったのか、快が声をあげて笑った。

「あはは！あゝ、なんか楽しいね！」

「いや、面白がられてもな」

喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか。レヒトは頬を掻いた。

「偶然ね、街外れで会って、一緒にお酒飲んだだけだよ」

「えゝ！ いいなあ！ レイヴンもお酒飲みたゝい！」

「だめだ」

即答。彼は生真面目である。

「なんで？ ガルがお酒飲むときは、レイヴンも一緒なのにゝ！」  
頬を膨らませるレイヴン。レヒトはガルヴァのあの微笑みを思い返して、軽い頭痛を感じた。

「……とにかく、屋敷に戻ろう。快、君も一緒に来てくれ」

「うわっ！ 積極的いゝ」

からかうような口調で言われ、レヒトはまたまた真っ赤になった。  
「違うわっ！ ただ話しておかなきゃならないことがあるだけだっ  
！」

「なゝんだ。期待して損したあ」

（……ガルヴァさん……どんな育て方をすれば、こういう子供が  
来上がるんですか……）

レヒトはがつくりと肩を落とした。

## 第11話 精霊に愛された娘 - 2 -

事後処理を街の警備兵に任せ、三人は場所をラグネスの屋敷へと移した。

疲れていたのか、レイヴンは屋敷に着くなり眠ってしまったため、レヒトは代わりに、快と少し遅めの夕食をとった。

夕食を終え、快のあてがわれた客間へと移動して、レヒトは快に、旅の目的について説明したのだった。

「なるほどね……事情はだいたいわかったよ」

窓辺に立ち、夜空に光る星々を見上げながら、快は言った。

「……精霊人と人間の同盟、か……」

小さく呟き、苦笑する。

「自分がどれだけ無茶言ってるか、自覚ある？」

「ああ」

快の後ろ姿を見据え、レヒトは答えた。

「無茶は承知の上だ。もう悠長にしている時間はない。街の中にまで魔物が現れるほど、事態は深刻になってきている。これは、人間だけに限った問題じゃない」

「確かにね。それは、僕も感じる」

レヒトの言葉に、快は頷いた。

「けどね、現実問題として……人間と精霊人が同盟を結べると思う？」

「それは……」

レヒトはなにも答えられなかった。

「人間にとっては、長い年月だったかもしれないけど……」

そこで一度言葉を切り、瞳を閉じて、快は続ける。

「精霊人が受けた傷は……まだ、癒えてはいないんだ。四百年前のことも、十年前のこともね……」

快は振り返り、レヒトに目を向けた。深い悲しみを宿した瞳。彼

女もまた、過去の人間の手による凶行の、被害者なのだろうか。

「……それでも」

レヒトは、静かに言葉を紡ぐ。

「それでも、俺は行く。過去に起きた悲劇を繰り返さないためにも、人間と精霊人の間に、絆を作る。口で言うほど簡単じゃないのは、わかっているさ。けれど、だからと言って、逃げるわけにはいいかな」

快は、少し驚いたような表情を見せた。

「……レヒト……」

自分を見つめる彼女の視線に、レヒトは照れたように頬を掻く。

「馬鹿な奴だって、思った？」

「まさか」

唇に指をあて、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「僕、惚れちゃったかも……なんてね」

「か、からかうなよ……」

レヒトの頬が朱に染まったのを見て、快はクスクスと笑った。

「冗談はともかく。君たちを、精霊界に案内するよ。同盟が結ばれるよう……僕が、人間と精霊人を結ぶ架け橋になってあげる。それができるのは、僕だけだから……」

「ありがとう……けれど、いいのかい？」

「なにが？」

小首を傾げる快。少し躊躇ったあと、レヒトはゆっくりと口を開く。

「君は……人間を、恨んではないのか？」

返答は、ない。快はレヒトに視線を向けていたが、その瞳は、どこか遠くへ——おそらく、二度と戻らない過去へと向けられていた。

「……憎しみは、憎しみしか生まないよ」

しばし時を置いて、快は答えた。

「昨日を嘆き悲しむより、前を向いて明日を生きると……彼がそう、教えてくれたから」

彼女は微笑んでいた。しかし、レヒトの目には、泣き顔のように映った。

「……明日は早いよ。今日はもう休もう」

小さな声でそう告げて、快は夜空を見上げる。月光を受けた後ろ姿は、触れれば消えてしまいそうなほどに、儚くて。

「快！」

「なあに？」

彼女の存在が掻き消えてしまうような、どうしようもない不安を感じて名を呼べば、快は振り返り、あの可憐で、そしてどこか妖艶な笑みを見せた。

「……あ、いや……」

言葉を濁すレヒトに、快はどうしたの、と笑いかける。

「君が……消えてしまうような気がしたから……」

小さな声で、レヒトは呟く。

「え？」

「いや、なんでもない。明日は早いんだろう？ 俺も、もう寝るでしょう」

「あ、そうだね。おやすみ、レヒト」

「……おやすみ、快」

そう答えて、レヒトは部屋を出る。背後で扉の閉まる音を聞き、快はそつと窓を開けた。

「……これで、いいんだよね？ 僕は……正しい道を、選びとれたよね？」

流れる風をその身に感じながら、快はぼつりとそう呟いた。

「……君は、今どこで……この風を感じているの？」

温かな雫が溢れ落ち、木製の窓枠に染みを作る。

「……会いたいよ……疾風……」

小さな声は、風に流されて消えた。この地上のどこか、彼女の想い人のもとへ、言の葉を届けるかのように。

「……疾風……」

風が、そつと快の髪を揺らす。部屋の外、廊下に立ち尽くす人物に、彼女は気付かなかったようだ。

（疾風……か）

扉の前に、レヒトは佇んでいた。

（……盗み聞きするつもりは、なかった）

しかし、快の呟いた名を耳にした途端、足が動かなくなった。

疾風——聞いたことは、ない。快と同じく、不思議な響きを持った名前だった。

おそらく、精霊人なのだろう。

（恋人……なんだろうな）

レヒトは胸のあたりが痛むのを感じた。

（馬鹿なことを……余計な詮索なんか、するもんじゃない）

浮かんでは消えてゆく様々な思い。それを振り払うように、レヒトは首を振った。

翌朝。集合を約束した食堂に、一番乗りでやって来たのはレヒトだった。すぐに、給仕が朝食を運んで来る。

すると、ぱたぱたと階段を走り降りる音が聞こえた。それから扉が勢いよく開き、現れたのは予想通りの人物。

「おはよう、レイヴン」

「おっはよお！」

元気いっぱいに返してくる。

「疲れはとれたか？」

「ばっちり！」

そう答え、レヒトと向かいあわせの椅子に座る。給仕がレイヴンの朝食も運んで来た。ちなみに、メニューはあの極甘パンケーキである。昨日のうちに、料理長にレイヴンの好物を伝えておいたのだ。「わあ、パンケーキだ！」

嬉しそうにパンケーキに手を伸ばすレイヴン。それを見て、レヒトは微笑んだ。

「切り分けてやるのか？」

「うん！」

その様子を見ていた給仕や料理人たちが、まるで親子のようだと話していたのはここだけの話。

「快、遅いね」

食事を終え、壁にかけられた時計を見ながらレイヴンが言った。

「確かに遅いな」

約束した時間は、とうに過ぎてしまっている。

「……様子を見に行くか」

「レイヴンも！」

二人は食堂を出て、快のあてがわれた部屋へ向かった。

ラグネスの屋敷は、魔界を統べる者が住まうにしては質素なものだ。必要最低限のものがあるだけで、無駄は一切ない。調度品なども花を飾る花瓶や、客間に置く絵画程度のものである。

これはラグネスの性格を反映したものであり、そんなラグネスに育てられたレヒトにも、少なからぬ影響を与えている。

彼が高い地位の割に偉ぶったところがないことや、庶民的な考え方なのもそのためである。

「快、起きてるか？」

返事はなかった。しかし、いないわけではなさそうだ。

「参ったな……まだ寝てるのか」

「なんで『参ったな……』なの？」

レヒトの声真似をしながらレイヴンが言った。似てないぞ、と一応突っ込みを入れておく。

「……と言われてもな。男の俺が、女性の寝所に押し入るわけにはいかないだろう」

「なんで？」

レヒトは軽い頭痛を感じた。

（……これは説明しないといけないのか？）

しかし、答えない限り、延々と『なんで』と『どうして』が繰り返されることは目に見えている。探求心と好奇心において、レイヴンの右に出るものはいない。

そして旅をし始めてから気付いたのだが、どうやらレイヴンは一般常識というものが欠落しているらしい。

『神の頭脳を持つ』などと称されるくせに、日常生活で必要な知識や一般常識などは人並み以下なのである。なにしろナイフとフォークの使い方すら、わかっていなかったのだから。

「……一般常識だ」

しばらく悩んだ末、そうとだけ答えた。これ以上は説明する気にならない。

「快！ まだ寝てるのか？」

何度呼んでも返事はない。

「仕方ないな……入るぞ」

聞いてはいないだろうが、一応断わりを入れる。扉に鍵がかかっているかとも思ったが、かかっていなかった。

「用心だな……」

寝台で毛布にくるまったまま、まだ情眠を貪っている姫君を見て、レヒトはため息混じりに呟いた。

「快、起きろ。約束の時間は過ぎてるぞ」

細い肩を揺する。さすがに目が覚めたのか、薄く瞳が開き、むにやむにやと、なにやら言葉にならぬ声が唇から漏れた。

「出発するんだろ？ 早く起きて」

レヒトが言い終える前に、快は寝惚け眼で起き上がり、レヒトに右手を向けて言い放った。

「……水よ、泣け」

水瓶を引っくり返したかのような水流が、避ける間もなくレヒトを襲った。

快が寝惚けているからか、威力はだいぶ落ちており、被害はレヒトがずぶ濡れになっただけですんだ。

ちなみにレイヴンは快のあれが詠唱だとわかっていたらしく、少し離れた場所に避難している。

「……快」

「ふぁ……なぁに？」

まだ完全に覚醒していないのか、欠伸混じりに返す快。

「起きろお~~~~っ！」

屋敷中に、レヒトの声が響き渡った。

## 第12話 隠密の帰郷

魔界首都ロイゼンハウエルを出発してから、指折り数えて両手に足りなくなつたある日のこと。一行は快の案内で、ようやく精霊界への入り口へと辿り着いた。

「思ったより時間がかつちやつたなあ」

「……間違いなく快のせいだぞ、それは」

レヒトは小声で呟く。快の寝起きの悪さは凄まじく、レヒトは何度命を危険に晒したか知れない。快を起こす度に、なにかしらの魔法が飛んでくるのだ。かといって、起こさなければいつまでも寝続ける快を起こさないわけにはいかず、それは必然的にレヒトの役目になっていた。

しかも、快は自分の寝起きの悪さをまったく自覚していないし、魔法をぶつ放すことも覚えていないのである。

「なにか言つた？」

「いえ、なにも」

ちよつぱり、レヒトは悲しくなった。

「精霊界まではあとちよつとだよ。あゝ、今日はあつたかい寝台で寝られる」

快は幸せそうに呟いた。

「ここのところ、ずっと馬車か森の中で野宿だったからな」

見ていた地図をしまいながら、レヒトはそう返す。

魔界から東に存在する『精霊の森』——位置的には、森のちょうど中心部だろうか。大きな湖の前に、一行はいた。水面が太陽の光を受けて、キラキラと美しく輝く。

しかし、この光が満ちる美しい森の中でも、レヒトたちは何度か魔物と遭遇した。

精霊の森に、魔物が出るなんて……快はショックを隠しきれぬ様子だった。

やはり、魔物の被害は人間だけにとどまるものではなかったということだ。一刻も早く精霊王にヘヴンの危機を告げ、同盟を結ぶ必要がある。

湖のすぐ傍まで近付いた快が振り返り、両手を広げて見せた。

「ここが、精霊界への入り口だよ」

「……そう言われてもな」

レヒトとレイヴンは顔を見合わせた。

森の中に大きな湖があったことには驚いたが、それ以外には、特に変わったものはない。

だが、レヒトは目の前の湖から、なにか不思議なものを感じていた。言葉では言い表せない、なにかを。

「この湖……なにか変だ」

レヒトがそう呟くと、快は少し驚いたようだった。

「精霊を感じたんだね、レヒト」

「俺が……精霊を？」

精霊とは、ヘヴンに満ちるエネルギーのことだ。精霊は全ての生物が生きてゆくのに必要なエネルギーであり、ヘヴンの創造神たる、三闘神の精神そのものだと考えられている。

神がかり的な技——魔法を行使するにも、精霊の力が必要なのである。精霊を感知し、その力を借りて解き放つ——それが魔法なのだ。

それだけを聞くと、誰にでも扱えそうなものだが、すべての者が精霊を感知できるわけではない。生まれつきの素質、種族的な要素が深く絡んでくる。魔法を扱えるのは、精霊人、魔精霊、竜族——確認されている限り、この種族の者だけである。この三種族に当てはまらないレヒトは、精霊を感知できない。そのため、彼は魔法が使えない。

ちなみに、天界人とは人工的に魔法を扱えるようにされた魔界人のことを指す。両者はもともと同じ種族なのだ。

ここでは詳しくは述べないが、魔精霊と竜族の使う技は、精霊人

のように自然に干渉するタイプの魔法ではない。己の肉体そのものを、精霊の力を借りて変化させるのだ。

「精霊界はね、精霊がたくさん存在する場所なんだ。だから、精霊界の入り口であるこの湖からは、精霊の力が溢れているんだよ。それでも、気付くなんて凄いね」

「俺は職業柄、人より神経が鋭くなっているから……そのせいかな」

レヒトはそう答えた。魔界評議会の議長を務めるラグネスの護衛役という職業柄、襲撃なども多かったため、人の気配などにレヒトはかなり敏感だ。それに加え、彼は生まれついて、特殊能力とも呼べるほどに卓越した神経を備えている。

「そっかあ。む……レイヴンは感じなかったけどなあ」

水面と睨めっこするレイヴンに、レヒトは落ちるなよと声をかけた。

快は水面を見つめ、精霊に呼び掛けた。すると、水面が虹色に輝き始める。

「さ、行こう」

そう言って、快は湖に飛び込んだ。慌てて覗き込むが、彼女の姿を捉えることはできなかった。

「行こうって……」

レヒトとレイヴンは思わず顔を見合わせる。

「やってみる他なさそうだね。快、先に行っちゃったし。……どーしたの？」

心なしか蒼白い顔のレヒトに、レイヴンは問いかけた。

「……泳げないんだ」

返ってきた言葉に、レイヴンは目を丸くする。

「えっっ！？ レヒトってば泳げないの！？ うわあゝ」

「……なんだよ」

「別にいゝ」

レイヴンにはにこにこ笑った。完全にこの状況を楽しんでいる。

「じゃあ、レイヴンは先に行くね〜！」

とおっ！ と元気よい掛け声とともにレイヴンは湖に飛び込み、その姿はすぐに見えなくなった。

「……はあ」

レヒトは深いため息を吐いた。

考えていても仕方ない。覚悟を決めて、レヒトは虹色に輝く水面へとダイブする。

水の中にいるとは思えないほどに視界は鮮明で、呼吸もできた。

肺に流れ込むのは、空気とは違うなにか冷たいものだったが。

（水……じゃないのか？）

水とは違う、キラキラと輝くなにか美しい流れの中を、レヒトは急降下——方向感覚がわからないので、ひよっとしたら急上昇かもしれないが——していた。

すると、目の前の景色が歪み、光が強くなった。

「ぷはっ」

『水ではないなにか』の中から、外に出られたらしい。肺を満たす空気が、それを告げている。

レヒトは『水ではないなにか』の中に、漂うように浮いていた。

辿り着いた場所は、先ほどの湖があった場所と同じような雰囲気のところだ。

違うのは、そこに満たされていたのが『水ではないなにか』だということ。そしてあとは、あたり一面、見渡す限り薄桃色だったということ。

木々も、草木も、見たことのないもので——それらは全て、薄桃色だった。

その周囲には、淡く光る胞子のようなものがふわふわと浮遊しており、とても美しい、幻想的な場所だった。

「あ、レヒト」

木の根本に座っていた快とレイヴンが手をあげた。レヒトは大地に手をかけ、『水ではないなにか』の中から上がる。やはり水とは

違っていたらしい。体や衣服はどこも濡れていない。

「あれってなんだろうね、レヒト」

「俺にはわからないな」

レヒトとレイヴンは揃って首を傾げた。

「精霊界へようこそ。僕たちが暮らす都は、ここから少し離れた場所にあるんだ。案内するよ」

二人は快の後を追ひ、美しい薄桃色の森の中を歩く。足をつけるたび、大地から薄ぼんやりと光る綺麗な粉が、ふわっと微かに舞い上がった。

「なんだろ、これ。ちょっと採取していこつかな」

レイヴンはこの不思議な森がたいそうお気に召したらしい。

浮遊する胞子を捕まえようとしているようだが、捕まえたはずのそれは難なくレイヴンの指をすり抜け、逃げるように遠ざかっていった。

しばらく歩いていくと、少し開けた見晴らしのいい丘に辿り着いた。

「あー！」

なにかを見つけたらしいレイヴンが声をあげた。光る胞子を捕まえるのは諦めたようだ。手にした透明な小さな瓶には、胞子の代わりに薄桃色の草花がいくつか納められていた。

「あそこ？」

指さす方向に見えるのは、薄桃色の森の中に見えた、宝石のような氷色。

「そうだよ。あれは精霊王の王宮。とは言っても、小さなものだけだね」

「……あそこに精霊王様がいらっしゃるんだな」

「そういうこと」

快は頷いた。そして神妙な面持ちで告げる。

「ここからは、あんまり大きな声を出さないで。見付かると煩いから」

「わかった」

「こっそり行くの？　なんか楽しそうだね！」

言われた側から語尾が跳ねる。

「静かにしてろよ、レイヴン」

そう釘をさせば、レイヴンはわかってるよと頬を膨らませた。

快に連れられ、二人は精霊人の都へと足を踏み入れた。とはいえ、あくまでこっそりとである。都の中は通らずに、抜け道を使ってじかに王宮へと入ることに成功した。

「誰も知らない秘密の抜け道だからね。見付かる心配はないよ」  
そう言つて、悪戯っ子の笑みを見せる快。

「よく、こんな抜け道を知ってたな」

「昔、色々と悪いことを教えてもらったからね」

快はウィンクした。と、その時。

「快！」

静かな王宮内に声が響く。声のしたほうに視線を移せば、見た目には快と同じくらいの年頃の女性が、一行の傍に走り寄ってきた。

「快！　久しぶりね！　ずっと帰ってこないんだもの……。なにかあったんじゃないかと、心配したわ」

兄さんと同じように、と。女性が小声で呟いたのをレヒトは聞き逃さなかった。

「誰？」

レイヴンが快に声をかける。そこで初めて二人の存在に気付いたらしい女性が小さく声をあげた。女性の目に、一瞬よぎった怯えの色。

「快、その人たちは……」

「大丈夫だよ、瑠璃。僕の友達だから」

快の言葉に、瑠璃と呼ばれた女性は安堵したようだった。

「そうよね。快が連れて来た人たちだもの……。大丈夫よね」

自分に言い聞かせるように言つて、瑠璃は深々と頭を下げた。

「ごめんなさい、怯えたりして。私、瑠璃っていいいます。あの……  
よろしく願います」

おずおずと差し出された手を、レヒトは握り返した。細くて壊れ  
そうな手だと、レヒトは思った。

「俺はレヒト。よろしく、瑠璃さん」

「レイヴンだよ！　よろしくう」

「はい、よろしく願います」

もう一度そう言って、少しぎこちないながら、瑠璃は微笑んで見  
せた。

「瑠璃。いきなりで悪いんだけど、精霊王に取り次いでくれないか  
な？」

「そんな。取り次ぎなんていらないわ。精霊王様、ずっと快のこと  
を心配してたんだから。早く顔を見せて差し上げなきゃ！」

「え、けど、ほら。一応、形式は形式だし……わ！　ちよつと待  
つてよ！」

瑠璃は快を引きずって行った。彼女はしなやかに筋肉の付いた快  
と違い、線の細い感じのする女性なのだが、見た目によらず、意外  
と腕力はあるようだ。

レヒトとレイヴンも、二人の後を追う。

奥まった場所にある大きな氷色の扉の前に、二人は立っていた。

この扉の向こうが、玉座の間なのだろう。

扉に向かい、瑠璃が声をあげる。

「精霊王様、快が戻って参りましたわ。お客様も一緒に一緒です」

すると、扉がゆっくりと開き、三人は瑠璃に促され、部屋の中へ  
と足を踏み入れた。

### 第13話 癒えぬ傷跡

玉座に腰かけていたのは、燃えるような真紅の髪に、快と同じ蒼穹色の瞳を持った男性だった。外見的な年齢は、三十歳前後といったところか。鋭い光を宿す切れ長の瞳が、彼にどこか知的な印象を与えていた。

精霊王は快に視線をやった。うつ、と小さく呻き、快は精霊王から視線を外して小さく答えた。

「あゝ、えっと、その……なんていうか、ただいま」

そう言つて、精霊王に――彼が腰かけていた玉座のほうに視線を戻す。だが、彼はそこにはいなかった。いや、正確にはいたのだ。彼女の目の前に。

「快！」

瞬間移動と見紛うような速度で快の目の前に移動した精霊王は、そのまま彼女をぎゅっと抱き締めた。

レヒトは突然のことに啞然とした。レイヴンも驚いたようだが、瑠璃のほうはにこにこしている。ちなみに、抱きつかれている快はなんともいえない微妙な表情だ。

「おお、おお。よくぞ無事に戻った。お前の無事を神に感謝せねば……！」

「相変わらず大袈裟だなあ……」

ぼろぼろと涙する精霊王に、快は呆れたように言った。

「大袈裟なものか！」

精霊王はムツとしたように言い返す。

「なにも言わずに出て行きおつて、本当に心配していたのだぞ！

ああ、お前が無事で本当に……うう……快！」

また泣き出した。威厳もなにもあつたものではない。

「……ほんとにあの人が精霊王なのかな」

レイヴンが小声で呟いた。もちろん、レヒトに答える術はない。

「黙って出てったのは悪かったと思ってるけど、僕だってもう子供じゃないんだからさ」

「私にとっては、いくつになろうと可愛い娘だ」

「娘!？」

驚きの声をあげるレヒトとレイヴン。

「そう。この人、僕のパパ」

(似てない……)

二人を見比べ、レヒトは素直にそう思った。快は母親似なのだろうか。

「もう……僕が悪かったってば。だからいい加減泣きやんでよ」  
困ったように快が言えば、瑠璃も同意する。

「精霊王様、お客様の前ですし、感動の親娘対面は後ほどゆっくりと」

「おお、そうだな」

瑠璃の言葉に、精霊王は頷いた。

「客人よ、失礼した。私の名は紅蓮。この精霊界を治める者だ」

凜とした声でそう言った。が、まだ快に抱きついたままだ。なんだかいろいろと台無しである。

「うわ……本物だ」

「俺はレヒト、こっちはレイヴンです。お初にお目にかかります、精霊王様」

慌ててレイヴンの口を塞ぎ、レヒトは挨拶した。

「いい加減離れてってば」

抱きつかれたままの快が、紅蓮を引き剥がしつつ言った。

「パパにそんなこと言うなんて……酷いぞ、快！」

いつの間にか懷から取り出した、快によく似た人形を抱き締め、紅蓮は傷付いたような仕草をしてみせる。

瑠璃が平然としているところを見ると、こういったやりとりはおそらく日常茶飯事なのだろう。

なんでもいいが、大の男がそういった仕草をしないで欲しいもの

である。

「僕そつくりの人形相手になにやってんのさ！ 気持ち悪い！ 没収！」

人形を取り上げる快。

「そんな〜！ パパの宝物を！ 返しなさい！」  
「嫌！」

「あ、待ちなさい！ 快〜！」  
逃げる快と追う紅蓮。

「まあまあ、相変わらず仲良しですね」  
そんな二人を見て、瑠璃はにこにこ笑った。

「……で、どうすんの？ あれ」  
「……」

目の前で始まった妙な親娘喧嘩を遠目に眺めつつ、呆れた口調で言ったレイヴンに、レヒトは答える術を持ってはいなかった。

「……それでは、君たちの用件を聞こうか」

結局、人形を取り返すことはできなかったらしい。

少し涙目になっている紅蓮に促され、レヒトは今この世界に起こりつつある異変、そして旅の目的を説明した。

「……ふむ。確かに、魔物の動きがあつたことはこちらも承知している」

レヒトの説明を聞き終え、真面目な表情で紅蓮は頷く。

「しかし、街の中に出現するほどの事態になっているとは……。精霊界には、まだ直接的な被害がないとはいえ……捨て置くことのできる問題ではないな」

「……十年前の大異変のようなことになったら……」  
話を聞いていた瑠璃が、小さく呟いた。

重苦しい沈黙が、部屋を支配する。十年前の大異変、未だ精霊人の心には、深い傷として残っているのだろう。

「……それを防ぐためにも、人間族と精霊人の間に……同盟を結び

たいと、俺は思っています」

レヒトは静かに言葉を紡いだ。

「十年前の大異変で起きてしまった悲劇——それを繰り返さないために、どうか」

「人間と精霊人の間に、同盟を結ぶ……か」

紅蓮は目を閉じた。

「……確固たる絆があれば……あのような悲劇は、起きなかったかもしれないぬ……」

再び部屋に沈黙が流れ、しばし刻を置いて、紅蓮はレヒトに向かって敵かに告げた。

「君の考えはよくわかった。私も、その通りだと思う。だが……残念だが……君の力には、なれぬ」

「パパ！」

レヒトより早く、快が声をあげた。

「どうしてさ！ 今だって、人間は魔物に襲われる恐怖に苛まされているんだよ！？ それに、これは僕たちにだって、無関係な問題じゃ……！」

「それはわかっている」

紅蓮は快の言葉を遮った。

「……考えてもみるのだ、快。現に、精霊界には未だ魔物の姿はない」

「それは、そうだけど……」

うつむき、快は悔しそうに唇を噛み締めた。

「それに、仮に私が了承したとしても……民からの支持は得られないだろう。皆、未だ苦しんでいる。お前とて、例外ではあるまい？ いつまでも、還らぬ者を探し続けて……」

「僕のことはどうだっていいんだ！ 放っておいてよ！」

珍しく、快が声を荒げる。

「そんなことはできない。私にとっては大事な問題だ。疾風も、そんなことを望んでは……」

紅蓮の言葉は、凄まじい轟音と激しい震動とに掻き消された。

「な、なんだ？ 地揺れか？」

地揺れとは、読んで字のごとく大地が震動する現象である。原因はまだ説明されてはいないようだが、魔界南部、特に南東部ではこの地揺れが多い。

揺れはだんだんと強くなり、立っているのが困難なほどの激しさとなっている。

（地揺れ？ いや、違う……これは、ただの地揺れなんかじゃ……）  
本能的に、レヒトはそう悟っていた。

「なにかが……近付いてくる」

レヒトが呟くとはほぼ同時に、突き上げるような一際激しい揺れが起きた。

「きゃっ！」

バランスを崩してよろけた快を支える。

「大丈夫か？」

「ありがと。もう大丈夫」

快はレヒトと顔を合わせようとはしなかった。どこか、寂しそうな彼女の横顔。

「……揺れは、収まったようだな」

玉座に手を付いて、紅蓮は立ち上がった。傍の床に座り込んでいた瑠璃に、手を貸して立たせる。

「あゝ、びっくりしたあ。なんだったんだろうね」

スタッフを文字通り、杖代わりにして耐えていたレイヴンがそう言った。

「わからない……けど、なにか嫌な予感が……」

その言葉が終わらぬうちに、明らかに人のものではない、遠い咆哮が響き渡った。そして、いくつもの悲鳴があがる。

「あ、レヒト!？」

快とレイヴンが気付いたときには、その場にレヒトの姿はなかった。

（間違いない……魔物が現れたんだ）

玉座の間を飛び出したレヒトは、長い廊下を走っていた。最初の別れ道、迷わず右へ。次の別れ道は、左へ。己の勘だけを頼りに、レヒトは走り続ける。

目に飛び込んだできたのは、大きな扉。蹴り破るように開き、外へ。レヒトが目にしたのは、巨大な影。それは、百足に似た生物だった。

硬そうな皮膚に、鋭い刃のような足。魔物のすぐ側の大地には、巨大な穴が空いていた。あの地揺れは、魔物が地下を移動したためのものであったのだろう。

「うわあああつ！」

「きやあつ！」

逃げ遅れた精霊人を食らおうと、魔物が迫る。あの鋭い顎に食いつかれたら、人の体などあっさり千切られてしまうだろう。

「やめろあつ！」

セイクリッド・ティアを抜き放ち、魔物の足を数本まとめて斬り落とす。

斬り落とした場所からは、青紫色の体液が溢れ出した。

「キシヤアア！」

レヒトに気付いたらしい魔物が、その鋭い顎でレヒトに襲いかかった。

左に飛んでかわし、着地と同時に、横を通る足を再び数本斬り落とした。

「フシユウウ……」

上体をもたげ、レヒトに狙いを定める魔物をしっかりと見据える。すると不意に、魔物はレヒトから視線を外した。その視線を追えば、そこにいたのは幼い子供。恐怖からか、逃げることもできずに、ただ魔物を見上げていた。

（まずい！）

レヒトはとつさに剣を捨て、走った。重たい大剣は、素早く行動するには邪魔にしかならない。

子供を抱えて、大地に伏せる。間一髪、そのすぐ上を、凄まじい速度で魔物が通りすぎていった。

「大丈夫か？」

恐怖で震える子供に、優しく問いかける。子供は我に返ったように小さく頷いた。

「あ、ありがとう……」

小さな声で呟いた子供の顔に、影が落ちた。その視線が、ゆっくりと上を向き――。

「兄ちゃん！ 後ろっ！」

叫び声で振り返る。そこに、二人を狙う魔物の姿があった。

## 第14話 未来へ進む道

（しまった……！）

剣は投げ捨ててしまっている。レヒトは立ち上がり、魔物と対峙した。

「に……兄ちゃん……」

子供が、レヒトの脚にすがり付いてくる。その声は、恐怖に震えていた。

二人の周囲を、魔物の体がとぐろを巻くように取り囲んでいた。完全に退路を絶たれ、武器はない。

（くそっ……なんとかこの子だけでも……！）

レヒトは唇を噛み締めた。

魔物はその口から、なにか白い液体を二人に向かって吐き出した。

レヒトは、庇うように子供を抱き締め、魔物に背を向けた。

「兄ちゃんっ！」

子供の絶叫が響く。その時だった。

「光よ、護れ！」

二人の前に、輝く光の盾が現れた。液体は光の盾に弾かれ、横手の大地に降り注ぐ。液体を浴びた大地は、嫌な音と煙とを吹き上げた。

（溶解液……！）

レヒトは背筋が凍るのを感じた。あんなものの直撃を受ければ、それこそ骨も残らないだろう。魔物が声に反応して、そちらへ視線を移した瞬間。

「プチポアルス！」

レイヴンの掲げたスタッフから放たれた激しい雷撃が、無防備だったの魔物の腹部を襲った。

「シャアアウー！」

痛みのにたうつ魔物。レヒトは隙を見て魔物の作り上げた檻から

脱出し、二人と合流する。

「……助かったよ。快、レイヴン」

「まったく、無茶するんだから……。こっちの心臓に悪いよ」

快は重そうに抱えた大剣をレヒトに差し出した。先ほど、レヒトが投げ捨てたセイクリッド・ティアだ。

「ありがとう」

「翡翠も、大丈夫だった？」

レヒトの腕に抱かれた子供に、快は声をかけた。

「うん、大丈夫。兄ちゃんが助けてくれたんだ」

翡翠と呼ばれた子供は、嬉しそうにそう言った。もつとも、精霊人であるこの少年が、見た目通りの年齢だとは限らない。

「翡翠、君は離れた場所に隠れているんだ。ここは危険だからね」

レヒトがそう言うと、翡翠は素直に頷き走って行った。きっと、レヒトが英雄のように見えているのだろう。

「かつこいいじゃん、レヒトってば」

レイヴンが言うと、レヒトは照れたように頬を掻いた。

「まずはあの魔物を、なんとかしないと」

受け取ったセイクリッド・ティアを、レヒトは再び構える。

レイヴンはスタッフを、快はペンダントを銃に変化させて、それぞれ構えた。

魔法でレイヴンに射たれた場所は焼け焦げてはいたが、致命傷とはなっていないようだ。

「あの皮膚、相当硬いみたいだね。レヒトの剣じゃ、だめかな？」

レヒトの構えたセイクリッド・ティアを見て、レイヴンが言った。「斬れるかもしれないが、あそこまで近付くのは難しい……急所がわかればな」

魔物は迂濶にはしかけられないと悟ったのか、上体をもたげ、三人を威嚇している。こちらの様子を窺っているのだろうか。

「頭……は、狙うの難しそうだね。さっきのスピード、凄かったし」  
快の言葉に、レヒトは頷く。あの魔物の速さは確かに尋常なもの

ではなかったが、その巨体ゆえに、魔物が動いた瞬間に身をかわせば、避けることはできるのだ。だが、なんとか避けられるというのと、仕掛けられるというのには、天と地ほどの差がある。

「俺の剣じゃ、頭を狙うのは無理だ。二人の魔法を、同時に叩き込む……ってのはだめか？」

レヒトが言うと、レイヴンは少し考えるように腕を組んだ。

「さっきのレイヴンの魔法、一応、ダメージはいったみたいだしね。今度は頭、狙ってやってみようか」

「オーケー。僕の魔法も同時にぶつけてみよう」

話はまとまったようだ。魔法には精神を集中させ、精霊を行使するための詠唱が必要不可欠である。そのためには、魔物を引き付けしておく罠役が必要だった。

「よし。その間、俺が魔物を引き付けて時間を稼ぐ」

罠役を買って出たレヒトは、魔物に向かって走り出した。反応した魔物の、鋭い顎がレヒトに迫る。

それをかわし、隙を突いて腹部を横に薙ぐ。辛うじて傷は残るものの、致命傷にはほど遠い。

「セイクリッド・ティアでも、傷を残すのがやつとか……」

この様子では、おそらく並の武器では傷も付かない。そしておそらく、この防御力こそがこの魔物の最大の武器なのだ。これでは、魔法の扱えない人間たちでは、打つ手がない。一方的に蹂躪されて終わりだろう。

「レヒト、離れて！」

快の声が響いた。レヒトは大きく後ろに跳ぶ。

「プチヴォルケーノウ！」

「焰よ、踊れ！」

同時に放たれた二人の魔法。レイヴンのスタッフの先から吹き出した焰と、快の右手に宿った焰。二人の生み出した焰が、まるで意思を持つかのように、魔物に向かう。

焰は見事、魔物の頭に命中した。

「フシャアアアア！」

頭を焼かれ、それでもまだ、魔物は倒れなかった。

「ちっ……しつこい」

「これは、ちよつとずつダメージ与えて、何度も繰り返して倒すしかないかな」

「……そうだな」

レヒトがそう答えた時。蒼穹が輝き、淡い光が降り注いだ。すべてを浄化するような、美しく、優しい光。

「あ、あれは……！」

驚きの声をあげたのは、快。

光は魔物を包み込み——魔物は一瞬にして灰と化した。断末魔の悲鳴も残さずに。いや、苦しむそぶりすら見せずに。

「皆、無事か？」

凜とした声。視線を向けると、王宮へと続く扉の前に紅蓮が立っていた。

「パパ！」

（今は……そうか、精霊王様の魔法か）

レヒトは納得した。三人がかりでてこずった魔物を、一瞬にして葬り去ってしまった。

（やっぱり、凄いな……）

そんなことを考えていると、紅蓮がレヒトに目を向けた。

「レヒト、と言ったね。君のお陰で、多くの命が救われた。感謝する」

そう言つて、紅蓮は頭を下げた。

「そ、そんな……俺はなにも……」

ひたすら恐縮するレヒトに、紅蓮は笑いかける。快到似た、少し悪戯っぽい笑顔。

「……君の申し出、受けようと思う」

「精霊王様……！ ありがとうございます！」

頭を下げるレヒトに、紅蓮は首を横に振った。

「礼を言うのは、私たちのほうだ。私は君の申し出を断ったはずなのに」

周囲を見渡し、紅蓮は言葉を続ける。

「君は私の民のために、必死で戦ってくれた。私たち、精霊人のために」

「パパ……」

紅蓮は快に視線を向け、苦笑した。

「お前のほうが、正しい道を選び取れていたようだ。人間とともに歩むという、道を……」

「そう、教えてくれた人がいたからね」

そう言って微笑む。紅蓮は周囲に集まった精霊人に向けて、威厳ある口調で告げた。

「聞け、皆の者。我々は、人間族と同盟を結び、この世界の危機にともに立ち向かってゆくことになる」

精霊人は皆、静かにその言葉を聞いていた。

「あ、あの……」

一人の女性が、おずおずと進み出た。

「……人間を信じて……大丈夫なのですか？ また、あのようなことが……」

周囲にざわめきが、波のように広がる。それも仕方ないことだと、レヒトは思った。

過去、人間が精霊人にした仕打ちは、当事者でないレヒトには、想像もできないほどに酷いものだったのだ。許せと言われて、簡単に許せるようなことではないのだろう。

「そんなことない！」

そんな中、ざわめきを裂くように、大きな声が響いた。

「翡翠……」

レヒトが助けたあの子供——翡翠が、皆の真ん中に立っていた。

「あの兄ちゃん、おれを守ってくれたんだ！ おれは、兄ちゃんを信じる！」

幼い瞳に宿る、強い光。

「……わ、私も……信じます」

紅蓮の背後に控えていた瑠璃が、小さな声で言った。

「レヒトさんも、レイヴンさんも……私たちのために、戦ってくださいました。怖がってばかりじゃ……だめだと思っんです……。だから、私はお二人を、人間を、信じます」

レヒトは瑠璃と目があつた。はにかんだように、瑠璃は笑う。レヒトも微笑み返した。

「……過去の悲劇を悲しみ、閉じ籠っていても、なにも変わりはないよ」

ぽつりと、快が呟いた言葉。見上げた蒼穹と同じ色をした彼女の瞳は、静かな光を湛えていた。

「悲しみや憎しみは容易くは消えないけれど……。それにいつまでも縛られていては……未来のために、今なにをするべきなのか——見失ってしまうから、ね」

詠うようにそう言って、快はそつと微笑む。

レヒトは、彼女の微笑みの中に潜む、異質な感情を捉えていた。

「ね、レヒト？」

彼女に瞳を向けられる。その瞳から、あの感情は消え去っていた。

「その通りだ……」

どこかで、声があがった。

「……私も、信じてみる」

また、声があがる。

「お、俺も！」

「私も！」

次々にあがる、声。レヒトの胸に、熱いものがこみあげてきた。

「よかったね、レヒト」

「……ああ……」

レヒトは、こみあげる涙を、誰にも気付かれないよう、そつと拭いた。

## 第15話 還らぬ人

その夜、精霊界ではレヒト、レイヴンを歓迎する宴が、盛大に開かれた。

あれだけの戦いだっただにも関わらず、一人の死傷者も出さずにすんだことで、精霊人は二人を認め、心を開いてくれたようだった。

「……ふう」

宴の会場となっている広場の隅で、レヒトは一人、風に当たっていた。

ひっきりなしに勧められる酒をなんとか断わり、ようやく落ち着ける場所を見付けたところだ。

レヒトは酒に強いほうではない。あのままでは確実に酔い潰れていただろう。

流れる風が、火照った頬を優しく撫でる。レヒトは心地よい睡魔を感じ始めていた。

ぼんやりと周囲を眺めていたレヒトは、ふと、森の奥へと入っていく人影に気付いた。眠気と酔いが一気に醒める。

（あれは……）

闇に映える真紅のドレスは、間違いなく彼女のもので。

（こんな時間に……どこへ行くんだ？）

魔物が現れた以上、精霊界も安全とは言えなくなっている。

（一人には、しないほうがいいだろうな……）

レヒトは気付かれぬよう、快の後を追った。

快が足を止めたのは、森を抜けた先にある、小高い丘の上だった。たくさん、白い墓標が並んでいる。

その中のひとつの前に、快は佇んでいた。

「ただいま……。しばらく帰ってこれなくて、ごめんね」  
手にした花束を手向ける。

「今日はね、話せること、いっぱいあるよ。新しい友達ができたんだ」

そう言っ、快は微笑んだ。墓標の前に座り、今は亡き誰かに語りかける。

「人間なんだけどね、不思議な人たちなんだ。やっぱり、僕は人間が好きだなあ……。あ、それからね、人間と同盟を結ぶことになったの。これで、仲良くなれるよね。きっと、みんなも人間が好きになるよ」

墓標に向かい、嬉しそうに語る快を、レヒトは少し離れた場所から見つめていた。

「気になるかね」

突然肩に手を置かれ、レヒトは驚いて振り返る。

「すまないね、驚かせるつもりはなかったんだが」

レヒトを驚かせた張本人、紅蓮が笑いながら言った。

「何度か声をかけたんだが……。気付かなかったようなのでな」

「す、すみません……。全然、気付きませんでした」

ぼーっとしていたとはいえ、人並み外れた神経を誇るレヒトの背後を、紅蓮はあっさりとしてみせた。

やはりただ者ではない。

「……快が誰に語りかけているか、気になるかい？」

「はい」

レヒトは素直に頷いた。

「あれは、あの子の母親の墓だ。旅から戻ると、ああして、必ず母親に報告するんだよ」

紅蓮はレヒトの隣に立ち、月明かりに照らされた快の後ろ姿に目をやった。ひよっとしたら、彼女の後ろ姿に、今は亡き愛する人を、重ね見ていたのだろうか。

「セレネは、あまり丈夫とはいえない身体でね……。快がまだ幼い頃に……。亡くなった」

少し寂しそうにそう語り、紅蓮はそつと瞳を閉じた。

「精霊人では……なかったのですか？」

セレネ——名前の持つ響きが、精霊人とは違う。気になったレヒトが問いかけると、紅蓮は小さく頷いた。

「セレネは天界人だ」

「あ……」

レヒトは、快の言葉を思い出していた。『僕が、人間と精霊人を結ぶ架け橋になってあげる。それができるのは、僕だけだ』——彼女が、そう言っていた。

人間と精霊人の間に生まれた娘。双方を結ぶ、架け橋。

しかし、天界人といえば、紅蓮や、他の精霊人にとっては敵にも等しい存在だろう。

「……天魔大戦は、本当に酷い戦いだった。多くの精霊人が、未だ癒えぬ傷に苦しんでいる」

レヒトの心の中を読んだかのように、紅蓮は静かに言葉を紡ぐ。

「セレネや快の存在は……時として、その傷を抉ることになっていたのかもしれない」

「……」

レヒトはなにも答えられなかった。紅蓮は再び、墓標の前に座る快へと視線を移す。

「二人に向けられる、その眼差しは……無意識のうちに、冷たいものとなっていたのかもしれない……」

なんとなくだが、レヒトはそれを察していた。快は故郷に帰ってきたというのに落ち着かない様子だったし、宴の間も、レヒトは快の姿を見つけることができなかった。

「私は、愛する妻も、大切な娘も……救ってやることができなかった……」

紅蓮は自嘲ぎみにそう呟く。

「快は、自らに向けられるそれに……気付いていたのだろうな……。幼い頃から、あの子は疾風について旅ばかりしていた。ここに、帰りたくなかったからだろう……」

今もそうだ、と紅蓮は小さな声で言った。

「あの……ひとつ、お聞きしてもよろしいですか？」

「なんだね」

「……疾風、という人のことを」

控え目に尋ねれば、紅蓮は小さく笑みを溢す。

「快から、なにか聞いたかね」

「いえ……彼女が、探している人だということしか」

「……そうか。探している、か……。もう、この世に存在しない者を……」

紅蓮が発した言葉は、レヒトに少なからぬ衝撃を与えた。

「……それは、どういう意味ですか」

「言葉通りだ。疾風は十年前、人間たちに殺されている」

あの大異変の犠牲者だ、と紅蓮は続けた。

「快も、その場に居合せた。あの子は疾風が死ぬ瞬間を見ていたはずなのだ。人間たちの手によって、殺される瞬間を」

「そんな……」

「……遺体は、ついに見付からなかった。あの子は疾風の死を、信じようとはしなかった。遺体がないなら、生きているに違いない、と言ってな……」

それで、今も探し続けていると言うのか。還らぬ人を、今も。

「……それなら、どうして……」

かすれた声で、レヒトは呟く。

「どうして快は……人間を憎まないんでしょう。どうして……あんなに……」

人間を、愛することができるのか――。

「捕われた場所から自力で逃げ出した快を、助けてくれた人々がいたそうだ。彼らは快に温かいスープとパンを与え、傷の手当てをし……怪我が治るまで村に置いてくれたという。快が精霊人だと、知っても……なにも言わず、なにも聞かずに」

紅蓮の瞳は、穏やかな光を湛えていた。

「……だから、人間を憎むことはできない……あの子はそう言っていた」

快は、憎しみだけに囚われなかったということか。愛する人を、奪われても。それでも、快は――。

「強いんですね……」

レヒトがそう呟くと、紅蓮は、疾風の影響かもしれない、と答えた。  
「疾風……あれも変わった男だったな。掴みどころのない性格で……周囲からは浮いた存在だったが、私の、大切な友でもあった」

そう言つて、微笑む。過去を、懐かしむように。

「精霊王様は……人を、恨んではいいのですか？」

レヒトが問いかければ、紅蓮はその瞳をレヒトのほうへ向けた。  
「恨んでいないと言えば、嘘になる。私も、家族や友を奪われているからな。だが、私もたくさんの人間を、この手にかけた。私にとつては敵であつた彼らにも、家族や友がいただろう。私はそんな彼らから、大切な者を奪つたのだ」

『憎しみは、憎しみしか生まないよ』――紅蓮の瞳の向こうに、快の姿が見えた気がした。

「私は快のように、全てを受け入れることはできないだろうが……精一杯、努力してゆくつもりだ。人間と精霊人が、再び手を取り合つて生きてゆける、そんな世界を作るために」

「……人間と精霊人が、わかりあえる日は、きっと、来ます」

レヒトは微笑む。頭上に輝く月を見上げて。

「いつか、きっと……」

小さく呟く。そうだな、と紅蓮が紡いだ。

「さて……そろそろ戻ろうか。実は珍しい客人が来ていてな。奴が君を連れて来いと言うので、私が君を迎えに来たというわけだ」

「俺を？」

レヒトは首を傾げた。

「うむ。レイヴン殿には、先に行ってもらっている。待たせると煩い男だからな。行くとしようか」

「あ、はい。わかりました」

紅蓮が来てからけっこう話し込んだので、その客人とやらは、もうだいぶ待たされているのだろうが。レヒトは気にしないことにした。

レヒトは快のほうへ視線をやった。それに気付いたのか、紅蓮が小さく笑う。

「快のことは心配いらんよ。あの子は強い。それに、精霊界にいる限りは、心配ない」

そう言つて、紅蓮はもと来た道を歩いて行つた。

レヒトは一度だけ振り返り、紅蓮の後を追う。

月に照らされた快の姿が、レヒトには、ひどく小さく感じられた。

## 第16話 意外な来訪者

紅蓮に案内された彼の私室で待っていたのは、意外な人物だった。  
「遅えぞ、紅蓮」

欠伸混じりに声を上げたのは、ここにいるはずのない天界最高責任者、レイ・クリスティーヌ。

「すまん。少々、遅れた」

紅蓮は笑顔で返した。

「レイ様！？ ど、どうしてここに……！」

「逃げて来たんだってさ」

レヒトの問いに答えたのはレイヴンだった。手には小さな袋が握られている。中に入っているのは甘い飴玉。滅多に手に入らない貴重な品で、貴族の子女などに人気がある菓子である。

「レイさんからお土産にもらったの」

「お前にもやるよ。ほら」

言って、同じ袋を投げて寄越した。慌てて受け取る。

「あ、どうも……じゃなくて！」

レヒトはぶんぶんと首を振った。

「どうしてレイ様がここにいらっしゃるんです？」

レイと紅蓮は、ともにあの天魔大戦を戦い抜いた英雄である。戦友の関係にある二人なのだから、ここにいても、おかしくはないのだが。

紅蓮が持ってきた果物に齧りつきつつ、レイが答える。

「お前らの様子見つてのが建前で、トゥールの奴があんまりうるせえから仕事押し付けて逃げて来た」

（トゥールさん……）

レヒトはご愁傷様、と心の中で合掌した。

「またそんなことを言って……これを受け取りに来たのだろう？」

そう言って、紅蓮は一枚の紙を取り出した。

「ああ、ついでにな。仕事サボる口実になっていい」

紙を受け取り、机の上に広げる。高級そうな紙に、ビッシリと書き込まれた細かな文字。その一番下には、紅蓮の署名がある。

「なあに、それ」

「同盟の締結を……まあ、証明する書類みたいなもんだ」

「ふうん……」

レイヴンはあまり興味もなさそうに、飴玉をひとつ口に放り込んだ。

「君が四百年もの間、ずっと所望し続けていたものが、今、君の手にあるわけだ」

紅蓮は小さく笑った。

「これで、やっと一歩前に進んだ。残るはふたつだ」

「あとふたつだけ？ なーんだ、あっさり終わっちゃいそうだね」

樂觀的なレイヴンの言葉。レヒトもそう思ったのだが、レイは表情を曇らせ、首を横に振った。

「そううまくはいかねえだろう。残る相手は、魔精霊と竜族。どちらも厳しいもんだ」

「竜族は難しくとも、魔精霊はそれほど厳しいとは思えないが。向こうにはセトがいるだろう」

紅蓮がそう返すと、レイも頷いた。

「ああ、俺もそう思ってた。あの皇帝は気に食わねえが……セトがいればなんとかなるだろうってな。だから、俺も最初の訪問国は真魔界にするつもりだったんだ。そうしなかったのには、理由があるだよ」

「理由……ですか？」

確かに、魔界に降りた段階では、レイからは真魔界へ向かうよう指示されていた。その後で快と出会い、半ばレヒトの独断で精霊界へと向かうことになったのだが、精霊界行きを決めた直後にレイから連絡が入り、真魔界へは向かうな、との指示を受けたのだ。レヒトは、それが少し気になっていた。

「セトと、連絡が取れねえ」

「なんだって？」

レヒトが聞き返すより先に、声をあげたのは紅蓮だった。

「セトに連絡が取れない？ なにかあったのか？」

「わからねえ。無事でいりやいいが……」

二人とも押し黙ってしまふ。レイヴンは我関せず、といった様子で飴玉を頬張っている。

「あの……セト、とは？」

その場の空気に圧され、レヒトはおずおずと声をかける。

「セルトラートⅡシグルーン。真魔界皇帝ウインドリヒⅡシグルーンの実姉にあたり、天魔大戦で俺たちとともに戦った戦友さ」

レイがそう答えた。その後を紅蓮が続ける。

「かつての皇帝であり、自身の父親でもあったゼファルドⅡシグルーンに反旗を翻し、彼をその手で討ち取った——民からは英雄と名高い女性なんだ」

ゼファルドⅡシグルーンとは、天魔大戦を引き起こしたロライザⅡクリスティーナの甘言に釣られて彼に協力した、先代の真魔界皇帝の名である。

「ウインドリヒの野郎は、セトを煙たがってるからな……」

「なんで？ 実のお姉さんなんでしょ？」

珍しくレイヴンが口を挿んだ。

「実の姉だからこそ、だ。あいつは民から絶大な人気を誇るセトに、いつか皇位をとられるんじゃないかと不安で仕方ないのさ。本当はセトが皇位を継ぐはずだったのに、なんだかんだと言いがかりをつけて無理に皇位についたんだからな、ウインドリヒは」

嫌悪感を露にするレイ。レイは人物の好き嫌いが非常に激しい。

だからこそ、レイが信頼し、好意を寄せるセルトラートという女性は、信用できるのだ。

「皇位継承者は直系の男子であるべき……なんて、馬鹿げた法をつくったのもそのためさ。セトを王宮から追い出して、離宮に監視付

きで住まわせてる。外交的なものにも、一切参加させない」

「なるほど……腐ってますね」

「だろ？」

レヒトは大きく頷いた。

「だが、そうだからといって、諦めるわけにはいくまい？」

「当たり前だ。ここまで来て、すぐごと引き下がるかよ」

レイはその長い脚を優雅に組み、果物に齧り付く。優雅ではあるが、上品ではない。

「本当は、俺が直接出向こうかとも思っただけだな」

「それは駄目だ、あまりにも危険が大きすぎる。休戦状態にあるとはいえ、お世辞にも仲がいいとは言えない状態で、君が直接出向いてみる」

「そうですよ、レイ様！ 最悪、捕まって取引なんかに利用されたりするかもしれませんよ？」

紅蓮とレヒトに詰め寄られ、レイはヒラヒラと手を振った。喧しい、と言わんばかりの顔で。

「行かねえよ。トゥールにも同じこと言われた」

「それならいいけど……ウィンドリヒは近視眼的で衝動的だ。君を行かせるわけにはいかない。となると……」

紅蓮の視線を受けて、レヒトは頷く。

「もちろん、真魔界へは俺たちが向かいます。けれど、無視されるという可能性も、捨てきれませんね」

「まあな。精霊界と真魔界については、紅蓮とセトを頼っていきやいいと思うってたんだが、そう甘くもなかったな」

ふう、とレイはため息を吐いた。

「……八方塞ですね。だめもとで、行ってみますか？」

「まあ、待てつて。そのために俺が来たんだからよ」

レイは懷から取り出した一枚の紙を、レヒトに手渡す。流麗に綴られた文字と、レイの署名。これを書いたのが本当にレイ本人なのか、気になったレヒトが問いかけてみると、レイの返答は、トゥー

ルに書かせたに決まってるだろ、とのこと。

「なに、これ？」

背伸びをしつつ、レイヴンが紙を覗き込んでくる。

「簡単に言や、俺の代理人だってことが書いてある。その紙を持って行け」

「こんな紙切れ一枚で大丈夫なの？」

レイは右手の人差し指を左右に振りつつ答えた。

「俺の代理人ってことは、『天界最高責任者』の代理人って意味だ。手荒な真似でもすりゃ、それこそ魔法の雨をプレゼントするぜ……って書いてあんのさ」

「レイさん本人が行くのと、どう違うの？」

「言っちゃえば、まあ、身代わりってことだな」

今度はレヒトが答える。

「万が一、レイ様を失えば、それこそ世界は大混乱になる。それを防ぐために、俺たちが身代わりで行くのさ」

「あ、そっか」

ぼんつと手を打った。要するに捨て駒なのだが、本当にわかってるのだろうか。

（好奇心のほうが勝ってるのかも……）

うきうきと楽しそうなレイヴンを見て、レヒトはそう思った。

「……悪いな。本当は、俺が行きやいいんだが……そうもいかねえんだ」

レイがすまなそうに言った。

「俺たちが行くのは、当然のことです。レイ様のお身体は、すでに貴方だけのものではないのですから」

この世界の、象徴。そういつても、おかしくはない。

「お前らに不快な思いをさせないよう、できる限り裏から手は回すつもりだ」

レイがそう言い、紅蓮も頷く。

「私たちも、協力は惜しまない」

「ありがとうございます。それでは、明日の朝にはここを発ち、真魔界へ向かいたいと思います」

「ああ、わかった」

「ここから魔界に戻って、それから真魔界に行くんだよね？ うわ

ゝ……大変そう……」

レイヴンがため息混じりに呟いた。無理もない。ロイゼンハウエルからここまでは、ラグネスの所有する馬車を使って来たのだが、ここからは歩いて戻ることになる。加えて、真魔界へはかなりの道のりである。

「仕方ないだろう。とはいえ、あまり時間をかけるのもマズいしな……強行軍になるぞ」

「うげっ」

「安心しろ。俺だってそこまで鬼じゃねえよ」

思い切り嫌そうな顔をしたレイヴンを見て、レイが苦笑した。

「『精霊の森』を抜けた先に、馬を用意させてある。それを使って行け」

「わかりました」

「あゝ、よかったあ」

ふあ、とレイヴンは小さな欠伸を溢す。

「なんか安心したら眠くなっちゃった。先に寝るね」

「ああ、おやすみ」

レイヴンは自身のあてがわれた部屋へと戻っていった。

「そっぴゃ、快はどうしてる？ 戻ってきたんだろ？」

レイがそう問えば、紅蓮は怪訝そうな顔をした。

「戻ってはいいるが……なんで知ってるんだい？」

「報告があつたんだよ。天界の兵士が、こともあるうに魔界でナンパしてるってな。んで、その相手ってのが」

「快だった、と」

「そっぴゃことだ」

レイはまたひとつ果物に齧りついた。好きなかもしれない。

「それを救い出したのが、そこにいるレヒトだったってことも知ってるぞ」

「えー？ い、いや……俺はなにも……」

突然話を振られ、レヒトは驚いた。

「そうだったのかい。君が娘を」

なんでもっと早く言ってくれないんだ、と詰め寄る紅蓮に、レヒトは思わず半歩下がる。

「相変わらずの親馬鹿っぷりだな。そんなに娘が好きか。あんまりしつこいとそのうち嫌われるぞ」

「娘だけじゃないさ。妻も愛している」

聞こえていたのかいないのか、最後の一文は綺麗に無視された。ふと、気付いたように紅蓮が告げる。

「セレネは、ずいぶん君のことを心配していたよ。身体を壊すんじゃないかとか、泣いてないかとか」

レイは答えない。

「精霊王様の、奥様ですよね？」

「ああ。セレネはレイの妹でもあったんだ」

「……そうだったんですか」

ということとは、レイと快は伯父と姪の関係にあるということだ。快がレイに会ったことがあるのも当然だ。親族だったのだから。

（そう言われてみれば……少し、似てる感じがする）

レイの瞳は、どこか遠くへと向けられていた。そんな表情をする  
と、少し、快に似ているとレヒトは思った。

「すまない。私はセレネを……」

紅蓮の言葉を、レイは無言で制した。

「……セレネは幸せだったんだろ。快を見りゃわかる」

しばらくの沈黙の後、レイは静かにそう言った。

「少し……休ませてやればと、思っている」

やはり、レイは答えなかった。

「君も少し、休んでいけ。だいぶ、痩せたようにも見える」

「ここんどこ、しばらく寝られてないもんでな。んじゃ、お言葉に甘えて寝かせてもらうとしますかね」

ばふっと、レイは寝台に寝そべった。

「……ここは私の部屋なんだがね」

「おー、知ってる。使っわ」

その言葉が終わると同時に、安らかな寝息が響く。レイの様子からは想像できないが、休む暇がないほどの激務なのだと、レヒトは以前ラグネスから聞いたことがある。

「やれやれ……相変わらずというか、なんというか」

とんでもない義兄を持ったものだ、と紅蓮は呟く。表情は穏やかだった。

「今回の同盟締結……よかったですね、精霊王様」

「うむ。……セレネも、きつと、喜んでいるだろう」

紅蓮は、そう言っただけを閉じる。

レヒトは、窓越しに夜空を見上げた。星は、ただ静かに瞬いていた。

### side story 3 〈覚醒〉

男は小高い丘の上に立ち、魔物に蹂躪される小さな街に目をやった。

凄まじい破壊音と魔物の咆哮、そして上がる悲鳴――。

『ぐっ……！』

突如、胸をえぐられるような感覚に襲われ、男はその場に膝をついた。頭から血の気が引き、動悸が激しくなる。視界が黒く染まり、意識が遠退いてゆく。

『かはっ……！』

蹲り、襲いくる吐気に必死に耐える。

ふと、男の脳裏に、あの三人の姿が浮かび上がった。同じ苦しみに、必死で耐えているだろう、三人の、愛すべき者の姿が。

『くっ……これ以上は……。もはや、私がやるしかないのか……！』

男は立ち上がり、右手を天に向けた。男の手に、輝く光が集う。

光は徐々にその輝きを増し、一条の筋となって天へと放たれた。

『我が命に従え！』

男の声が響いたその一瞬、厚い雲に覆われていた天が、輝いた。

そして上空から、幾筋もの光の雨が降り注ぐ。

まるで傷付き、荒れ果てた大地を癒すかのように。魔物が溢れる世界を、浄化するかのように。

光が消え去った後、魔物の姿は、すでに世界のどこにも存在しなかった。

男は、再び眼下の街へと視線を向けた。人々は魔物が消え去ったことが信じられないのか――ただ呆然と、天を見上げていた。

『っ……！』

その時、男は頭に激痛を感じて倒れ伏した。頭の中で、己の声が響く。

『うあっ……！ 私は……私は……もう、迷わぬと……決めたのだ』

……！』

ドクン、と心臓が激しく脈打った。

『ぐあああつ！』

己の中から、なにかが吹き出すかのような、感覚。男は意識を失った。

『……痛っ』

どのくらい気を失っていたのか。気付けば、あたりはすっかり闇に支配されていた。

男はゆっくりと立ち上がる。頭の痛みは、すっかり引いて——むしろ、先程よりも軽くなったようにすら感じられる。だがそれと同時に、なにか、大切なものを失ったようにも、感じた。

『……まあ、いい。どうせ取るに足らぬものだ』

男は小さく呟き、純白の髪を掻きあげた。

『……もう、迷うまい。このままでは、世界は確実に滅びに向かう。そんなことだけは、させない。私たちの『HEAVEN』は……』

風が吹き、男の髪とマントを揺らす。

『私が守ってみせる』

その姿は、さながら神のごとく。

ヘヴンを危機から救った男は、誰にも気付かれることなく、その場から姿を消した。

## 第17話 帝都リデルゲアルス

精霊界でレイに出会った数日後のこと。二人は静寂が支配する『精霊の森』を、並んで歩いていていた。あの不思議な湖を通り、もうすぐ森を抜けるという場所まで戻ってきたところで、不意にレイヴンが声をかけた。

「ほんとによかったの？」

「なにがだ？」

横目使いにレヒトを見上げる。

「快、おいてきちゃって」

「彼女は関係ないだろう。危険な旅になりそうなのに……わざわざ巻き込むもんじゃない」

もつともらしく、レヒトは返す。レイヴンはなにか言いたそうな様子でレヒトを見上げていた。

「ふうん？」

「……なんだよ」

「別れの挨拶もせずに出てきちゃったからさ」  
ちよつと気になっただけ、と続け、レイヴンはぱたぱたと走って行った。

（……好きで黙って出てきたわけじゃないさ）

本当は、誘いたかったのだ。一緒に来ないか、と。

（……言えるわけ、ないだろう）

快がまだ起きて来ない早朝に精霊界を発ったのも、彼女に会わずに出るためだった。どうせ別れなければならないのなら、会わないほうがいい。

「我ながら女々しいな……」

小さく呟き、レイヴンの後を追う。ちょうど森を抜けたところで、レイヴンは立ち止まっていた。  
「レイヴン？」

言って、同じ方向を向き——レヒトは固まった。

「レイさん……馬、用意しとくって言ってたよね」

「ああ……言ってたな」

確かに、馬はそこにいた。ただひとつ、違うのは。

「天馬だなんて、聞いてないし！」

感嘆の声をあげて、レイヴンは天馬に駆け寄る。天馬は純白の翼を広げて嘶いた。

「これは……レイ様にしてやられたな」

レヒトは苦笑し、人を驚かせるのが大好きな天界最高責任者に深く感謝した。天馬であれば、真魔界までそう長くはかからないだろう。

「凄いよ、レヒト！ わあ、初めて見た！」

楽しそうにはしゃぐレイヴン。

天馬は、天界人と同じく、天魔大戦で生み出された種族である。

現存する数は非常に少なく、天界で保護されていると聞いたことがある。

「……綺麗だな」

レヒトはそつと天馬に触れ、ヒラリとその背に飛び乗った。さすがに慣れたものだ。

「ほら、来いよ」

慣れない様子のレイヴンに手を貸して前に乗せ、レヒトは手綱を握る。

「はっ」

天馬は蒼穹へと翔びたった。地上が、どんどんと遠ざかっていく。

「うわあっ！ 凄いね！」

「落ちるなよ！」

興奮状態のレイヴンに声をかける。天馬は風よりも早く、蒼穹を駆ける。

「これで本当にさよならだな……快……」

レヒトの呟きは、風に掻き消された。

二人が真魔界帝都リデルグアルスへと到着したのは、それから数日後のことだった。城下町へと続く、巨大な門の前に降り立つ。

「あつという間だったね」

天馬の背から降りつつ、レイヴンがそう言った。

「おかげで楽ができた。ありがとな」

レヒトはそつと天馬を撫でた。

「……お前たち、何者だ？」

不意に、声がかかった。見れば、真魔界の兵士だろう男たちが、門の向こうから歩いて来る。

「俺たちは、旅の者です。天界最高責任者の命を受け、旅をしています」

「天界からの旅人か。今はいかなる者も、門を通すなどの命令ゆえ、悪いが通せん」

先頭にいる、四本腕の男が答えた。右腕のうちの一本に、紋様状の印がある。

原型となった動物の一部と、紋様状の印こそが魔精霊の証だった。魔精霊は精霊人とよく似ているが、両者の違いは原型が人間であるか、否かだ。人間を原型とする者を『精霊人』それ以外の者を『魔精霊』と呼ぶ。精霊人も魔精霊も、精霊の力を強く受けた種族である。

ちなみに、四本の腕は蜘蛛一族の者に現れる証だ。

「隊長！ 子供が一緒です！」

レヒトが返す前に、彼の後ろに控えていたまだ若い男が、レイヴンを見て言った。

「え……なに？」

突然指をさされ、きょとんとするレイヴン。

「子供……そうであれば話は別だ。悪いが一緒に来てもらおうか」  
四本腕の男が言くと、二人はあつという間に兵士たちに取り囲まれた。

「な……ちょっと待ってください。俺たちは……」

「なにをしているのです？」

レヒトの言葉は、穏やかな声によって遮られた。

「セルトラート様！」

兵士たちが一斉に敬礼する。レヒトの位置からでは、声の主の姿を確認することはできない。

（セルトラート様……？）

「下がりなさい」

「はっ！」

隊長格の四本腕の男が声をあげ、部下たちを下がらせる。そこで初めて、レヒトはその姿を目にした。

「真魔界の兵士たちがご無礼を……申し訳ありません、旅の方」

そう言って小さく頭を下げる、美しい女性。水色の長い髪に、優しい光を湛えた同色の瞳。しつとりと円熟した、絹のような美しさだった。

「私はセルトラート＝シグルーンと申します。失礼でなければ、お名前を教えてくださいませんか？」

「俺はレヒト、こっちはレイヴンです」

セルトラートは微笑み、四本腕の男に視線を向けた。

「これは、どういうことですか？ ……いえ、陛下のご命令ですね？」

「はっ」

四本腕の男が返す。

「わかりました。この方々には、私の屋敷で休んで頂きます」

「し、しかし……それでは……」

不安そうな表情をする兵士たちに、セルトラートは優しく微笑む。  
「陛下のほうには、私から使者を送っておきます。貴方がたは、持ち場へお戻りなさい」

「はっ！ 失礼いたしました！」

兵士たちは敬礼すると、その場を去って行った。その頬が赤いこ

とに、レヒトは気付いた。

「……さあ、それでは私の屋敷へと行きましょう」

セルトラートに連れられ、二人は街の中へと足を踏み入れた。大きな街だというのに、行き来する人の姿はあまりなく、閑散としている。

時折すれ違う兵士や住人たちは、セルトラートを見て深く敬礼した。民たちに絶大な人気を誇る、とのレイの言葉を、レヒトは思い出していた。

セルトラートが案内したのは、街の北側にある大きな屋敷だった。「ここが、私の屋敷です。あの橋を渡れば、陛下のおわす王宮になります」

二人は王宮へと視線を向ける。門は閉ざされ、中の様子を伺い知ることはできない。

「……皇帝陛下に、お会いすることは……」

セルトラートはゆつくりと首を振った。

「陛下は、誰ともお会いになりません。ご用件は、私が伺いましょう。ここではなんですし、どうぞ中へ」

「はい。失礼します」

「失礼します」

天馬を扉の前に立っていた兵士に預け、扉を潜る。屋敷の壁はまるで蒼穹を模したかのように、水色と白とに塗りわけられ、色とりどりの花がたくさん飾られていた。

「おかえりなさいませ、セルトラート様。お客様も、ようこそいらっしゃいました」

若い女性が深く頭を下げ、三人を出迎えた。

「リイナ、さつそくで申し訳ないのですが、王宮へ行っていただけますか？ 陛下に書簡を届けていただきたいのです」

「かしこまりました、セルトラート様」

リイナと呼ばれた女性は、セルトラートの命を受け屋敷を出て行った。

「私の部屋へ案内しますね。そこでお話を伺いましょう」

「はい」

奥の部屋に案内される。セルトラートの好みなのか、やはり壁は水色と白に塗りわけられており、室内の調度品も、水色のものが多かった。

「少し待っていてくださいね。紅茶を淹れます」

セルトラートは部屋を出て行く。レヒトとレイヴンは椅子に座って待つことにした。

「なんかいい匂いがする」

レイヴンが言った。確かに、室内は甘い香りに満ちている。仄かに甘い、上品な香りだ。香でも焚かれているのだろうか。

「なんの匂いだろうな」

「なんだろう。けどいい匂いだね」

二人して首を傾げていると、セルトラートが戻って来た。三人分の紅茶が入ったカップを、銀色のトレイに載せている。

「お待たせしました。さあ、どうぞ」

カップをテーブルに並べる。

「ありがとうございます」

一口飲む。蜜を数滴混ぜてあるのか、ほどよい甘さが舌に残る。

「あ、おいし」

「本当だ。とても美味しいです」

「気に入っていただけで、よかった」

セルトラートはふわりと微笑んだ。

「それでは、貴方がたのご用件を伺いましょう」

「はい、実は……」

カップを置き、レヒトは静かに話し始めた。

第18話 誘拐事件 - 1 -

「まあ……それで旅をなさっているのですか」

レヒトが話し終わると、セルトラートは驚いたように口許に手をあてた。

「はい」

「そうでしたか……レイや紅蓮にも、心配をかけてしまいましたね……」

瞳を閉じて、セルトラートは小さく呟く。

「わかりました。私としてもなんとかしたいところですが、今の状況では……」

「そういえば……兵士たちも言っていました。今は街に入れられない、と。なにか、あったのですか？」

レヒトがそう問うと、セルトラートは沈痛な面持ちで頷いた。

「……街の子供たちが、突然姿を消してしまったのです」

「子供たちが？」

「ええ……それと同時に、陛下にあてた書簡が届きました。子供たちを預かっている。返して欲しくば『CHILD』を渡せ、と」

聞き慣れない単語に、二人は首を傾げた。

「『CHILD』とは？」

「わかりません。ただ、その『CHILD』が子供であること、そしていずれ真魔界を訪れるはずだと、書簡には書かれていました」  
(なるほど、それで子供の旅人を……)

「犯人と子供たちのいる場所はわかっています。何度か兵士たちを送ったのですが……」

「戻って来なかった、と」

セルトラートは頷く。

「ええ、打つ手がありません。陛下のご命令に従わないわけにはいきません……。しかし、このようなことを続けられ、いずれ他国と

の間に軋轢が生じます。そのような事態だけは、避けなければ……」

「セルトラート様……」

控え目に、部屋の扉が叩かれた。

「……失礼致します、セルトラート様」

顔を覗かせたのは、先程の女性、リイナ。

「リイナ。どうしたのです？」

「セルトラート様、それが……」

「退け、邪魔だ」

リイナを押し退け、男が部屋に入って来た。転びそうになったリイナを、立ち上がったレヒトが支える。

「姉上、お元気そうでなにより」

男はセルトラートを見てそう言った。それが本心からの言葉でないことなど、誰の目にも一目瞭然だ。

「まあ、陛下……このような場所までお越しに……いかがなさいました？」

「姉上が旅人を連れて行つたと、今しがた報告を受けましてな」

男——皇帝ウィンドリヒはレヒト、レイヴンに目をやってから、

セルトラートに視線を戻した。

「勝手な真似は慎んで頂きたいですな、姉上」

「しかし、陛下。これでは他国と争いになってしまいます。どうかご自重くださいますよう」

「ほう……では姉上は自国の子供たちを見捨て、他国との関係を重視すると？」

「陛下……私は決して、そのような……」

辛そうに俯く。もう見てはいられなかった。

「……いいんですよ、セルトラート様」

静かに声をかけたのは、もちろんレヒトである。

「俺たちが、行きますから」

セルトラートは弾かれたように顔をあげた。

「まあ、いけません！ 誰一人として戻って来た者はいないのです。」

危険とわかっている場所に、行かせるわけには……」

「俺たちは大丈夫です」

レヒトは微笑んで言った。

「それに、どのみち事件が解決するまでは、この街から出しては頂けないんですね？」

「無論だ」

ウインドリヒが答える。

「それなら、俺たちが行つて、事件を解決させてみせます。俺たちにも、使命がありますから」

「……レヒト殿……」

「俺たちに任せてください、セルトラート様」

セルトラートは小さく頷いた。

「して、貴様らは何者だ？」

ウインドリヒがレヒトに視線を向けた。

「申し遅れました、俺の名はレヒト。こっちはレイヴン」カトレーヌ。天界最高責任者の命を受けて旅をしています」

レヒトはレイより預かった書状をウインドリヒに手渡した。ウインドリヒは書状に目を走らせる。

「……あの男の名代だと？」

「はい。人間と魔精霊の間に同盟を結ぶべく、天界最高責任者の命を受けて参りました」

「人間と魔精霊の間に同盟を結び、我々に利があるとは思えんが？」  
ウインドリヒは冷たい瞳を細める。歓迎されるとは微塵にも思っていないが、ここまで邪険にあしらわれるとは。これはレイから書状を預かってこなければ、門前払いに近い扱いを受けたに違いない。

「陛下、そのお話は私のほうからさせて頂きたいと存じます」

セルトラートが声をかける。ウインドリヒとしても、民に絶大な人気を誇る彼女の意見を、無碍にはできないのだろう。加えて、同盟を申し入れているのはあのレイ「クリスティーヌ」である。

「……貴様らが、この事件を解決できたのなら……考えてやらんこともない」

しばし思索した上で、ウィンドリヒが言葉を発した。

「お任せください、陛下」

恭しく頭を垂れたレヒトに、ウィンドリヒは書状を投げ返す。

「まあ、やってみるがよいわ……」

あてになどしておらんがな、と冷ややかに続け、ウィンドリヒは部屋を出て行った。

「……レヒト殿、レイヴン殿……申し訳ありません。どうか、お気を悪くありませんよう……」

「気にしないでください、セルトラート様。俺が、自分で言ったんですし」

「そうそう。解決しなきゃ出られないなら、レイヴンたちがさくつと解決すればいいんだしね！」

微笑むレヒトに、レイヴンも同意した。

「それで、早速なんですけど、その犯人がいる場所を教えて頂けませんか？」

「……わかりました。案内させましょう。リイナ、行ってくれますね？」

「もちろんです、セルトラート様」

「無事にお戻りくださいね。同盟の締結については、私がなんとかします。お二人とも、どうかお氣をつけて……」

セルトラートに見送られ、二人は犯人がいるという、遺跡へと出発した。

「あれが、そうです」

リイナに案内されて辿り着いた先、帝都リデルグアルスより北東

——深い霧に覆われた『白霧の森』の中に、それはあった。

朽ち果てた、巨大な建造物。刻の流れの中に置き去りにされ、時を刻むのを忘れたかのように、ひっそりと佇んでいる。

「ほえ……お化けとか出そうだね」

「やめろ」

霧の中に佇む遺跡は、不気味なことこの上ない。

「リイナさん、案内、ありがとう。もう、ここまででいいですよ。後は俺たちが」

「はい。どうか……お願いします……。このままでは、セルトラト様が倒れてしまいます。どうか、子供たちを……セルトラト様を……お願いします」

リイナは深く頭を下げた。彼女がセルトラトに心酔しているのがよくわかる。

「……大丈夫ですよ。俺たちに、任せてください」

「そうそう。レヒト、頼りないけど、頼りになるから」

「褒めるか貶すかどっちかにしろ」

言って、レヒトはレイヴンの頭を小突く。

「リイナさん、気を付けて戻ってください」

「はい。お二人も、どうかご無事で」

「……ねえ、レヒト。なんで引き受けたの？」

リイナの姿が霧の向こうに消えてゆくのを見送って、スタッフで肩を叩きながら、レイヴンが言った。

「嫌だったか？」

「そうじゃないけど。あんな嫌な奴のために、なんで引き受けたのかな……って思ってた」

思い出したのか、レイヴンは思いきり顔をしかめた。

「あの皇帝のためじゃないさ。セルトラト様のためだ。俺たちを庇ったばかりに、辛い思いをしただろうからな」

女性の悲しそうな顔は見たくないんだ、とレヒトは続ける。

「ふうん……レヒトって、優しいんだね」

「女性と子供には優しく、が俺の信条だ」

レヒトはウィンクして見せた。

「さて、それじゃあ行くとするか」

二人は遺跡内部へと入って行った。内部は真っ暗で、少し先も見ることができない。レイヴンがスタッフの先に光を灯す。

この遺跡、どうやらかなり広いようだ。見える限りでも、道は幾重にもわかれていた。

天井から、ぽたり、と落ちてきた冷たい水が、レイヴンの首筋に当たった。

「冷たッ……！」

レイヴンが上げた声が、響く。

「静かに…… ってもう遅い気もするが」

「ごめ〜ん」

えへっと笑うレイヴンに、レヒトは肩を落とした。こっそり侵入するつもりだったのだが、思いきり存在を宣言してしまった。

「まあ、仕方ない。とりあえず進もう」

「分かれ道なんだけど」

レイヴンが突っ込みを入れる。

「任せろ。選択問題は得意だ」

レヒトは自信満々に言った。ぐるりと周囲を見渡し、ほとんど直感に従って道を選ぶ。

「……こっちだ」

レイヴンの手を引いて、レヒトは歩き出す。

「……任せろって言われてもさあ」

しばらく進んだところで、不意にレイヴンが声をあげた。

「なんだ？」

「答えがわかんないから、レヒトがあってるのか間違ってるのかもわかんないよね」

「……それは、まあ、な」

なかなか鋭い突っ込みである。

「仕方ないだろ。けど、今のところループしてる感じもしないし、あつてるとは思っんだが……」

「ねえ〜」

二人は立ち止まった。

「今の、聞こえたか？」

「うん……なんか聞こえた」

「ちよつと」

周囲に視線を走らせる。

「……聞こえたよな？」

「聞こえた」

「おい」

間違いなく、声はしている。しかし、周囲に人の姿はない。

「お化け？」

「ばっ……馬鹿なこと言うなって！」

レヒトが思わずあげた声は、静かな遺跡内部に訝した。

「……あーあ」

「すまない……」

ジト目で見上げるレイヴン。

「ねえってばー！　ここ、ここだよー！」

ふと、二人は天井に目をやった。すると、さして高くもない天井に、男が張り付いていた——もとい、磔にされていた。

「うわぁ~~~~っ!？」

今度こそ。二人のあげた絶叫は、遺跡内部にビリビリと響き渡ったのだった。

第19話 誘拐事件 - 2 -

「そんなに怖がらなくても」

思わず抱き合ってしまった二人を見下ろして、男はのほほんとした口調で言った。

「もうッ！ びっくりさせないでよねッ！」

「ごめん、ごめん」

にへらつと笑う。

「悪いんだけどさ、助けてくれない？ ここで会ったのもなにかの縁だし」

「助けて……って言われてもな。どうすればいい？」

「おおっ、助けてくれる？ んじゃ、君たちの足元にある魔法陣、消してくんない？ 俺の体を縛ってる鎖、その魔法陣のせいだから」

見れば、確かに足元には薄ぼんやりと光る魔法陣があった。

「助けるの？」

「……あのままにして、もし死なれでもしたら夢見が悪い」

「あゝ、確かに」

二人は頷きあうと、足で擦って魔法陣を消した。

ぱちん、と小さな音を立て、男の体を戒めていた鎖が解け、男は地に降り立つ。

ふわり、と仄かな甘い香りが周囲に漂った。

（この香り……どこかで……）

レヒトは首を傾げた。

「やあやあ、助けてくれてどーもありがとね」

男は、極楽鳥も真つ青の、ケバケバしい派手な衣装に身を包んでいた。一言で言ってしまうえば趣味が悪い。かなりの美形だが、そのチャラチャラした雰囲気や派手な服装が、彼を三枚目に見せていた。

「俺の名前はシャサラザード。君らは？」

「俺はレヒト。こっちはレイヴンだ」

「ふんふん、レヒトにレイヴンね。んで、こんなとこでなにしてるの？　ここ、けっこう危ないよ？」

シャサラザードは左右に指を振りつつ言った。なにか塗ってあるのか、その爪は毒々しい紅い色をしていた。

「あんたはなにをしてるんだ？　危険な遺跡で……宝探しか？」

シャサラザードと名乗った男は、にへらつと笑って見せた。

「お宝はお宝かもね。拐われた子供たちを探してるのさ」

「あんたも？　俺たちもだ」

レヒトがそう返すと、シャサラザードは口笛を吹いた。

「そりゃ奇遇。んじゃさ、一緒に行こうぜ。けっこう危険な敵さんだし、戦力は多いに越したことないだろ？」

「まあ、な……。あんた、犯人と接触したのか？」

「ん、まあね。かなり美人なお姉ちゃんだった。いやあ、見惚れてたら魔法で天井に磔にされたってわけ」

「……助けないほうがよかったんじゃないの？」

「ちよいちよいとレヒトの服の裾を引き、小声で呟くレイヴン。レヒトも頷いた。

「んじゃ、行こうか。ちなみに道はあっち」

シャサラザードは別れ道を右に指差した。

「自信ありそうだな」

「そりゃ、昔、奥さんと一緒に来たことがあるからさ」

「奥さん！？」

驚きの声をあげたレヒトとレイヴンに、シャサラザードはきょとんとした表情を見せた。

「どーかしたのかい？」

「あ、いやいや……なんでもないんだ」

ぱたぱたと手を振って誤魔化す。シャサラザードは首を傾げたが、それ以上は追及してこなかった。

「一番奥に、ちょっとした広間みたいなのがあってな。子供たちと犯人は、たぶんそこだろ」

真面目な顔で、シャサラザードが二人にそう説明する。こういう顔をすると、気品のようなのが滲み出た。

「ここってさ、けっこう複雑な造りしてて、適当に進むとすぐループすんの。よくここまで辿り着けたな」

「選択問題は得意なんだ」

レヒトは得意げに言った。

「バトルのほうは？」

「試してみるか？」

そう切り返せば、シャサラザードはけっこう、と両手をあげた。

レヒトにしてみれば、彼の腕のほうが気になるのだが、自分で話題を振ってきた以上、自信があるということなのだろう。

「さうて、子供たち救出に、レッツらゴー！」

鼻唄を歌いながら先を進むシャサラザード。二人も後に続く。

「変な人だね」

「……俺もそう思う」

一応、二人は小声で話している。仮に聞こえていたとしても、彼はなにも言っていないような気もするが。

「あの人の奥さん、見てみたいな」

「え？ 俺の奥さん、見たいって？」

シャサラザードが突然振り返り、レイヴンにずっと詰め寄る。やはり聞こえていたようだ。

「う、うん。まあ……」

珍しく押されぎみのレイヴン。

「この事件解決したら会わせてあげるよ。もうね、めっちゃ美人優しいし、気立てはいいしで最高」

「そ、そうなんだ」

延々と続くシャサラザードの妻自慢を聞きつつ、一行は古い扉の前へと辿り着いた。

「ここは？」

「この奥が、例のちょっとした広間ってやつ」

「すごい扉だな……」

人の背丈の二、三倍はあろうかという巨大な扉を見上げつつ、レヒトは呟く。

「ん、ここって、昔は城だったらいいんだよね。今は廃墟だけど。だから、その当時の玉座の間かなんかだったんじゃないかねえ？」  
「なるほど」

レヒトは扉に手をかける。当然のごとく、扉は押しても引いてもびくともしなかった。

「……だめだ。鍵かなにかがかかってる」

「そりゃそうだろうね。まっかせなさい」

「うりゃっ！」とシャサラザードは扉を一蹴り。凄まじい音が響いて、破壊された扉は内側に倒れた。

「はい、完了。子供たちはどこかなあ？」

目を丸くする二人を置いて、シャサラザードはすたすたと中に入ってしまった。

「……なに、あの人」

「俺が知るか」

二人も追って中へ。と、その時。

「うおっ!？」

ぶんとレヒトめがけて振り降ろされた、なにか鋭いもの。レヒトは半歩後ろに下がってそれをかわす。

「な、なんだ!？」

レヒトの声に気付いて、シャサラザードが近付いてくる。声はほぼ同時にあがった。

「ありゃ、誰かと思えば」

「父上!？ 父上ですね!？」

レイヴンがスタッフの先に灯した光が、レヒトを襲った人物を照らし出した。

年の頃なら十代半ば、まだ幼さを残してはいるが、整った顔立ちの美少年だった。

「父上つて……?」

「ん? こいつ、俺の息子」

少年の肩を叩きながら、シャサラザードが答えた。

「父上のご友人でしたか。先程は失礼致しました」

少年は深く頭を下げた。

「私はリーンハルトと申します。どうぞ、よろしくお願い致します」

「こちらこそ」

あまり……というか、全然、似ていない。母親似なのかもしれない。

「リン、他の子は?」

「奥です。凄まじい音がしたので、もしや魔物かと思い、私が出て参りました」

「そっか、そっか。子供たちが無事ならそれでよし」

シャサラザードがそう言った、その時だった。

「退がれ!」

レヒトはセイクリッド・ティアを抜き放ち、虚空に向けて振った。キンツという甲高い金属音が響き、弾かれた投げナイフが周囲に落ちた。

全員が、臨戦体勢に入る。

「ほう……やるな。防がれるとは思わなかった」

扉の向こうに立つ人影。魔法の光がその姿を照らし出す。

一人の男が、そこにいた。褐色の肌に、金色の髪。そしてなにより印象的なのは、猛禽類のような、鋭い琥珀色の瞳。年は、若くも見え、老けても見えた。

（この男……かなり強い）

威圧感とでもいうべきものを、レヒトは感じていた。目の前の男は動いてすらいない。こちらも動かない。いや、動けないのだ。動けば、瞬時に殺られる。

「ああ、君がもう一人の敵さんね」

シャサラザードが呑気な声をあげた。ゆっくりと男に近付いてゆ

く。

「男女二人組だって聞いたのに、俺が会ったのは美人のお姉ちゃんだけだったからさ」

「シルディールが言っていたのはお前のことか」

「あのお姉ちゃん、シルディールちゃんって言うのか。よし、メモしとこう」

まるで、世間話でもしているかのように。それでも、一歩ずつ、確実に距離は縮まってゆく。

長いような短いような時の後。二人の距離は、手を伸ばせば届くところまで縮まっていた。

そして、シャサラザードが立ち止まる。対峙は一瞬だった。

二人は一度大きく後方へ飛び、動く。向かってくる投げナイフを弾き、シャサラザードが肉薄する。耳障りな金属音をあげ、ぶつかりあふたつの影。男の手にした投げナイフを、シャサラザードはあるうことが、長く伸びた片手の爪で受けとめていた。

「ほーら、なにやってんの。子供たち連れて、さっさと逃げな！」

「あんたを一人残して行けるか！」

「いいから、早く行け！」

声を荒げるシャサラザード。彼の息子のリーンハルトが、レヒトの手を引いた。

「父上は大丈夫です。あんな奴に負けはしません。行きましょう！」

「……わかった！」

奥にいた子供たちを連れ、出口に向かって走る。直感に従い、レヒトは皆を先導した。あと少しで、出口。

「っ！」

その足が、止まる。目の前に現れたのは。

「魔物！？ こんな時に！」

獅子と、鷲の姿をあわせもつ、巨大な魔物——グリフォン。獰猛な魔物が、立ちはだかった。

「レヒト、こんな場所じゃレイヴンの魔法は使えないよ。魔法なん

が使ったら、衝撃で遺跡が崩れちゃう」

レイヴンが悔しそうに声をあげた。

「わかってる。俺がなんとかするから……レイヴンは子供たちを、頼む」

「うん」

子供たちを退がらせ、レヒトはグリフォンと対峙した。

グリフォンはその口から、灼熱の炎を吐き出す。

「くっ！」

体勢を低くし、逆に相手の懷に飛び込むようにして避け、隙を突き、レヒトはセイクリッド・ティアを一閃させる。しかし、グリフォンは背中の翼を羽ばたかせると、空中へと舞い上がった。

「くそっ！」

ここが出口に近い場所であることをレヒトは悔やんだ。この遺跡——もとは城だったということは、ここはエントランスかなにかだったのだろう。無駄に広い空間は、魔物に逃げる場所を与える。そして、空中に逃げられては、レヒトの剣は届かない。

空中へと逃れた魔物は、子供たちめがけて一直線に降下した。

「まずい！」

走り出すが、魔物には到底、届きそうもない。

子供たちの絶叫が、響き渡った。

## 第20話 再会

落雷にも近い轟音が響き、魔物は空中より撃ち落とされた。

そして、そのまま動かなくなる。

「……なんだ、今のは？」

小さく呟き、レヒトは遺跡の入り口へと視線を向け——目を見張った。そこに、立っていたのは。

会いたくて、たまらなかった人物。

「はあい、お元気？」

巨大な銃を構えた、快の姿。

「快！？　なんでここに！」

「それはこっちの台詞！　酷いよ、人のこと置き去りにして〜！」

快は柳眉を釣り上げてレヒトに詰め寄る。

「いや、それは……」

レヒトは頬が緩みそうになるのを必死で堪えた。

「およっ？　なんだい、これは？」

「あ、父上！」

声をあげ、リーンハルトがシャサラザードに駆け寄った。

「大丈夫ですか？　あの人は……？」

「ああ、琥珀色の目のおっかないお兄ちゃん？　いやあ、実に怖かったねえ。死ぬかと思った」

「琥珀色の瞳……！？」

快はシャサラザードに掴みかからんばかりの勢いだ。

「ね、ねえ！　その人、どこに行ったの？」

シャサラザードは首を傾げた。

「こっちに来たと思ったんだけど……会わなかったかい？」

「……そう」

小さく呟き、快は肩を落とした。

「快……」

彼女に言葉をかけようとしたその瞬間、レヒトは凄まじい力で壁に叩き付けられた。

「レヒト！」

駆け寄ろうとしたレイヴンも、風のようなものに弾かれ、床を転がった。

「グルル……」

先程、快が倒したはずのグリフォンが起き上がり、その手に子供を一人、握り締めていた。

「シンシア様あつ！」

リンハルトの悲痛な叫びが響く。

「くっ！ 倒したと思ったのに……！」

快が銃を構える。しかし、それより早く、グリフォンが空いた片手で快を掴みあげた。

「快っ！」

痛みを堪えて、レヒトは立ち上がる。

「うあっ……！」

グリフォンが握り締める腕に力を籠めたのか、二人の表情が苦悶に歪む。

（どうすればいい！？ どうすれば……！）

動けない。下手に動けば、二人の命はない。

「快！」

「シンシア様っ！」

今にも飛び出しそうな二人を、シャサラザードが制する。

「下手に動くな！」

「父上っ！ ……シンシア様あつ……！」

「くっ……！」

なにもできない自分が、ただ悔しくて。レヒトは唇を噛み締めた。誰もが、最悪の事態を思い浮かべた、その時。

魔物の、絶叫が響いた。

その体が、ゆっくりと倒れる。

「シンシア様！」

父親の手を振りきって、リーンハルトが駆け寄り、グリフォンに捕われていた、幼い子供を抱き締める。

「……リンっ……怖かったぁ……！」

シンシアという名なのだろう、可愛い顔立ちの幼い子供も、リーンハルトにしがみついて泣いていた。

「快……大丈夫か？」

「ん、大丈夫。倒したつもりだったんだけど……甘かったね」

快は体を起こした。露出した腕に見える、赤い痕が痛々しい。

「その……すまない。助け、られなくて……」

「……そんな泣きそうな顔しないの。みんな無事だったんだから、よかったじゃない」

快は、そつと微笑んだ。

「そ、そうだ。魔物は……」

「死んでるよ。ほら、心臓をナイフが貫通してる」

レイヴンが魔物の死体を指差して言った。側の大地には、一振りの投げナイフが突き刺さっていた。

「……助けて、くれたのか？」

レヒトは、あの琥珀色の瞳の男を思い出していた。

そのナイフは間違いない、あの男が使っていたのと同じナイフ。だが、なぜ彼が自分たちを助けるような真似をしたのか、レヒトにはわからなかった。

「ま、みんな無事でよかったねえ。とりあえず、戻ろうか」

相変わらず緊張感もなにもない口調で、シャサラザードが言う。

「そつだな……。とにかく、一度戻ろう。快、君も来るだろう？」

快は小さく頷いた。

「じゃ、戻ろう！ お腹空いちちゃった」

「あのなぁ……」

「いいじゃん、成長期だもん！」

ぎゃあぎゃああと騒ぎながら、一行は遺跡を出て行く。

そんな中、快は一人、立ち尽くしていた。

「……疾風……」

ぽつりと呟き、瞳を細めた快に、レヒトの声がかかる。

寂しそうな微笑を消し、あの可憐で妖艶な笑みを浮かべて、快は皆のあとを追う。その手には、あの投げナイフが握られていた。

「おお、シャサラザードか！」

リゼルグアルスへと戻り、門をくぐると、あの四本腕の男が声をかけてきた。

「やあ、ファントム」

「よく無事に戻った。皆、貴殿の帰還を心待ちにしておったのだ」

「子供たちは無事だよ。早速で悪いんだけどさ、家に帰してあげてくれない？」

ファントムと呼ばれた四本腕の男は頷いた。

「了解した」

側に控えていた部下に命じる。命令を受けて、兵士たちは、子供たちを親元へと送っていった。

残ったのは、シンシアと、もう一人——気弱そうな感じのする、

同じくらいの年頃の幼い子供。

「シンシア様、ケリイ様……よくぞご無事で……」

ファントムが膝を付き、二人に敬礼した。その足に、シンシアが抱き付く。

「ファントム！ 怖かった！」

大きな紅玉色の瞳が、ファントムを見上げる。

「お怪我をなさっておられますな……。城に戻りましたら、手当てを致しましょう。ケリイ様は、お怪我はありませんか？」

ケリイと呼ばれた子供は、おずおず、というよりは、怖々といった様子で頷いた。

「シンシアもケリイも疲れただろう？ 王宮に戻って休もう。ね？」  
シャサラザードが優しく言えば、二人は素直に頷いた。

「ファントム、陛下に取り次いでもらえるかな。その二人も、陛下に用があるだろうしね」

「なんで、わかったんだ？」

不思議そうにレヒトが問えば、シャサラザードはにへらっと笑った。

「これ、なぐんだ？」

言って、見せたのは、レイから受け取ったあの書状。レヒトが持つていたはずだが……ない。

「あ、あんた……いつのまに……」

「いやあ」

シャサラザードは書状をレヒトに返した。油断も隙もあつたものではない。

「と、いうわけ。いいよね？」

「もちろんだ。王宮までは、私が案内しよう」

ファントムに連れられ、一行は王宮へと向かった。すぐに、玉座の間へと通される。

ウインドリヒは玉座に座り、傍にはセルトラートが控えていた。

「陛下、シャサラザード、ただいま帰還致しました」

シャサラザードが敬礼する。

「うむ……よくやった。褒めてつかわす」

「シンシア、ケリイ。無事に戻り、喜ばしい限りです」

セルトラートが二人を見て微笑む。

「はい！ 伯母上！」

シンシアが元気いっぱいと言った。

「シンシア！ なんと、怪我をしているではないか！」

ウインドリヒが玉座から立ち上がり、シンシアを抱き上げた。

「父様、シンシアは平気。でもケリイが……」

シンシアが、心配そうにケリイを見た。ウインドリヒもケリイに視線をやる。その瞳は、恐ろしく冷たかった。

「ふん……母親がお前を心配していたぞ。顔を見せて来い」

「は、はい……しつれい、いたします……」

可哀想なくらいに震えて、ケリイは逃げるように玉座の間を退出した。

「あ！……ケリイ……」

シンシアはしゅんとしてしまった。

「では、貴様らの件だな。一人増えているようだが？」

視線を受け、快は一步前に出た。恭しく礼をする。

「お初にお目にかかります、陛下。私は快、精霊界より参りました。彼らと道を同じくする者です。……陛下のお目にかかれたこと、身に余る光栄と存じます」

レヒトやレイヴンと違って上品な快の物腰に、ウィンドリヒも気をよくしたようだった。このあたりはさすが、といったところか。まあ、美しい女性を前にして、気分を害する男はいないだろう。

「姉上より聞いたのだが、天界は我が真魔界だけでなく、精霊界とも同盟を結んだとのこと。にわかには信じられぬ話ではあるが……どうやら、真のことであるようだな」

ウィンドリヒは快、そしてレヒトに視線をやった。

「はい」

ウィンドリヒとしても、ヘヴンで孤立することだけは避けたいのだろう。ここで申し出を突っぱねると、真魔界は天界、魔界だけでなく、すでに両国と同盟関係にある精霊界とも関係が悪化する。天界の特使である二人とともに、精霊人である快がいたことは大きい。……持つてゆくがよい」

しばしの沈黙のあと、差し出された一枚の書状を、レヒトは受け取った。

ふと、セルトラートと視線があう。彼女がウィンドリヒを説得するためだけにどれだけ心を砕いてくれたのかは、想像に難くない。

「感謝致します、陛下」

レヒトは深く礼をした。

「話もまとまったようですので……私は屋敷のほうへ戻りましょう」

「えっ……伯母上……帰っちゃうの？」

シンシアが泣きそうな顔でセルトラートを見た。それから、父親の傍に立つリーンハルトに視線を移す。

「……リンも？」

「はい。私も戻らなければ……」

「や！ シンシア、リンと一緒にいい！」

シンシアはウィンドリヒの腕から飛び下り、リーンハルトにしがみついた。

「これ、シンシア。あまりわがママを言うものではない。ほら、こっちへおいで」

「……やだ。リンがいい。リンと一緒に行く！」

困り顔のリーンハルトを見て、セルトラートは微笑んだ。

「ふふふ……それでは、一緒に行きましょうか。陛下、よろしいですね？」

「……仕方あるまい」

ウィンドリヒはため息混じりに許可した。シンシアが可愛くて仕方ないのだろう。

「やった！」

「さあ、戻りましょう。皆様も、一緒に。美味しい紅茶を用意しますよ」

「はい」

一行は玉座の間を退出し、セルトラートの屋敷へと向かった。

## 第21話 安らぎの時 - 1 -

「はあゝ……やっぱり我が家は落ち着くねえ」

ゆったりとしたソファに腰かけ、シャサラザードは開口一番、そう言い放った。

「……我が家？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？」

「……聞いてない。というか、それってつまり……」  
レヒトはセルトライトに視線を移す。

「そう。俺の奥さんだよ」

隣に腰かけたセルトライトの肩を抱いて、シャサラザードはにへらつと笑う。

「趣味悪ッ！」

声をあげたレイヴンの口を、レヒトは塞いだ。

「いやあ、セトは美人だし気立てもいいし、俺にはもったいないね！」

「まあ、サラ。そんな、お客様の前で……」

笑いあう二人。リーンハルトは両親のラブラブっぷりに慣れているのか、特に気にした様子もなく人数分の紅茶を用意している。

「うーん、見てるこっちが恥ずかしいなあ……」

「……まったくだ」

小さく呟く快に、レヒトも同意する。

「リン！ 待ってゝ！」

シンシアは手慣れた様子で紅茶と菓子を用意するリーンハルトの後を、ずつついて回っている。

そんな二人を見て、快はその瞳に優しい光を宿した。意外と子供好きなのかもしれない。

「お待たせしました、どうぞ」

リーンハルトが紅茶と甘い焼き菓子をテーブルに並べた。

「ありがとう」

「いえ、ごゆつくりお寛ぎください」

礼儀正しく一礼して、席についた。見た目にはレイヴンとそんなに変わらないが、中身にはだいたい差がある。

「いただきまあす」

シンシアが焼き菓子を口に運ぶ。しばらくはもくもくと食べていたが、不意に食べるのをやめた。

「シンシア様、どうなさいました？」

リンハルトが心配そうに声をかける。

「……義母様とケリイにも……食べさせてあげたい」

隣に座るリンハルトを見上げて、シンシアは小さく呟いた。

「まあ……シンシアは優しいですね。大丈夫ですよ、お二人の分はちゃんと用意してありますからね」

セルトラートが優しく声をかければ、シンシアの顔がぱあっと明るくなる。

「よかったですね、シンシア様。後で、リンハルトと一緒に渡しに行きましょう」

「うん！」

シンシアは元気いっぱいに頷いた。

「皆様もどうぞ、召しあがってください」

「すみません、俺たちまでご馳走になってしまつて……」

セルトラートは微笑む。

「ふふふ、皆様は誘拐事件解決の立役者ですよ？」

「そうそう。子供たちの英雄だぜ」

「そんな……俺は、なにも」

レヒトは頬を掻いた。彼が照れたときの癖である。

「まあ、確かに今回はなんにもしてないね」

「……それはお互い様だ。一番の功労者はシャサラザードだろう。」

俺たちは、なにもできなかった」

「なあに言つてんだい」

シャサラザードは肩を竦めた。

「俺だつてなんもできなかったさ。時間稼ぎどころか、こつちが殺られないようにすんで精一杯！ 恐ろしい兄ちゃんだったな」

「まあ……。サラがそう言うのなら、相当の使い手なのでしょうね」

「ああ、もうヤバいつて。しっかし……。どっかで見たことあるような気がするんだよね、あの兄ちゃん」

「どこだったかねえ？ とシャサラザードは首を傾げた。

「……」

先程から、快はカップを握ったまま、ずっと黙りこくっている。

「快？ ……どうした？」

「えっ……。？ あ、ちよつとぼーつとしちゃって……」

なんでもないよ、と微笑む。あの遺跡から戻ってからというもの、どこか様子がおかしかった。

「それよりさ、君らこれからどうすんの？」

シャサラザードが興味津々といった様子で尋ねる。

「精霊人、魔精霊とは同盟を結んだ。残るは竜族だけだ」

「竜族！ こりやまた厄介なところが残ったもんだねえ」

「なんで厄介なの？」

レイヴンの疑問には快が答えた。

「竜族は悠久の時を生きるといわれる種族。未だ尽きた命がないといわれるほどに長命なんだ。戦いを好まない穏やかな種族だから、争いばかりを繰り返す人間を——あまり、快く思っていないんだよ」

「いきなり門前払いとか、されなきゃいいね」

「あのなあ……。冗談にならないぞ、それ」

「それは、たぶん大丈夫かな」

レヒトが眉をひそめると、快が笑いながら言った。

「僕、竜族の長老様とは何度か会ったことあるから。話くらいは聞いてもらえると思うよ。そこから先は、レヒトの力量だけだね」

「……頑張るさ」

「うわっ、頼りない」

「そんなこと言うのはこの口か」

レイヴンの背後に回り、レヒトはその頬を左右に引っ張る。

「いにゃ〜っ！」

「君も、一緒に来るつもりなのか？」

レヒトは快に声をかけた。もちろん、じたばた暴れるレイヴンはしつかり押さえ込んで。

「当たり前でしょ？」

快はさも当然とばかりに言った。確かに、竜族に会うためには彼女の協力が必要なのだが。

「最初からついて行くつもりだったのに、気付いたらいないんだもん。びつくりしたよ」

「それは……すまなかった。精霊王様も、しばらく君を休ませたいとおっしゃっていたのに、結局、君を巻き込んでしまうな」

「いいの！ 僕が自分からついて行くんだから。それに、女の子の一人旅は危ないって言ってたじゃない」

「……そう言えば」

快と初めて会ったときに、そんなことを言ったりもした。まだそんなに経っていないはずだが、ずいぶんと昔のことのように感じる。

「レヒトが守ってくれば、それで問題ないでしょ」

快は悪戯っ子のように笑った。

「ああ、任せておけ」

レヒトは力強く頷いた。

「快のほうが強いのじゃない？」

いつの間にか、レヒトの腕から抜け出したレイヴンがぼつんと呟いたその言葉。

グサツと、なにかが突き刺さるような音がした。

「お前なあゝ……！ 今日という今日は許さん！」

「だって事実じゃ〜ん！」

珍しいレヒトの怒声と、楽しそうなレイヴンの笑い声。二人が走り回るせいで、屋敷内は大騒ぎである。

「……せつかくいい雰囲気だったのにねえ」

「ふふふ、そうですねえ」

自宅内で始まった追い掛けっこを眺めて、ラブラブ夫婦はにこにこ笑った。

レヒトとレイヴンの追い掛けっこは、遊び疲れたレイヴンが眠ってしまったので強制終了となった。

「お二人は仲良しなんですね。まるで親子のよう」

セルトラートはそう言って微笑む。レヒトは軽い衝撃を受けた。

（俺……そんなに老けて見えるのか？）

レヒト、二十三歳。悩み多き年頃である。

ふと、リンハルトが壁掛け時計を見て言った。

「もうこんな時間ですか。シンシア様、そろそろ王宮へ戻りましょう」

「……リンは？」

シンシアは上目使いにリンハルトを見上げた。

「私は一緒にできません。シンシア様とは身分が違いますから……」

「じゃあやだ！ 帰らない！ リンと一緒にがいいもん！」

「あらあら。けど、シンシア。フィーリア様がご心配なさいますよ？」

セルトラートがなだめるように声をかけると、シンシアは寂しそうにうつむいた。

「母様……シンシアのこと嫌いだもん……おうちに戻ったら、誰にも会えないもん……」

「シンシア様……」

「じゃあ、今日は泊まっていくかい？」

シャサラザードが優しく言えば、シンシアの幼い顔に、満面の笑みが浮かぶ。

「うん！ お泊まりする！」

シャサラザードとセルトラートは、顔を見あわせて微笑んだ。

「リン、陛下にそうお伝えしてくれ。あと、ファントムにも」

「はい、わかりました」

「シンシアも行く！」

「まあ。それではシンシア、ケリイとリリス様に、これをお渡ししてくれませんか？」

セルトラートはシンシアに、包みをふたつ手渡した。

「あ、お菓子！ ケリイと義母様にあげてくるね！」

「ふふふ。きつと喜びますよ。それではリン、お願いしますね」

「はい、行って参ります」

「行ってきまあす」

二人は手を繋いで部屋を出て行った。

「……すごい熱愛ぶりだな」

「シンシアには、他に友達と呼べるような相手がいないからねえ」

「身分が違うから？」

王候貴族の生活とは縁遠いレヒトが聞き返すと、シャサラザードは困ったような顔をした。

「まあ、それもあるんだけどさ……シンシアとケリイの場合は、もっと事情が複雑だからなあ」

「ええ、そうですね……」

どこか辛そうな二人。

レヒトは、それ以上を聞かないことにした。

## 第22話 安らぎの時 - 2 -

結局、レヒト一行はその日、休んでいけという言葉に甘え、セルトラートの屋敷で世話になることにした。レイヴンは眠ってしまったし、体にもだいたい疲労が溜っている。この申し出はありがたかった。

報告に出ていた子供たちが戻ったところで軽い食事を取り、湯あみを済ませると、重だるかった体も、いくぶん軽くなったように感じる。

用意されていた上質な夜着に着替え、浴室から戻ると、シャサラザードが居間で本を読んでいた。

「お。あがったのか」

「ああ。なんか悪いな、すっかり世話になって」

「気にしない。滅多に客なんか来ないし、大勢のほうを楽しいし」  
シャサラザードはにへらっと笑った。言っでは悪いが締まりのない顔だ。

「なに読んでるんだ？」

ふと気になり、彼が手にした本に視線をやりつつレヒトは尋ねた。  
「これは天魔大戦について綴った本さ。ま、俗に『英雄』って呼ばれてるような連中の活躍する物語」

「天魔大戦……」

レヒトの主であるラグネスも、天魔大戦を戦った英雄の一人である。レヒトは強く興味を持った。

そんなレヒトに気付いたのか、シャサラザードは本をレヒトに差し出した。

「持つてく？」

レヒトは慌てて首を振った。

「こんな高級そうなもの、貰えない」

見た目にも高級とわかる革張の表紙に、描くように綴られた流麗

な題を彩るのは金の輝き。

「遠慮するなんて、らしくないっての」

シャサラザードはしきりに遠慮するレヒトに、半ば強引に本を持たせた。

「なんか……申し訳ないな」

「いいってことよ。俺が持つていつて欲しいんだし」

レヒトは首を傾げた。

「それはどういう？」

「ん？ なんつーか、ほら。あの戦いが、風化してしまわないように、さ。若い世代に語り継ぐのも、あの戦いの経験者の役目だろ？」

そう言つて、シャサラザードは笑った。あのふざけた締まりのない笑みではなく、穏やかな微笑。

「人々が、凄惨な天魔大戦を忘れてしまわないように。あんな戦い、二度と起こってはならないんだ。だから……」

シャサラザードは瞳を閉じた。

「だから、戦いを経験してない若い世代に語り継ぐのさ。戦乱はなにももたらさない。消えることのない悲しみと、やりばのない憤り、そして——決して癒えることのない、深い傷を残すだけだつてな」

「シャサラザード……」

「つてなわけで、受け取つて欲しいんだけど？」

「そんなこと言われて、嫌だなんて言えるか。ありがたく、頂いていくさ」

受け取った分厚い本をぱらぱらと捲りながら、ありがとう、と言つたレヒトに、シャサラザードは少年のような笑顔を見せた。

「霧が降りてきたな」

窓のほうへと目をやって、シャサラザードが呟く。

「このあたりの森は『白霧の森』って言つてな、常に深い霧がかかつてるんだ。夜になると、その霧が街のほうにも降りてくるのさ」

「へえ……」

レヒトは窓の側まで行き、霧に覆われてゆく街並みに目を向けた。まだ灯りのついている家も多く、霧の向こうで微かな淡い光が輝いている。

「神秘的だ」

「遠目に見ればな」

シャサラザードは小さく笑った。

「霧が出たら外には行かないほうがいい。方向感覚をなくして、道に迷うのがおちだ。ランプの灯りも、この霧の中じゃ役に立たない」  
「知らなかった。こんなに綺麗なものにな」

レヒトは飽きることなく街を覆う霧を見つめている。こんな光景、魔界ではまず見ることはできない。

「常に霧に覆われた『白霧の森』の奥に——なにがあるか、知ってるかい？」

「なにかあるのか？」

オウム返しに聞き返して、シャサラザードのほうへ視線を移せば、彼は悪戯っぽくウィンクして見せた。

「あるさ。この霧はそれを隠すためのものなんだ」

シャサラザードは立ち上がり、レヒトの側まで移動し、両手で大きな窓を押し開いた。冷たい風とともに、霧が部屋に流れ込んでくる。

「『白霧の森』の奥には、三闘神ヴェゼンデイの住まう屋敷がある」

「三闘神……」

レヒトは驚いた。まさかこんな場所で、その名を聞くとは思っていなかったからだ。

「ま、あくまで『あるらしい』って噂で、森を抜けて実際に会った人間はいないらしいけど」

「けど……前に、あんたは会ったことがあるんだろう？」

天魔大戦で、三闘神は人々の前に姿を現し、その力を見せたと言われている。となれば、天魔大戦を戦い抜いたシャサラザードも、

会っているはずである。

「もっちゃん。今でもはつきり……昨日のことのように思い出せる」  
「ヴェゼンディ様は、どんな方なんだ？」

レヒトが問えば、シャサラザードは目を細めた。

「ヴェゼンディ様は紫色の髪と、金色の瞳——それに、真っ白な肌が印象的な美人だったなあ。病的っていうか、魔性っていうか……人間には、ありえない雰囲気ってやつ？」

「……意外だ」

「意外？ なにが？」

レヒトは小声で呟いた。シャサラザードが首を傾げる。

「いや……ヴェゼンディ様は、三闘神の中でも最も強い力を持つ、とか聞いてたから。もっと強そうな人を想像していたんだ」

「あゝ、まあ確かに『強そう』って感じじゃなかったなあ」

シャサラザードは苦笑した。

「どつちかって言えば、今にも倒れそうな感じ。ただ、瞳だけは……もの凄く強い光を宿してた。あの瞳を向けられると、身が凍るっていうか足が竦むっていうか。とにかく、強い眼差しなんだよ」

視線だけで人が殺せるなら、あの人はそういう眼差しだ、とシヤサラザードが続けた。

「……この霧の向こうに、ヴェゼンディ様が……」

レヒトは再び街並みに目をやった。月明かりに照らされ、霧に覆われた街並みは、幻想的であり……どこか、恐ろしくもある。

「父上！」

響いた声に下を見れば、リーンハルトとシンシアが、中庭に立ってこちらを見上げていた。

「お。そういえば稽古の時間だな」

「はい！」

「よし、それじゃ稽古といくかあ。レヒト、一緒にどうだい？」

ジャラジャラとアクセサリのたくさん付いた——高級そうだが趣味は悪い——上着を脱ぎ、腕捲りまでして準備万全のシャサラザー

ドがレヒトに声をかける。

「そうだな。ご一緒させてもらおうか」

「そうこなくっちゃな」

シャサラザードはにへらつと笑い、ひょいと窓から飛び降りて、軽やかに中庭に降り立つ。

慌てて見下ろせば、シャサラザードは手を振って『降りてこいと合図。』

「……ここは四階だぞ」

思わず呟く。とはいえ、シャサラザードは鍵のかかった大扉を蹴り開けるような人物である。レヒトは深く突っ込まないことにした。

「遅いぞ」

中庭に辿り着いたレヒトは、霧の中から突然現れたなにかに頭を襲撃された。シャサラザードが放った礫が頭に命中したようである。

「そこから飛び下りればすぐなのに」

先程の部屋の窓を、シャサラザードは指差した。

「あなたと一緒にしないでくれ」

あの後、レヒトは窓をしつかりと閉め、召し使いに案内を頼み、歩いて中庭までやって来たのである。窓から見えたのですぐだろうと思っていたが、とんでもない。無駄に広いこの屋敷、だいぶ時間を食ってしまった。一人では確実に迷子になっていただろう。

「レヒト殿も、稽古を付けてくださるのですか？」

喜々として聞いてくるリンハルトに、レヒトは苦笑を返した。

「俺は教えられるような腕前じゃないさ」

「そんなことないさ。あの時……あのお兄ちゃんの一撃に気付いたのは君だけだったろ？」

シャサラザードの言葉に、リンハルトも頷く。

「はい。レヒト殿は素晴らしいです。私など、気付きもせずに討たれていたでしょう。精進あるのみです」

生真面目なその言葉。レヒトは笑みを溢した。

「んじゃ、早速始めるか」

「はい！ 宜しく願います、父上！」

二人は少し距離をとり、構える。素手のままである。

「素手か……」

「まあね。人間の作った武器を使うこともあるけど、魔精霊にとつては、己の肉体こそが最大の武器さ」

シャサラザードが笑って言った。魔精霊は精霊人のように魔法を扱うことはできない。その代わりに、素晴らしい身体能力と、原型となった動物の持つ『力』を使うことができるのだ。

「ちなみに、俺とリンは蠍の一族だ」

「シンシアはね、ちょうちょ！」

にこにこ笑うシンシアの頭を、レヒトはそつと撫でた。

あまり風がないためだろうか。霧が、周囲をゆつくりと覆ってゆく。持ってきたランプで周囲を照らす、シャサラザードの言葉通り、あまり効果はないようだ。

「この霧の中で、大丈夫なのか？」

「いいのさ。神経もついでに鍛えられて、お得だろ」

霧の向こうからシャサラザードの声が聞こえた。

「リン〜！ 頑張つて〜！」

シンシアがぴよぴよこと飛び跳ねる。

「はい！ 頑張りますね、シンシア様！」

「なんだよ、シンシアはリンの味方かあ」

「じゃあ、俺が応援してやろうか？」

にやりと笑って言えば、シャサラザードが霧の向こうで苦笑したのがわかった。

「どうせなら美女がいいよ〜」

「それは悪かったな」

楽しそうな笑い声が周囲に響く。こんな時間に近所迷惑な気もするが、気にしてはいけない。

「よしっ。それじゃ、行くぞ」

「はい、父上」

空気が緊張していく。一瞬の間の後——二人が、動いた。

## 第23話 安らぎの時 - 3 -

瞬時にして長く伸びた二人の爪がぶつかりあい、火花を散らす。シャサラザードの爪は毒々しい真紅、リーンハルトの爪は蒼白い色をしている。

大地を蹴り、リーンハルトが後方に飛べば、追い撃ちをかけるようにシャサラザードの爪が空を裂く。

爪が庭の草を散らし、風に吹かれて舞いあがる。

大地に手を着き、その反動を利用して、リーンハルトは蹴りを叩き込んだ。

「おおっと！」

それを、シャサラザードは軽く上体を反らして避ける。

「……さすがだな」

目の前で繰り広げられる一進一退の攻防に、レヒトは感嘆の声をあげた。

シャサラザードはさすが英雄と賞されるだけあり、その動きは常軌を逸している。そして、そんな彼に育てられ、また鍛えられたからだろうが、リーンハルトの動きもしなやかかつ大胆。変則的なシャサラザードの攻撃を受け流し、常に反撃の機会を窺っている。

静寂の中、爪と爪とがぶつかりあう甲高い音が響く。

「リンっ頑張つて！」

きやつきやつと楽しそうに応援するシンシア。幼い子供は稽古とはいえ戦いなど怖がるのではないかとレヒトは思っていたのだが、シンシアは怯えるどころかシャサラザードが持ってきた訓練用の剣を嬉々として振り回している。これは、将来かなりの大物になるかもしれない。

「シンシアはリンが好きかい？」

レヒトがそう尋ねると、シンシアは満面の笑みで頷いた。

「うんっ。シンシアね、リン大好き！」

リンハルトの頬が微かに朱に染まったのを、レヒトは見逃さなかった。

「シンシアが応援してあげれば、勝てるかもしれないな」

「レ、レヒト殿！ からかわないでくださいっ！」

生真面目な少年は真っ赤になった。

「悪い、悪い」

シャサラザードの放った一撃を避け、リンハルトは再び真剣な表情を見せる。

どれほど、撃ち合いが続いただろうか。元気に応援していたシンシアも、眠くなったのか、座り込んでうとうとしていた。

（まだ、シャサラザードのほうが上手か）

笑みまで見せ、余裕のあるシャサラザードとは対照的に、リンハルトのほうは呼吸が荒くなっている。集中も途切れてきたのだろうか、徐々にシャサラザードの攻撃を防ぎきれなくなってきた。

「おりやつ！」

鋭い気合いとともに、シャサラザードが受け止めていたリンハルトの爪を弾いた。

数歩下がり、リンハルトが膝を付く。

「はあ…… また負けてしまいました。やはり父上はお強いです」

リンハルトは額の汗を拭きつつ笑った。

「動きはだいぶよくなった。あとは基礎体力の向上だな」

師匠でもあるシャサラザードが告げれば、リンハルトは素直に頷いた。

「なあ、レヒト。リンに稽古つけてやってくれないかい？」

突然話を振られ、レヒトは驚いた。

「え、俺が！？」

「見てるだけじゃ退屈だろ？ ほら、それにリンの勉強にもなるからさ」

「はいっ！ ぜひお願いします、レヒト殿！」

シャサラザードが言えば、リンハルトは嬉しそうに声をあげた。

「……俺はほとんど我流だし、戦い方もいい加減だけど。それでもいいなら」

「問題ないさ。俺だって我流だもんな。ほら」

シャサラザードがレヒトに、先ほどまでシンシアが振り回していた、例の訓練用の剣を投げた。稽古によく使われる小振りな剣で、刃がついていないため、斬れることはない。

「よし……じゃあ、行くぞ」

レヒトは剣を構えた。リーンハルトも腰を落とし、臨戦体勢に入る。

「はい。よろしくお願いします」

再び、彼の爪が長く伸びた。蒼白い爪が闇に浮かび上がる。

「遠慮はいりません。本気をお願いします!」

「ああ」

レヒトは頷く。

先に仕掛けたのはリーンハルトのほうだった。

「はあっ!」

突き出された爪を剣で受けとめる。バチッという耳障りな音とともに、蒼白い雷が周囲に走った。

「!」

レヒトは剣を退き、間合いをとった。指先に、微かな痺れが残っている。

「雷か。これはまともに食らえば死にかねないな」

冗談にならないような言葉をさらりと言ったのけ、レヒトは再び剣を構えた。

振り下ろされた爪を、半歩下がってかわす。

濃くなった霧に阻まれ、視界はいよいよ悪くなっている。

リーンハルトの攻撃をかわした瞬間、一瞬だけ、レヒトが体勢を崩したようにも見えた。

その隙を逃さず、リーンハルトが迫る。

「わっ……!」

だがその瞬間、右足に軽い衝撃を受けて、リーンハルトの動きが止まった。

「はっ！」

レヒトの突き出した剣が、その肩を強かに打った。

「っ！」

突かれた肩を押さえ、リーンハルトは大きく後方へと飛んだ。その姿は、霧に隠されて見えなくなる。

「霧を味方につけるとはねえ」

眠ってしまったシンシアを腕に抱き、二人の様子を眺めていたシヤサザードが、感心したように言った。

「そんなんじゃない。ただ、せこいだけだ」

レヒトは笑った。

種を明かせば至極単純、レヒトは霧で体が隠れているのを利用して、足元の小石を蹴っ飛ばしたのである。

「邪道と言われれば邪道だが」

構えを解き、レヒトはシヤサザードのほうを振り返る。

隙だらけ……という以前に、まったくの無防備である。

「残念ながら、俺が戦ってきたのは手段を選ばないような連中だったんでな。なんでもありだ。生き残るため、守るためには——」

背後から振り降ろされた一撃を、レヒトは振り返りもせず、剣で受けとめた。

「えっ……！？」

驚愕に声をあげたリーンハルト。動きがとまった隙に、レヒトは剣で爪を弾いた。

そして瞬時に振り返るも、剣の間合いの外である。

とっさに後方へと飛んだリーンハルトの頬を、レヒトが手にした剣がかすった。頬に、微かな紅い筋が走る。

リーンハルトは目を見開き、そのままずると地面に座り込んでしまった。

「言っただろ？」

そんなリーンハルトを見下ろし、レヒトは悪戯っぽく笑った。

「——なんでもありさ」

レヒトは手を貸してリーンハルトを立たせた。ぱちぱちと、シャサラザードが手を叩く。

「いやあ、やるね」。さすが、さすが。まさか剣をぶん投げるとは思わなかったけどさ」

「だから言っただろう、我流の邪道戦法だって。……っと、大丈夫だったか？ 稽古なのに、つい本気で」

うつむき、肩を震わせているリーンハルトに気付き、レヒトは気まずげに声をかけた。

（少し大人げなかったかな）

困ったように頬を掻くレヒト。リーンハルトがぱつと顔をあげた。その瞳はキラキラと輝いている。

「素晴らしいです、レヒト殿！ 教えられることがたくさんありました！ これからは、私もレヒト殿を見習って……！」

拳を握り締めて捲くし立てるリーンハルトに、レヒトは慌てた。

「いや、それはやめたほうが。俺のは邪道だから」

「とんでもない！ 戦い方に邪道もなにもありませんっ！」

「あ、いや……けどなあ……」

そんなやりとりがしばらく続き、ふとシャサラザードが屋敷内の喧騒に気付いた。

「なあんか騒がしいな。なんかあったのかな？」

屋敷内に戻ると、召し使いが慌ただしく走り回っている。

「おい、どこかした？」

「あ、シャサラザード様！」

シャサラザードに気付いた召し使いが駆け寄ってくる。

「それが、室内に剣が投げ込まれて……。幸い怪我人はなかったのですが、窓ガラスが砕け散ってしまいました。賊やもしれません。お気を付けください」

その言葉に、思わず顔を見あわせる。

「あゝ……えっと、それは賊じゃなくてだなあ……」  
「？」

言葉を濁すシャサラザードに、首を傾げる召し使い。

「……真似はしないほうがいいぞ」

「そうします……」

人騒がせな邪道戦法が受け継がれる危機は、どうやら逃れたようである。

「おい、レヒト！」

「快」

客室に戻ろうとしたレヒトは、廊下で快とばったり出会した。自然と心が弾む。

快は上質な絹の夜着に身を包んでいる。シンプルだが美しい白い夜着は、快の清楚で可憐な印象を際立たせ、彼女を彩る。

レヒトも同じような夜着を借りているのだが、彼の場合はなんと  
いうか、似合わない。

「なんか、いつものレヒトと違うからかな？ 不思議な感じ」

「まあ、似合わないのは認めるが。そういう快は様になってる。まるでどこかの姫君じゃないか」

「あら、ありがと」

快は艶やかに微笑んだ。

「……あ、その、快？」

「なあに？」

言い淀むレヒトに、首を傾げる。

「ありがとな」

レヒトは小声で言った。

「一緒に、来てくれて」

「気にしないで。僕と一緒にいきたいって言ったんだし」

ひよっとして迷惑だった？ と快が言えば、レヒトはぶんぶんと首を振った。

「とんでもない！……嬉しいよ」

「クス……ありがとう。なんだか、楽しい旅になりそうだね？」  
そう言ってウィンクする快到、レヒトも笑い返す。

「ああ、そうだな。……き……き……」

「どうしたの？」

「あ、いや……き、今日は、もう休ませて貰う。明日からは、また忙しくなるしな！」

軽く咳払いしてそう言えば、快も頷いた。

「そうだね。それじゃあ、おやすみ、レヒト」

おやすみ、と返して、二人は別れる。

（君がいるから、なんて……言えるわけないって）

振り返り、立ち去ってゆく快の後ろ姿を眺めて、レヒトは軽いため息を吐いた。

翌朝は快晴、絶好の旅日和。一行は屋敷前で別れの挨拶を交していた。

「すっかりお世話になってしまっ」

恐縮するレヒトに、セルトラートが優しく微笑む。

「そんな。昨日はとても楽しかったです。また、お立ち寄りくださいね」

「そうそう！ 俺たち、ダチだろう？ また来てくれよな」

「ああ、必ず！」

レヒトは差し出されたシャサラザードの手を握り返した。友人、という言葉が、なにより嬉しい。

「じゃあね、ムーン。また遊びに来るから」

レイヴンはここまで乗ってきた天馬の背を撫でていた。竜谷は遙か北東部、雪と氷に閉ざされた極寒の大地に存在する。気候の変化に弱い天馬は連れて行けないため、ここで預かってもらうことにしたのだ。

「勝手に名前つけて」

「だって、名前ないまんまじゃかわいそうだもん」

天馬が同意するように翼を広げた。

「きちんとお世話しますからね」

「すみません。よろしく願いします」

レヒトは頭を下げる。

「真魔界と魔界の国境まで、馬車で送らせるからさ。そっからは徒歩でクレセント大橋を越えて行くことになる。長い道のりだけど、頑張れよ」

シャサラザードがレヒトの肩を叩いた。

「ああ」

「セルトラート様、馬車の準備が整いました」

御者だろう、初老の男性が声をかけた。

「わかりました。お名残惜しいですが、ここでお別れですね」

「また、ぜひお立ち寄りください、レヒト殿。その時は、きっとレヒト殿から一本取ってみせます」

「楽しみにしてる」

答えて、レヒトは手を差し出した。リーンハルトがその手を握り返す。

「ばいばい」

リーンハルトの影から手を振るシンシアの頭を撫で、レヒトは立ち上がった。

「それじゃあ、俺たちはこれで」

「お元気で。皆さんの旅の成功を、お祈りしています」

四人に見送られ、朝露の残る道を馬車は動きだした。彼らの姿が小さくなって見えなくなるまで、レヒトは手を振り続けていた。

side story 4 〈慈悲深き修道女〉

街の片隅に造られた、小さな教会。三闘神を模した神像に頭を垂れ、熱心に祈りを捧げる娘。

ヘヴンを壊滅寸前にまで追いやった魔物は、数日前に、突如その姿を消した。

人々が喜びに沸き返る中、娘は教会で、静かに祈り続けていた。

『誰に祈っている？』

娘以外にも、誰もいなかったはずの教会に、男の声が響いた。

驚いて振り返ると、ステンドグラスに寄りかかり、男が一人、立っていた。

整った顔立ちに、純白の髪。鋭い金色の瞳が、真っ直ぐに、娘を捉える。

綺麗だと、娘は素直にそう思った。

『……神様？』

『残念だが……私は神ではない。だが人でもない』

謎かけのような言葉を発し、男は小さく笑った。

『誰に祈っている？』

男は、先程の言葉を再び繰り返した。

『……三闘神様に、お祈りしていました』

『誰かが、己を必要としてくれるようにか？』

その言葉を聞き、娘はビクリと肩を震わせた。

男は、ゆっくりと娘に歩み寄った。そして、娘が熱心に祈りを捧げていた三闘神の神像に、そっと触れる。

『神は、苦しんでいる』

『苦しんで……いる？』

ああ、と頷き、男は静かに告げた。

『この世界は、神そのもの。世界が傷付けば、神も傷付く』

『……』

娘は、男をじつと見つめていた。

『魔物どもは、完全に消えたわけではない。いずれ神の力が弱まり、この世界の均衡が崩れたその時……『CHILD』の復活とともに、再び世界に現れる』

『『CHILD』？』

娘の問いには答えず、男は言葉を続ける。

『愚かな人間は、それに気付くことなく……きつと、また争いを始めるのだろつ。それが『CHILD』を目覚めさせるとも知らずに……』

男は、三闘神の神像の前に跪いた。

『お前たちは、きつと私のすることを許さないだろつ。だが、もう決めたのだ。この世界を……私たちの『HEAVEN』を、お前たちを守るためになら……私は、なんだつてしよう』

立ち上がり、神像に口付け——男は娘に向き直った。

『人と竜の力を持つ娘よ、私とともに来い。誰もお前を必要としな  
いなら、私がお前を必要としてやる』

『ど、どうして……』

『必要とされたかつたのだろつ？ ……それに、お前は少し似ているからな。放っておけん』

男は純白の髪を掻きあげた。

『行くぞ、シルデール』

男が投げかけた名前。それは、確かに。久しく呼ばれたことのない、己の名前だった。

一方的に言つて、男は扉に向かって歩き出した。

『ま、待ってください。貴方は一体……？』

男が振り返る。

『私は『大いなる意思』——世界を、神を、守る者だ』

そう言つて、再び歩き出す。娘は、黙つてその後を追つた。

後に残された三体の神像が、消え行く二人の後ろ姿を見つめていた。

## 第24話 クレセント大橋

どこまでも広がる青空の下、蒼穹よりも深い色合いの青が、遙か彼方まで続いている。

湖とは違う、その広くて大きなものを、レヒトとレイヴンは呆けたように見つめていた。

「二人は初めてなんだね」

そんな二人を眺めて、面白そうに笑う快。

「実際に見るのは、な」

目の前に広がる青へと視線を向けたまま、レヒトは答えた。

真魔界を出発した一行は、中央大陸と北方大陸とを結ぶ、クレセント大橋へと差し掛かっていた。

精霊界、真魔界、そして八つある魔界の領土のうち、五つが中央大陸に。北方大陸には、残る三つの魔界領土と竜谷が存在する。

クレセント大橋は、地理的には魔界に存在し、中央大陸のガドレイン領と、北方大陸のハルニート領とを結んでいる。

「わあー！ 初めて見た！」

橋から身を乗り出すようにして海を見つめるレイヴン。その瞳は好奇心でキラキラと輝いている。

「感動するのはいいが、間違っても落ちるなよ、レイヴン。俺は助けてやれないぞ」

レイヴンはぽん、と手を打った。

「泳げないんだよね」

「……忘れてくれ。頼むから」

レヒトが小声で呟けば、二人は声をあげて笑った。

「さ、そろそろ行こう。いつまでも海に見惚れてると、本当に陽が暮れちゃう」

「そんなにかかるのか？」

驚くレヒトに、快は頷いてみせた。

「そうだね。歩いて行くとすると、北方大陸に抜ける頃には夜になっちゃうかな」

レヒトは眉根を寄せた。これはうつかりすると、橋の上で夜を越すなどということになりかねない。それは正直、ごめんこうむりたい。

そんなレヒトの心情を悟ったのか、快は笑みを溢した。

「ご心配なく。橋のちょうど中央にね、街があるから」

「え！ 橋の上に街があるの！？」

レイヴンが振り返り、驚きの声をあげた。好奇心を刺激されたい。

「うん。橋を行き来する旅人のために造られた街でね。物資なんかもけっこうあるんだ。北方大陸——特に竜谷は寒いから、防寒着なんかも用意しなきゃ」

「詳しいな」

こういう時、旅慣れた快には助けられることが多い。

「昔、いろんなところを旅してたからね。こっちにも、何度か来たことがあるんだ。けど……前に来たときは、この橋も人でいっぱいだったのに。商隊とか、旅の一座とか……」

「魔物の影響かもしれないな」

人気のない森の中や街道で、魔物に襲われたと見られる旅人の遺体を、何度か目にしている。

レヒトたちも、旅の途中、何度も魔物に出くわした。倒した数など、もはや数え切れない。

「……とにかく、一刻も早く魔物出現の原因を解明し、ヘヴンを危機から救わないと」

とは言え、未だ有力な情報は得られておらず、被害はゆっくりとだが確実に増している。その状況が、レヒトを焦らせていた。

「そうだね。そのためにも、竜族の長老様を説得しなきゃ。大丈夫、きつとうまくいくよ」

快に言われると、本当にそうなりそうだという気がしてくるから

不思議だ。

「ああ……悩んでなんか、いられないな。よし！」

レヒトはにっと笑い、再び橋から身を乗り出して海を眺めていた  
レイヴンの頭を、ぺしっと軽く叩いて走り出す。

「競走だ！」

「ずるゝい！ レヒトなんかに負けないぞおッ！」

前を走る二人を眺め、快は日溜まりでまどろむ猫のように、優しくその瞳を細めた。

クレセント大橋の中央に造られた、旅人のための街——テイク  
ウェル。

中央大陸と北方大陸とを結ぶ交易の中継点でもあるこの街は、数  
多くの商隊や旅人が行き来する活気に溢れた街だ。

街の入り口に設けられた門の前に、とても警備兵とは思えない、  
盗賊だかゴロツキだかわからないような連中が、たむろしていた。

「おい、お客さんだぜ」

そのうちの一人が、レヒトたちに気付いたらしく、顎をしゃくる。  
男たちが一斉に振り向いた。周囲には、空になった酒瓶が何本も転  
がっている。

「警備兵……には見えないね。そこ、退いてくれない？ 入りたい  
んだけど」

快が両手を腰にあてて男たちに言い放った。街の中から溢れる、  
妙な違和感を察知したのか、冷たい声で。

「おうおう、威勢のいい姉ちゃんだなあ。いいぜえ、そういう女は  
好きだ」

「あら、それはどうもありがとう。じゃあ、街の中がどうなってる  
のか、それとゴロツキっぽい君たちがどうして門の前に居座ってる  
のか、教えてくれない？」

「そいつは無理だな。しっかし、見れば見るほど、あんた美人だな  
あ。あんたを献上すりゃ、俺も幹部になれるってか？」

男たちが下卑た笑みを浮かべて立ち上がる。その手には、それぞれ得物が握られていた。

「野郎ども！ 女は傷つけんなよ！ 男はやっちまえ！」

「おう！」

威勢のいいかけ声とともに、突撃を開始するゴロツキたち。

「……残念ね。おとなしくすれば、許してあげようと思ったのに」  
快はひどく、妖艶な微笑を浮かべた。

「仕方ないから、君たちをしばき倒して通ることにするよ」  
右手をゴロツキたちに向ける。

「水よ、泣け！」

快の言葉に反応し、今まで穏やかだった海が急に荒れ狂った。

「な、なんだあ！？」

怯えた声を発するゴロツキ。未知への恐怖、というやつだ。レヒトも今ではだいぶ慣れたが、魔法を使えない身だと、快やレイヴンの使う不思議な魔法は、感嘆すると同時にやはり恐ろしくも感じられる。

十年前、精霊狩りが起こってしまったのも、なんとなく、理解できるのだ。

荒れ狂う水が一気に、ゴロツキたちめがけて襲い掛かった。

「うわあ！ に、逃げ……！」

上げかけた言葉ごと、ゴロツキたちを飲み込み、押し流す。凄まじい水流に門も破壊されて瓦礫と化し、ゴロツキともども、海の中へと消えていった。

「……ちよつとやりすぎちゃったかな？」

再び静けさを取り戻し、穏やかになった水面を眺めて、快が苦笑した。

「門までぶっ壊したからな」

「修理費出せ！ とか、言われないといいね」

軽口を叩き合う。だが、全員が気付いていた。この街を取り巻く、妙な違和感。

「気をつけて、行こう」

レヒトの言葉に、二人も頷く。

そして、一行は先程まで門があった場所を通り、街の中へと足を踏み入れ――。

「これ……どういうこと？」

街の惨状を見渡して、レイヴンが呆然と呟いた。  
廃墟と化した街を、冷たい風が吹き抜けていく。

そして、その風が運ぶ、嫌な――しかし、嗅ぎ慣れた匂い。

「……レヒト」

「わかつてる」

セイクリッド・ティアに手をかけて、レヒトはゆっくりと歩き出す。

街の中心部に近付けば近付くほど、その匂い――血の匂いは、濃くなっていた。

そして。

「っ――」

目を覆いたくなるような、光景だった。

バラバラに引き裂かれた、もともとは人間だったと思われるそれが、あたりに散乱している。

血の海に沈む小さな手……快が口元を覆った。

「なにこれ……まるで虐殺じゃない……！」

レイヴンが、転がっている丸いもの――おそらく、誰かの頭だったのだろう――に手を触れた。

「……一日か、二日つてとこかな」

「なんだって、こんな……！」

唇を噛み締めるレヒト。

キィ……と微かな音がして、全員が武器を構えて音のしたほうを振り返る。見れば、なんとか原型を保っている家の焼け焦げた扉を開き、やつれた様子の老人が現れた。

「あんたがたは……旅人かね？ どうやってこの街に……」

「入り口のゴロツキしばき倒してですけど。……貴方は？」

「わしはティークウエルの長をしておったものじゃ……。このような時に、この街を訪れるとは……」

小さく呟き、老人は踵を返す。

「あ、ちよつと！」

レイヴンが声をあげる。老人は振り返ると手招きした。

「入りなさい。たいしたもてなしはできませんが……。この街がどういった状況にあるか、話すことはできるじゃろう……」

三人は顔を見合わせ、老人の後に続いて家の中へと入った。

「……すまんの、今は茶も出すこともできん」

三人を粗末な椅子に座らせ、老人はため息混じりに呟いた。

「いえ、そんなことは構いません。それより、一体なにが起きているんですか？」

「……五日ほど前のことになるかの……。突然、賊徒が街を襲ってきたんじゃ」

「賊徒……ですか？」

「そうじゃ……。奴らは毎晩のようにやってきては悪逆の限りを尽くしてゆく。わしらは逃げることにすらできん……」

先程、快が倒したゴロツキ——賊徒は、街の住人を逃がさないための見張り役だったのだろう。

「警備隊は……いないんですか？　あとは、領主にかけて兵を派遣してもらえば……」

レヒトが言うと、老人はレヒトのほうへと視線を向けた。苦悩と諦めと、疲れ……様々な感情が混ざり合った瞳とぶつかる。

「街の警備隊は、まったく齒が立たなかった。領主には……」

老人は、一度言葉を切った。

「この街は、ちょうどガドレイン領とハルニート領の中間に位置しておる。以前は、どちらの領に属するのかわざいふんと揉めたもんじゃ」

その話は、レヒトもラゲネスを通して聞いたことがある。

ティークウエルは豊かな街だ。どちらの領土に属するかで、双方は揉めに揉めたらしい。結局、議会での話し合いは平行線に終わり、街の中心から南側をガドレイン領、北側をハルニート領とするという、なんとも微妙な結末に終わったのだった。そのため、ガドレイン領主アルベルと、ハルニート領主ウィークは非常に仲が悪い。

「どちらの領主にも書状を送ったのだが……」

「相手方になんとかしてもらえの一点張りなんですね」

「……そうなんじゃ」

老人は深い深いため息を吐いた。

「今日もきつと来るじゃろう……。あんたがたはどうなさる。見張りの賊徒を倒せるなら、反対側の門から出ることもできるじゃろう」

「その賊徒は、ハルニート領から現れるんですね？」

レヒトたちはガドレイン領を抜けてきたが、賊徒の噂など聞かなかったし、魔物の被害は多少あれ、人々は普段どおりの生活を送っているように見えた。

「そうじゃ。ハルニート領では、最近になって、領主も手を出せんような、凶悪な賊徒が横行していると聞く」

レイは天界の兵士を魔界に送ったようだが、いかんせん、数が少ない。大都市には配置できても、小さな街や村までは手が回らないのだろう。

賊徒というものは、基本的に大きな街は狙わない。大きな街は物資が多く、栄えている代わりに、警備も厳重であるからだ。

しかし、ティークウエルのように、旅人のために開放されたような街は違う。物資も豊富に存在し、開放的であるがゆえに警備も薄い。加えて、ティークウエルは前述した通り、少々特殊で領主が対処しにくい環境にある。長い橋の中央ということもあり、住人の避難も難しい。

「……格好の獲物ってわけか」

許せないな、とレヒトは小さく呟き、黙って話を聞いていた二人

に視線を向けた。

「……放つてはおけないよ」

「レイヴンも、このまま逃げるのはやだな」

快とレイヴンが口々に言った。レヒトも、もとよりそのつもりである。

「俺たちは、ここに残って賊徒をなんとかします。大丈夫、任せてください」

自信があるわけではないが、憔悴しきった老人を安心させるように、レヒトは力強い言葉をかけた。

## 第25話 夕闇に染まる廃墟

廃墟と化した街を、レヒトは一人歩いていた。

立ち並ぶ建物のほとんどが、もはや原型を留めてはいない。

生き残った住人たちは、快が破壊した門から、すでにガドレイン領へと避難させている。あとは賊徒がやってくるのを待つだけとなり、レヒトは見回りも兼ねて、街を探索し始めたのだ。

「……酷い有様だ」

血の匂いの充満する街を吹き抜ける、冷たい風。まるで泣き叫んでいるようだ、レヒトは思った。

街の南側を一回りし、レヒトは中心部へと戻った。街の中心部は、本来ならば露店などが立ち並んでいるためか、ちょっとした広場のようになっている。

散乱していた人々の惨い遺体は、簡易的な弔いをすませた後、快が精霊の力を借りて火葬した。

レヒトは、どす黒い血溜まりの中、佇む鮮やかな真紅を見つけた。胸の前で両手を組み、瞳を閉じて。その唇が、微かに言葉を紡いでいた。

近付けば、レヒトに気付いたのか、ゆっくりと視線を移す。その瞳に、いつもの強い輝きはない。代わりに存在するのは――暗く、冷たい、なにか。

「なにをしていたんだ？」

「……祈ってた」

レヒトが問いかけると、快は小さな声で答えた。

「そんなの、気休めでしかないって、わかってるんだけどね……」  
レヒトは理解した。快の瞳の奥に存在するものが、深い哀しみの色だと。

「快……」

「大丈夫だよ、僕は」

快は微笑んで見せた。彼女の微笑みを見ると、レヒトは、それ以上にも言えなくなる。

快が時折見せる、美しくも哀しいその微笑みは、他人を拒絶する壁でもあった。

「そんなことより。ほら、これ見て」

彼女の瞳に、輝きが戻った。

「これは？」

快が見せたのは、茶色い、硬質の太い毛。

「……亡くなった人の衣服にね、ついてたんだ。レイヴンは、プロウ・デーモンの体毛だろうって言ってる」

「プロウ・デーモン……」

「それに、亡くなった人たちの身体を見ても……剣とかでやられた感じじゃないんだ。あくまで推測だけど、鋭い爪とか牙とかで……食いちぎられたんだと思う」

「賊徒と……魔物が一緒に行動してたってことか……」

それは、レヒトも薄々感じていたことだった。あの建物の壊れ方——人間がやったとは、思えなかったからだ。それに、街の住人が見たという、黒く大きな獣の影。

「そんな話、聞いたこともないけど……たぶん、間違いないよ」

そう言って、快は引き攣れ、焼け爛れた壁を指差した。

「あの爛れた壁も……普通に焼けただけじゃ、ああいう風にはならない。魔法が直撃して、ああなったんだと思う。けど、あの焼け跡からは精霊を感知できないんだ。だから、人の手によるものじゃないよ」

精霊人や天界人が魔法を発動させるには、精霊の力を借りなければならぬ。快が言うには、精霊の力を借りて発動させた魔法——それによって破壊されたり、傷を負ったりした場合、そこには必ず『痕跡』が残るというのだ。それを感知できないということは——。

「……魔物、か」

快は頷いた。

魔物も魔法を使うが、一つだけ大きな違いがある。魔物は精霊の力を借りずに、魔法を発動させることができるのだ。

魔法の発動に必要なエナジーは、その体内で自己生成されているのではないかと考えられている。魔物が詠唱を必要としないのは、そのためである。

「……魔物は精霊の力を借りずに、魔法を使う、か……」

それなら、レイヴンは——そう言いかけて、レヒトはやめた。それは、レヒトがずっと疑問に思っていることだった。

快も、レヒトの言わんとしていることがわかったようだ。

レイヴンは、精霊を感じることができないらしい。そして、魔法を発動させるための詠唱も、必要としない。

にも関わらず、レイヴンは人並外れた、凄まじい破壊力の魔法を扱えるのだ。

人間でも、精霊族でも、竜族でもないというレイヴン。あの子は、一体——。

「……レイヴンは、レイヴンだ。たとえば、あの子の正体がなんであれ……」

そう呟けば、快もにつこりと笑った。

「当たり前でしょ。レイヴンは大切な仲間だよ。それに、ちょっとくらいミステリアスなほうがいいじゃない」

快らしい言葉。彼女の言葉には、他人を安心させる不思議な力があると、レヒトは思った。

しばらく快と話をしていると、広場から街の北側に続く道を走る、見慣れた小柄な人影が見えた。

「レヒト——！ 快——！」

見張りに出ていたレイヴンが戻ってきた。

街の住人に聞いたところ、賊徒は街の北側、ハルニート領から現れるという話だった。そのため、三人は交代で、賊徒が現れるという北側の門を見張ることにしたのだ。

橋の上で戦うという方法もあるのだが、これはレヒトのことを考慮して却下された。

というのも、泳げないレヒトは、水に囲まれた橋の上という場所に、恐怖心を覚えるのだ。こればかりは、いかんともしがたい。

そのため、それなりの広さがあり、水の上だということを感ぜない街中で、賊徒を迎え撃つことになったのである。

「おかえり、レイヴン。その様子だと、まだみたいだね」

レイヴンは頷いた。

「うん。まだ見えないよ」

「それじゃ、次は僕が見に行こう」

「気を付けるよ、快」

レヒトが声をかければ、快はウィンクして見せた。

「任せてよ」

快が見張りのためにその場を去り、レヒトとレイヴンが残された。

二人の間を、強い風が吹き抜ける。

「……風、強いね」

「ああ……」

かける言葉が見付からず、沈黙が流れた。

「ねえ、レヒト」

先に言葉を発したのは、レイヴンのほうだった。

「なんだ？」

「んつとね……えつと……」

いつもとは違うレイヴンの様子に、レヒトは首を傾げた。

言葉を探しているのではない。言いたいことがあるのに、言おうかどうか迷っているといった感じた。レイヴンがこういった態度を見せるのは珍しい。

「言ってみな？　ちゃんと聞いてやるから」

そう言えば、レイヴンは小さく頷き、話し始めた。

「あのね……さっき快に聞いたんだけど、魔界の南のほうにね、綺麗な海があるんだって。ずーっと砂浜が続いてて、すごく綺麗な

んだって」

レヒトは黙ってその言葉を聞いていた。レイヴンは話し続ける。  
「だからね、今度一緒に行こうよ。レヒトと、快と、レイヴンと。」

「……いいでしょ？」

不安げに、上目遣いに見上げるレイヴン。断わられるかも、と心配したのだろうか。

その頭に、レヒトはそつと手を置いた。

「ああ……使命を果たして、この旅を終えたら……一緒に行こうな」  
レヒトがそう答えれば、レイヴンは輝くような笑顔を見せた。

「ほんと！？ 約束だよ！ 絶対だからね！」

「約束しよう」

「うん！ 楽しみにしてるよ！ 泳げないからって、約束すっぱかしたらだめだからね！」

そう言って、何度も何度も、約束を交わす。

繰り返させる『絶対』に、レヒトは何度も頷き、その度に、何度も『絶対』と返した。

そんなやりとりを繰り返すうちに、街はすっかり闇に包まれた。  
吹き荒む風が破壊された建物の間を抜け、その音は、まるで悲しげな悲鳴のように、廃墟と化した街に響いた。

「……レヒト」

不意にレイヴンがあげた小さな声。レヒトは無言で頷いた。

「ついに……来たな」

その言葉が終わらぬうちに、廃屋の向こうから快が姿を見せた。  
その手には、すでに銃を構えている。

「数は、ざっと二、三十人ってとこかな」

ほぼ予測通りだと、レヒトは思った。

「さて、お客様をここまでご案内するか」

レヒトがおどけた口調で言えば、レイヴンがスタッフの先に光を灯した。

太陽——とまではいかないが、レイヴンの生み出した光は、存在

を知らしめるには十分な輝きを放った。

「油断するなよ、二人とも」

レヒトはセイクリッド・ティアを抜き放つ。魔法の光を受け、剣は美しく煌めいた。

## 第26話 ニンブル盗賊団戦 - 1 -

暗闇の向こうに、ぼんやりとした松明の明かりが浮かび上がり、十人ほどの男たちが、その姿を見せた。

見えるだけが全てではない。闇に紛れ、廃屋の影に身を潜めながら、レヒトたちを取り囲むように近付いて来る。放たれる明瞭な殺気が、それを伝えていた。

「そんな殺気丸だしじゃあ、不意打ちなんて出来ないよ」

快が馬鹿にしたように声をかけた。面白いくらいにはつきりと、男たちの間に動揺が走り、殺気が一際強くなった。

「ほお……よくわかったな、姉ちゃん」

賊徒の頭らしき、頬に傷のある男がにやりと笑った。

「わざわざこのニンブル盗賊団を待ち伏せしようってんだ。ちったあ出来ると思っていいいかい？」

「ご自由にどうぞ、三流悪役の親分さん？」

再び、男たちが殺気立った。今にも斬りかからんばかりの男たちを、賊徒の頭が制す。

「この街の人たちを、ブラウ・デーモンに食い殺させたのは、お前たちだな？」

レヒトの言葉に、賊徒の頭は大袈裟に驚いて見せた。

「驚かせてやろうと思ったんだがなあ。バレてんなら、隠しとく意味はねえ」

賊徒の頭が指を鳴らすと、闇の中から、一匹の異形の生物——ブラウ・デーモンが現れた。その首や腕、足には、太い鎖が詰められており、男たちが数人がかりでその鎖を引いていた。

「へへへ……捕まえんのは苦労したが、今じゃこいつのおかげで楽させてもらってるぜ」

確かに、小さな街の警備兵などでは、最下級の魔物がたった一匹とはいえ、容易く倒せるものではない。

ここで出会ったのも、他の旅人であったなら。二十人強の賊徒と、ブロウ・デーモンを相手に、かなりの苦戦を強いられ——殺されてしまったかもしれない。

が、今回は残念ながら相手が悪い。

「さて、本来なら、俺たちに喧嘩を売るような身の程知らずはブロウ・デーモンに食わせちまうんだが……」

にやり、と賊徒の頭が笑みを浮かべる。レヒトはおや、と首を傾げた。

「正直、あんたみたいな美人を殺るのは気がひける。そっちの兄ちゃんもそれなりに腕がたつようだし、残るは子供だ」

（なるほど……）

この男がなにを言いたいのかを、レヒトは理解した。

「そこで、だ。俺の手下になるってんなら、命は助けてやるぜ。なあに、難しい商売じゃねえ。俺の言うことさえ聞いてくれりゃいい」

気色悪い笑みを浮かべたまま、賊徒の頭が言い放った。本当に仲間を引き入れるつもりなのか、それとも隙を見て殺すつもりなのかはわからないが——おそらく後者であろうと思われる。

返ってくる言葉はない。賊徒の頭は一方的に話し続ける。

「どうだい？ 悪い話じゃねえだろう？」

賊徒の頭が、だんだんと焦れてきたのが伝わってくる。

レヒトはさり気なく、二人に視線を送る。二人は小さく頷いた。

それを確認し、レヒトは賊徒の頭を見据えて、冷たく言い放った。「生憎と、お前たちみたいな悪党と手を組むほど、俺たちは落ちぶれちゃいないんでな」

断られるとは露ほどにも思っていなかったのだらう。ばかんと間の抜けたような顔をし——ようやく理解したのか、その表情が怒りに染まる。

「デメエ……こっちが下手にでりやあつけあがりやがって！」

お約束の台詞とともに、腰に下げたロングソードを抜き放つ。

「ブロウ・デーモンの恐ろしさ、思い知らせてやるぜ！」

その言葉に反応したように、ブロウ・デーモンが咆哮をあげる。それが、戦闘開始の合図となった。

予め詠唱を終えていた快は右手を掲げ、荒れ狂う雷撃を呼び起こす。賊徒の頭に延々と喋らせていたのも、彼女の詠唱時間を稼ぐためである。

「雷よ、撃て！」

目標めがけ、放たれた雷は一直線に走る。

ブロウ・デーモンを狙ったその一撃。しかし、ブロウ・デーモンは背中の翼を羽ばたかせると、空中へと逃れた。その代わりに、雷は側にいた賊徒を巻き込み、絶命させる。

「ま、魔法……！」

それを目撃した男たちが動揺し、動きが止まる。

「プチグレイシャー！」

生まれた一瞬の隙を逃さず、レイヴンの放った氷の魔法が直撃し、数人の賊徒をあつという間に行動不能に陥れる。

「ええい！ 怯むんじゃねえっ！」

賊徒の頭が怒鳴る。そこへ、気付かれぬよう接近していたレヒトが剣を振り降ろす。

闇に響く、耳障りな金属音。レヒトのセイクリッド・ティアと、男のロングソードがぶつかりあい、火花を散らした。そのまま数度、打ち合う。

剣の腕、そして手にした武器の質ともにレヒトのほうが上だ。普段ならば、ここであつさりと討ち取っているはずである。

しかし、今回はそうもいかなかった。

「でいやあああつ！」

横手から突きかかってきた賊徒の剣を、後退してかわす。再びつかかってくる賊徒の足をひっかけて転ばせ、別の相手と斬り結ぶ。ぞわつと背筋に悪感が走り、レヒトはとっさにその場に屈み込んだ。その上を、凄まじい速度でブロウ・デーモンが通り過ぎてゆく。

レヒトと斬り結んでいた賊徒が、首をへし折られて倒れ伏した。

（くそっ……！）

レヒトは舌打ちした。一人一人の力は大したことがないのだが、いかにせん数が多い。

それに加え、賊徒の攻撃は、ほぼレヒトに集中していると言っている。魔法を扱える二人を相手にするよりは容易いと思ったのか、はたまた単純に二人とは戦いたくないからか。理由は不明だが、レヒトにしてみれば堪ったものではない。

「レヒト、行くよッ！」

レイヴンの鋭い声が飛んだ。見れば、レイヴンの周囲を風が渦巻いている。レイヴンはスタッフを、賊徒が集まっている場所——要するに、レヒトのほうへ向けた。

「……まさか」

「プチサイクロン！」

レイヴンの声とともに、鋭い刃と化した風が周囲を吹き荒れた。

「死ぬ~~~~っ！」

思わずあげた絶叫。これは本気で死ぬ——レヒトがそう思った瞬間。

「光よ、護れ！」

柔らかな光が、その身を包んだ。光の壁は風の刃を弾き、荒れ狂う風の中にいたレヒトの身体は、傷一つつくことはなかった。

風が収まった時、賊徒の半数以上が、物言わぬ肉塊と化していた。ブロウ・デーモンも翼を傷付けられ、地に落ちて唸り声をあげていた。

「俺まで殺す気か」

こめかみのあたりがヒクヒクと引きつっているのをレヒトは感じた。快とレイヴンは打ち合わせて魔法を使ったのだろうが、なにも知らされていないレヒトにとっては恐怖である。寿命が軽く十年は縮んだ。

「えっ？ いいじゃん、生きてたんだから。あのままじゃ、そのう

ちやられてたよ」

「そうそう。むしろ僕らに感謝するべきでしょ」

顔を見あわせて笑う二人。快とレイヴンという最強タッグ、もとより勝ち目のなさそうな戦いなのだ。レヒトは早々に白旗をあげた。

「……感謝してます」

そう答えて、レヒトは賊徒に視線を戻した。

「そろそろ観念したらどうだ？」

レヒトの発した言葉に、しかし、賊徒の頭はにやりと笑った。

「……観念するのはテメエらのほうだ」

「なんだと……？」

賊徒の頭はレヒトたちの背後へと顎をしゃくった。つられるように視線を移し、三人の動きがとまる。

「すまぬ、旅の方……」

数人の男に囲まれ、うなだれていたのは逃がしたはずの街の住人たち。そして、住人たちを囲む男は――。

「あら……生きてたんだ」

昼間、快がしばき倒した見張りの賊徒たちだった。

「よお、姉ちゃん。昼間はよくもやってくれたなあ。たっぷりと可愛がつてやるぜ」

住人を人質にとられてしまった以上、下手に動くことはできない。「ずいぶんとてこずらせてくれたじゃねえか。ま、これで終わりだな」

賊徒たちが笑い声をあげた。もはや、打つ手はない。

「ニンブル盗賊団に逆らったこと、後悔するんだな！ やっちまえ！」

その言葉とともに、ブロウ・デーモンがその爪を振りあげて快に飛びかかった。

「快っ！」

レヒトは快を突き飛ばす。その瞬間、レヒトの身を襲う衝撃と激痛。

「ぐうつ……！」

倒れたレヒトを先に食らおうと、ブロウ・デーモンが迫る。咆哮とともに、その鋭い爪が閃く。

次に己の身を襲うだろう『死』を覚悟して、レヒトは静かに瞳を閉じた。

「嫌あつ！ レヒト！」

快の悲鳴が、聞こえた。

## 第27話 ニンブル盗賊団戦 - 2 -

「やめてよおッ！」

闇に響く、子供特有の高い声。泣いているのか、微かに震えている。

（レイヴン……ごめんな……）

何度も何度も『絶対』と約束を交したのに、守れそうにない。きつと怒るだろうな、とレヒトは思った。

（……？）

しかし、覚悟した『死』は、いつまで経っても襲ってくることはなく——別に襲ってきて欲しいわけではないが——レヒトは目を開けた。

ブラウ・デーモンは、最後に見たときと同じように、倒れたレヒトの前に立っていた。

だが、その目はレヒトを見てはいない。ブラウ・デーモンの視線の先にいたのは——泣き顔の、レイヴン。

きつと、誰もが理解できなかったに違いない。たった一人の子供が——。

「ど、どういうことだ？」

賊徒の頭が呆然と呟いた。

「お前……一体、なにをしゃがった！？ ええい、ブラウ・デーモンよ！」

その声に、ブラウ・デーモンは賊徒の頭に視線を向けた。

「そのガキからやってしまえ！」

賊徒の頭がレイヴンを指差して怒鳴れば、咆哮をあげ、ブラウ・デーモンが飛びかかる。

レイヴンに、ではない。ブラウ・デーモンに命じた賊徒の頭に、その爪が迫る。

「ぎいやあああああ！」

耳を塞ぎなくなる絶叫。血しぶきが上がり、肉片が周囲に飛び散った。

「……所詮、人が魔物を支配するなんて……無理だったんだよ」

賊徒の頭がブロウ・デーモンに食い殺される様を見つめて、快が呟く。その瞳は、ひどく冷ややかだった。

「テ、テメエら……人質の命が惜しくないようだなあっ！」

街の住人に剣を突き付けていた男の一人が、ブロウ・デーモンの乱心をレヒトたちの仕業だと思い込んで声を張り上げた。

剣を向けられた女性が悲鳴をあげる。

「違う、俺たちじゃない！ やめるんだ！」

レヒトの制止も聞かず、剣を振りあげる男。快とレイヴンの魔法も、間に合いそうにない。

（まずいつ……！）

その時だった。街の住人に剣を向けていた男たちの足元に、淡い光の魔法陣が浮かび上がり、男たちの体を戒める。

「な、なんだあっ!？」

「動けねえ！」

カツカツと、闇の静寂を裂いて聞こえる足音。闇の中——ハルニート領の方から、一人の女性が姿を見せた。

神官だろうか。白を基調としたゆつたりとしたケープに身を包み、先端に宝石の埋め込まれた杖を持っている。さらさらとした茶色の長い髪、優しい水色の瞳の美しい女性だった。

（あの女性……どこかで……？）

はつきりとは思いつけないが、どこかで会ったような気がした。

「貴方がたは……人々を守るために、戦っておられるのですね？」

女性はレヒトたちのほうを向いて静かに問いかけた。

敵か味方かは、はつきりしない。だが、男たちの動きを封じたのはこの女性で間違いないだろう。レヒトが頷くと、女性は微笑んだ。「わかりました。助太刀させていただきますわ」

よろしく願いますわ、と頭を下げる女性に、レヒト一行もつ

られて頭を下げた。

「や、野郎……舐めやがってえっ！」

近くにいた男の一人が、無謀にもレイヴンめがけて突っ込んで来た。それを迎撃しようと、レイヴンがスタッフを振り上げ――。

大きな影が、レイヴンを庇うように、レイヴンと賊徒の間に飛び込んできた。男の剣は、その影――ブロウ・デーモンの肉体に、深々と突き刺さる。

「え……？」

構えていたスタッフをおろし、その様子を見つめるレイヴン。

苦しげなうめき声をあげながらも、ブロウ・デーモンはゆっくりとその瞳をレイヴンに向け、腕を伸ばした。

「レイヴン！」

動かないレイヴンの手を引き、ブロウ・デーモンから離す。

急所を貫かれた魔物は、その場に倒れ伏した。死してなお、レイヴンに向けられたその瞳は、どこか満足そうな、そんな風にレヒトは感じた。

「……さて、よくはわからないけど、これで完全に形勢逆転、かな？」

快が挑発的に言った。

賊徒の間に怯えが走る。頭は殺され、切札のブロウ・デーモンも死んだ。人質も奪還されたも同然である。

「に、逃げろおっ！」

捕われた仲間を捨て、逃げ出そうとする賊徒。しかし、それより早く、快が魔法を発動させた。

「……闇よ、抱け」

ぶわっと、周囲に夜より暗い、濃く冷たい闇が広がった。それは賊徒たちのもとにも広がる。

「な、なんだ？ こりゃ」

「痛くも痒くもねえぞ！」

快がクスリと妖艶に笑った。

「そう、痛くも痒くもないよ。ただ……」

その言葉が終わらぬうちに、悲鳴があがった。賊徒たちが、次々と大地に倒れ伏してゆく。

「ただ、恐怖に包まれるだけだよ」

賊徒たちは、現れた闇に、体を食われていた。闇に包まれた部分から、体が消滅し始めたのである。

「た、助けて……助けてくれえっ！」

足から消滅した男が、快の脚にすがりついた。

快は無表情で、体が消えてゆく男を見据える。

周囲に倒れた男たちがあがる、恐怖の声。手や足から消えていった男たちは、ただその闇から逃れようとがむしゃらに暴れ。頭から消滅した男は、まだ半分以上も残っているというのに、ピクリとも動きはしなかった。

「た、頼む！ 助けてくれえ！ なんでもするっ……！」

「……君たちは、そうやってすがってきた街の人たちを、ブロウ・デーモンに食い殺させたんだよ？ 無抵抗の人たちを、なんの躊躇いもなく」

快は笑っていた。冷たい、冷たい氷の微笑。

「僕は、君たちだけは許せない。だから……」

男の顔に、絶望の色が広がった。

「さよなら」

その言葉とともに、男の体が完全に消滅した。闇が消え去った時、賊徒たちは、誰一人として残ってはいなかった。

「……終わったね」

快が微笑む。レヒトは、静かに頷いた。

人の中には、これほどまでの憎悪が、眠っているというのだろうか……。

「どうやら、終わったようですわね」

あの女性が、レヒトに近付いてくる。レヒトは頭をさげた。

「ありがとございました。貴女のおかげで、街の人も無事でした」

「いえ。私はなにもしておりませんわ。魔物を浄化するという目的を果たしに來ただけです。お氣になさりませぬよう」

女性はふんわりと笑った。

「魔物の浄化を？」

「ええ、それが私の役目ですわ」

「そうですか。とにかく助かりました」

「偶然でしょうが、お役に立ててよかったですわ」

女性はレイヴンのほうへと視線を移した。

「なあに？」

「いえ、なんでもありませんの。確か、二人組ということでしたし、きつと私の勘違いですわね。魔物には氣を付けなければなりませんよ？」

女性は屈み、レイヴンの頭をそつと撫でた。

（この女性、やっぱりどこかで見たような氣がする）

先程からの疑問。レヒトは女性に聞いてみることにした。

「あの、どこかでお会いしたこと……ありませんか？」

レヒトがそう聞くと、女性は驚いたような顔をした。

「まあ。私もそう思っていましたの。けれど、どこでお会いしたのか……」

「不思議なこともあるものですね」

「ええ、本当に」

女性はそう言つて微笑んだ。

「それでは名も知らぬ旅の方、機会があれば、またお会いしましょう」

優雅に一礼すると、女性はガドレイン領の方へと歩いて行った。  
「知り合い？」

見上げてくるレイヴンに、レヒトは曖昧な笑みを見せた。

「いや……見たことはあるんだが、どこで会ったのか思い出せないんだ」

「ふうん。けつこつ、綺麗な人だったね」

名前、聞いとけばよかったのに、とレイヴンが悪戯っぽく言った。

「…………あのなあ」

「旅の方…………」

言葉を遮られ、レヒトが振り向くと、賊徒に捕われていた街の住人——昼間出会ったあの老人が立っていた。

「街を救ってくれたこと、感謝しておる。だが…………言にくいんじやが、今夜のうちに出て行つてはくれんかね」

「なん…………」

「わかつてます」

言いかけたレイヴンの口を封じて、レヒトが答える。老人の視線の先にいるのは、快。

「すまぬの…………」

「…………気にしないでください。快、行こう」

納得していないレイヴンの手を引き、うなだれたままの快を連れて、レヒトは街の外へ出た。

「ねえ、なんで追い出されないといけないの？ レイヴンたちがやつつけてあげたのに！」

頬を膨らませるレイヴンに、快が力なく微笑んだ。

「ごめんね。僕のせいだ」

「気にするな、快。君のせいじゃない」

その肩に手を置いて、できる限り優しくレヒトは言った。

街の住人たちは怯えていた。快の放った魔法を見て。快が人間ではないと気付いて。

「僕が…………街の人たちの前で、あんな魔法を使ったからね。怖がらせちゃったんだ」

「でも、快は街の人のために魔法使つてあいっらやつつけたんでしょ？ それなのに、追い出されないといけないの？ ひどいね！」

怒るレイヴンに、快は柔らかに微笑んで見せた。

「…………レイヴンは優しいね」

「レイヴン、快のこと大好きだから！」

そう言つて、レイヴンは笑つた。

「ありがとね」

快はどんな気持ちで魔法を使つたのだろう。どんな気持ちで人の命を弄んだ賊徒を葬り、どんな気持ちで今この場にいるのだろう。

レヒトは胸が痛んだ。彼女の、悲しそうな顔は見たくない。

人間と精霊族の間に横たわる深い溝。本当に、埋めることはできるのか。十年前の精霊狩りの再来を、とめることができるのか。

(……それでも、俺はやる。どんなに困難なことだろうと)

快の横顔を見て、レヒトは深く心に誓つた。

「レヒト！ 見てよ、ほら！ 陽が昇つたよ！」

レイヴンがはしやぎながら水平線の彼方を指差した。闇を裂き、輝かしい太陽が姿を見せ始めている。

さっきまであんなに怒っていたというのに。二人は顔を見合わせて笑つた。

「行こうか」

「……うん」

先を進むレイヴンの後を、少し遅れて二人は追つた。

## 第28話 雪に包まれて

クレセント大橋を渡り、ハルニート領、イーヴァル領を抜けたレヒト一行は、ついにエリルダータ領の小さな街、ルナルへと辿り着いた。ルナルは魔界最北端の街であり、竜谷への旅も、これでようやく終わりが見えて来た——と思われたのだが。

「寒い！ 寒い！ 寒いよッ！」

毛布にくるまった白い物体——レイヴンが、本日通算二十回目の悲鳴をあげた。

「寒いのは俺も同じだっ」

同じく頭から毛布を被ったレヒトが、律儀にも二十回目の返事をした。

一行は早朝に付近の村を発ち、ルナルを目指して歩いてきたのだが、あと一步のところ突然の吹雪に見舞われたのである。あわや凍死寸前のところを、偶然通りかかったルナルの住人によって救われ、今に至るというわけだ。

「うえー、死ぬかと思ったよー」

暖炉の前で丸まるレイヴン。鼻が焦げるのではないかと思われるほどに、顔を近付けている。

「レイヴン、もう少し右に寄れ。これじゃ俺が寒い」

「やだよ。レヒトってば、年下に譲りなよね」

「そういうお前こそ、年上に遠慮しろ」

本日数度目の——もはや数える気にもならないが——暖炉争奪戦争が勃発した。

訂正しておく、見た目はともかくとして、実際にはレイヴンのほうが年上である。

と、部屋の扉が開き、冷たい風が流れ込んできた。

「お二人さーん、生きてるー？」

二人は肩を震わせて、冷たい風を運んできた人物を恨めしそうに

見つめた。

「快……寒い……」

快はむっとしたように腰に手をあて、柳眉を釣り上げた。

「なんだよ、その言い草は。動けない二人の代わりに、情報収集してきてあげたのに。外は吹雪だし、大変だったんだよ？」

「わかった、わかったから……閉めて……」

二人は本当に寒さには慣れていないらしく、蒼白になっていた。さすがに哀れと思ったのか、快は扉を閉めてやった。吹雪の中、外を歩いてきた快にとっても、この部屋の暖かさは心地よい。

「ふう……それにしても凄いい吹雪だね。しばらくは止みそうもないよ」

被っていた黒のふわふわした帽子を脱ぎ、快はソファに座った。

彼女はあの真紅のドレスではなく、袖や裾にふわふわのついた黒いコートを纏っている。露出度が下がって、レヒトとしてはあまり嬉しくないのだが——下品と言っなけれ、レヒトも健全な二十三歳男子である——今はそんなことを言っている場合ではない。

「悪かったな、快。君一人に任せて……」

「いいよ。寒さで死にかけたレヒト連れて行ったって、役に立たなそうだし」

レヒトは激しく傷付いた。が、事実なので仕方ない。ぐっと耐える。

「皆さん、温かい紅茶でもいかがですか？」

穏和そうな紳士が、扉を開けて部屋に入ってきた。この屋敷の主であり、ルナルの権力者でもあるロディ「マインドだ。

「ロディさん。すみません……お世話になります」

「いえいえ、お気になさらず。この吹雪では竜谷へは向かえそうです。ゆつくりとお寛ぎください」

ロディは人の良さそうな笑顔を見せ、人数分の紅茶をテーブルに並べると、部屋を出て行った。

「……あんまりいい話、聞かないんだよね」

ロデイが出て行った扉を見つめて、快が呟いた。

「いかにもいい人っぽいのにね」

紅茶をすすりながらレイヴンが言った。

「見た目はね。話を聞く限りじゃあ、街の人にはあんまり良く思われてないみたいだよ。街で唯一のお医者様だから、街の人たちも下手に口出ししたりはできないらしいけどね」

「そつえば、レイヴンたちと最初に会った時も、微妙な感じだったね」。天界最高責任者の代理だって知ったら、急に優しくなったけど」

「そんなものだろう、権力者なんて」

評議会の議員たちで、嫌というほどそれを経験しているレヒトが言った。

「レイ様々って感じかな」

快が悪戯っぽく言った。彼女は天界最高責任者、レイ・クリスティヌの姪という立場を最大限に利用して、死にかけた二人を休ませる部屋と温かい食事を用意させ、吹雪が止むまでの滞在などの全面的な支援を約束させたのである。

レヒトが思わず心の中で、快にだけは逆らわないようにしよう、と誓ってしまったのも無理はない。

「……俺も、彼があまりいい人だとは思わないがな」

「なんで？」

「さつき、あの人が自分の娘を俺たちに紹介しただろう？ その時に、ちらっと見たんだが……首に、絞められたような痕があった。一度や二度の痕じゃない。あれは、慢性的な暴力による傷痕だ」

ロデイには娘が一人いる。かなり可愛らしい少女で、年は十六歳になると言っていた。

「さすが。女の子のことはよく見てるね、レヒト」

快に言われ、レヒトは軽く咳払いした。

「最初に紹介されてから、あの子は一度も俺たちの前には姿を見せていない。会わせて欲しいと頼んだら、人見知りするからと断られ

た。それが少し、気になるんだ」

「レヒトってば、そんなこと言ったの？」

「少し気になっただけだ」

微妙な表情で見上げてくるレイヴンの頭を、レヒトは軽く小突いた。

「快、竜谷について、街の人からなにか聞いたか？」

「うーん……皆、同じようなこと言ってたよ。竜族は野蛮で好戦的な種族だって」

「え？ 前に快に聞いたのと全然違うね」

レイヴンが不思議そうに首を傾げた。

「竜族は人との関わりを避けて、滅多に人前に姿を見せないから……」

……

「勝手な思い込みから、いつの間にかそういう風に定着してしまっただろう。自分たちより圧倒的に強い力を持つ竜族を、恐れる気持ちは、まあ、なんとなくわかるけどな……」

竜族は人間との関わりを避け、人間は竜族を恐れている。とても良好な関係とは言い難い。

シャサラザードが言った通り、これは難しい交渉になりそうだ。

「吹雪が止んだら、出発だな。竜谷への道は、どうなってるんだ？」

「正確には、ルナルの街を出て北側——ちょうど森になってるんだけど、森を抜けた先はもう竜谷だよ。ただ、竜族の住む都——ドラゴン・リバティは、雪山を二つ越えた盆地にあるの。常に雪が降ってて、登るの大変だけだ」

快がそう説明した。彼女には本当に助けられてばかりだ。これがレヒトとレイヴンの二人旅であつたなら、ここまで辿り着けたかどうかも定かではない。

「雪山かあ……寒そうだなあ」

レイヴンがため息混じりに言った。危うく凍死しかけたことで、すっかり寒さが苦手になったようだ。

「本気で死ぬかと思っただね」。普段はルナルの街まで雪が降ること

は滅多にないらしいんだけど……最近になって、大雪が降り続くようになってたんだってさ」

「……異常気象、か」

最近、魔物の出現と同様に世界を見舞った異常気象。

レヒト一行が最初にそれを知らされたのは、今から少し前、イーヴァル領でのことだった。イーヴァル領では季節外れの長雨が続く、作物が全てのためにってしまったと、若きイーヴァル領主、ネイザーが沈痛な面持ちで語った。レヒトたちがイーヴァルの大都市に立ち寄り、ネイザーと面会した際にも豪雨が続いており、ネイザーのあまりの悲愴な様子に、見かねたレイヴンがレイに食糧の支援を頼んだほどである。

このような異常気象はヘヴンの各地で起きているらしい。レイの話では、ラグネスの治めるクリスティヌ領——ここに魔界首都ロイゼンハウエルが存在する——は、連日うだるような暑さに見舞われているとのことである。

（ラグネス様、暑いのが苦手だから……）

へばっているに違いない主の姿を思い浮かべて、レヒトは苦笑した。

「こんな吹雪で山越えするなんて、それこそ凍死しちゃうから。しばらくはここに足止めされそうだね」

「竜谷まで行けば、旅も終わりなのにな」

「……そうだな。正確には、竜族の長老様と同盟を結んでから、だな。魔物出現の原因調査は……俺たちの手に負える問題ではなさそうだな。一度、戻って対策を練ることになるだろう」

レイヴンの言葉に同意しつつも、レヒトは一抹の寂しさを感じていた。

「……終わっちゃうんだね、もうすぐ」

レイヴンも同様の思いだったらしい。少し寂しそうに言った。

「レイヴン、あんまり外に出ちゃだめって言われてるから。レヒトと快と一緒にいろんなところ行って、すごく楽しかったなあ」

「……レイヴン」

えへへ、と笑ってみせるレイヴンに、かける言葉が見付からず、レヒトが黙り込めば、代わりに快が明るく言った。

「なあにしんみりしてるの。まだ終わってないでしょ？ それに約束したじゃない。使命を果たしたら、皆で海を見に行こうって」

「あ、そうだった。レヒト、忘れちゃだめじゃん！」

「おい。お前だって忘れてたじゃないか」

「レイヴンはいいの！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ二人を見て、快が柔らかに笑った。

「元氣、出たみたいだね？」

快の存在は、単なる旅の同行者としてではなく、本当に、仲間として自分たちに必要なのだと、レヒトは改めて実感していた。

## 第29話 禁断の恋人たち - 1 -

レヒトは目を覚ました。理由は単純、寒いからだ。

「寒っ……」

寒さで目を覚ますなど、レヒトにとって初めての経験だった。

ロディは一人ずつに客室を与えてくれた。夜も更けてきたため、レヒトたちはそれぞれ与えられた部屋で休んでいたのだが、大して寝もしないうちに起きてしまったようだ。疲れのとれ具合で、あまり寝ていないことがわかる。

レヒトとしては、もう一度眠りにつきたいのだが、目が覚めてしまつと、寒さのせいではなかなか眠れない。

温かい飲み物かなにかを入れてもらうのも手だが、それなりに夜も遅い時間帯、皆すでに寝静まっているようだ。わざわざ人を起こすのも憚られて、それでは暖炉に火を入れようかと、レヒトは起き上がった。

ふと、窓の外に視線をやれば、人目を憚るように去って行く小さな人影が目に入る。

（あれは……）

それは間違いなく、ロディの一人娘で。

（……こんな夜遅く……それも雪の中を、一人で？）

昼間のような吹雪ではなくなっているが、外は未だ雪が舞っている。

（……行ってみるか）

レヒトは壁にかけてあった黒いコートを身に纏うと、窓を開けて飛び降りた。

レヒトがあてがわれた部屋は三階だったが、降り積もった雪がクッションとなり、着地の際にすっかり足を滑らせたレヒトが、体を痛めることはなかった。

身を斬るような凍て付く風の中、少女は歩いて行く。

（このまま行くと……快が言っていた、竜谷へと続く森のはず……）  
少女は積もった雪の中を平然と歩いているが、レヒトのほうはそ  
うもいかない。

慣れない雪道に足を滑らせながらも、少し離れて、レヒトは少女を追った。

少女はレヒトの思った通り、街外れの森へと入って行った。雪と風を避けるように、大樹の幹にもたれかかる。誰かを、待っているように見えた。

声をかけようとしたレヒトの首筋に、冷たいものが当たる。それが短剣だと気付くまでに、大した時は要さなかった。

「愛し合う二人の逢い引きを覗き見とは、ちつとばかり趣味悪くないか？」

すぐ後ろで、低い男の声がする。面白がるような、からかうような響きを含んだ声だった。

「あ、逢い引き！？ お、俺は……！」

「しーっ。人目を忍んでるんだから、大声出してくれんなよ」

男はレヒトの首筋から短剣を離す。振り返ったレヒトは、自分を襲った男の姿を目にした。

少し長めの水色の髪に、淡い緑色の長い布を大雑把に巻き付け、鋭く、しかし穏やかな水色の瞳をした男性だった。どことなく野性的な、精悍な顔立ちだ。年は、三十半ばといったところか。軽装だが、その身には鎧を纏っている。

落ち着いた大人の男性としての印象と、やんちゃな少年のような印象、その双方を受けた。

「悪い……決してそんなつもりじゃなくて」

レヒトが弁解すると、男は楽しそうに笑った。

「本当かあ？」

「うう……あ……」

小さな声が聞こえた。男はからかうような笑みを消し、代わりに穏やかな微笑を浮かべて、少女のほうへ近付き、その細い体を抱き

締めた。

「わかってるよ、ケアル。怪しい奴だと思ったら、とつくに殺つて  
るさ」

額にそつと唇を寄せ、男はレヒトに向き直った。

「ケアルを心配して、わざわざ付いて来てくれたんだろ？　ありが  
とな」

「あ、いや……俺のほうこそ、悪かった。覗くつもりはなかったん  
だ、本当に」

「わかつてるつて。あんた、真面目なんだな。冗談だ、じょーだん」  
男はにんまりと笑った。

「俺様はシャウト＝フリーウってんだ。あんたは？」

「レヒトだ。彼女の家に、厄介になつてゐる旅人さ」

男、シャウトはケアルと呼んだ少女に目を向けた。

「う……ああ……」

「そうか、そうか。竜谷に用事があるのか」

レヒトは驚いた。

「まだ説明してもいないのに……どうして、わかつたんだ？」

「今、ケアルから聞いた」

シャウトは当然とばかりに言った。

「ああ、ケアルがなにを言ったか、わかんねえのか。人間つてのは、  
けつこう不便だな」

シャウトはケアルの髪に指を絡めた。満足そうに、微笑む。

「ケアルはさ、喋れねえの。目も、見えてねえ」

そう言われれば、確かに。彼女の瞳は、焦点を定めることなく、  
虚空を彷徨っている。

「目が見えないのに、よくここまで来れたな」

「人の肉体つてのは五感のどれか一つでも欠如すると、他の機能が  
それを補うように出来てんだぜ？」

シャウトが言った。レヒトにはわからないが、ケアルを見ると、  
そうなのだろうと納得する。レヒトはケアルの後を追って来たが、

彼女が視界の利かぬ人だとは、感じなかった。

「俺様に会うために、この雪道を健気に歩いて来るなんて、大感激だぜ。あゝ……俺様死んでもいい」

シャウトはケアルの細い体をぎゅっと抱き締めた。

（恋人同士と言うよりは、父親と娘……なんてな）

年の離れた恋人たちを眺め、レヒトは失礼なことを考えていた。

「それにしたって、なんでまたこんな森の中で？　それも夜中に」

レヒトが言うと、シャウトは唇の端を歪めた。

「そりゃ昼間、大っぴらに会えないからに決まってるだろ。俺様だつて……ちゃんと会いたいっつの」

「……その、悪い……」

レヒトが謝ると、シャウトはにやりと笑ってレヒトの頭をぐしゃぐしゃと掻き回した。

「あつはは！　あんた、本当に面白い奴だな」

「うわっ！　よせつて！」

その腕から逃れて、乱れた髪をもとに戻す。

「俗に言う禁断の愛ってやつだ。なあ、ケアル？」

「ううっ……あう……」

口付けを交わす二人から、レヒトはなんとなく視線を外した。

「見ててもいいぜ？」

それに気付いたシャウトがにやりと笑う。

（……この破廉恥男め）

レヒトは内心毒付いた。

「あんたは愛する人、いないのか？」

突拍子もないシャウトの言葉。レヒトは思わず足を滑らせた。

「な、なにを突然……！」

「その様子からすつといねえな？　恋はいいぞ？」

「煩いっ。別にいないわけじゃ……！」

そこまで言われ、はつとした。が、時すでに遅し。

「なあんだ、立派にいるんじゃないかねえの。どんな娘だよ。な、教える

って」

「あ、あんたに言う必要はないだろ」

「いいじゃねえの。教えるよ」

シャウトはバシバシとレヒトの背を叩いた。とんでもない馬鹿力だ。

「く、苦しいっ……」

その様子を見て——実際には見えていないのだろうが、ケアルがくすくすと笑った。

「ん？ 面白かったか？ そうか、ケアルが喜んでくれば、俺様最高に幸せだ」

シャウトはケアルに優しく笑いかけた。

雪の中、無邪気に笑いあう二人が、とても微笑ましい。

「……残念だが、そろそろタイムリミットだな」

シャウトは本当に残念そうに、ケアルから体を離れた。

ほんの数十分間の、二人の逢引き。

「レヒト、ケアルを連れて帰ってやってくれよ。大丈夫だとは思いますが、やっぱり可愛い恋人を一人で帰すのは不安だな」

「ああ、わかった」

レヒトは頷く。

「……手は出すなよ？」

「心配するな、あんたじゃないんだ」

「なんだよう」

くす、とケアルが小さく笑ったのがわかった。

「……また逢おうな、ケアル」

約束の口付けを交わして、シャウトは雪に覆われた森の中、立ち去って行った。

シャウトがどこに帰るのか、レヒトにはわからない。だが、なんとなく、彼とはまた会えそうな気がした。

「それじゃあ……俺たちも戻ろうか、ケアルちゃん」

レヒトが声をかけると、ケアルは小さく頷いた。

「う……ああ……」

「なんだい？」

なにか、伝えたいことがあっても。レヒトには、シャウトのように、彼女の意思を汲み取ることができない。

それを、レヒトは齒がゆく思った。

「……ごめんね」

レヒトが謝罪の言葉を口にする、ケアルは首を横に振って微笑んだ。

（今度シャウトに会ったら、ケアルちゃんとの話し方を教えてもらおう）

レヒトはケアルとともに、屋敷へ向かい雪道を歩き出した。

そんな二人に気付かれぬように。大きな影が、小さくなる二人の後ろ姿を、そっと見守っていた。

### 第30話 禁断の恋人たち - 2 -

一行がルナルを訪れてから、数日後の夜のこと。

レヒトはなんとなく寝付けず、暖炉の前に座ってぼんやりとしていた。

ルナルの街は、相変わらずの吹雪に晒されている。街全体が、雪に埋もれてしまいそうだった。

レヒトたちも、ここ数日は、雪を街の外に掻き出す住人の手伝いをして過ごしていた。なにもせずに居座り続けることを心苦しく感じていたこともあるのだが、なにしろ暇なのだ。凄まじい吹雪のため、竜谷へ向かうこともできず、なにもすることがない。

レヒトは動いていないと死にそうになるタイプではないし、なにもせずにぼんやりと過ごすのも、別段苦にはならないのだが、さすがにこうも長く続くと飽きてくる。そして更に行動派な同行者二人が、これに耐えられるはずもなく。暇よりはマシだと、雪掻きに参加することになったわけである。

「……もうこんな時間か」

暖炉の上に置かれていた時計に視線をやって、レヒトは呟いた。

（ケアルちゃんは、今日もシャウトのところか？）

人々が寝静まった夜中に、ケアルがそっと屋敷を抜け出すところを、レヒトは何度か目撃した。だが、付いて行くようなことはしなかった。シャウトに会って話をしたいという思いはあったが、恋人たちが二人で過ごせる少ない時間を、邪魔したくはなかったのだ。

シャウトは『禁断の愛』などと言っていたが、なぜ二人が人目を忍んで逢い引きを繰り返すのかは、レヒトにはわからないし、詮索しようなどという無粋な気も起きなかった。

コツン、と窓が叩かれたような気がした。気のせいだろうと思っただが、間髪入れずにもう一度音がした。

不思議に思っただけで、そちらに目をやれば。

「シャウト!?」

思わず立ち上がったて声をあげていた。窓の外のシャウトが、静かに、と口許に指をやる。

レヒトは窓を開けた。冷たい風が部屋に吹き込む。

「よっ。元気か?」

「元気かって……ここは三階だぞ。どうやって……」

そこで、レヒトは気付いた。シャウトの背中にある、人ならざる者の証。黄金色の竜の翼。

それが、二人がこっそりと逢い引きを繰り返す理由。許されざる『禁断の愛』——竜族と、人間との恋だったからだ。

「……早いとこ入れよ。俺のほうが風邪引く」

とりあえず、レヒトはシャウトを部屋に入れ、外に人がいないのを確認すると、窓と部屋の扉の鍵を閉めた。

「急に邪魔して悪かったな」

シャウトが翼を消しながら言った。天界人の翼と違い、出し入れは自在にできるようだ。

「どうしたんだよ。今日はケアルちゃんと会ってなかったのか」

「そう! 今日はケアルが来なくて。俺様寂しすぎ」

シャウトがガツクリと肩を落として見せた。その弾みで、彼の頭や肩に積もっていた雪が床に落ちた。

「雪が積もってる……って、あんた……ひょっとしてケアルちゃんがああ森に来るまで、毎日ずっと待ってるのか? 雪の中を」

レヒトが言えば、シャウトは当然とばかりに頷いた。

「ケアルが危険を冒して、屋敷を抜け出して来るんだぜ? 惚れた女がそこまでしてくれんだ。俺様だって、な」

にいつと八重歯を見せて、シャウトは笑った。

「馬鹿なんだが情熱的なんだかわからないな……。俺は客人の立場だし、こんな時間だから茶も出してやれない」

「ああ、茶をもらうために来たわけじゃねえから」

シャウトはドカッと寝台に腰を降ろし、パサパサと服に着いた雪

を落としている。

「寒くないのか？」

シャウトは薄着だ。胸と肩とを覆う皮製の鎧の下は半袖だし、腰から下は鎧も身につけてはいない。ズボンの上から、頭に巻かれた布と同じだろう、淡い緑色の大きな布を巻き付けているだけだ。

「竜族と精霊族は、精霊を行使して防御壁にできる。人間が纏うような、物理的な防御はあまり必要ない。その対象は寒さだったり、攻撃だったり様々だ」

魔法や精霊などといったことに関してはほとんど無知なレヒトに、シャウトが説明した。

なるほど、とレヒトは納得する。快が防具を纏わないことや、この寒さがレヒトやレイヴンほど応えていないのはそのためらしい。

「それに、俺様たちが住むドラゴン・リバティは雪と氷に閉ざされた極寒の大地だ。この程度の寒さなんか慣れっこだったの」

「……そういえば、快からそう聞いたな」

レヒトが呟くと、シャウトの瞳がキラリと光った。

「快……って精霊人の名前だな。レヒトの愛する人は精霊人なのか」

「あ、あのなっ！　なんですぐにそういう……！」

シャウトはにやりと笑って口許に指を当てた。静かにしろ、と言っているのだ。

「ぐっ……そんなことより、なにしに来たんだ。まさか本気で寂しいから、とか言うんじゃないだろうな」

「そうだったったら？」

「叩き出す」

即答したレヒトに、シャウトは吹き出した。

「安心しろよ。そうじゃねえから。ケアルに聞いたんだ。竜谷に行つて、人間と竜族に同盟を結ぶつもりだってな。間違いは？」

「ない。俺たちは天界最高責任者の指示で、すでに精霊人、魔精霊と、人間との間に同盟を実現させた。残るは竜族だけなんだ」

その言葉を聞くと、シャウトは寝台に寝そべった。

「……人間族と竜族の間に同盟結んだら、隠れずにすむな」

「協力してくれるってことか？」

竜族の長老は気難しいと聞いている。加えて、竜族は人間と関わろうとしない種族だ。シャウトの協力が得られれば、事態は一気に進展する気がした。

「俺様は竜族の変わり者、だからな。俺様がなにか言ったところで、他の連中が納得するかどうかは謎だ」

「けど、あんたは協力してくれる気があるから、わざわざ危険を冒してまで俺のところに来たんだろう？」

それは確信に近いものだった。シャウトはケアルを愛している。他に言葉はいらないほどに。だから、きつと同盟を望んでいるに違いないのだ。

「……人間は不毛な争いばかりを繰り返す、愚かな種族だと……幼い頃から、そう聞かされて俺様は育った」

シャウトが、静かに語る。

「だが、そんな俺様が生まれて初めて出会った人間は……あの雪のようにまっさらな、汚れない心を持った少女だった」

寝台から起き上がり、窓の外に降り積もる雪を眺めてそう言った。「俺様は恋をしたのさ。ケアルのためなんだからできる。竜族の仲間を、世界全部を敵にしたっていい。ケアルがいれば、それでいい」

シャウトは、黙って聞いていたレヒトに視線を向けた。

「だから、協力してやってもいいぜ？　俺様とケアルのハッピーな未来のためにな」

唇の端を持ち上げて、シャウトは笑った。

「凄い覚悟だな。ケアルちゃんだけが特別で、他の人間が本当にどうしようもない奴らだったらどうするんだ」

「それはありえない」

シャウトは首を横に振った。

「なんで、そう言い切れる？」

あまりにはつきり言い切るので、不思議に思っただけ聞き返せば。

「そりゃあ、あんたと会ったからだ」

「は？」

予期していなかった答えに、レヒトは素っ頓興な声をあげた。

「だから、あんたに会ったからだっつもの」

「……なんでまた。というかそれは全然答えになってない」

眉間に皺を寄せるレヒトを見て、シャウトが笑う。

「あんたは真面目だし、正直だし、それに優しい。ケアルがそれを俺様に伝えた。俺様もそう思ってる。そんなあんたの仲間がどうしようもない嫌な奴なはずはないし、あんたと同じ人間も信じるに足る存在だと俺様は確信した。他に理由が必要か？」

「……単純だな」

レヒトは苦笑した。

たったそれだけ、自分という人間を見て、その向こうに人間全てを重ねてしまうシャウトに。

きっと彼も、雪のような心の持ち主。彼が愛した人と同じように、まっさらな。

「……ありがとう」

「気にすんな。吹雪が収まったら、竜谷に来るだろう？ その時はきっと凍えそうになってるだろうから、熱い茶を用意して待ってやる」

「あ、それと茶菓子もな。俺の仲間は甘い菓子が好きなんだ」

そう注文を付ければ、シャウトは任せておけ、と胸を叩いた。

「じゃあ、またな」

黄金色の翼を羽ばたかせ、シャウトは雪が降り続く闇の向こうへと消えて行った。

窓から吹き込む風は冷たかったけれど、上気した頬には、その冷たさが心地よかった。嫌いになりかけた雪。けれど、彼のおかげで、どうやら嫌いにならずにすみそうだ。

### 第31話 愛と狂気の狭間で - 1 -

ドラゴン・リバティへと向かって、街の遙か上空を飛んでいたシヤウトは、見慣れた愛する人の姿を見付け、急降下した。ルナルの街の中央広場で、愛するその人は身を屈め、隠れるように泣いていた。

「ケアル……！」

近付き、その尋常でない様子に息を飲む。

愛しい人はこの雪の中だというのに、裸足で服は裂け、体中、切り傷と痣だらけだった。

逃げてきたのだと、シヤウトは直感的にそう思った。

その体を抱き寄せれば、一瞬身をこわばらせるが、それが愛しい男の腕だとわかると、安堵したようだ。その瞳から、大粒の涙が溢れ落ちた。

「……なにがあった？」

そう問いかければ、ケアルは力なく首を横に振った。

ケアルの身に、なにが起こったのかなど、聞かずともわかる。今までにも、幾度となく同じことがあった。だが、ケアルが自ら逃げ出してくるなど、初めてのことだった。

彼女の体中にある痛々しい傷跡。それは、長い年月をかけて、たった一人の人間の手によって、刻まれたものだ。

ケアルとシヤウトが出会ったのは、五年ほど前のこと。街をふらふらしていたシヤウトが、屋敷の前を通りかかった時、開け放たれた二階の窓からふわりと舞い落ちた、ケアルのリボンを拾ったのが、二人の出会い。

シヤウトは外から、ケアルは二階の窓から。二人は少しだけ話をした。

ドラゴン・リバティへと帰っても、シヤウトは街で出会った少女のことが忘れられなかった。それから、暇を見付けては街まで通い、

少し離れた会話を楽しんだ。シャウトは彼女が見せる、無邪気な笑顔が好きだった。その想いが愛に変わるまでに、大した時はかからず——しかし、それが後に悲劇を呼び起こすこととなる。

無数の足音が近付いて来ることに、シャウトは気付いた。ケアルを腕に抱いて立ち上がり、やって来るであろう人物を待ち構える。

闇から現れたのは予想通りの人物。そしてその後続く、剣や弓矢を構えた街の住人たち。

先頭に立った男、ロディ＝マインドは、ケアルを抱き締めたシャウトを見て怪訝な顔をした。

「お前……？　そうか、お前だな。お前が私から娘を奪ったのだな……！　許さんぞ……殺してくれる！」

暗い、狂気を宿した瞳が、シャウトを映した。

「その愛しい娘を……今、テメエは殺そうとしてるじゃねえか」

ロディの手に握られた弓矢を見て、シャウトは忌々しげに吐き捨てた。

ロディは、親に恵まれなかった子供だった。早くに父親を亡くし、母親に捨てられ、孤独な少年時代を過ごした。

そんなロディを救ったのが妻の存在だった。娘も生まれ、幸せな家庭を築いていたロディ。だが、その齒車は、最愛の妻を亡くして以来、少しずつ狂っていく。

病で妻を亡くしたロディは、ことさらケアルを可愛がるようになった。常に側に置き、ケアルの姿が見えなくなると騒ぎ、ついにはケアルを屋敷に閉じ込めるようになった。

その深すぎる愛情——それは、幼かったケアルの一言によって、狂気へと変貌したのだった。

『お父さん、私ね、好きな人ができたの！』

愛情が、狂気に変わった瞬間だった。

光を奪ったのは、その瞳が、自分以外の男を映すことがないように。言葉を奪ったのは、その唇が、自分以外の男に愛を囁くことが

ないように。体中に傷を付け、自分だけのものだと言い聞かせた。  
日に日に増える傷跡。シャウトが何度逃げるように諭しても、ケアルは頑として首を縦には振らなかった。

狂ってしまった父親を、これ以上傷付けないように。父親がそう望むなら、側にいようと。

「ケアルを殺す……？ 違う。違う。それは違う」

ロデイが微笑んで言った。狂気を宿して。

「私はケアルを連れ戻しに来たんだ。さあ、おいでケアル。一緒に帰ろう」

その腕を、伸ばす。

「安心しなさい。化け物は私が始末してあげるから。ほら、街の皆も来てくれたよ。怖がらなくていい」

ケアルがすぐるようにシャウトの腕を握り締めた。弱々しい力で。

「……テメエに、ケアルは渡さねえ」

声が冷たくなるのを、シャウトは感じていた。

もう限界だ。これ以上は、きつと耐えられない。腕が、震える。  
瞳に、憎悪の炎がともる。

気を緩めたら、目の前の男を八つ裂きにしてしまいかもしれない。  
恵まれなかった過去など、知ったことか。どんな過去があつたにせよ、それがケアルを傷付けていい理由になどなりはしない。

「私から……私からケアルを奪うのか！ 殺せ！ 殺してしまえ！」  
ロデイが叫んだ。

「し、しかし……相手は人間です！ 化け物では……」

言葉は、最後まで続かなかった。ロデイの矢が、言いかけた青年の胸を貫いていた。

「化け物だよ。くくっ……ははは……」

笑い声が、闇に響く。

「……狂ってる」

そう声に出したのは、誰だったか。

住人たちの手にした矢が、一斉に向けられた。

シャウトは抱いていたケアルから身を離れた。視界の利かぬケアルは、なにが起きたのか、理解できない。

微かな風を切る音とともに、矢が放たれた。肉を貫く嫌な感覚。ケアルの前に立ちはだかったシャウトは、その身を襲った感覚に少しだけ顔をしかめた。

腕に、肩に、足に。見事に急所を外して射られた矢。シャウトは苦笑した。

「……うあ……あ……！」

充滿する血の匂いで、ようやく事態を理解したケアルが声をあげた。背に触れた彼女の指が、震えているのにシャウトは気付いた。

「ケアル……なぜ、その男を庇う。そうか、そうなのだな……。私からお前を奪おうとした化け物は、その男なのだな……。！」

「人のことを化け物、化け物ってなあ……。テメエに言われたくはねえつつの」

シャウトは眉根を寄せた。

「黙れ！ 化け物め……。私の娘を汚した、竜の化け物め……。！」  
「なっ……」

シャウトは言葉を失った。周りの住人たちも、驚愕に目を見開いている。

ロディが適当に言っているようには見えない。彼は確信している。シャウトが竜族であると。

シャウトの正体を知っているのはケアルと、あの不思議な青年――レヒトだけである。

（まさか……）

ケアルであるはずがない。となると、やはりレヒトなのだろうか。（違う……違う、絶対に）

彼ではない。レヒトと話したあの後、シャウトはすぐに傷付いたケアルを見付けたのだ。彼が、ロディに言う暇などなかったはずだし、それよりも。

（あいつは、そんなことする奴じゃない。そんなこと、できる奴じゃない）

確証などありはしない。だがシャウトは信じていた。初めてできた、友人を。

しかし、そうになると……。

竜、という言葉聞いて、街の住人たちの瞳に恐怖の色が浮かんだ。

「あ……まあ、その、なんだ。確かに俺様は竜族だ。けど、別にあんたらをとって食うってわけじゃ……」

横手から放たれた一本の矢を、シャウトは手で掴んだ。

そのままそちらへ視線をやれば、弓を構え、怯えたように震える青年の姿。

「……話し合いにもなりやしないぜ」

「当然だ。竜に言葉など不要！ ケアル、もう大丈夫だ。化け物は皆が殺してくれる。お前の腹にいる化け物の赤子も、私が始末してあげよう……」

ロディが優しく言葉を紡ぐ。

その言葉に、シャウトは二度目の衝撃を受けた。

それは、シャウトも知らなかった事実。

「なんだって、そんなこと……ああ、そういえば……あんだ、医者なんだっけ。俺様としたことが、忘れてたぜ」

ロディはケアルが身籠っていることに気付いたのだろう。そして、それが竜族の子であることも。

怒り狂ったであろうロディは、おそらく赤子を殺そうとしたのだ。だから、ケアルは逃げて来たのだろう。愛する男の子供を守るために、必死で。

「ケアルはそれを嫌がって、こうして逃げて来たんじゃないか。それくらい、わかってやれよ。あんた父親だろう！」

「黙れ、化け物め！ 許さん……！ 許さん！」

ロディが射た矢を、シャウトは叩き落とした。積もった雪に、突

き刺さる。

「殺せ！ 竜を殺せえ！」

その声に弾かれて、二人を取り囲むようにして様子を窺っていた街の住人たちも、一斉に矢を放った。

「ケアルまで殺す気か！」

逃げ場はない。シャウトはとつさに、本来の姿へとその体を変化させた。人の数倍はあろう、黄金色の巨大な竜。ケアルを庇うように、その大きな翼で包み込む。

「射て！ 射て！ 化け物を殺せえっ！」

絶え間なく射たれる矢。突き動かすのは、狂気。従うは、恐怖。矢などでは、竜の体に傷を付けることはできない。だが、胸が痛んだ。人々の恐怖に染まった瞳を見て。

（……人間と竜族がわかりあえるなんてこと、ありはしないってわかってたはずだろ？）

また、胸が痛む。傷を負った肩や足よりも。無傷の胸が、痛い。逃げることも、反撃を加えることもせずに——できずに。シャウトはただ、じっと耐えた。

どれほど、時がたったのか。それは一瞬のようにも、永遠に近しくも感じられた。

一筋の、眩い光が天を射した。突然のことに、誰もが一瞬、天を見上げ——。

「なにをしているんですか！」

響いた声に、振り返る。

黒いコートに身を包んだ、三人の若者の姿があった。その中央にいるのは——。

（……レヒト）

一瞬、目があった。今のうちに逃げろ、と言われた気がした。

シャウトは咆哮をあげると、ケアルを抱えて飛び立つ。凄まじい速度で、シャウトは闇の中を飛び続けた。

（くそっ……）

ドラゴン・リバティへと続く山道に、シャウトは降り立った。その姿が、人のものへと変わる。

「もう……飛ぶだけの力もねえか……あゝあ、俺様カッコ悪すぎ」  
自嘲ぎみに呟く。

「ごめんな、ケアル。勝手に連れて来たりして。けど……あのまま、ケアルを残してはこれなかった」

そう言ったシャウトを見上げて、ケアルは微笑んだ。

「……ありがとな。ここからは歩きになっちまう。少しキツイけど……頑張ろう」

ケアルの手を引き、ゆっくりと歩き出す。傷付いた体は一步進む度に悲鳴をあげたが、無視を決め込む。

（あいつ……きつと追ってくるだろうな）

山道を行きながら、シャウトは自分たちを逃がしてくれた、あの不思議な青年を思い出していた。

人間と竜の間に同盟を結ぶために、協力すると約束したのに、その自分が騒ぎを起こしてしまった。これで交渉は決裂だろう。

レヒトはきつと追ってくる。彼にも退けない理由があるのだから。その結果、刃を向けあうことになったら、彼は容赦なく自分を斬るだろう。

それも悪くないと、シャウトは思った。

真っ白な雪が、ぽたぽたと落ちた血を吸って紅く染まった。まるで、彼を誘う道標のように。

### 第32話 愛と狂気の狭間で - 2 -

街の中央広場で、レヒトは興奮ぎみの住人たちと向かいあっていた。

あの後、眠ろうかと考えていたレヒトは、ふと、街のただならぬ様子に気付いた。闇に浮かぶ松明の明かりや、人々の声。こんな真夜中になにが起きているのかと部屋を出れば、レヒトと同じように気になったのか、起きてきた快と会った。

廊下で彼女と話をしていると、レイヴンが階段を駆け上がって来たのだ。

レイヴンの話を聞き、レヒトは体から血の気が引くを感じた。偶然起きていたレイヴンは、レヒトがシャウトと話している間に、屋敷内の異変に気付いたという。そして階下に降り、レイヴンは事の一部始終を目撃したというわけなのだ。

ロディの狂気とケアルの傷の理由。竜族の血を引く、腹の赤子。状況を理解した三人はすぐさま屋敷を飛び出した。そして三人が中央広場に辿り着いた時には、事は最悪の状態だった。

話し合いの余地などすでなく——レヒトは仕方なしに、人々の注意を反らして、とにかくシャウトを逃がすことにした。

天を射したあの一条の光は、レイヴンが放ったものだったのだ。

シャウトを逃がすことには成功したが、街の住人たちは未だ恐怖と、ある種の興奮とに包まれていた。

「街に……竜の化け物が現れるなんて……」

化け物、という言葉に、僅かだが快の眉が跳ねた。レヒトは視線で、激昂しないように、と諭す。

「殺してしまわなくて、よかったのか？ あの化け物……逃がしてしまったら、仲間が押し寄せてくるんじゃないあ……」

誰かが発した一言で、住人たちが騒ぎ出した。

「……少し落ち着いてください」

無駄だろうとは思ったが、一応声をかけてみる。

「これが落ちていていられるか！」

そうだ、と同意する声上がる。

「化け物は怪我してる。今なら、まだそんなに遠くには行っていないはずだ。追い掛けて、殺してしまえばいい」

「ちよつと待つてよ！」

レヒトよりも早く、レイヴンが声をあげた。一斉に視線が集まる。

「なんだ、あんたたちは……化け物を庇うつてのか」

敵意の籠った、その眼差し。快は慣れたような様子だが、レイヴンはたじろいでいた。

レヒトは少し悲しくなった。これほどまでに、深い溝が存在するのか。決して諦めないと、誓ったばかりなのに。

（……俺が気後れしてどうするんだ。この状況を打開すればいい。諦めるな！）

レヒトは自分自身に言い聞かせ、気持ちを支えた。

「……そうではありません。貴方がたでは、竜を倒すことはできないでしょう」

「なんだと？」

「竜族は、ヘヴンで最も強い力を持つ種族です。手負いとはいえ、容易くは倒せないでしょう。下手に攻撃しては、貴方がたのほうが危険に晒されます」

人々が押し黙った。必要以上に竜を恐れる彼らに、脅しは効果をあげたようだ。

「じゃあ、このまま放っておけというの？ 危険な化け物を？」

そう言ったのは、青年に肩を抱かれた若い女性だった。腹部が膨らんでいる。身籠っているのだろう。

その姿に、レヒトは無邪気に笑っていた恋人たちの姿を思い出していた。

「……どうしても、始末しないと気がすみませんか」

「当たり前だわ。前々から、竜族なんていう化け物が近くににいるの

は怖かったのよ」

「それなら、いつそ竜族なんて皆殺しにしてしまえばいいんだ」

「馬鹿なことを……！」

快が呟いた。さすがに、今の言葉は腹に据えかねたようである。

それは、レヒトも同じこと。

「……彼女の言う通りです」

レヒトが快の言葉を継ぎ、住人たちを見渡して続けた。

「竜族の力は強いです。先程の竜族は、手負いでしたから攻撃を加えては来ませんでした……彼らの都まで行って、大勢の竜族を相手にするなど……生きて帰れる保証はありませんよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

「もう、いつそ死ぬ覚悟で行けばいい！」

人間とは、こうも――。

レヒトは一瞬、絶望に近い感情を抱いた。

その時、ドクンと心臓が大きく脈打った。突如、視界が闇に閉ざされる。

『不可能なのだ』

頭の奥で、誰かの声がした。それと同時に、重い頭痛が身を襲う。……人間は愚かだ。人間に変化を求めること自体が、間違っている』

（……間違つて、いる？）

疲れきつたような声だと、レヒトは思った。以前、これと同じ声を聞いた。あれはやはり、幻聴などではなかったのだ。

『愚かな人間は、再び争いを繰り返すだろう。争いは神を傷つけ、世界を滅びへと向かわせる。争いをなくさぬ限り、世界は救われることはない』

（あんたは誰だ？ なぜ、俺に語りかける？）

頭痛が酷くなり、レヒトはその場に膝を付いた。

『お前は私であり、私はお前。同一にして別個の存在』

（なん……だつて？）

吐気が込みあげる。その言葉を拒否するように。

『私は光、お前は影。私の弱き心が生み出した、愚かな存在』

(よせ……やめろ……！)

口を吐いて出た言葉は、震えた。レヒトの頭の中を、あの不思議な夢が、走馬灯のように駆け巡った。

(くっ……！)

レヒトの目の前に、一人の男——あの夢に見る、白髪の若い男が現れた。

(あんたは……)

『もう一人の私たるお前に問おう。世界を救うために、お前はどうすればいいと思う？』

レヒトが言葉を紡ぐ前に、男の姿が掻き消えた。

「レヒト！」

肩を掴まれた。意識が戻り、視界が開ける。

「……快」

「大丈夫？ 様子がおかしかったけど……」

君のほうで蒼白だ、と。レヒトは苦笑して言った。

「……大丈夫」

立ち上がり、街の住人たちに向き直る。

「俺が、行きましょう」

「できるのかね……君に」

今まで、ずっと竜谷の方向に視線をやって、微動だにしなかった男が口を開いた。

「……ロディさん」

「君は竜族と交渉するために来たと言っていたではないか。竜族と人間との間に同盟を結ぶために。そんな君に、竜を倒せるとは思えないがね」

「……確かに、俺たちは竜族と同盟の交渉をするために、ここへ来ました。今、ヘヴンには危機が迫っています。その危機を乗り越えるために」

魔物の出現や異常気象を、その身をもって体験している人々は、レヒトの言葉を黙って聞いていた。

少しは、落ち着きを取り戻してくれたのか——と、レヒトは少しばかり安堵した。

「人間には、魔物に対抗する術がありません。強大な力を持つ精霊族や竜族とともに、ヘヴンの危機に立ち向かっていきたいと——」

「精霊族に竜族か……ふん、あんな奴ら……魔物と同じじゃないか！」

レヒトの言葉を遮って、一人の男性が声を張り上げた。

「どこが違うんだ！？ 妙な技を使って……魔物とどこが違うって言うんだ！ 俺たちを襲わない保証が、どこにあるって言うんだよ！」

誰も、なにも答えない。男性は周囲を見渡して、言葉を続けた。

「大方、俺たちを苦しめてる魔物だって、奴らが作り出したのかもしれないじゃないか！」

その言葉を皮切りに、今まで黙っていた住人たちが、再び一斉に騒ぎ始めた。

「そうだ、そうに違いない。精霊族に竜族なんて……わけのわからない連中がいないほうが、世界は平和になるんだ！」

「皆殺しだ！」

口々にそう言って、騒ぐ人々。静かに雪の降る小さな街に、狂気じみた声が響き渡る。

「くそっ……どうすればいい……？」

誤解だ、いいがかりだと叫んでみたところで、彼らに届きはしないだろう。

彼らは、もはや自分たちがなにを言っているのか、なにを行おうとしているのかすら、わかっていない。ただ、突き動かされていた。人の心の奥に潜む、暗い感情に。

快やレイヴンがなんとか場を静めようと躍起になっていたが、周囲の見えていない人々に、効果はないようだ。

喧騒に包まれ、レヒトは、ただ静かに、先程の声を思い出していた。

「……わかりました」

小さな声。だが、その声は。不思議なことに、騒いでいた人々、全員に届いた。

「そうまで言うのなら……」

レヒトは腰に提げたセイクリッド・ティアを抜き放った。冷たい輝きを放つ刀身を、舞い落ちる雪が撫でてゆく。その様子を静かに見つめるレヒトの瞳に、光は——ない。何人が、気付いただろうか。言葉では表すことのできない、その違和感に。

まるで——彼であって、彼ではないかのような。そんな違和感。

「……俺が、竜族を葬って見せましょう。それで、争いが収まるなら。世界が平和になるのなら」

レヒトは静かにそう告げ、剣を鞘に戻した。

「それで、構いませんか？」

「あ、ああ……」

レヒトに圧されたように、住人たちが頷いた。

「……それでは、私たちも行くのか。竜族の最期を見届けに」

ロディが言った。まるで物見遊山にでも行くように。狂気を宿した瞳が、レヒトに向けられる。

「ええ……どうぞ」

レヒトがそう答えれば、ロディは満足げに笑った。街の住人たちも、ついて行くと口々に言った。

「……レヒト……」

近付いて来た快が、そっとレヒトに声をかけた。その瞳が、揺れている。不安げに。悲しげに。

「二人に頼みがある。……ここから先は、俺に任せてもらいたい」  
たとえ、なにがあっても……そう、レヒトは呟いた。竜谷の方へと、その視線を向けて。

「……信じてるからね、レヒト」

そう言って微笑む二人に、レヒトは応えることができなかった。

### 第33話 退けない理由

ドラゴン・リバティへと続く雪に覆われた山を、レヒト一行とルナルの住人たちは登っていた。

先程まで、飽くことなく降り続いていた大雪は止み、今は風もまったく吹いていない。

静かな——静か過ぎる山に、人々の微かな息遣いが、嫌に大きく響いた。

道に行く途中、真新しい血の跡を見付けた。誰のものかなど、考えるまでもない。

普段、人々が頻繁に行き交うことがないためか、道らしい道などはない。点々と続く血の跡を辿り、一行は雪山を進んでいた。

頂上に近付いて来たのか、急斜面に手を付き、這うようにして登ってゆく。

やはりその先は頂上、少し開けた空間が広がっていた。

そこに立つ、二人の人影。住人たちの手にしたランプと松明の仄暗い明かりが、その姿を照らし出す。

そのうちの一人——竜族の青年シャウト・フリユウが、一行の姿を捉えて唇の端を吊り上げた。

「よお。やっぱり追って来たんだな……って、おいおい、ずいぶん多いなあ」

レヒトが追って来ることは予想済みだったようだが、住人たちまでおまけについてくるとは思わなかったらしい。少しばかり驚いたようだ。

「ケアル……！ 無事、だったのだな！」

住人たちを押し退けて、ロディが前に歩み出た。ケアルがどんな表情をしているのか、レヒトには読み取れなかったが——彼女が、シャウトの服を強く掴んだのが見えた。

更に近付こうとするロディを、レヒトは手で制す。

「……それ以上は」

レヒトは前もって、決して手は出さないようにと条件を出している。言つては悪いが、街の住人が束になったところでシャウトに敵うはずもないし、下手に手を出されても邪魔なだけである。

「はあ、なるほど。見物人つてわけか。俺様、大人気じゃね？」

ふざけた口調で言い、シャウトはレヒトに視線を向けた。その瞳が、真剣な光を宿す。

「……悪かった。協力するなんて言っておいて、その俺様が騒ぎ起こしちゃった。あんたまで、巻き込みしまったしさ」

「いや……構わないさ、そんなことは」

「あんたは優しい男だな、レヒト。あんたのことを思うと、おとなしく捕まってやりたいとこなんだが……」

シャウトは、一度そこで言葉を切った。そして、自身の隣に立つ人に視線を送り、ふつと微笑む。

「……退けない理由があるんだよ。俺様には」

愛する人のために。彼女のためなら、世界全てを敵に回せる——シャウトはそう言い切った。

「……羨ましいな、そういうの」

小さくそう呟けば、シャウトは意外そうな顔をした。

「あんたにも、あるだろう？ 退けない理由ってやつが」

「退けない理由……か」

今までのレヒトであれば、即答していたはずだ。退けない理由がある、と。ヘヴンに生きる人々のため、そしてヘヴンのため、退くことはできない、と。

この旅を始めるきっかけは、実に些細なことだった。

偶然にも——実際には、レヒトの主であるラグネスが裏で糸を引いていたわけだが——レイに目をつけられ、変わり者と有名なレイヴン・カトレー又教授を説得し、表舞台に引っ張り出すという役目を押し付けられた。そしてなぜかそのまま同行者に命じられ、各地を飛び回った。

最初は、使命だからと始めた旅。それは、やがてレヒトにとって大切ななにかへと変わり始めていた。

力を持たぬ人々のため、ヘヴンのため。この世界に、真の平和をもたらすために。

（……平和……）

夢に見るあの男に問いかけられた最後の言葉が、レヒトの頭の中をぐるぐると回っていた。

『世界を救うために、お前はどうかすればいいと思う？』

簡単だ。自分たちはそのために、今まで旅をしてきたのだから。異種族との間に同盟を結び、ともにヘヴンの危機に立ち向かう。

それが答え。そのはずなのに。

（本当に、そうなのか？）

ルナルの住人たちは言った。異なる種族など存在しないほうが、争いなどは起きないのだ、と。殺してしまえ、と。

その言葉の、なんと傲慢で、愚かなことが。

わかっているのだろうか。異種族と同盟を結ぶ、その理由がなんなのか。

力を持たぬ民——人間を守って欲しいと、人間を守るためにその力を貸して欲しいと、頼むためだというのに。

（……わかりあえることは、ないのか……？）

人々の心ないその言葉は、レヒトの心に暗い影を落としていた。

『不可能なのだ』

あの、疲れきった声を思い出す。

『人間に変化を求めること自体が、間違っている』

体が、心が、溶けてゆくような感覚に襲われた。

「おい……レヒト？」

答えないレヒトを不思議に思ったのか、シャウトが声をかけてくる。

真っ直ぐなその眼差しを、少し眩しく感じながら、レヒトは少し悲しげに苦笑した。

「……俺には、シャウトほどかつこいい理由は……」  
「あるだろ」

思い付かないよ。レヒトがそう続ける前に、シャウトが言った。  
「……あるじゃねえか。立派な理由が。異種族との同盟実現。お前に託された希望だろうが」

「……希望」

それは、思いもよらぬ言葉だった。

「知らないだろうから言っというてやるよ。魔精霊が、魔界各地に小規模ながら軍を派遣した。精霊人も、義勇軍を組織して魔界に送ったらしい」

お前の功績じゃねえか、と笑われる。

「……そんなことが……」

「残るは、竜族だけだろう。俺様とケアル、そして俺様とお前、それから……お前と、後ろにいるお嬢ちゃんがわかりあえたように。きつと、わかりあえる。違うか？」

シャウトは、小声でそう言った。レヒトは快のほうへ視線を移す。彼女には、今の言葉は聞こえなかったはずだ。だが、声には出さず、唇がそつと言葉を紡いだ。

『信じてるからね』

レヒトの瞳に、再び強い光が宿った。

「……ああ、そうだな。退けない理由が、俺にもある」

レヒトは腰に提げたセイクリッド・ティアを抜いた。美しく煌めく剣の刀身が、向かいあつて立つ男の姿を映し込む。

「そうそう。その調子」

シャウトは隣に立つケアルを、後ろへと下がらせた。ルナルの住人たちも、数歩後ろへと下がる。

この場所は頂上であるからか、少し開けているため、二人が戦うスペース程度はなんとか確保できそうだ。だが、雪が降り積もっているために足場は最悪である。それに加え、周囲は断崖絶壁。間違つて落ちてもすれば、助かる保証はどこにもない。

背に負っていた巨大な戦斧を、シャウトは構えた。身の丈ほどもあるそれを、シャウトは片手で軽々と振り回す。手負いだということとを、全く感じさせない。

「……お互いの背負うものを賭けて——真剣勝負といこうぜ」

この戦いは、きつと死闘になる。

レヒトはそう感じていた。

シャウトには、退けない理由がある。レヒトにも、退けない理由がある。

対峙する二人の間を、一陣の風が吹き抜けてゆく。

そして、闇を裂き、太陽が姿を見せ始めた。雪がその光を反射して、美しい、幻想的な風景を作り出していた。

「よく拝んどけよ。これが、最後の日の出になるかもしれないぜ？」

「それはこっちの台詞だ」

にやりと笑って言うシャウトに、レヒトも笑い返す。

「……俺は負けない」

静かに、だがはつきりとそう言ってやれば、シャウトは一瞬その目を見開き——楽しそうに、笑った。

「この俺様を倒すつてのか。はっはっは！ いいな！ そりゃあいー！」

一頻り笑った後、シャウトはまだ笑みを浮かべたまま、しかし真剣な眼差しで答えた。

「俺様も、負けてやる気はない。遠慮はいらねえ。こっちも……本気でいくからな」

お互いの守るべきものを、背負うものを賭けて。二人の男がぶつかりあった。

### 第34話 死闘の果てに

気合いとともに振り下ろされた戦斧を、レヒトは辛うじて頭上で受けとめた。あれだけ巨大な戦斧だというのに、振りは恐ろしく速い。

シャウトの馬鹿力に加え、かなりの重さが乗ったその一撃は、並の相手であれば、受けとめた武器ごと両断していただろう。もちろん、並の相手であればの話だが。

ミシリ、と腕の骨が軋むのをレヒトは感じた。無理に弾き返すことはせずに、後ろへと身を退いて勢いを殺し、なんとか体勢を立て直そうとする――が。

「わあっ!?!」

踏み固められ、氷と化した雪に足を滑らせた。

前のめりに倒れる瞬間、レヒトが無意識に掴んだのは、シャウトが腰に巻いていた長い布である。

「なっ!?!」

盛大に倒れ、雪に見事な人型を作ったレヒトとは逆に、さすがに慣れているためか、シャウトは雪に片手を付くとそこを軸にして大きく跳び、バランスを崩すことなく着地した。

ぱらぱらと、観客から拍手があがる。

「あんたなあ……俺様まで巻き込むなっつの。おい、生きてるか?」

未だ雪に埋もれたままのレヒトを見てシャウトが言えば、レヒトが力なく左手を挙げた。

「仕方がないだろっ。こんな雪の中で戦ったことなんかないんだからな、俺は!」

髪や体に付着した雪を払い落しながらレヒトは立ち上がった。力は、圧倒的にシャウトが上。速さに関してはレヒトに軍配がありそうだが、いかんせん、戦いの舞台となっている場所が悪い。

シャウトが手強いのはもちろんのことなのだが、レヒトにとって危険なのはこの雪である。

膝下あたりまで、積もりに積もった雪——慣れないレヒトには、かなり厳しい環境だった。

「あんたと違って、俺は歩くだけで精一杯……わわっ！」

言った側からふらつく。倒れないようバランスを取るレヒトを眺め、シャウトはため息混じりに呟いた。

「……削がれるなあ……やる気……」

「う、うるさいっ！ 本気で来いよ！」

「おっ、そう？ じゃあ遠慮はしないぜ！ 後悔するなよ！」

レヒトと違い、この雪の上をも平然と走れるシャウトが、ようやと剣を構えたレヒトに迫る。

腹を薙ぐようにして戦斧を横に振れば、レヒトは戦斧の表面に手を付き、そのまま跳びあがると空中で体を捻り、シャウトの背後に着地してみせる。

すぐさまセイクリッド・ティアを一閃させるが、体を反転させたシャウトが身を退き、剣は空を斬った。

「うーん……惜しい」

顎に手をあてて唸る。

攻撃をかわすことには成功したが、これにはさすがのシャウトも驚いたようだ。

「あ、あんたは軽業師か！」

「違う。魔界評議会議長の護衛役。今は天界の特使」

生真面目にそう返すと、レヒトは再びセイクリッド・ティアをシャウトに向けた。

「なんとなく感覚が掴めてきた。要は余計な力を抜けばいいんだろ。——次は俺のほうから行くぞ！」

本当に感覚を掴んだらしいレヒトが、体勢を崩すことなくシャウトに突きかかる。

「っと！」

剣の切っ先が頬をかすめ、軽い裂傷が走った。

ぽたり、と落ちた鮮血が、真っ白な雪に真紅の染みを作る。

「やべつ。傷口、開いちまったか」

見れば、確かに。簡単に止血だけはしてあったのだろう。傷口に巻かれた布が、紅く染まっていた。

「……こりゃ、ちつとばかりやべえな」

表情は変えないが、やはり痛むのだろう。声に、微かだが焦りの色が滲むのを、レヒトは感じた。

「おい、手加減しようとか、間違っても思っなよ？ 真剣勝負だ」  
それに気付いたのか、シャウトが念を押すように声をかけた。

「わかってる。あんたは手加減できるような相手じゃ……ないからな！」

言って、剣を振り下ろす。シャウトは戦斧でそれを受けとめた。  
そのまま、二人は押しあう。

「舐めるなよ！」

シャウトが吠え、レヒトの剣を弾くと、数歩後ろに下がったレヒトに重い一撃を放った。

レヒトは屈んでそれをかわし、シャウトの左足を狙う。

セイクリッド・ティアが閃き、血が吹き出した。

「ちつ……！」

間髪入れず、レヒトは体勢を崩したシャウトに斬りかかった。

速さに勝るレヒトが、シャウトに反撃の隙を与えず押し続ける。

一方的な攻撃。気付いた時には、シャウトは崖際まで追い詰められていた。

「くそつ……」

遙か下に広がる大地を視界の端に捉え、シャウトが舌打ちすると、レヒトは攻撃の手を止めた。

「なんで攻撃しない！ 哀れみのつもりか、レヒト！」

シャウトが怒りを露にすれば、レヒトはふっと笑った。その意味を掴みかね、シャウトが一瞬だけ気を許した隙に。

「そんなんじゃない」

そう言つて――。

レヒトがなにをしたのか。きっと、誰も理解できなかっただろう。シャウトがそれを理解したのも、自身の体が空へと投げ出されたのに気付いたからだつた。

いや、シャウトだけではない。レヒトの体も、谷底へと向かつて落ちてゆく。

「レヒト!？」

快とレイヴンの声が重なり、雪に閉ざされた山に響いた。

「レヒト……レヒト!」

駆け寄ろうとするレイヴンを、快が制する。

「……だめ。行っちゃだめだよ。レヒトは言つてたじゃない。任せてくれて。だから……レヒトを信じなきゃ……」

気丈を装う快。その指先が震えているのに、レイヴンは気付いた。

「……レヒト……」

祈るような気持ちで、二人は待つた。

どのくらいの時間が経つたのかは、わからない。一瞬だつたかもしれないし、永い時間だつたのかもしれない。

二人が落ちたその崖際に、手がかかった。這い上がってきたのは――。

「レヒト!」

今度こそ駆け寄ろうとしたレイヴンの足が、再び止まつた。

レヒトが、雪に突き刺したセイクリッド・ティアを見つめて。美しい装飾の施された見事な大剣には、大量の血が付着していた。内腑にまで、間違いなく達しているだろう、どす黒い血が。

ざわざわとしていた住人たちも、押し黙る。

「……竜は殺した」

レヒトの声が、響く。

誰も、なにも答えなかった。

「これが、貴方たちの……望んだことだったはずです」

違いますか？ と声をかければ、住人たちが息を飲むのがわかった。人の命など奪ったことはないだろう、住人たちの間に広がる重苦しい沈黙。

「う……ああ……」

その沈黙を破ったのは、ケアルだった。シャウトがいなくなったことに気付いたのか、彼を探すように、雪の上を歩く。その唇が、なにか言葉を紡いだ——おそらく、シャウトを呼んでいるのだろう。「ケアル、こっちへ……おいで、ケアル……」

ロデイが語りかける。その肩を、住人の一人が掴んだ。「なにを……」

「ロデイさん。あんたの娘の腹には、あの竜の赤子がいるんだろ？俺たちに復讐に来るかもしれない。ここで殺したほうがいいんだ」  
「そ、そんな……そんなことは……！」

声をあげるロデイを制し、その男性はレヒトに視線を移した。「なあ、あんた。悪いんだが……」

あげかけた言葉を無視して、レヒトのほうで男性に言った。

「なら、貴方自身で始末されてはいかがですか？」

「えっ……」

思いもよらぬ言葉だったのだろう。男性は硬直した。

「ああ、俺の剣をお貸しします。人間の首くらいなら、あっさり飛ばせますよ」

レヒトが血まみれのセイクリッド・ティアを男性に差し出せば、男性は小さく悲鳴をあげた。

「なら、貴方はどうです？」

レヒトは別の住人にも剣を向けた。

「お、俺は……もう、気がすんだから……！」

皆、脅えたように首を振った。

「わざわざ殺さずとも、彼女一人では生きられない。いずれ、死ぬでしょう」

まだ、シャウトを探し続けるケアルを見て——レヒトは冷たい微笑を浮かべ、住人たちに向き直った。

「……お帰りになられてはどうですか。これ以上、ここにいる意味はないでしょう」

住人たちは頷くと、どこか強張った表情で山を降りて行った。狂気の光が消え、呆然としているロデイも、人々に連れられて姿を消した。

レヒトは微動だにせず、その様子を見つめていた。

「……レヒト、その……本当に……」

気まずげに、快が声をかけようとして。彼女はレヒトの異常に気付いた。

「ねえ、レヒト……顔、蒼白だよ。それに黒いからわかりにくいけど、コートが血に染まってる。これ……返り血なの？」

「……返り、血？ いや……違う……それは……」

ぐらりと、その体が傾く。

「レヒト……！？ しっかりして……レヒト！」

意識を失い、倒れかけたレヒトの体を。力強い、逞しい腕が抱きとめた。

## side story 5 決意

『……違う』

男は開いていた本を閉じた。机に積まれた大量の古ぼけた本に囲まれ、数度目のため息を吐く。

『……この文献にも載っていない……』

分厚い表紙の古い本を、男はパラパラと捲る。古い本独特の匂いが鼻をついた。

天魔大戦の記録を、男は虱潰しに探し、読み耽っていた。

それこそ星の数ほどある書物。そのほとんど全てを読破したが、男の求めること——肝心なことは、どの書物にも書かれてはいない。天魔大戦を引き起こした、狂った男が抱いた野望の原因となったもの。そして、今回の魔物出現。それは、一つの糸に繋がっているはずなのだ。

『まさか……いや、私の仮説に間違いがなければ……これは『CHILD』の仕業』

男は小さく呟いた。椅子から立ち上がり、周囲を歩きながら言葉を続ける。

『『CHILD』は『HEAVEN』を滅ぼそうとする、いわば意思そのもの……今回、魔物を産み出したのは、恐らく『CHILD』だろう。言うなれば、あれは魔物の母体のようなものだから。

魔物が神々の力——精霊ではなく、別のなにか——恐らく『CHILD』から力を得ていることを考えれば、間違いはない』

数日前、ヘヴンを滅亡の危機へと迫いやった魔物は、世界を守らんとする一人の男によって浄化された。人々は、三闘神の加護だと喜びに湧き返っている。その大いなる神々が、想像を絶する苦しみの中にあるとも知らずに。

『天魔大戦、魔物出現……原因は、間違いなく『CHILD』であったはずなのだ。しかし、記録にはなにも残っていない。誰かが

抹消した？　そうであっても、存在はするはずなのだ。だが、そうであるならば……どこに存在する？　なぜ、私が位置を把握することができない？』

男は机を叩いた。置かれた紅茶が揺れた。もう冷めきってしまっている。

『これ以上は時間がない。もう待つことはできん。人間たちが変わらぬというのなら……』  
『HEAVEN』を、三人を守るためには、私が……私が『CHILD』を葬り去る以外にはないというのに……』

男は純白の髪を掻き毟った。過ぎゆく時間だけが、男を駆り立てた。魔物が現れたということは、『CHILD』を抑え込む力が弱まったということ。それは、神の力が弱くなっていることを意味する。

『……お前たちは、それでも人間を信じるのだな。この想像を絶する苦しみの中にあっても、人間の変化を待ち続けるのだな……』

眠りから覚めた男は、人々の愚行により迫る危機を告げるために三人と会った。男は『CHILD』を始末し、人々を統治するべきだと語った。だが、三人はその言葉に頷くことも、『CHILD』についてを話すこともなく。

『人々は、必ず気付く。それまで、私たちは待ち続ける。人々を信じて』

異口同音にこう告げたのだ。その身を襲う苦しみに耐えながら、それでも微笑んだ三人を、男は思い出していた。

『ヴェン、ミロ、アル。お前たちは優しすぎる』

その意思を汲んでやりたいと、男も待ったのだ。だが永き時を経ても、人々は変わらなかつた。そして、ゆつくりと、だが確実に、神は力を失い始めている。男に、もはや時間は残されてはいなかつた。

『……すまない。私は、これ以上……待てない。お前たちが苦しみ消えゆくのを、見過ごすことなどできない』

彼らを、失うわけにはいかない。この世界——『HEAVEN』  
を、壊させるわけにはいかない。

冷えきった紅茶を、男は飲み干した。甘い味がするはずのそれは、  
なぜだが、苦く感じられた。

### 第35話 ドラゴン・リバティにて - 1 -

ぼんやりとしていた視界が、次第に鮮明になってゆく。周囲を真っ白い壁に囲われた、小さな部屋。窓から入り込む光が、優しく降り注いでくる。

（……綺麗なところだ。死んだら地獄行きだろうと思ったが……。ひよつとすると、ここが地獄か？）

レヒトは部屋にある寝台に寝かされていた。視界は鮮明になったが、頭の中はまだ霞がかかったようにぼんやりとしている。体も、重だるい。ほんの少し動かすことさえ、億劫に思えた。

「……どこだ、ここは……？」

少しばかりかすれた声で、お決まりの台詞を口にしつつ、首だけを動かして周囲を見渡す。

寝台の側には、レヒトのセイクリッド・ティアと、彼が常に纏っている銀色の鎧、そして白いサーコートが置いてあった。

誤解がないようにしておくが、別にレヒトは素っ裸で寝かされているわけではない。上半身は腹部から胸にかけて幾重にもきつく包帯が巻かれており、下半身は白いズボン姿である。

体を起こそうとしたレヒトは、腹部を襲った激痛に身をよじり、寝台に倒れ込んだ。

「ぐうつ……！」

浮かんだ涙を拭おうと、伸ばした手が鈍く痛む。見れば、そちらにも包帯が巻かれていた。

「……これは……」

レヒトがはつきりしない記憶をなんとか呼び起こそうとしていると、控え目に扉が開かれ、女性が部屋に入って来た。清潔感に溢れた白衣をその身に纏っている。

「お目覚めになられたようですね。——ご自分の名前は、わかりますか？」

投げ掛けられた妙な質問に、首を傾げる。地獄に行くにも審査が必要なのかと、レヒトは一瞬考えた。

「……はあ、わかりますけど。あの、ここは……」

レヒトが女性に聞き返す前に、勢いよく部屋に飛び込んできた人物に思いきり抱きつかれ、レヒトは声にならない悲鳴をあげた。たとえようのない激痛が、レヒトの全身を駆け巡る。

「レヒト……！　ばっ！　心配したんだから！」

深緑色の緩い巻き髪が、肌を擦る。細い指先が、すぐるように絡みついてきた。

彼女がここにいるということは、どうやらあの世ではないようだ。しかしこの状況、レヒトにとってみれば、まさに天にも上るような夢心地——生きててよかった——となるはずなのだが。

「？　……わあっ！　レヒト！　しっかりして！」

当のレヒトはあまりの激痛に、生死の境を彷徨っていた。これは本当に天に召されかねない。快はレヒトの首を掴んでガクガクと振った。

すると、またしても扉が開かれ、今度はレイヴンが入ってきた。

「レヒト、目が覚めたんだってね……って、うわっ！　口から魂出てるよ！」

「ああつ、だめです！　本気で死んでしまいますから！」

レイヴンと女性がなんとか快を落ち着かせ、レヒトは一命をとりとめた。

快をなだめすかした後、死にかけたレヒトに薬を与えると、女性 は気を利かせてくれたのか、三人を残して部屋を出て行った。

「……死ぬかと思った」

喋る度に、酷い痛みが腹部を襲う。顔を歪ませれば、快が小さな声でなにかを呟き、傷口に手をかざした。

柔らかな、淡い緑色の光が傷口を包むと、不思議と痛みが和らいだ。

「……本当に……死ぬところだったんだからね」

レヒトと視線を合わせることなく、快はそう口にした。

「もう少し処置が遅かったら……死んでたかもしれないんだよ？」

何日も……目、覚まさなかったし……」

その瞳の縁が——溢れはせずとも揺れていることに、レヒトは気付いた。

レヒトが快に言葉をかけようとすると、まるでそれを見計らったかのようなタイミングで扉を叩く音が響いた。返答を待たずに開かれたそこから顔を覗かせたのは、二人の男性。

一人はよく知った顔、もう一人は知らない男性だった。レヒトの知っている方の男性が、彼を見て笑った。安堵したように。

「意外と元気そうだな。顔色もいいし」

連れて来たときはゾンビ色だった、と笑う。

「あんたもな、シャウト。傷は癒えたのか」

男性——シャウトは頷いた。

「俺様の傷は大したことなかったからな。あんたほど酷い怪我じゃなかったし、姫の治癒魔法が効いた。あつという間に治っちまったから驚いたぜ」

シャウトがそう言うのと、快が眉根を寄せた。そんな表情も美しい、などと思ってしまうあたり、レヒトはかなり重症であるようだ。きつともう手遅れだろう。

「その『姫』はやめてって言ったのに」

彼女に付けられたあだ名であるらしい。なかなか的確な表現だとレヒトは思った。

「治癒魔法など、永い時を生きてきたが初めて目にした。大変な修練を積んだのだろう」

レヒトの知らない男性が、感心したように言う。

こと魔法に関しては無知なレヒトだが、快が自分に対して使っているのが治癒魔法というものだとは、なんとなく理解できた。そういえば、初めて快と出会った時にも、快はレヒトに同じような魔法

を使っていた気がする。

「便利なんだな」

脳天気なその言葉に、快が苦笑した。

「治癒魔法は、精霊を送り込んで、対象の自然的な治癒力を高める魔法のことを言うの。だから、すぐに治せるのはかすり傷くらいだよ。酷い怪我は……少し治りを早めたり、痛みを取り除いたりすることくらいはできない」

「それにな、レヒト。魔法の行使ってのは大変な精神力を消費するんだ。ずっと精神を集中させてるわけだからな」

快の後をシャウトが継ぎ、レヒトにそう説明した。

「そうなのか。俺は魔法が使えないから、よくはわからないが……なんでもできて、便利そうなイメージがあったからな」

「魔法は万能じゃないよ、レヒト。魔法でだって、できないことがある」

死者を生き返らせることはできない——快は言外にそう匂わせていた。それは重傷のレヒトに対して言われた言葉なのか、それとも今は亡き誰かを指す言葉なのか——レヒトには、わからなかったが。「だから、もう無茶はしないって約束してね。じゃないと僕、加減を間違えて大変なことになっちゃうよ」

快がそう言うと、レヒト以外の面々が顔色を変えた。どうやら脅し文句だったようだが、魔法に疎いレヒトには理解できない。

「ど、どうしたんだ？」

なんともいえない微妙な表情の一同を見渡してレヒトが言えば、レイヴンが答えた。レイヴン自身の身長よりも、遥かに大きなスタツフで軽く肩を叩きながら。

「レヒト、治癒魔法は精霊の力を送り込んで傷を治すものだって言っただでしょ？ もし加減を間違えてもしたら……どうなると思う？」

「……どうなるんだ？」

レヒトは首を傾げた。

「ぱんっ！ って感じで内部破裂。場所にもよるだろうけど、レヒ

トみたいに腹部だったら、間違いなく即死だね。それも面白いから見てみたい気もするけど」

レイヴンは可愛い口調で、とんでもなく恐ろしいことをさらに口にした。

「……つまり、快はそのとんでもなく恐ろしい魔法を今、まさに俺に対して使っている、と」

「そういうこと。だから僕がすっかり加減を間違えないように、おとなしくしててね」

「……はいっ」

もちろん、逆らえるはずもなく。身を強張らせるレヒトに、シャウトがにやりと笑ってみせた。

「尻に敷かれてんなあ」

ひどい言われようである。まあ、事実なので仕方ない。

「ケアルちゃんの前じゃ、ふにゃふにゃのあんたに言われたくはないな」

シャウトがなにか言うよりも早く、彼の隣に立っていた男性が微笑かに笑った。どこか軽い印象を受けるシャウトと違い、どちらかといえば堅苦しいタイプの男性だが——どこことなく、シャウトに似ていた。

「まったくだ。人間の娘に骨抜きにされおって、見ておれぬ」

冷たい表情——無表情なのだろうか。だが、それに反して口調は柔らかかった。

「なんだよ、ケアルのこと見て可愛らしいって言ってたくせに」

「あの娘を悪く言っているのではない。お前を府抜けと言っておるのだ」

「誰が府抜けだ！ あんたにだって同じ血が流れてるだろうが！」  
シャウトが噛みつく、男性はあからさまに嫌そうな顔をした。

「お前のような馬鹿者と同じ血が流れているかと思うと、我が身を呪いたくなる」

「……野郎〜！」

バチバチと火花を散らす二人を眺めて、レイヴンが呆れたように言った。

「また始まったよ」

「……誰なんだ、あれは」

二人に悟られないように、レヒトはレイヴンに問いかけた。

「竜族の長老様。シュリーク」フリユウだつてさ。ちなみに、シャウトのお兄さん」

「……あれがか」

取っ組み合いの喧嘩に発展しつつある二人を眺めてレヒトは呟く。どうにも人の上に立つ人々というのは、揃いも揃って灰汁の強い御人が多いようだ。そうでなければやっていけないのか、それとも自然とそうなってしまうのか——微妙なところだ。

「怪我人があるんだし、ちよつとは落ち着きなよね」

子供のレイヴンが大人二人をたしなめるような口調で言ったのがおかしくて、レヒトは笑った。

もちろん、その拍子に再び腹部を襲った激痛に、本日二度目の悲鳴をあげることとなったのだが。

### 第36話 ドラゴン・リバティにて - 2 -

「しっかし、あんたは相当の強運の持ち主らしいな」

痛みを堪えて半泣きになっているレヒトを、面白そうに眺めてシヤウトが言った。

「二人して落ちた崖のすぐ下に足場があるなんてよ」

ひよつとして、それをも見越してたのか。そう問いかけたシャウトに、レヒトは苦笑を返す。

ちなみに訂正しておく、正確には『二人して落ちた』ではなく『レヒトが突き落とした』が正しい。

「いや……ただ、あの時はなぜかそうしなければいけない気がしたんだ」

あの時の行動に、確かな根拠などはなかった。無茶をしたものだと、今になって思う。

「へえ。あんたの持つ不思議な力ってやつが働いたのかもな」

「……誰から聞いたんだ、そんなこと」

聞かずともわかつてはいるのだが、レヒトは一応問いかけてみた。

「えへへ。喋っちゃった」

案の定、レイヴンが舌を出す。その頭を軽く小突けば、レイヴンにはにこにこ笑った。

「あんたが突き落としてくれたお陰で、俺様は盛大に頭を打ったんだがな」

右手を頭にやるシャウトを見て、竜族の長老——シュリークがふん、と鼻を鳴らした。馬鹿にしたように。

「心配するな。元来馬鹿なお前だ。それ以上馬鹿にはなりようがない」

「んだと、こんのデコっぱちが！」

「貴様、人の気にしていることを……！」

気にしていたらしい。シュリークは短い髪をオールバックにして

いる。冷たく鋭い瞳と相まって、どことなく危険な雰囲気が漂ってくる。

「ならその髪型やめればいいのに」

（ごもつとも）

非常に的確なレイヴンの突っ込みに、レヒトは心の中で同意した。「ふむ……しかし、気に入っていてな。毎日早朝から昼にかけて、ビシッとセットするのだ」

レヒトの脳裏に、鏡の前で髪を整えるシュリークの姿がよぎった。「……なに笑ってんだ？」

「い、いや……別に……」

痛みと戦いながら笑いを堪えるレヒトを、シャウトが怪訝な目で見つめてくる。

「ま、なにはともあれ……俺様とケアルが無事だったのはあんたのお陰だ、レヒト。……ありがとう」

改まって頭を下げられ、レヒトは慌てた。

「や、やめてくれ。俺はただ……必死で……」

「……他人のために、死ぬ覚悟で自分の腹を掻きさばくような奴……初めて見たよ」

レヒトの腹部に巻かれた包帯を見つめて、シャウトが呟く。

レヒトが見せた、血濡れのセイクリッド・ティア——彼の剣を染めあげていたのはレヒト自身の血。

あれはレヒトが打った、一世一代の大芝居だったわけである。

レヒトが大根役者であるということは、彼の名誉のためにも、ここでは言及しないでおきたい。

「……ああする以外に、思い付かなかった。深く考えてなんていなかったんだ」

レヒトは窓の外へと視線を移した。外は純白の雪が降り積もり、美しく輝いている。雪に反射する光が眩しくて、レヒトは瞳を細めた。

「……あんたとケアルちゃんを死なせたくなかった。本当に……」

ただ、それだけさ」

その言葉を聞き、シャウトはにやりと笑った。

「あんた、最高にかっこいいぜ。ま、俺様には劣るがな」

「ふっ……勝手にほざいているがよいわ」

「ああ!？」

再びいがみあう二人。どうにも相性がよくないようだ。

「仲悪すぎだよな、兄弟のくせに」

レイヴンが呆れたように呟いた。

「……まあ、あれだな」

三人は顔を見合わせて苦笑する。

「似た者同士」

そう言って笑うレヒトたちに向き直り、二人はほぼ同時に言葉を発した。

「一緒にすんなっつもの!」

「似てなどおらぬ!」

そして同時に顔を反らす。

ここまで似ている兄弟も珍しい。似ているから仲が悪いのかもしれないが。

シュリークは不意にその表情を和らげ、レヒトに向かって静かに言った。

「話は、すでに聞き及んでいる。我が愚弟を救ってくれたことを……

……そなたに感謝せねばならぬな。そなたは人間であるというのに……

……」

人間、という言葉の裏に、微かだが、嫌悪するような響きをレヒトは感じた。それは、シャウトも同様だったらしい。

「……兄貴。人間だとか竜族だとか、そんなことは関係ねえつつたろ。そんな小さいことはどうだっていいんだ」

「……しかし」

シュリークの声を、シャウトが無言で遮った。向けられた瞳は、強く鋭い。

「今回の事で人間を恨むのは筋違いだ。永きに渡って、人間との関わりを避けてきた、俺様たちにこそ責がある」

シャウトは一度そこで言葉を切った。

「……今、世界が危機に瀕してるのは、兄貴だって知ってるだろ。レヒトたちは、その危機を乗り越えるために、バラバラになった種族を一つにしようと躍起になってる。俺様たちだって無関係じゃねえ。もう、無関係なフリはできねえんだよ」

シュリークは黙っていた。シャウトを見つめるその顔には、少しばかり、驚いたような表情が見える。

「……俺様たちは岐路に立たされてる。同族だけで閉じ籠ってちゃ……この先、生き残れねえ。人間たちと手を結ぶか、それとも、ここで滅びを待つかだ」

「……いつから、長たる我に対してそのような口を利くようになったのやら」

シュリークはふつと微笑んだ。

「我が思うほど……お前は子供ではなかったようだな」

緊張していた空気が、ゆるゆるとほどけていった。レヒトは気付かれぬように息を吐いた。緊張は傷に悪い。

「当ったり前だろ。俺様だって、いつまでも子供じゃねえつつの」

「まあ、馬鹿なところは変わっておらぬようだが」

「……なんだってえ？」

青筋立てて怒るシャウトと、その様子を冷ややかに眺めるシュリーク。

またしても兄弟喧嘩勃発かと思われた矢先、部屋の扉が激しく叩かれた。

（……なんだ……？ なにか、嫌な……）

それは、言葉では言い表せないような、嫌な感覚。外れてくれればいいのだが、レヒトの感じる『予感』は、悪いものに限って外れたためしがない。

シュリークが入るよう促すと、一人の少年が転がり込んで来た。

シュリークの足元に跪くが、相当急いで来たのか、呼吸が荒い。

「どうした。いつ何時も、常に静なる心を忘れてはならぬと……」

「も、申し訳ありません！　しかし、緊急事態です！　ルナルの街が……！」

シャウトの眉が僅かに跳ねたのを、レヒトは視界の端に捉えた。

「ルナルの街がどうしたというのだ」

少年は呼吸を整え、シュリークを見上げて言った。

「たった今発生しました大雪崩に巻き込まれ……壊滅状態です！」

「なんだって！？　ぐうつ……！」

少年の言葉を聞き、レヒトは起き上がろうとしたが、身を襲う激痛に再び寝台へと沈んだ。

「レヒト！　無茶しちゃだめ。傷口が開いちゃうよ」

それでも起き上がろうとするレヒトの肩を押さえて、快が言い放った。有無を言わせぬ、強い口調で。

「兄貴……！」

シャウトがシュリークに視線を向けた。動揺しているのか、その瞳が揺れていた。

「……雪崩はたった今、発生したのだな？」

シュリークが念を押すように、静かに声をかけると、少年は頷いた。

「はい、間違いありません」

「そうか……」

シュリークはなにかを思案するように瞳を閉じた。誰もが、黙ったまま――まるで、言葉を忘れたかのような、沈黙が流れた。

「皆に伝えよ。男たちはすぐにルナルの街へ向かい、生存者をここへ運べ。女たちは温かな部屋とスーパの用意だ。急げ！」

「は、はい！」

少年は入ってきたときと同じように、転がるように走って行った。

「兄貴」

「……なんだ」

シャウトはにっと笑った。少年のような、屈託のない笑顔だ。

「ありがとな」

「さて……なんのことが、わからぬな。お前も行け。必ず全員、連れて戻るのだ。失敗は許さん。いいな」

「了解！ 任せてくれよ。兄貴、俺様がない間はケアルのこと、頼むぜ！」

部屋を出て行こうとするシャウトに、快が声をかけた。

「僕も行くよ。最近は雪掻きばかりしてたしね。今は少しでも人手が必要でしょう？」

「レイヴンも行く！」

シャウトは頷いた。

「よし、姫と教授は俺様の背に乗って行けばいい。行くぜ！」

「はい！」

連れだつて部屋を出るシャウトとレイヴン。

快は寝台に横たわったままのレヒトに視線を向けた。

「……情けないな。こんなときに……俺はなににもできない……。俺は……」

悔しげに呟いたレヒトの唇に、快の指先が触れた。言葉を遮るように。

「今、レヒトがやるべきことは、少しでも早く傷を治すことだよ。

レヒトが僕たちに『信じてくれ』って言ったように……今度は僕たちを信じて欲しいの」

そう言つて、快は微笑んだ。吟遊詩人が詠うサーガの聖女よりも

——ずっと強く、そして優しい微笑だった。

「……俺は、いつだって……君たちを信じてる」

レヒトがそう答えると、快は安堵の表情を見せた。

快を呼ぶレイヴンの声が聞こえ、彼女は立ち上がった。去り行くその後ろ姿に、レヒトはそっと声をかける。

「……気を付けて」

「レヒトのほうこそ、僕がいない間に無茶したら怒るからね！」

振り返り、茶目つ氣たつぷりにウィンクすると、快は部屋を出て行った。

レヒトは窓の外へと目をやった。竜へとその姿を変えた人々が、ルナルの街へと飛び立ってゆく。

半ば祈るような気持ちで、レヒトは彼らを見送った。

### 第37話 この手に絆を - 1 -

レヒトはなんとか寝台から身を起こし、部屋にある窓から、ルナルの街があるはずの方向を見つめていた。

ここからでは、そびえ立つ山々が邪魔をして、離れた小さな街を見ることは叶わないのだが。

「……時間とは、待つ身になるほど長く感じられるのだな……」

窓辺に立ち、同じように外へと視線をやっていたシュリークが、そつと呟いた。

シャウトたちがドラゴン・リバティを出発してから、さほど時間は経っていないはずである。その証拠に、彼らが出て行ったすぐ後に、あの若い女性——彼女はドラゴン・リバティの医師であるらしい——が持つて来た紅茶からは、微かにだが、まだ湯気が立ち上っていた。

「……人間の生死に……これほどまで、気を揉むことになるとはな……」

シュリークが呟くように発した言葉に含まれた、複雑な感情。それは、自嘲するような、悲しむような、それでいて、不思議と誇らしいような——様々な感情が混ざりあったものだった。

「……竜族が、人間との関わりを持たない理由……教えて、頂けませんか？」

控え目に問うたレヒトのほうへと、シュリークは視線を向けた。様々な感情を含んだ、深い海のような瞳がレヒトを映す。

「竜族が人間との交流を絶ったのは……遥か昔、それこそ気の遠くなるような昔の話だ」

シュリークは無表情のままに言った。瞳に宿るのは、悲しみの光。無表情である分、彼の瞳はその感情を雄弁に語る。

「我がまだ幼い頃は、竜族も人間との関わりを持っていた。我はあまり覚えてはいないのだが……その当時、竜族の長をしていた我が

両親が、人との交流に積極的だったのもあり、関係は良好だったはずだ。あの事件が起こるまではな……」

シュリークの瞳が、鋭さを増した。そこに見えるのは、強い怒りと、深い悲しみ。

「……『竜の生き血は、人に不老不死を与える』……そのような愚かな噂が流れ、そしてその噂に惑わされた人間たちが……我らの都を襲って来たのだ」

「そんな……ことが？」

シュリークは頷き、静かに言葉を続けた。

「……幼かった我には……人間たちと対話するために出た両親が殺され、肉を喰われ、血を吸われる……無惨な……その光景だけが焼き付いた」

レヒトの頭の中から、一切の言葉が消え去った。想像することさえできない、凄惨なその場面を、幼き日のシュリークはまのあたりにしたというのか。彼の受けた衝撃は――どれほどのものだったのだろう。

「両親を食らった人間たちは、怒り狂った我が同胞によって殺された。不老不死など……所詮は迷信に過ぎなかったのだ」

無表情なシュリークの顔に、憎悪の色が滲む。

実際に、その光景を目撃したわけではないレヒトには、シュリークが感じたであろう絶望は、わからない。しかし、自分の好奇心が彼の心の奥底に封印されていたその記憶を呼び起こさせてしまったことを、レヒトはただただ後悔した。

「……申し訳ありません。思い出させるようなことを……お聞きしてしまって……」

レヒトが謝罪の言葉を口にする、シュリークの顔から憎悪がふっと消えた。代わりに見せたのは、柔らかな微笑。

それはシャウトが、時折ケアルに対して見せるような、優しい微笑みだった。

「弟が言った通りの人物であるようだ、そなたは。他人のことを

……まるで自分のことのように思い、行動する——不思議な人間だとあれは言っていたが……なるほど、確かにそのようだ」

感心するような眼差しに、レヒトは内心、首を傾げた。それほど特別なことをしているという感覚が、なかったからだ。

「そなたは素直なのだな。人間にも、そなたのような者がいたこと……我は知らなかった。それこそ、愚かなことだったな」

シュリークが微笑みを消し、無表情ともとれるような、普段見せる顔に戻り、レヒトに言った。

「……ようやく、理解できたような気がするのだ。死に際に、人間たちを葬ろうと飛び出した同胞に、父がかけた言葉を。『やめよ』」

……父は確かにそう言っていた。これも……あれのお陰、か」

シャウトのことを言っているのだと、レヒトはなんとなく理解した。

「長老様は、シャウトのこと……大切に思っているらしいやうですね」

シュリークが少し慌てたような表情を浮かべた。冷たい印象を受けたが、あの子供じみた喧嘩のときなど、シャウトが関わると意外に表情豊かなようだ。

「……そつ、そんなことはない。わ、我は別に……。ふう、なにを必死になっているのだ、我は」

にやにやと笑うレヒトに気付いたのか、シュリークは軽くため息を吐いた。

「あれは、馬鹿だからな。放っておけぬ。それに……あれは人間を好いている。両親と同じように。人間の手により、目の前で両親を奪われた我は……不安で仕方なかった。あれもいつか、人間に殺されるのではないかと……」

それも無理のないことだと、レヒトは感じた。彼は事実、人間によつて殺されかけている。

「……あれが傷だらけで戻って来た時は……恐怖さえ感じた。我は、弟まで奪われるのかと。そなたたちを見て、我や同胞たちの中に沸

き上がる怒りに気付いたのか……あれも言ったのだ。父と同じように。我らに向かつて……『やめろ』とな」

不思議なものだ、と呟く。穏やかな声で。

「子供、子供と思ってきたあれに気付かされたのは悔しいが……あれのほうが、我よりも……ずっと大人だったのだろう」

シュリークの言葉に、少し、寂しそうな響きが含まれているのを、レヒトは感じた。

年齢としてはあまり離れてはいないのかもしれないが、シュリークにとって、過去を知らない——彼の目から見れば、少しばかり危なっかしいシャウトは、きっと幼い頃から庇護の対象だったのだろう。

そして、唯一残された家族なのだ。親離れならぬ兄離れに、多少の寂しさを感じているのかもしれない。

「……ついすっかりと、余計な話までしてしまった」

ため息混じりに呟き、シュリークは再び窓の外へと視線を移した。弟が戻ってくるはずの蒼穹へと向けられた瞳は、どこか誇らしげにも見える。

シュリークの後ろ姿を見つめて、レヒトはほんの少し羨ましく思った。

(……家族、か……)

親も、兄弟も、レヒトには存在しなかった。いや、本当はいるのかもしれない。だが、今は己に関すること総てが、霞がかったように閉ざされている。

レヒトの記憶の始まりは、いつだって、十年前のあの日。

朦朧とする意識の奥で、響く誰かの声。誰もが喜びに湧き返る中、孤独と寒さに震えるレヒト。誰にも気付かれず、今にも消えてしまいそうな、存在。そんなレヒトを救い出したのは——あの優しい、光満ちる人だった。

(……ラグネス様)

血の繋がりなどなくても。あの優しい人は、レヒトにとって、た

だの主としてではなく、それ以上に、大切な人だった。

側の机に置かれていた紅茶のカップを手取る。

（そういえば……俺が最初に貰ったのも、温かい紅茶だったな）

指先、そして掌に伝わるその温かさに、自然と笑みが溢れた。

「……どうやら、戻って来たようだな」

シュリークの発した言葉が、過去の世界に浸っていたレヒトの意識を呼び起こした。

「ほ、本当ですか!？」

「あそこだ。人間の眼では、捉えることは難しいかもしれんが……」  
そう言つて、シュリークは蒼穹の一ヶ所、彼方に広がる雪山の上あたりを指差した。レヒトは視力に関しても、少々人間の域からは外れているのだが、飛翔する竜の影を見つけることはできなかった。  
「すぐにここへ戻って来るだろう」

「待つてください、俺も行きます!」

部屋を出て行くこうとするシュリークを追い、レヒトは寝台から起き上がった。途端、腹部を襲った激痛に、その場に膝を付いて呻き声をあげる。

「……あまり無理はするでない。いかに治癒魔法と言えども、そのような大怪我を完全に癒すことなどできぬのだぞ」

無茶をするレヒトをたしなめるようにシュリークが言つが、レヒトは彼を見据えて言い放った。

「それでも、行きます。役には立たないかもしれませんが……  
……じつとなんかしてられないんです」

そう言つて、苦痛に顔を歪めながらも立ち上がろうとするレヒトを見て、シュリークは小さくため息を吐き、その手を差し延べた。

「あの娘になにを言われても、我は知らぬぞ?」

差し出された手を握り返し、レヒトは立ち上がった。

「快に怒られるのは覚悟の上ですから。それに、俺に手を貸した長老様も共犯です」

悪戯っぽくレヒトが言えば、シュリークは喉の奥で笑った。

### 第38話 この手に絆を - 2 -

竜族の暮らす都、ドラゴン・リバティは、ひとつの巨大なドーム型の建物である。ひとつの建物の中に、竜族全員が住んでいると聞いて驚いたが、なにしろ竜族は絶対数が少ない。ヘヴンで最も数が多いのは、間違いなく魔界人である。それに魔精霊が続き、精霊人、竜族、天界人となるだろう。

レヒトがシュリークに連れられ、辿り着いたのは、建物の地下部分にある広い部屋だった。部屋の中は暖かく、女性たちが毛布と温かなスープを用意し、雪崩に巻き込まれたルナルの住人たちを待っていた。

忙しく働く女性たちの中に、見知った姿を見付けて、レヒトは声をかけた。

「ケアルちゃん、手伝いかい？」

声をかけられたことで、ケアルはレヒトに気付いたらしい。振り返り、柔らかに微笑んだ。

しかし、焦点の定まらぬ彼女の瞳が、不安げに揺れているのをレヒトは見逃さなかった。愛する人を待つ心細さ、そして不安は——レヒトも今、まさに体験中だ。

「……シャウトはちゃんと帰ってくるよ。それに……ロディさんだって、きつと無事だから……」

彼女の細い肩に手を置いて、レヒトが励ますように言葉をかけると、ケアルは小さく頷いた。

『ちゃんと帰ってくる』——それはひょっとしたら、自分自身への言葉だったのかもしれない。

竜族の女性がケアルを呼び、彼女は軽く頭を下げると呼ばれたほうへと歩いて行った。彼女が障害物を避けて歩けるのが、レヒトには不思議で仕方ない。レヒトが目を閉じて同じように歩いても、障害物を避けるどころか、真っ直ぐに歩けるかどうかも定かではない。

ケアルは竜族の女性たちと、なにか話しているようだ。時折笑い声があがるのを聞き、レヒトは安堵した。

シュリークが語った過去の話を聞く限りでは、竜族は人間を嫌悪しているように感じられた。人間であるケアルが、竜族とうまくやっていけるかと不安だったのだが、どうやら杞憂だったようだ。

「健気な良い娘だな。あれにはもったいない」

レヒトの隣に立つシュリークが、ケアルの後ろ姿を見て言った。「結構、お似合いだと思います。二人を見てると、感じるんです。

種族の違いなんて、関係ないんだって」

それは、レヒトの本心からの言葉だった。無邪気に笑いあう二人は、本当に幸せそうで。

種族が違う二人には、様々な障害があるだろうけれど……きつと乗り越えてゆける。なにがあるうとも、きつと。

「いつか……世界中の人々が、種族の違いなど気にせずに、手を取り合って生きることができればいいと……俺はそう思っています」

「……そうだな」

シュリークが小さく発した同意の言葉。それが、レヒトはただ嬉しかった――が。

「そなたの愛する娘も、精霊人のようだからな」  
顎に手を当て、なにやら一人で納得している。

（……この親にして、この子あり……なんてな。あ、親子じゃないか）

レヒトは彼の横顔に、シャウトの姿を重ね見た。

不意に、静かだった外が騒がしくなった。人の姿に戻った竜族の男性たちに支えられて、ルナルの住人たちが運ばれてくる。

その顔は寒さのせいなのか、蒼白だったが、部屋の暖かさで人々の優しさに、どこか安堵したような表情も伺えた。

「ずいぶんと少ないが……残りはまだ戻らぬのか」

シュリークが、戻ってきた竜族の青年に声をかけた。

「はい。予想以上に被害が大きく……また、再び雪も降り出したために、救出作業は難航しております。全員を救出するには、もう少しばかり時間がかかると。私もすぐに加勢に戻ります」

「頼む。なんとしても……全員を救い出したいのだ」

青年は頷き、仲間とともに、再び雪と氷とに閉ざされた、極寒の大地へと出て行った。

「……あなたは……」

運ばれて来た住人の一人が、レヒトの姿を見て声をあげた。

忙しそくに指示を飛ばすシュリークの邪魔にならぬように、レヒトは彼から離れ、声をかけてきたその男性の側へと移動した。

「大丈夫ですか？」

「ああ……もう、大丈夫だ」

その言葉通り、顔色はだいぶよくなっているように見えた。

「すみません、貴方がたを……騙すような真似をしてしまって」

男性は、ゆっくりと首を振った。

「いや……俺たちが、間違ってたんだ。竜族を……よく知りもしないのに、勝手な思い込みで、あんな馬鹿なことをしようとした。それを……あなたが止めてくれたんだ。なにを謝ることがある」

竜族の女性が、温かいスープを運んで来た。それを受け取り、男性は小さい声で、だが確かに『ありがとう』と言った。それは、女性にも聞こえたらしい。ほんのりと頬を染めて、彼女は微笑んだ。

立ち上がったレヒトは、部屋の入り口付近に立つ、毛布にくるまった小さな人影に気付いた。

「誰かを探しているのかい？」

近付き、声をかけると。毛布を頭から被った幼い少年が、レヒトに視線を向けて頷いた。

「……ママ、待ってるの」

少年の年は五、六歳といったところか。母親が運ばれて来るのをじっと待っている、寂しそうなその少年に——レヒトは、レイヴンの姿を重ねていた。

「はぐれちゃったのかい？　じゃあ、お兄さんも一緒に待っていてあげるよ」

「本当！？」

知らない場所に、知らない大人ばかり。一人きりで、不安だったのだろう。泣きそうだった少年の表情が、ぱあっと明るくなった。

「ああ。君の名前は？」

レヒトが問いかけると、少年は元気よく答えた。

「イム！」

「よし。男の子は泣いちゃだめだ。イムのママが来るまで、少しお話をしよう」

入り口付近に座り込んでいたら邪魔だろうと、レヒトは場所を移した。少し離れた、しかし入り口の様子はよく見える場所に陣取って、レヒトはイムと一緒に腰を下ろした。

「おじちゃん、竜に乗せてもらったことある？」

元気を取り戻したイムが、レヒトに言った。

「竜に？　俺はないな。それと、俺はまだお兄さん」

二十三歳におじちゃんはひどいと、レヒトは訂正した。こんな若い少年に、わざわざ訂正するレヒトもレヒトだが、おじちゃん扱いは少し悲しいものがある。

「ぼくはね、あるよ！」

イムは自慢げに胸を反らした。近くにいた人々が、そんな無邪気な少年を見て、微笑んでいた。

「イムは竜が怖くないかい？」

「怖くないよ！　あのね、竜ってすごくかっこいいんだ！　いいなあ……　ぼくも変身できたらいいのに」

羨ましそうに呟いたイムの頭を撫でてやる。擦ったそうに笑っていたイムは、ふと視線をレヒトから外し、その幼い顔に満面の笑みを浮かべた。

「あつ！　ママだ！　おじちゃん、またね！　おじちゃんも、竜に乗せてもらえるといいね！」

イムは元気よく手を振って、母親のもとへと駆けて行った。母親も、はぐれた子供を心配していたのだろう。ようやく見付けた我が子を抱き締めて泣いていた。

「……よかったな」

「ほんと、よかったね」

言葉とは裏腹に、冷たい声が背後から響き、レヒトは身を強張らせた。

恐る恐る振り返れば、そこには。

「……僕の言ったことが理解できなかったみたいだね、レヒト？」

表面上は誰もが見惚れるような笑顔を浮かべた——内心は般若の表情だろう——快の姿が。

「……は、はは……」

覚悟はしていたとはいえ、やはり——怖い。

「あれだけ無茶するなって言ったのに！」

ぐつと拳を握り締める快。

彼女はしとやかに鏡の前で紅を差すような女性ではない。あの巨大な銃を振り回して、敵を薙ぎ倒す戦士である。ということは、それなりに力もあるわけで。

「うわあっ！ レイヴン、見てないで助けてくれ！」

「いいじゃん、男前で」

いれてもらった温かいスープをすすりながら、頬に鮮やかな紅葉を作ったレヒトを眺めて、レイヴンが言った。それはもう、心底楽しそうに。

第39話 この手に絆を - 3 -

「痛い……」

「レヒトが悪いんだからね」

ヒリヒリと痛む頬を押さえるレヒトに、快は当然とばかりに言い放った。かなり痛い。これは拳でなかっただけ、幸運だったかもしれない。

「……そういえば、二人が戻って来たってことは、シャウトも？」  
「うん、戻って来てるよ。レイヴンたちが最後だもん。——ほら、あそこ」

レイヴンが、入り口のほうを指差した。そちらを見れば、シャウトが男性を一人、背負って歩いて来る。雪にまみれてはいたが、覚えるのあるその姿。かなり、衰弱しているように見えた。

「シャウト！……ロディさん……大丈夫なのか？」

背負われていた男性——ロディ「マインドを見てレヒトが言えば、シャウトは小さく頷いた。

「寒さにやられてる。大丈夫だとは思うが……念のために、医師に見せるさ」

「ああ……」

レヒトはロディの肩に手を置いた。長時間、雪の下にいたのか——その体は、ひどく冷たかった。

「……ロディさん。大丈夫ですか？」

ロディが、うつすらと目を開けた。力なく周囲を見渡し、苦笑を溢す。

「……竜の都？ 私は……殺されるのか……」

呟くようにそう言っ、その目を閉じる。

「死なせるかよ。あんただけは死なせない。あんたには、生きててもらわねえと困るんだよ」

言葉を発したのはシャウトだった。その声を聞き、ロディが再び

苦笑した。

「……。生きて、いたか」

シャウトが唇の端を持ち上げた。そんな風に笑うと、尖った八重歯が覗く。

「生憎、俺様はまだ死ぬわけにはいかなえんだよ。——ケアルを遺して、死ねるかっつの」

「……ケアルは生きているのだな……。そうか……。生きて、いるのか……」

ロディの瞳が、優しい光を宿した。その声に含まれた、どこか安堵したような、そして愛おしげな響き。

「……あんた、ケアルが自分のこと愛してないとしても……捨てるのも思っただのかよ」

シャウトが、静かに語る。騒がしい室内に、掻き消されてしまいそうな、小さな声だったけれど。彼の声は、背負われていたロディには、届いたのだろう。

彼が見せたのは、自嘲するような笑み。

「ケアルはなあ……。一度だって、俺様を選んじゃくれなかったんだ。あんたを残してはいけないって……。そうやって……。あんたのこと、愛してたから、だからケアルは……」

「もうやめよ、シャウト」

シャウトの言葉を遮ったのは、いつの間にか近付いて来たシュリーク。隣には、ケアルの姿もある。

「兄貴……。それと、ケアルも……」

ケアルが、冷たくなったロディの手に触れた。弱々しい力で、ぎこちなく——ロディはその手を握り返した。

「ケアル……。おお、ケアル……。！ 温かい……。人の、温もりなど……。いつからか、忘れていたな……」

その頬を伝う、熱い滴を。ケアルが、指で拭った。

「……そなたは、永き時を苦しんだのだな。……。すでに悪夢は去った。もう苦しまずとも、よい」

ロディは、答えなかった。だがその瞳に、狂気の影はない。穏やかで、そして優しい光が満ちていた。

「……」

ケアルが、父親の手をぎゅっと握り締めた。微笑みを浮かべて。

「……微かにだが、怪我也見られる。シャウト、奥の部屋に医師たちがいる。——二人を運べ」

「俺様、運搬係かよ。しょうがねえな。ケアル、一緒に来てくれ」

シャウトとシュリークが二人を連れて、奥の部屋へと向かうのを見届けると、快が服に付いた雪を落としながら言った。

「僕も、怪我人の治癒を手伝って来るよ」

救出が早かったからか、ほとんどの住人は軽傷で済んだようだが、中には意識がなかったり、重傷を負った人々もいるようだ。死者が出なかったことが、奇跡に等しい。

「レイヴンも手伝う」

「じゃあ……」

俺も、と言いかけ、レヒトは口をつぐんだ。快の微笑みを目にしたからである。

「なになな？ レヒト」

誰もが見惚れる、心が蕩けるような微笑を、レヒトに向ける快。

胸の前で握り締められた拳が、彼女の本心を物語っていたが。

「いえっ……なんでもございせん！」

「よろしい。まったく……ちゃんと休んでなよね。それじゃあ、行こうか」

「うんっ」

快はレイヴンを連れて、別室に運ばれた怪我人のもとへと向かい、レヒト一人が残された。部屋の真ん中にぼけっと立っただけは邪魔だろうと、片隅へと場所を移す。

「……休んでろって、言われてもな……」

周囲を忙しく働く人々を見ると、とてもそんな気にはなれないのだ。幸い、腹部の痛みも幾分和らいでいる。少しくらい動いたとこ

るで、支障はないだろう。

「よし。やつぱり、俺もなにか手伝おう……」

そう呟いたレヒトの肩に、背後から手が置かれた。

「ぎゃあっ！」

驚いて飛び上がった拍子に腹部に響いた激痛。声にならない悲鳴をあげてしゃがみこむレヒトを見て、彼を驚かせた張本人は楽しそうに笑った。

「なあにびびってんだよ。俺様だっつの」

にやにやと笑うシャウトは、蹲ったままのレヒトに手を貸す。その手を握って、レヒトは立ち上がった。

「脅かすなよ……。また叩かれるかと思ったじゃないか」

真つ赤な手形の残る頬に手をやって呟けば、シャウトは声をあげて笑った。

もつとも、もしも快に見付かったのなら、今度は間違いなく拳が飛んでくる。紅葉では済まないだろう。

「これまた見事な紅葉だなあ」

「あんただって、いつかケアルちゃんに付けられる日が来るかもしれないぞ」

「ケアルはそんなことしないっつの。あゝ、けどそれもいいかもな。なんつーか『愛の証』みたいな？」

勝手な想像の世界に浸るシャウトの、そのやに下がった顔に、それなら望み通りに手形でも作ってやろうかと、レヒトは一瞬考えた。が、軽くかわされそうなので、やめておくことにした。

シャウトと戦ったレヒトは、彼の強さを体感している。あの勝負、シャウトが手負いでなかったら、レヒトは負けていただろう。

職業上、レヒトもそれなりに場数を踏んではいる。そして、彼には生まれ持った天賦の才がある。

とはいっても、いかんせんレヒトとシャウトの間には、経験値に天と地ほどの開きがあるのだ。埋めることのできない、生きてきた年数、つまりは積み重ねてきた歳の差だ。

「なあ、あんた何歳だ？」

唐突なレヒトの問いに、シャウトは首を傾げた。

「あゝっと……俺様、何歳だったっけか。兄貴に聞けばわかるんだけどよ……確か、三千を超えたあたりで数えるのやめたんだよな」  
「……ああ、そう」

それがどうかしたのか、と聞いてくるシャウトに、レヒトはなんでもない、と返した。

『悠久の時を生きる種族』——その言葉、あながち間違いではないようだ。竜を食らえば不老不死になれると、過去の人間が言っただけだが、たかだか数十年しか生きられない人間から見れば、数千年もの時を生きる竜族を『不老不死』と羨むのも、無理はないかもしれないとレヒトは思った。

誰だって、いつまでも若く、そして永く生きたいという願望は持っているのだから。

人間の命は短い。そして、他種族に比べれば遥かに弱い。だが——いや、だからこそ、残酷になれるのかもしれない。四百年前の、あの天魔大戦のように。

レヒトはシャウトから視線を外して周囲を見渡す。人間と竜の絆。それは、まだ弱く、不安定なものかもしれない。けれど、ぎこちないながらも、最初の一步をここに刻んだ。

それが、レヒトはただ嬉しかった。

「にしたって、信じられねえな。人間と竜が一緒にいるなんて、さ少し前までは、それこそ夢みたいな話だった光景が……今、目の前にあるんだぜ？」

「ああ。けど、夢なんかじゃないんだ。これは現実。……シャウトのおかげ、だな」

竜族が人間に対して、友好的だった理由。シュリークの命令だといふのもあるのだろうが、それなら、人間を嫌悪していただろうシュリークを説得したのは誰なのか。答えは、簡単だ。

「シャウト、あんたが説得してくれたんだろう？ 長老様や、仲間

の竜族を」

レヒトがそう言えば、シャウトはにやつと笑った。

「前に、言っただろ？ 俺様とケアルのハッピーな未来のために、協力してやるってな」

シャウトは子供のように、屈託なく笑って見せた。

「あんたって、なんでそんなに……。諦めたことは、ないのか？」

「ある。ルナルの街で、矢を射られて。わかりあえないって、思ったさ」

シャウトは目を閉じ、静かにそう答えた。

「けどな、あんたたちが来る前——二人で、雪道を歩いてる時に、ケアルが俺様に言っただ。『人を嫌いにならないで欲しい。憎まないで欲しい』ってな。それで十分」

ケアルには、すでに新たな命が宿っているという。二人の間に産まれてくる命が、種族の違いなど関係なく、幸せに生きられる未来は——きっと、やってくるだろう。

「そう、だったな……。あんたはそういう……奴……」

不意に、レヒトの意識が揺らいだ。

次の瞬間には、目の前が、真っ暗になった。体から力が抜けてゆく。体が冷たい。床に、倒れたようだ。

「レヒト!？」

シャウトの声が響く。大丈夫、と言ったはずの声は、言葉にならなかった。

「姫！ 教授！ レヒトの奴が……!」

声が、遠ざかってゆく。冷たい床の感覚を、どこか心地よく感じながら。

レヒトは意識を手放した。

#### 第40話 この手に絆を - 4 -

レヒトが運ばれたのは、彼が最初にいた部屋だった。

寝台に寝かされたレヒトの腹部にある傷を、快の治癒魔法が生み出す淡い光が包み込む。

レヒトの負った怪我は、決して軽いものではない。自身の持つ大剣セイクリッド・ティアを、その身に突き刺したのだから。

「……無茶ばかりして……次に起きたら、絶対に殴ってやるんだから……！」

レヒトは、昏々と眠り続けている。

汗を拭うふりをして、快は溢れそうになる涙を拭った。

もう、どのくらい魔法を使い続けているのだろう。肉体的にも、精神的にも——疲労は、極限に達しようとしていた。だが、やめるわけにはいかない。

気力を振り絞って、快は乱れそうになる意識を集中させる。

額に張り付いた、深いワインレッドの髪。その髪を掬い上げ、レイヴンは濡れた布を、そっとレヒトの額に載せた。

「……大丈夫なのか？」

シャウトが心配そうに、眠るレヒトの顔を覗く。つい先程まで、元気に話していたというのに。

「動き回れるような状態ではありませんでした。完全に、傷口が開いてしまっていましたから。もう一度、縫合はしましたが……」

あの若い女性の医師——タニアが、血まみれの包帯を片付けながら、シャウトにそう説明した。

レヒトが気を失ったのは、大量出血が原因だった。縫合した傷口が開いたことにより出血し、それによって意識が混濁、気絶したのだ。

タニアが傷口を縫合している間、レヒトはずっとうなされていた。快が治癒魔法を使っている今は、落ち着いているようだが、未だ意

識は戻らない。

「ふえ……ぐすつ……レヒト、起きてよお……」

レイヴンはその小さな手で、レヒトの大きな手をぎゅっと握り締めた。大剣を握る戦士の手は、レイヴンよりずっと大きい。いつも力強く、レイヴンの頭を撫でるその手に、今はなんの力もない。

耐えきれなくなったのか、今までずっと漏れそうになる鳴咽を押し殺していたレイヴンが、声を放って泣き出した。溢れ落ちた大粒の涙が、レヒトの頬を濡らす。

「う……ん……」

微かに、その指先が動いた。

「レヒト……？」

そつと、確認するように名前を呼べば、僅かに瞼が震え、ゆつくりとその瞳が開いた。

「よかった……気付いたんだね……」

治癒魔法をかけ続けていた快が、目を覚ましたレヒトを見て、微笑んだ。疲労がどっと押し寄せたのだろう、ふらつく快をシャウトが支えた。

「……レヒト……」

心配そうに見つめる、その視線に気付いたのか。レヒトの手——レイヴンの大好きなレヒトの手が、レイヴンの頭に置かれた。

「……ごめん、な」

レヒトは、快に視線を移した。疲れきっているだろう彼女は、それでも微笑んだ。

「教授、タニア。悪いんだが、ちょっと手伝ってくれよ。他の怪我人のほうにも、人手が欲しいんだ。姫は疲れてるだろうし、少し休んでな」

「うんつ。レヒト、目が覚めたみたいだし。レイヴン、お手伝いしに行くね」

シャウトが二人に声をかけ、部屋を出て行った。気を利かせてくれたのだろう。

「……大丈夫なの？」

「ああ……」

大丈夫だと、レヒトは力なく微笑んでみせた。

「もう、無茶しないでよ？　また倒れたりしたら……本当に……」

今にも泣き出しそうな瞳が、揺れている。決して他人には見せまいと、気丈に振る舞う快が見せた、ほんの僅かな、弱さ。

「……約束するよ」

「うん、約束」

レヒトがそう答えると、快はようやく笑顔を見せた。あの可憐で、そして妖艶な笑顔。レヒトの一番好きな表情だ。

「レヒト、薬は飲めそう？　タニアさん——さっきの女医さんね——が、くれた薬んだけど」

快が掌に載せた、数粒の薬を見せる。レヒトは起き上がろうとするが、体には全く力が入らなかった。

「だめだよ、起き上がっちゃ。……待ってて」

快が近くに置かれていた、水の入ったコップを手に取り、薬と水とを口を含む。

そしてそのまま、口移しでレヒトに薬を飲ませた。

頬が、全身が熱いのは——おそらく傷のせいだけではないだろう。彼女の唇が離れる。惜しい、とレヒトは思った。

「……もう少し」

なにが、とは言わなかった。

快も、聞き返してはこなかった。

もう一度、唇を合わせる。舌に残る薬の苦味など、甘い口付けで消し去ってしまえばいい。

瞳を閉じた快の、深緑色の緩い巻き髪に、レヒトはそっと指を絡めた。

微かな音が響き、訪問者がやって来た。快の姿は、ない。レヒトが眠った後、彼女は自身も休息を取るようにと、戻って来たシャウ

トに勧められ、彼女も一緒に部屋を出ていた。

部屋にやってきたのは、シュリークとタニアだった。

「今は……眠っているようだな。彼の傷について、話があるのとことだったな」

タニアは頷いた。

「彼の傷は、大剣で腹部を刺し貫いたものだと言いました。ですが……気になることがあります」

「気になること？」

「はい」

タニアは新しい包帯の巻かれたレヒトの腹部に目をやった。

「確かに、なにか大きなもの——話にあった通り、彼の剣でしょう——が、貫通したとみて間違いない傷です。しかし、この傷は妙なのです。大切な臓器や筋肉などを一切傷付けることなく、剣が貫通しています」

「それは……。しかし、シャウトの話では、彼はとつさにそういう行動に出たということだ。そんなことは不可能だろう」

「はい。不可能です。事前に計画してあったとしても、寸分の狂いもなく貫くなど……。それがひとつめです」

タニアは言葉を切り、紅い大きな布を取り出して見せた。それは、レヒトの着ていたサーコートと、彼の傷口に巻かれていた包帯である。もともとは白かったはずのそれらは、どちらも、血で真っ赤に染まっていた。

「これはほんの一部です。あれだけの量の血を一度に失えば、竜族でも命はありません。彼が人間であれば……今、生きているはずがないのです。これがふたつめです」

「つまり……彼は人間ではない、と？」

シュリークの問いに、タニアは表情を曇らせた。

「……わかりません。彼は竜族ではありません。精霊人でも、魔精霊でもありません。しかし、人間だとは思えません……」

「確かに、なにか不思議なものを我も感じるのだ。うまく、言葉で

は言い表せないのだが……」

しばし、二人の間に沈黙が流れた。

「……彼は、何者なのだろうか。聞いたところで、話してはくれぬだろうがな」

「……そうですね。一体、何者なのでしょう。あのレイヴン＝カトレイ又という子供のほうも……」

話し声が遠ざかってゆく。小さな音を立てて、扉が閉められた。

「……さあ……何者だろうな」

レヒトは目を開けた。酷い怪我を負ったとはいえ、人並み外れた神経を誇っているレヒトが、誰かが部屋に入ってきて、気付かないはずがなかった。

「……俺の正体……それを一番知りたいのは……」

包帯が巻かれた右腕を、天井に向かって伸ばす。レヒトは下ろしたその右腕で、目を覆った。

「他ならない俺自身だっ……！」

瞳から滲んだ透明な液体が、覆う右腕の包帯に、小さな染みを作った。

レヒトがタニアから『動いてよし』の許可をもらったのは、彼が倒れてから十日ほど過ぎた日のことだった。

レヒト一行とシャウト、シュリークは、ドラゴン・リバティの前で別れの挨拶をかわしていた。

「また、いつでも訪ねてくるといい。そなたたちは我が愚弟の恩人だからな、歓迎する。レイヴン殿も、ぜひに」

「うんっ」

いつの間にか仲良くなっていたらしい二人。レヒトはタニアに監視まで付けられ、最近は寝てばかりだったので知らなかったが、二人は話があっという間。レイヴンの専門的な知識にはシュリークも驚いたようで、二人で他人の入り込めない深い話をしていたと、レヒトは快から聞いていた。

「長い間、ありがとございました。それにシャウトまでお借りしてしまつて」

「構うことはない。連れて行つて、こき使つてやつてくれ」

「……兄貴の台詞は冗談に聞こえねえんだよな」

シャウトがジト目でシュリークを見つつ呟いた。

「悪いな、シャウト」

それに気付いたレヒトが声をかけると、シャウトにつと笑つた。

「いいつてことよ。あんたが恩人なのは事実だし、その体じゃ、天界に辿り着くのに何十日かかるか、わかつたもんじゃねえぞ」

『動いてよし』の許可はもらったレヒトだが、まだ腹部の傷は完全に癒えたわけではなかつた。普通にしている分には問題ないのだが、戦つたり、長時間体を動かし続けることは負担となる。

天界へも、歩いて行くのは困難と判断したシュリークが、シャウトを貸してくれたのだ。

「僕たち、クレセント大橋は渡れないし、ラッキーだったね」

快が小さな声でレヒトに言つた。同意しつつ、レヒトはティークウエルの惨劇と、人々の脅えた瞳を思い出していた。

（……いつか、彼らもわかつてくれるはずだ）

レヒトは、そう信じている。一度は、失いかけた希望。それをもう一度、信じさせてくれたのは、目の前で屈託なく笑う竜の青年。

「それと、ついでに俺様が竜族代表として、レイックリスティーヌにご挨拶つてわけさ」

「お前のような、礼儀のなっていない者を使いにするのは不安だがな……」

シュリークが眉間に手をやってため息混じりに言つた。

「おい……誰のことだ、そりゃ」

「お前以外に誰がいる」

「ああん!? なんだつてえ!？」

睨みあう二人を、レヒト一行は笑いながら眺めていた。

「つと、あんま遅くなんのもまずいな。俺様の速さなら、天界まで

は——三日もあれば行けるだろ」

「気を付けて行くのだぞ」

「おうよ。兄貴こそ、ケアル……それから親父さんと、街の人たちのこと、頼むぜ」

ルナルの街の住人たちは、まだドラゴン・リバティで生活していた。ルナルの街は未だ雪に埋もれたまま、吹雪や雪崩のせいで、復興は難しいらしい。

お互いを理解するにはちょうどいい機会だと、シュリークは言っていた。

「任せておけ」

「よしつ。それじゃあ行くぜ！」

シャウトは巨大な黄金の竜へとその姿を変えた。

その背に、レヒトたちを乗せて。黄金の竜が舞い上がった。

風を裂き、遙か雲の上を進む。竜の咆哮が、澄みきった蒼穹に響いた。

## 第41話 消えた魔物と片翼と - 1 -

空は晴れ渡り、風が優しく街の中を吹き抜けてゆく。

露店などが立ち並び、賑やかな街の中心部。そこから延びる大通りで繰り返される、本日数度目の小さな事件。

「ねえねえ、彼女！ そんな冴えない男なんか放つといてさ。一緒にお茶しようよ」

「悪いんだけど忙しいんだ。それに僕、軽い男って大嫌いなもの」  
声をかけてきた、いかにも軽そうな若い男たちを、快は手慣れた様子であしらう。

隣で買い物袋を抱える『冴えない男』—— もといレヒトは、何度目ともしれない、快と街の男たちのやりとりを眺めていた。

快は男のあしらい方が上手い。レヒトなどが加勢に入らなくとも、大抵は彼女一人でなんとかしてしまうのだ。むしろ、レヒトが余計な口を挟んだりすると、かえって騒ぎが大きくなる。というわけで、彼は先程から、ずっと傍観者を決め込んでいた。

「……平和だ」

隣で起きているちょっとした騒ぎなど、知らぬ顔でレヒトは空を見上げる。

今日はいいい天気だ。天気がいいと、気分も晴れやかになる。レヒトはけっこう単純だった。

「ふう……いい加減、嫌になるなあ」

男たちを追い払った快が、髪を掻きあげる。深緑色の長い髪と真紅のドレスが、柔らかな風に踊った。

「揃いも揃ってみんな同じ台詞だし。はあ……シャウトはナンパ避けになるんだけどなあ……」

快がぼつりと呟いた一言が、レヒトの心に深々と突き刺さった。彼女は聞こえないと思ったのかもしれないが、いかんせんレヒトの耳は、常人より遥かに性能がよくできている。

人々より頭ひとつ分は高いだろう長身、恵まれた体格に、鍛えられた筋肉。精悍な顔立ちに加え、シャウトは街中でも、身の丈ほどもある巨大な戦斧を軽々と背負っている。確かに、シャウトが一緒のときにナンパしてくるような、勇気ある男はいないかもしれない。対するレヒトはというと、身長は平均を少し超える程度、体格も戦いを生業とする者にしては細めであり、風貌に關しても——彼は目立ちはするのだが——特別美形だったりするわけではない。おまけに、今はセイクリッド・ティアも持っていないのだ。

わかつてはいるのだが……やはり、比較されると同じ男として悲しいものがある。それも、よりにもよって快に言われてしまったのだ。レヒトの落ち込みようは半端ではない。

「なに落ち込んでるの、レヒト。早く帰るよ。レイヴンに薬、飲ませてあげなきゃ」

「あ、ああ……そうだな」

レヒトは快の後を、薬や食糧の入った紙袋を抱えて付いて行く。彼らがドラゴン・リバティを出発してから、すでに六日が経過している。だが、一行は未だ天界に到着してはいなかった。

彼らが今いるのは、魔界の領土のひとつ、ウエルネス領。中央大陸に存在し、首都ロイゼンハウエルのあるクリスティーヌ領にも近いウエルネス領は、肥沃な大地が広がる、魔界の中でもかなり裕福な領土であった。

そのためか、この街、エンブレシアにも、警備のために雇われたのだらう傭兵の姿が目立つ——のだが。

「みんな暇そうだね」

昼間から酒を飲んでいる傭兵に目を向け、快が言った。

「魔物がいないんじゃない、やることないだろうけど」

ここ数日、魔物の襲撃や異常気象といった話を全く聞かなくなつた。街の住人の話では、以前は街の外などで度々魔物の姿を見たということだが、今は魔物の影すら見ないという。この付近を襲っていた異常気象——竜巻や突風もなくなつたとレヒトは聞いた。それ

は、四日ほど前からのことらしい。

「四日前、か」

レヒトはその日のことをよく覚えていた。ちょうど、レヒトたちがこの街に辿り着いた日――レイヴンが倒れてしまった日だからだ。原因はわからなかった。普段、あまり外に出ることがなかったというレイヴンには、ここまでの旅路は厳しいものだったのかもしれない。

レイヴンはいつだって明るく、元気よく振る舞っていたから、レヒトはそのことを忘れていた。

自分が気付いてやれば、こんなことにはならなかったかもしれない。

己の至らなさを、レヒトは深く後悔していた。

街の中心から少し南へ行った場所にある小さな宿に、レヒトたちは滞在していた。

倒れてしまったレイヴンを抱え、レヒトたちがエンブレシアに辿り着いたのは真夜中だった。にも関わらず、叩き起こされた宿の主人は、快く部屋を用意してくれたのだ。

レヒトたちが寝泊まりしているのは、宿にひとつだけある大部屋である。

「ただいま」

「おう、おかえり」

寝台に腰かけ、戦斧の手入れをしていたシャウトが顔をあげた。

レヒトたちがエンブレシアに滞在して、すでに四日目。昨日まで、買い物にはレヒトが怪我人であるということも考慮して、シャウトが付き合っていたのだが、今日はレヒトが無理を言い、付いて行った。

あくまで表向きは体を鈍らせないように、軽い運動をするという理由で。

本当は、子供じみた独占欲だった。この旅が終わってしまえば、

彼女と会うこともなくなるだろうから。少しでも長く、彼女と一緒に、同じ時間を過ごしていたかった。

その仕草、その表情、その香りを。胸に、記憶に焼き付けて。

（こんな時に……我ながら不謹慎だとは思うがな……）

レヒトは持ってきた紙袋を部屋中央にあるテーブルに置いた。

紙袋のひとつから、赤く熟れた果物がテーブルの上に転がった。

寝台に寝かされたレイヴンに、そっと近寄る。微かに上下する薄い胸を見て、レヒトは安堵した。

一時は、本当に危険な状態だったのだ。医師に見せても原因不明と言われ、レヒトたちはただ祈るしかなかった。それに比べれば、今はだいぶ落ち着いている。

テーブルに備え付けられた椅子を引っ張ってきて座り、眠るレイヴンの顔を見つめた。心なしか、幼い顔は蒼白く見える。

心が、締め付けられるような感覚を、レヒトは覚えた。もしかしたら、レイヴンを失うかもしれない。

そんな状況に陥って、いかにレイヴンが大切な存在であったのかを、レヒトは改めて痛感していた。

「……レイヴン……」

レイヴンの額の布を水に浸し、再び載せてやる。

「教授、まだ起きそうもないか」

側に来たシャウトが、レイヴンの顔を覗き込む。

「ああ……」

握ったその小さな手は、熱のせい、ひどく熱かった。

「……僕の魔法が効かなかったから……こんなことになっちゃったね……」

快が呟いた言葉に含まれた、自責の念。

レイヴンが危篤状態に陥ったのは、快が治癒魔法を使った直後だった。それが直接的な原因かどうかはわからなかったが、快はそのことで自分を責めているのだろう。

「君のせいじゃないさ、快。君は精一杯やってくれたじゃないか。」

自分を責める必要は、ないよ」

苦しそうにするレイヴンを見かねて、快に治癒魔法を使って欲しいと頼んだのは、レヒトのほうだったのだから。

「だけど……治癒魔法が効かないなんてこと、あるのか？」

レヒトが倒れたときも、快は治癒魔法を使っている。彼女に魔法をかけてもらうと、傷の痛みは和らいだし、治りも早かったようにレヒトは感じていた。

「正直、考えられない。治癒魔法は精霊を対象の体内に送り込んで、自然的な治癒力を高める魔法……。この世界の全ての生き物は、みんな精霊のエネルギーを受けて生きてるから……」

「その力を送り込んで、悪化するとは考え難いな」

快とシャウトが揃ってレヒトの言葉を否定した。

「この世界と、そしてそこに生きる生き物は、遙か昔、三闘神によって生み出された。三闘神の力である精霊がなければ、存在することすらできないの。けどね、ひとつだけ例外がある」

快の言わんとしていることを、レヒトはなんとなく、悟っていた。だが、それを理解することを、頭が拒否している。

「……『神の理から外れしもの』……要するに、魔物に治癒魔法——神の力である精霊を送り込めば、弱体化……場合によっては消滅するだろうな……」

シャウトが呟くように、言葉を続けた。

「……」

なにも答えないレヒトの肩に、シャウトが手を置いた。

「レヒト。これはあくまで推測に過ぎない」

「そうだよ。僕だって世界中の人全員に治癒魔法を使ってみたわけじゃないし。全員に効くか、どうかなんて断言できない。それに、レヒトは無駄に効きがよかったんだよね。単に体質の問題かもよ？」

快が、悪戯っぽくウィンクして言った。

「そうだよな。……ありがとう、二人とも」

レヒトがそう言葉にすると、二人が笑顔を見せた。

「レヒトが暗い顔してると、僕たちも辛いんだよ。だから元気出して」

「それに、教授が心配するだろ？ あんたが倒れたときなんか、ずっと泣きっぱなしだったんだからな」

自分のことを、こんなにも、本気で想ってくれる仲間がいることを、レヒトは嬉しく思った。

「ああ……」

レヒトは再びレイヴンのほうに視線を戻した。

「……早く元気になれよ、レイヴン」

眠り続けるレイヴンの手を握る指先に、僅かに力を籠めれば。それに反応したように、レイヴンが微笑んだような気がした。

## 第42話 消えた魔物と片翼と - 2 -

「ちょっといいかい、お客さんたち」

扉を叩く音とともに声がかけられ、恰幅のよい女性が部屋に入ってきた。この宿の女将である。

「あの子の様子はどうだい？」

「まだ、目は覚めていません。けれど、今はだいぶ落ち着いています」

レヒトがそう答えると、女将は安堵したようだった。

「そうかい、よかったよ。うちにもこれくらいの子がいるからねえ。他人事とは思えないんだよ」

眠るレイヴンに向けられた女将の眼差しは、とても優しいものだった。自身の子供を重ねているのかもしれない。

しばらくレイヴンを見つめていた女将が、ふと思い出したように口を開いた。

「そうそう。お客さんたち、暗くなつてからは外に出るんじゃないよ」

女将の言葉に、レヒトは内心首を傾げた。魔物は四日前に姿を消したという話だったはずだし、ウェルネス領では賊徒の噂も聞かない。

「けど、確か魔物はいなくなつたって話だったような……」

レヒトと同じく疑問に思つたらしい快が女将に聞き返すと、女将の表情が曇る。

「それがね、魔物じゃないんだよ。『片翼』が現れたって、みんな大騒ぎさ」

（……片翼？）

レヒトは再び首を傾げた。とりあえず快のほうを見ると、彼女は少し驚いたような顔をしていた。彼女には片翼がなにかわかるらしい。

「この街に、ですか？」

女将は頷いた。

「そうなんだよ。街外れで見た人がいるらしいんだ。だから、くぐれも気をつけるんだよ。あ、それと。その子が目を覚ましたら言っておくれ。食べやすそうなものを作るからね」

そう言い残して、女将は部屋を出て行った。階段を降りてゆく足音が遠ざかる。

「快……片翼っていうのはなんなんだ？」

ストレートに聞いてみれば、快はどこか呆れたような顔をした。シャウトも苦笑している。

「レヒトって……レイヴンもそうだけど、世間知らずっていうか、なんていうか……」

あのレイヴンと同等の世間知らず扱いをされたことに、レヒトは衝撃を受けた。

「うーん……片翼について説明するには、天魔大戦と天界人のことも説明しなきゃいけないんだけど……」

「天魔大戦の概要と、天界人の製造については大方知ってる。ラグネス様が、話して下さったからな」

天魔大戦は、一人の狂った男によって引き起こされた。その男――ロライザ・クリスティー又は、自身の野望のために、精霊人の力を人間に注入し、天界人という、強力な力を持った新たな種族を産み出した。そのロライザの野望を打ち砕いたのが、英雄レイ・クリスティーなのである。

これは誰もが知っている話だ。吟遊詩人の詠うサーガでも、最も有名で、また最も人気のある話だろう。

「そういえば、レヒトの主はラグネスさんなんだよね。じゃあ、そのあたりは割愛するよ」

そう前置きして、快は話し始めた。

「天界人を造り出したのは確かにロライザなんだけど、全員が全員、彼に従ったわけじゃないの。中にはロライザを裏切ってレイについ

た人々もいて——むしろ、レイと一緒に戦った人々が、今の『天界人』なの。ロライザに従った人々は、彼とともに、歴史の表舞台からその姿を消すことになったんだけど……」

「そのロライザに従った連中、どうなったと思う？」

いつの間にか、部屋の中央にあるテーブルの側まで戻っていたシヤウトが、テーブルの上に転がっていた熟れた果物を手で弄びながら、レヒトにそう問いかけた。

「そうだな……処刑された、とか？ あ、シヤウト。俺にもひとつ」

「妥当な答えだな。けど外れだ。……お、けっこう美味しいな、これ」  
投げ渡された果物を、レヒトは一口かじった。しやりしやりとした食感と、甘い果汁が口いっぱい広がる。

「甘い。……じゃあ、どうなったんだよ」

「敵だったからって、あっさり処刑するような男なら、ここまで称えられたりはしなかっただろうな」

「……食べるか喋るかどっちかにしなよね」

生返事を返すシヤウトの頭に、快の投げたワインボトルのコルクが命中した。

「シヤウトの言う通り、レイは処刑しなかった。けど、そのまま無罪放免ってわけにも、いかなかったんだよ。民が、それを許さなかったから」

「……そうだろうな」

それはレヒトにもわかった。ロライザに従った天界人といえば、レイとともに戦った人々にとっては、自分たちを弾圧していた相手である。許せと言われて、簡単に許せる相手ではなかったのだろう。なんらかの処罰がなければ、民は納得しない。そういうものだ。

「仕方なしに、レイは彼らの翼の片方を切り落とし、天界から追放することにしたの。大陸から離れた——中央大陸の遙か南東にある、地図にも載っていない小さな島にね」

「なるほど。それで『片翼』……けど、どうして両方の翼を切らなかったんだ？」

快は首を傾げて見せた。

「うーん……どうしてだろう。さすがにそこまではわからないな」

「教授なら、わかるんじゃないか？」

シャウトが言っていると、快もぽん、と手を打った。

「そっか。レイヴンならわかるかも」

「レイヴンが？」

レヒトは正直、半信半疑だった。

まあ、レイヴンは一応『神の頭脳を持つ』と称えられる人物である。それだけを聞くと、確かにレイヴンにならわかりそうなものだが、普段のレイヴンを知っているレヒトにしてみれば、それも首を傾げたくなるような称号である。

「あ、レヒトは聞いてないんだっけ」

快が思い出したように言っていると、シャウトが頷いた。

「あんたはずっと寝てたからな。教授、ドラゴン・リバティにいるときに、兄貴と他人の入り込めないような無駄に深い話、してたんだぜ。魔物が呪文を必要としないのも、体内で自己生成してるわけじゃないとか、どうとかこうとか……」

「……意味不明だな」

魔物は体内でエナジーを自己生成しているために呪文を必要としない、というのは、ヘヴンの研究者たちの間の定説である。

レヒトにはどう違うのか全くわからないが、要するにレイヴンはそれに異を唱えたということか。

「だろう？ 兄貴も驚いてたからな。ま、教授の知識量は半端ないってことだ。ただ少しばかり偏ってるだけで」

（……あれは偏り過ぎだろう）

レヒトは内心、そう思った。

「それにしたって……二人も詳しいんだな」

両親が天魔大戦の経験者である快はともかく、シャウトが意外と詳しいことにレヒトは驚いた。竜族は天魔大戦に関わらなかったという話だったからだ。

レヒトの心の内を読んだかのように、シャウトがふたつめの果物をかじりながら答えた。

「確かに、竜族は天魔大戦には直接的に関与してない。被害を受けてないからだ。ただ、こつちにも被害が出るようなら、なにかしら手を打つつもりだった。そういった意味で、兄貴が世界事情に精通してたからな」

「そういうレヒトは、ラグネスさんから聞かなかったの？」

もったもな疑問かもしれない。レヒトの主であり、育ての親でもあるラグネスも、天魔大戦の関係者である。

「……。ラグネス様は、あまり天魔大戦のことを、お話にならなかったからな……」

ラグネスは当時のことを語るとき、いつも悲しそうな顔をしていた。だから、レヒトは自分から聞くような真似はしなかった。

「そうかもね。パパも、天魔大戦のことはほとんど話さなかったから」

「んじゃあ、姫は誰から聞いたんだ？ 翼を切り落としたって事実是有名だけどよ、流刑にされた場所まで知ってるなんざ、関係者くらい——それも、一部の連中だけだろ」

「多分、名前を出してもわからないと思うけどね。僕は疾風から聞いたんだよ」

——疾風。その名前はレヒトの胸に、小さな棘となって刺さる。その名前を口に出すとき、快はいつだって、少し悲しそうな、そして——愛しそうな顔をするから。

「はは、ん、さては姫の恋人だな？」

にたりと笑うシャウトと、それに笑顔で応じる快から、レヒトは視線を外した。

チクチクと胸を刺す微かな痛み——それを取り除く方法を、レヒトは知らなかった。

side story 6 業を背負う者

降り続く雨は、徐々にその勢いを増していた。

痩せた大地が続く、辺境の地。細い道の脇に立つ、一本の痩せた木の下に、左の背に純白の翼を持つ幼い少年が座り込んでいた。

服はボロボロで、体は傷だらけ。顔には、殴られたような痕もあった。

その隣には、少年によく似た少女が横たわっている。少女の右の背にも、少年と同じ純白の翼。

苦しそうに息をする少女の手を、少年はぎゅっと握り締めた。その命を、繋ぎ止めるように。

ふと、道を歩いてくる人影を見付けて、少年は立ち上がった。そのまま、行く手を遮るように立ちはだかる。

『……なんの真似だ』

道を遮られた男が、少年にその瞳を向けた。金色の鋭い瞳に射抜かれ、少年は身を強張らせた。

『……たすけて……』

少しかすれてはいたが、辛うじて、言葉になった。

『お願い、助けて！ 死んじゃうよ！』

少年は男に向かって、叫ぶようにそう言った。

溢れた涙が、雨に混じって大地に染み込んだ。

『……』

男は、答えない。だが、立ち去ろうともしない。

『……お願い……助けて……。妹を助けて……。！』

少年は、膝を付いた。頼る者のない少年にとって、男は最後の希望だった。

男を直視できずに、うつむいた少年は――『妹』という言葉に、男の眉が僅かに跳ねたことに気付かなかった。

『……見せてみる』

『えっ……』

かけられた言葉に、少年は顔をあげた。

『見せてみると言っただ。お前の妹はどこだ』

『あ……えっと、こっち！』

少年は少女の元へと走って行く。男は黙ってその後を追った。

木の下に寝かされた少女の命の灯は、今にも消えそうだった。

『……』

男が、横たわる少女の額に手を当てる。すると、少女の顔から、

苦悶の表情が消えた。

それを見て、男は立ち上がる。

『……これでもいい』

『ありがとう、お兄さん！』

少年は、ようやく笑顔を見せた。

『……罪を犯したのは遠い過去の者だというのに、こんな幼子まで

業を負わねばならないのか……』

男が小さく呟いた言葉は、喜びに湧く少年には届かなかった。

男の視線に気付いたのか、少年は自身より遥かに背の高い男を見

上げた。

『片翼の子よ……私とともに、来る気はないか』

唐突な問いに、少年は首を傾げた。

『私は、この世界に真の平和をもたらず。争いのない世界——お前

たちのように、過去の罪を背負わされる者もなくなる』

『……えっと……』

男は、少し考えるように腕を組み。言葉を選んで少年に語る。

『……差別や偏見、争い……そういったものを、全て排除し……こ

の世界を、本当の意味で楽園とする』

『差別……』

少年が助けを求めた村人から受けたのは、翻弄と嘲笑の言葉。そして、暴力。

男の言う、真の平和——そんな世界なら、自分も、そして妹も、

認めてもらえるのだろうか。侮蔑の言葉を浴びせられることも、なくなるのだろうか。

『私は戦わなければならない。そのために、私は力を求めている』

『……ぼくにできる？ あ、けど……』

少年は、安らかに眠る少女を見つめた。

『安心しろ。……これより後に、ここを旅人が通る。お前の妹は、その旅人が連れて行く。戦いを終え、平和を実現させ……そうして迎えに行けばいい』

少年は、頷く。

『……お前の名を聞いておこうか』

『ぼくはミヤだよ。お兄さんは？』

男は小さく笑った。少年が初めて見た、男の笑み。

『私の名は『大いなる意思』……行くか』

そう言って歩き出した男。少年は一度だけ振り返り、少女の額に口付ける。

『……いつか絶対に、迎えに来るからね』

幼い少年に、男の語る理想など、難しいことはわからない。

少年は、ただ単純に嬉しかった。男が、妹を救ってくれたこと。自分を必要だと言ってくれたこと。

『じゃあ、ぼくは行くね』

いつの間にかずいぶんと小さくなっていた男の後ろ姿。少年は、急ぎ足で追い掛ける。

男に恩返しができるなら、なんだってしよう——少年は、幼心にそう誓った。

### 第43話 幼賢者の教え

目を覚ましてから、どれほどの時が流れただろうか。寝台に寝転がったまま、二度、三度と寝返りを打ち――。

「……。寝られない」

仕方なしに、レヒトはもぞもぞと起き上がった。

正確な時刻はわからないが、おそらく真夜中を回ったあたりだろう。

（……また、あの妙な夢だ。それに片翼……昼間、あんな話をしてたからか？）

あの夢に決まって現れる、白髪の男。知らないはずなのに、なぜか懐かしさを感じる、夢の記憶。

「……なんなんだ、あの夢は……」

「また夢見たの？」

胡坐をかき、腕を組んでうんうん唸っていたレヒトに、横手から声がかけられた。

「ああ……って、レイ……！？」

レヒトが思わずあげかけた声を、声の主――レイヴンが、指を口許に当てて制する。

「しーっ。快とシャウトが起きちゃうよ」

はっとして、レヒトは大部屋の反対側――レヒトとレイヴンの向かい側の寝台で眠る二人に視線をやる。二人は熟睡しているようで、起きる気配はない。

まあ、シャウトはともかくとして、快が起きてくるとは思えない。彼女は起こさなければ、なにか事件でも起こらない限りは、延々と寝続けるだろうから。

「悪い、起こしたか？」

「ううん。さつきから起きてたから。年甲斐もなくごろごろ転がってるレヒトが面白くてさ」

「……余計なお世話だ」

実際には、普通サイズの寝台に、大の男であるレヒトが転がれるだけの広さはないので、右を向いたり左を向いたりしていたというのが正しい。

連続でやっていれば、転がっているように見えなくもないか。

「いつから起きてたんだ？」

レイヴンは首を傾げた。

「ん……いつからかな。外はもう真っ暗だったよ。レイヴンが起きたときは快とシャウトがお酒飲んで、それでしばらくして二人とも寝ちゃって……それでまたしばらくしてレヒトが起きたから」

「……いつまで飲んでたんだ、あの二人は」

真っ昼間から酒盛を始めた二人に付き合わされ、レヒトは半ば気絶するように眠りに落ちたことを思い出した。あれはまだ日が沈む前の出来事である。

旅を続けるためにレイから貰っている金貨のほとんどが、酒代に消えているのではないかとレヒトは一瞬考え、やめた。

世の中には知らないほうが幸せなことがたくさんあるのだ。

「レヒトの見る夢ってさ、どんな感じなの？」

前から聞こうと思ってただけで、と。側に置いてあった小さなランプに魔法で火をともしながら、レイヴンがそう問いかけた。

ランプの光が、部屋をほんのりと照らし出す。

「そう、だな……。夢の内容は……断片的なんだが……。俺の見る夢には、必ず白髪の男が現れる。白髪の男と……あつ」

あげかけた声を、レヒトは飲み込む。

「どしたの？」

「いや、なんでもない」

怪しい、と顔を覗き込んでくる。レヒトは笑って誤魔化した。

（そう、夢だ。あの女性——どこかで見たような気がしたが、あれは夢の中で見たからだ）

今から少し前、ティークウエルの街で盗賊団と対峙したレヒトた

ちを救った、謎の女性。彼女は、夢で見た女性によく似ていた。もつともあの時、あたりは暗かったし、女性の名前も聞かなかったので、他人の空似かもしれないが。

「むう……なんでもないならいいけど。じゃあね……今までに見たその夢、はつきり思い出せる？」

「ああ。全部……とは言わないが、大抵のことはな」

「そっかあ……夢の内容なんて、普通は起きてすぐに忘れちゃうものなんだけどね」

レイヴンの眼がキラキラと輝いている。興味津々といった様子だ。「夢っていうのはね、その人の精神状態を表すものなんだ。たとえば不安な時とか、緊張してる時なんかは、嫌な夢を見るし。幸せな時とか、嬉しい時には、いい夢を見る。けど、レヒトが見る夢は、それとは違うみたい」

「普通に見るような夢とは違うってことか……？」

腕を組み、考え込むように眉根を寄せる。

身体能力や反射神経などは、もはや人の領域を超えているレヒトだが、どうやら頭の中身は極めて普通であるようだ。

「んつとね。要するに——双子なんかで稀に起きたりする現象なんだけど、片方が体験したことを、もう片方が夢に見たり。他には、前世の記憶なんかを、夢で見たりすることもあるらしいよ？」

「双子に、前世……」

なにか思い当たるふしは、と聞いてくるレイヴンに、レヒトは首を横に振る。

「ま、そうだよ。これといって思い当たるふしがないから、悩んでるんだし」

「そうだな」

レヒトは苦笑した。だが、頭の中はすっきりとしている。

明確な答えが得られずとも、一人で悩むよりは、誰かに聞いてもらったほうが楽になるのかもしれない。

「レイヴン。もうひとつ聞いてもいいか？」

「なあに？」

レイヴンは寝台に寝そべり、こてんと転がった。小柄で華奢なレイヴンなら、寝台の端から端まで使えば、何回転かできるだろう。「昼間、快とシャウトから聞いたことなんだけどな。——片翼って、知ってるか？」

一応、聞いてみる。知識の量は半端ないようだが、なにしろレイヴンは一般常識が欠落している。知らないかもしれないと思ったレヒトだが、レイヴンの返した答えは肯定だった。

「知ってる。常識だよ。知らないのなんてレヒトくらいじゃないの？」

「うっ」

快だけでなく、レイヴンにまで常識知らずの烙印を押されたレヒト。なにか言い返してやりたいところだが、事実なので言い返せない。

「……聞きたいのはその片翼についてなんだ。レイ様は、どうして両方の翼を切らなかったんだ？」

「だって、両方切ったら魔界人と区別つかなくなっちゃうじゃん」

あまりにあっけない答えに、レヒトはぽかんと間の抜けた表情を浮かべた。

「……それだけ？」

「嘘だよ」

面白そうに笑うレイヴンの頭を、レヒトは小突く。

「本当はね、流刑にされた場所に秘密があるの。場所、知ってる？」

「中央大陸の遙か南東にある小さな島だって、快に聞いた」

レヒトが答えると、レイヴンは少しばかり残念そうな顔をした。

「なーんだ、知ってたの。その島にはね、焰を噴く『死の山』があるんだよ」

さすがにこれは知らないでしょ、と。左右に指を振りつつ、レイヴンが言う。

「焰を噴く……山？」

突拍子もない言葉だ。

「うん。ほんととは違うんだけど、ほとんどの研究者は、そういう風に思ってるみたい。実際に 噴き出すのは、焰じゃなくて、大地の奥にある……レヒト、付いて来てる？」

「……」

「……」

無言のまま、しばし二人は見つめあう。

「……ま、いつか」

先に目を反らしたのはレイヴンのほうだった。

「えっと、翼を両方切らなかった理由だね。実はね、あの翼を両方切っちゃうと、魔法が使えなくなるんだ。あの翼自体が、魔法を使うための媒体ってわけ」

「翼の枚数が多いほど強い力を持つと言われるのは、そのためか」

「一对の翼しか持たぬ、他の天界人と違い、三対六枚もの翼を持つ、天界最高責任者レイ・クリスティーヌ。」

『最強』の名を欲しいままにする彼の強さは、どれほどのものなのか。

「そうだよ。ちなみに翼を失うとね、精霊を感知することもできなくなるんだ。両方の翼を切らなかった理由が、それ」

「つまり……精霊を感知する必要があったってことか？」

「そういうこと。レヒトにしては上出来だね」

レヒトの答えに満足したように、レイヴンは頷いた。

「『死の山』が焰を——ほんととは違うけど、レヒトが混乱しそうだから、焰ってことにしとくよ——噴く時、精霊が大きく乱れるんだって。だから、その焰から逃れるために、精霊を感知する必要があるんだよ」

「……なるほど。なんとなく、理解できた気がする。ありがとう、レイヴン」

「えへへ。なんかレヒトにお礼言われると変な感じ」

にこにここと、満面の笑みを浮かべるレイヴン。その無邪気な笑顔

に、レヒトの心は安らぐ。

レイヴンには、いつだって笑っていて欲しい。それは、レヒトの本心からの願いだった。

（レイヴンが笑っていてくれれば、それでいい。それだけで、俺は救われる）

見つめる視線に気付いたのか、レイヴンが小さく首を傾げた。

「どうかした？」

「いや、なんでもない。……少し、散歩をしに来る」

ここのところ、俺もあまり外出を許してもらえなかったからな、とレヒトは悪戯っぽくレイヴンに耳打ちした。

「いいなあ。レイヴンも一緒に行きたいなあ」

レイヴンが羨ましそうにレヒトを見上げる。退屈で動きたいのはわかるのだが、また倒れられてはレヒトの心臓に悪い。

自分が倒れた際に、仲間がどんな心境でいたのか。レヒトは今更ながらに、それを理解した。

「……今は夜だし、大事をとって、今日はもう寝たほうがいい。明日、もう一日だけ休みをもらって。そうしたら、明日は一緒に散歩に行こう。だから今日は休むんだ」

「うんっ、わかった。快とシャウトを説得するのはレヒトの仕事ね」それは大変な仕事だな、と。レヒトは苦笑する。

「すぐに戻ってくるけど、ちゃんと休んでるんだぞ」  
「はい」

レイヴンが火をともした小さなランプを借りて、快とシャウトを起こさないように、レヒトはそっと部屋を後にした。

#### 第44話 愛しき貴女に花束を - 1 -

時刻はすでに真夜中を回っているが、エンブレシアほどの規模の街では、その灯りが消えることはない。

旅人や傭兵などを相手にするような、いわゆる『夜の顔』があるからだ。

レヒト一行が滞在している宿も、一階部分は食堂兼酒場になっており、宿泊している客などで、それなりの賑わいを見せていた。

獣油の燃える独特の匂いと、傭兵たちの飲む安酒の強い匂いとが鼻をつく。

酒に弱いレヒトなどは、この匂いだけで酔ってしまいそうだ。

「おや、お客さん」

その匂いから逃げるように扉のほうへ向かうと、酒と簡単な料理を、厨房から運んできた女将に呼び止められた。

「ランプなんか持って、どこへ行くんだい？」

「少し、歩きに行こうかと思ひまして。すみません、勝手にお借りして……」

「ああ、それは構わないよ。自由に使っておくれ」

本来、こういった宿の部屋に備えつけられているランプは、泊まり客が使うためのものなのだ。

旅人の間では常識なのだが、どうやらレヒトはそのことを知らなかったようである。

これではレイヴンと同等の世間知らず扱いをされても、仕方ないかもしれない。

「魔物がいなくなったとはいえ、片翼が出たっていうからね。まあ……襲われたって話は聞かないから、大丈夫だとは思っけど」

側にある二人組の男女が座るテーブルに、注文されていたのだろ  
う酒と料理とを置きながら女将が言った。

「安い酒や、簡単なつまみなんかでよければうちでも出してあげら

れるけど。花籠にでも行くのかい？」

投げかけられた言葉に、レヒトは赤面した。

「ち、違いますよ。歩きに行くだけです」

真っ赤になつて慌てて否定するレヒトを見て、女将は豪快に笑つた。

側のテーブルの、傭兵だろう女性が、そんなレヒトに視線をやつて微笑む。健康的に焼けた肌が目に入り、レヒトはますます頬が熱くなるのを感じた。

彼女の向かいに座る男に、微妙に敵意の籠つた視線を向けられ、レヒトは軽く咳払い。

「それじゃあ、俺は失礼します」

「気を付けて行くだよ。あ、ちなみに花籠があるのは街の東側だからね！」

「だから違いますって！」

女将ばかりが客にまで笑われ、レヒトは店から逃げ出した。

傭兵たちの賑やかな笑い声が、扉越しに聞こえてくる。

いつ消えるとも知れぬ命。常に死と隣あわせの傭兵たちは、その人生を満喫するように騒ぎ、笑う。

それは、ともすれば、迫りくる死の恐怖を、忘れようとするからなのかもしれない。

「さて、どうするか……」

久しぶりの自由だ、とレヒトは満天の星が煌めく空を仰ぐ。

眠れないときは、温かい食事でもとって横になればいいのだが、なんとなく、このまま寝てしまうのは惜しいと思つたのだ。

一人で気兼ねなく出かけられるのは久しぶりだし、星を見ながら歩くのも、いいかもしれない。

「よし……少し歩くか」

目的地も決めず、レヒトはランプの明かりを頼りに、ぶらぶらと歩き始めた。

「ちょっと、放しなさいよ！」

そんな女性の声が聞こえてきたのは、街の中心部へ続く大通りから外れて、少しばかり歩いたところだった。

「ん？」

足を止めて声のしたほうを見れば、女性と男たちが揉み合いになっ  
っていた。

「なんだよ、いいじゃねえかよ」

傭兵なのだろう、背中に剣を背負った男が、乱暴に女性の手を引く。

（……どこにでもいるんだな、ああいう男は）

同じ男として、少しばかり情けない気もする。嫌がる女性を助  
けようかと、レヒトが歩き出す前に、頬を叩く小気味よい音が乾いた  
空に響いた。

「いい加減にしな！ アタシはそんなに安い女じゃないよ！」

レヒトは思わず立ち止まった。頬を叩かれた男も、呆然とした様  
子だったが。

「なにしゃがる！」

周りにいた仲間だろう男のうちの一人が、女性に食ってかかるう  
とするも、頭に強烈な一撃を受け、白眼を向いて昏倒した。

「なんだ！？」

もう一人の男が慌てて振り返るが、その鳩尾に膝が食い込みあっ  
さり気絶。

最後の一人、女性に頬を叩かれた男の意識はすでない。という  
のも、他の二人の男たちが女性に気をとられている隙に、こっそり  
とこの男を蹴り、更に今まで踏ん付けていたからである。

「やれやれ。女性に対する礼儀を知らな過ぎる」

「アンタ……」

倒れた男たちから、レヒトは女性のほうに視線を移す。

栗色の髪に、夕陽のような綺麗な色合いの瞳。真っ赤な紅を差し  
た唇。胸を強調するような作りの薄いドレスを身に纏っている。

彼女は、夜の顔に生きる女性なのだろう。とすると、先程しばき倒した男たちは、彼女の客だったのか。

三人の男をしばき倒したレヒトを、女性は驚いたように見つめていたが――その唇が笑みを形作り、彼女はレヒトに思いきり抱きついていた。

「うわっ！」

バランスを崩しそうになるが、ここは男の意地、なんとか体勢を保ち、女性の肩に手を置いて、それとなく引き離す。

「大丈夫ですか？」

そう問いかけたレヒトに、女性が妖艶に笑う。

「平気。助けてくれて、ありがとう」

「女性に対する態度じゃないと思っただけですから。じゃあ……」失礼します、と言いかけたレヒトの腕を、女性が掴んだ。

「さよなら、だなんて連れないこと言うのはよしなさいよ。少し、店に寄っていけば？」

真っ赤な唇が微笑む。

「ええっ！？ い、いや……俺は……」

「うふふ、アンタ純情なのね。やましい意味じゃないわよ。助けてくれた礼くらいしたいの」

女性はレヒトの返答を待たず、ぐいぐいと引つ張っていく。

彼女が案内したのは、やはりひとつの花籠だった。

店の中には、客を待っているのだろう若い女性が何人か。

レヒトが連れて行かれたのは奥の個室。簡素な椅子とテーブル、

そして更に奥へと続く扉があるだけだ。

「アタシたちが休憩に使う部屋よ。誰も入って来ないように言っておいたから」

「あ、はい……」

ガチガチに固まっているレヒトに、女性は笑みを溢す。営業用の笑顔ではなく、本心から笑っていることがわかる。営業用の笑顔なら、もっと綺麗に笑うだろうから。

「そんなに緊張しなくっていいわよ。酒でいい？」

「俺は、酒はどうも……」

女性はまた笑った。

「そ。じゃあミルクがいいわね。少し待っててちょうだい」

笑いながら、彼女は奥の部屋へと消えた。

「……ふう」

軽く息を吐き、持ってきたランプの火を吹き消す。緊張で高鳴る胸を静めつつ、レヒトは椅子に腰かけて女性を待った。

しばらくして戻ってきた女性の手には、湯気を立てるふたつの力ツプ。

「アタシも、酒よりはミルクが好きなのよね」

そう言って、カップをテーブルの上に置き、レヒトの向かい側に座る。

「さつきは助けてくれてありがとう。アタシの名前はマリアン。ここで働いてるわ」

「俺はレヒト。仲間と一緒に、旅をしています」

「旅人ねえ。こんな時間に出歩いているから、暇を持て余した傭兵かとも思っただけど……」

女性——マリアンが、温かいミルクを飲みながら言った。レヒトも口を含み、味を確かめるように舌先で転がす。

味わって飲んでいるのではない。毒が含まれていないかどうか、確かめているのだ。

ラグネスの護衛役であるためか、レヒトの料理や飲み物にも、毒が仕込まれることが何度かあった。

毒を疑ったわけではない。知らず知らず、癖になってしまっているだけである。

「よく考えれば、あんな美人な女の子がいるのに、花籠に来るわけないわよね」

美人な女の子、とはレヒトの思いつく限り快だけが、マリアンとは今が初対面のはずだ。

「昼間、アンタと女の子が一緒にいるのを見かけたのよ」

「ああ、それで俺と快のことを」

納得するレヒトを見て、マリアンが悪戯っぽく問いかけた。

「恋人？」

「……いえ……」

レヒトは、少し哀しげに笑う。

「快——彼女の名前です——には想い人がいるんです。これは、俺の……」

続く言葉は、声にならなかった。なんとなく、それを認めるのが、辛くて、哀しくて。

「……そう」

また一口、マリアンがミルクを飲む。

「マリアンさんには、いないんですか？」

「アタシ？」

声に出してから、レヒトは後悔した。花籠の女性であるマリアンにとって、その言葉は残酷すぎる。

「ふふふ。アンタ、どれだけアタシのこと若く見てくれたのかしら？」

言葉の意味を図りかねて、レヒトが首を傾げると、マリアンはウインクして見せた。

「アタシには、アンタと同じくらいの息子がいるのよ」

「ええっ!？」

思わずマリアンを凝視してしまう。二十三のレヒトと同じくらいということとは、少なくとも二十歳前後だろう。

「アタシが十五のときに産んだ子なのよ」

どう反応していいかわからずに、瞬きを繰り返すレヒトを、マリアンは面白そうに眺めてまた笑った。

第45話 愛しき貴女に花束を - 2 -

「けど、驚きました」

ようやく落ち着きを取り戻したレヒトが言うと、マリアンは嬉しそうに笑った。彼女はよく笑う。

「アタシの息子も、アンタと同じ赤毛。父親に似たのね」

レヒトを見て、マリアンは目を細めた。年が近いという息子を見ているのか、それとも――。

「あの男も旅人だった。一夜限りってわかってたのに、アタシったら。その男が別れ際に言った『迎えに来る』なんて台詞信じて。アタシも、当時はそのくらい純粹だったわけよ」

「……マリアンさん。すみません……俺、考えなしに……」

「いいわよ、そんなこと。なんか、久しぶりにガレオンと会ってるみたい」

マリアンの息子の名前だろうか。

「……息子さんに、ですか？」

「そ。今は離れて暮らしてるのよ。いくら金がないからって言っただって、母親が花籠の女なんて嫌だろうし……仕方ないわね」

「そんなこと、ないですよ。息子さんだって、絶対にそんな風には思っていないはずです。……俺はそう思います」

十歳以上も年の離れた女性に、こんなことを言っ、生意気だと思われただろうか。

それでも、レヒトは言わずにはいられなかった。

「そう思ってみるのも、悪くはないかもしれないわね。アンタは優しいのね。やっぱり似てるわ」

誰にとは、言わない。

「長々と引き留めて、悪かったわね。そろそろ戻ったほうがいいわ。誤解を解くのは大変よ」

「……いえ、俺のほうこそ失礼を」

レヒトが立ち上がると、マリアンも席を立つ。マリアンは店の前までレヒトを送った。

「アタシは仕事に戻るわ。それじゃ」

「さようなら、マリアンさん」

頭を下げ、レヒトは大通りへと抜ける道を歩き出した。

大事にしてあげなさい、と。その背にマリアンの声がかかる。

振り向けば、彼女が笑って手を振っていた。

マリアンは、去り行くレヒトに、愛した男の影を見ていたのか。

そして、その記憶に、別れを告げようとしているのか。

「……さようなら」

もう一度だけ頭を下げて、レヒトは今度こそ、振り返らずにその場を去った。

そろそろ宿屋へ帰ろうかと歩いていたレヒトが不意に足を止めたのは、さして行かぬうちだった。

「しまった……。ランプを忘れて来た」

自分のものならともかく、あれは宿屋の備品である。返さないわけにはいかない。

仕方なしに、レヒトはもと来た道へと踵を返し――。

突如響いた凄まじい破壊音に、レヒトは考える間もなく駆け出していた。

破壊音は、レヒトが戻ろうとしていた方向。今までレヒトがいた、あの花籠のほうから聞こえてきた。たまたま方向が同じだけで、花籠からのものだとは限らない。

しかし、レヒトは湧きあがる嫌な予感を、払拭することができなかった。

辿り着いたレヒトが目の当たりにしたのは、驚愕の光景。  
「これは……！」

そこは、確かにあの花籠があつた場所――だろう。

周囲には安宿や酒場が立ち並ぶ、人々に一時の娯楽と安息を提供する夜の顔。だが、そこはもはや原型を留めてはいなかった。

花籠も、安宿も、そして酒場も。もう、そこには存在しない。

立ち上る黒煙、燃え上がる炎。微かな風を切る音に、空を見上げれば、炎と月明かりに照らされる、無数の黒い影。

一瞬で破壊され尽し、炎に焼かれる建物。その中に、すでにこと切れているのか、ぴくりとも動かず倒れ伏した人々の姿――。

「マリアンさんっ！」

無駄とわかりつつも、その名を呼ぶ。

彼女は仕事に戻ると言っていた。破壊された、この建物の残骸の中にいるのか、それとも……。

絹を裂くような悲鳴が上がったのは、そんな時だった。

躊躇うことなくレヒトは走り出す。途中、駆け付けた傭兵や、起き出してきた街の住人たちとすれ違い、ぶつかりもしたが、そんなことは気にしていられない。

レヒトが向かったその先は、彼が最初にマリアンと出会った場所。そこは、街の大通りから東側へ、エンブレシアの夜の顔へと通ずるひとつの道。

走り抜けた先に、その場所があることを願って。栗色の髪的女性が、その場に立っていることを祈って。

右に、左に折れ曲がる路地を、レヒトは一気に駆け抜けて――。

周囲の建物はものの見事に破壊され、その場所は、ずいぶんと見張らしがよくなっていた。

そこが道だったのか、それともなにかが建っていたのか……それすらも、もはや確かめる術はない。

視界が一瞬、強烈な光に覆われ、同時に吹き付けてきた熱風と衝撃。レヒトはとっさに両手で顔を覆う。

弾き飛ばされてきた何かが、レヒトの側に転がった。

――鎧ごと腹を大きく薙がれ、絶命した男。この街の警備兵だろうか。その手には槍が握られている。

「ぐあっ！」

もう一人。突風に飛ばされたのか、若い男性が民家の壁だったと思わしき瓦礫の山に激突した。死んだ男と同じ形式の鎧を着込んでいる。槍がその手を離れ、乾いた音を立てて大地に落ちた。

「……ぐっ！ げほっ……かはっ！」

彼は身を折り、激しく咳込み——それでもゆっくりと立ち上がると、炎に照らし出された異形の生物へと視線を向けた。

青みがかった緑色の鱗に覆われた皮膚。絶え間なく動く眼球。そして風を切り裂く、一對の肉翅。

人の数倍はあろうかという、巨大なトカゲに似た魔物——ワイバーン。目撃例は極めて少なく、あのゴーゴンなども並び称されるほどの、邪悪にして凶悪な魔物。

ワイバーンの脚の下から、僅かに覗く栗色を見付けて、レヒトは息を飲んだ。

その肉を食らおうと、ワイバーンの鋭い爪が閃き——。

「やめろあっ！」

青年が、拾い上げた槍を振り上げ、がむしやらに突っ込んでゆく彼をとめようとレヒトは腰に手を伸ばし、舌打ちした。セイクリッド・ティアは、宿の部屋の中だ。

「よせっ……！」

レヒトの制止も間に合わず、青年は構えた槍をワイバーンめがけて振り降ろす。

耳障りな金属音とともに槍は弾かれ、その衝撃で青年は大きく体勢を崩した。

そこへ、ワイバーンが吐き出した炎が迫る。

「うわあああっ！」

炎は青年の顔を焼き、彼はその場に倒れ伏す。

それでも、炎に顔を焼かれながらも、青年は側に落ちた槍に手を伸ばした。

「うつ……ぐう……かあ……さ……」

ワイバーンは青年に狙いを定め、肉翅を広げると風に乗り、一気にその距離を詰める。

しかし、ワイバーンの爪は、青年に届くことはなかった。瞬時に青年の前へと移動したレヒトが、彼の落とした槍を拾いあげ、槍を横に構えて爪の一撃をなんとか防いだからである。

「くっ……」

受けとめた衝撃で、腹部に鈍痛が走る。

そのまま空へと舞い上がったワイバーンは、再びもとの場所へと着地した。

威嚇するように肉翅を広げるワイバーンに意識を集中させたまま、レヒトは横目で倒れた青年の様子を窺う。

青年はぼんやりとした眼差しを、前に立ちはだかるレヒトへと向けていた。炎の直撃を受けた顔の右側が焼けただれているが、命に別状はなさそうだ。

だが、目の前のワイバーンをなんとかしない限り、運よく助かったこの青年の命も、消えてしまう。

「……どうする。考えろ、考えるんだ……」

青年が先ほど試したように、空の覇者とも呼ばれるワイバーンには、警備兵が支給されるような、安価な槍は歯が立たない。

その硬い鱗は、なまくら剣など、いとも容易く跳ね返す。

総じて、魔物に効果的なのは、魔法。しかし、レヒトに魔法は使えない。

三闘神の力を賜りし聖剣、セイクリッド・ティアなら、この硬い鱗をも裂くことができるだろうが、それも今はない。

一匹のワイバーンとレヒトが対峙するその間にも、少し離れた場所では、建物が碎かれ、炎があがり、人々の悲鳴が夜の闇に訝する。ワイバーンが再び肉翅を大きく広げ、今度こそ新たな獲物を仕留めようと、レヒトめがけて飛びあがる。

（くっ……！）

その時、虚空から飛来した、無数の細く尖ったものが、ワイバー

ンの肉翅を貫き、空の覇者を地へと這わせた。

「ギャアオオオオン！」

肉翅を傷つけられ、怒り狂ったワイバーンが、その場所からは少し離れた、燃えあがる民家の屋根の上へと視線を移す。炎の中に佇む、小柄な人影。

「あれ、まだ生きてる。少しはやるじゃん」

面白そうにそう言つて、その人影は手に構えた巨大なボウガンを乱射する。

放たれた小型の矢が、ワイバーンの硬い鱗を易々と砕き、その肉体に次々と突き刺さる。

全身に矢を受け、血を吹き出しながら、ワイバーンはしばし痙攣していたが、やがて動かなくなった。

「あゝあ、死んじゃった」

笑いながらそう口にする人物を、レヒトは見上げた。

それは、桃色の髪をした少年。その顔は炎の熱に揺らめき、よく見えなかったが――その左の背に、翼のようなものが見てとれる。

少年が、レヒトを見て声をあげた。

「なんで、こんな場所にいるのさ。大いなる……」

そう言いかけて、少年は首を振った。

「違う、違う。なんだ、よく見たら全然違うじゃん」

少年は構えていた巨大なボウガンを右肩にかけ、立ち上がる。

「君は……？」

「……あ。危ない」

少年の声とほぼ同時に、背後の建物が破壊され、その影からワイバーンが姿を現した。

「っ……まずい……！」

少年に気をとられていたレヒトは、狙われた青年を守る体勢には、ない。

ワイバーンの鋭い爪が、夜の闇に閃いた。

第46話 愛しき貴女に花束を - 3 -

「雷よ、射て！」

「プチポアルス！」

レヒトが行動を起こすよりも早く、横手から現れた快とレイヴン、二人の魔法の十字砲火に、あっさりと打ち倒される。

「レヒト、大丈夫？」

スタッフの先端に光を宿したレイヴンが近付いてくる。

「ああ、俺は大丈夫だ」

そう答え、レヒトはあの少年がいた民家の屋根へとさりげなく視線をやる。だが、少年の姿はすでになくなっていた。

（……片翼？ ……まさか、な……）

快がレヒトの側に倒れている青年を抱き起こした。幸いにも、まだ息がある。

「快、その人の治癒を……頼む」

「わかってる。でも……」

快が、治癒魔法を使うことを躊躇う気持ちはわかる。

それが直接の原因かどうかはわからないとはいえ、レイヴンの容態が悪化したのは、彼女が 治癒魔法を使った後だったのだ。そのことが、快を迷わせているのだろう。

しかし迷っている暇はない。青年の呼吸は、徐々に弱くなっている。

「快、その人のこと助けてあげて？ 助けてあげられるのは、快の治癒魔法だけだから……」

「レイヴン……」

躊躇う快に小さくかけられた、レイヴンの声。レイヴンは、おそらく自分の身に起きたことを知らないのだろう。

だが、そのレイヴンの言葉は、他のなにより快の心に強く響いたはずだ。

「わかった。任せて、絶対に助けてみせるから」

そう言い、邪魔な青年の兜を外し、ただれた顔の右側に手をかざす。

青年の真っ赤な髪が、血の気が引いた顔を彩っていた。

彼を快に任せたレヒトは、先ほど桃色の髪の少年が倒したワイバーンのほうへ歩み寄る。そのすぐ側に見える、栗色の髪の女性――。

「……マリアンさん」

屈み込み、うつ伏せに倒れたマリアンの体を抱き起こす。確かめるまでもなく、その命はない。背中を、ばつさりとやられている。見開かれた夕焼け色の瞳を指で閉じ、その両腕を胸で組ませる。  
(助けられなかった……)

レヒトは立ち上がり、拳を握り締めた。抑えていたつもりだったが、震えていたのだらうか。その背に、レイヴンの声がかかる。

「……どしたの？」

「いや……なんでもない」

振り返り、そう答えたレヒトのすぐ真後ろで、複数の強い殺気が弾けた。

いつの間にか、闇より現れた数匹のブロウ・デーモン。

治癒魔法を使い、動きのとれない快を守るように、彼女の前へと飛ぶ。レヒトは槍を構え、レイヴンがスタッフを振り上げ――。

「ルオオオオオン！」

人間には決して発することのできない『声』とともに、上空から光の刃が降り注ぎ、現れたブロウ・デーモンを灰に変える。

その背に翼を生やしたシャウトが、上空からブロウ・デーモンの群れに『竜の吐息』をかましたのだ。

「ほらよ、レヒト！ 忘れもんだ！」

投げ落とされたセイクリッド・ティアを受けとめ、レヒトは上空のシャウトに向かい声を張り上げた。

「魔物は！？」

シャウトがぐるりと周囲を見渡し、大きく首を横に振った。かな

り面白くない状況だということだろう。

「それでもやるしかない。くそっ……こうなったら自棄だ！ 片っ端から蹴散らす！ レイヴン、快を頼むぞ！」

そう言つて、レヒトはセイクリッド・ティアを抜き放った。

「よし！ 捕まれ、レヒト！」

降下したシャウトが伸ばしたその手を、掴む。パニックを起こし、走り回る人々の間を抜けながら魔物を探すのは、得策でない。

シャウトはそのまま高度をあげ、魔物に蹂躪される街を飛翔する。次々にあがる火の手。街の至るところで傭兵や警備兵などが、数人固まってブロウ・デーモンと対峙している姿が見て取れる。どうやら彼らも善戦しているようだ。

レヒトほど腕が立つ者や、または快のように魔法が使える者にとつては、ブロウ・デーモンなどは大した敵にならないが、一般的な傭兵などにしてみれば、まさに洒落にならない相手である。それも、街の中に入り込んでいる数は、十や二十といった生易しいレベルのものではない。

ちょうど大通りの上空を飛んでいると、不意にシャウトが急降下した。そのすぐ上を、空の覇者の爪が裂く。

「ちっ……なにが空の覇者だ。天空の支配者を……舐めるんじゃないやねえつつの！」

吠え声とともに虚空に出現した光の刃が、瞬時にワイバーンを追尾、撃破した。

だがそこへ、別の一体が再び迫る。

街中へと向けられていたレヒトの視線があるものを捉えたのは、そんな時だった。

「見付けた！ シャウト、俺を降ろせ！」

「……気を付けろよ！」

突然の言葉にも、シャウトは驚かなかった。ひよつとしたら、彼も同じことを考えていたのか。

レヒトを降ろし、シャウトは闇色の空へと舞いあがる。

いかに竜族といえど、多数のワイバーンを相手に、余裕の戦いなどできるわけがない。レヒトというおまけがついていればなおのこと。

自由に空を飛ぶワイバーンを相手にするには、魔法も使えず、遠距離戦に不向きなレヒトには、少しばかり荷が重い。シャウト曰く『天空の支配者』たる竜族に任せたほうがいい——レヒトはそう判断したのだ。

そしてなにより——。

「そっちは任せる！ 俺は先に行くぞ！」

シャウトに声をかけ、レヒトは走る。

レヒトが目指した場所は、街の中心部。最も人の多いその場所に見た、蠢く無数の黒い影——。

パニック状態の住人たちが、右往左往と滅茶苦茶に走り回っている。転んだ少女めがけて放たれた火炎弾を、レヒトのセイクリッド・ティアが切り裂き、散らす。ブロウ・デーモンたちの意識が、レヒトに集中した。

「なんて数だ……！」

闇に浮かぶ魔物の姿に、レヒトは呻く。とにかくやるしかない、剣を構え——その時だった。

空から響いた高い鳴き声。同時に、風より速く舞い降りる、数羽の巨大な鳥。

「あれは……！」

声に出したのは誰だったのだろうか。

その場にいたブロウ・デーモンが、あるものはその巨大な嘴に貫かれ、あるものは爪に裂かれ——そしてまたあるものは、鳥たちが巻き起こした風の刃によって肉塊と化した。

大地に降り立った一羽を残し、鳥たちは魔物が残る街中へと消えて行く。

人々が呆然と見つめる中、その一羽が人の形へと変化した。鎧に刻まれた、真魔界軍を示す刻印。

「到着が遅れ、申し訳ありませんでした。私は真魔界軍第八師団所属、ツヴァイ＝ラターニアと申します」

淀みない口調でそう告げて、見た目には若いその男性は、レヒトに視線を向けた。見た目は若いとはいっても、彼は魔精霊である。外見と実際の年齢が一致するとは限らない。

「……天界最高責任者代理、レヒト様ですね？」

『天界最高責任者』との言葉に、周囲がざわめいた。

「……そうですけど……貴方は？」

そう尋ねると、男性が苦笑してみせた。

「あはは、やっぱり覚えてませんか。以前、私は貴方にお会いしたことがあるんですよ。ほら、最初に貴方がたが真魔界にいらしたとき、門のところで」

「……あ。あの時の！」

そう。あの時、レイヴンを見て声をあげた、あの男性だ。

「あ、思い出して頂けましたか。私どもの部隊が、ウェルネス領にありまして。足の速い者が先行し、こうして助けに」

「そうだったんですか」

真魔界が、小規模ながら魔界の各地に軍を派遣したという話は、シャウトから聞いていた。

「おい、レヒト！」

そのシャウトが後を追い、やってきた。彼の背にある黄金色の翼に、脅える人は、いない。

「真魔界軍が助けに来てくれた」

レヒトがそう言うと、シャウトも頷く。

「加勢してもらったからな。それだけじゃねえんだよ。聞いて驚け、レヒト。精霊人の義勇軍も到着した。中には姫みたいに、治癒魔法が使える人もいるらしいぞ」

「本当か！？」

あがった声は、レヒトのものではなかった。

「治癒……ってことは、傷を治せるのか！？」

血と泥で汚れた中年男性が、シャウトに掴みかからんばかりの勢いでそう問いかけた。彼が背負った少年は、ひどい怪我を負っているようだった。

「ああ、治せる」

周囲の人々に広がった、安堵の表情。絶望の只中にいた人々に、その言葉は希望の光をもたらした。

精霊人の義勇軍と、真魔界軍の兵士たちとがその場に姿を見せたのは、ちょうどそんな時だった。

街から少し離れた小高い丘の上に、その場所はある。小さな石の墓標が並ぶ、街の共同墓地。この三日の間に、ずいぶん墓標が増えていた。

エンブレシアが魔物に襲われたあの夜から、数えて三日。

助太刀に現れた魔精霊と精霊人のおかげで、すべての魔物を討伐することができ、エンブレシアは滅びの危機を免れたのだった。

レヒト一行は、まだエンブレシアにいた。

ウエルネス領主への報告などで忙しい日々を送っていたのだが、魔精霊と精霊人たちが事後処理と街の復興、警備などを一手に引き受けてくれたため、レヒトたちは今日、天界へ向けて旅立つことにしていた。

花束を手に、レヒトは墓地を歩く。目的の墓標は、この三日で新しく作られた女性のもの。その墓標の前で祈る人影を見付け、レヒトは立ち止まった。

顔の右側に残るひどい火傷の痕には包帯が巻かれ、真っ赤な髪が風になびいている。

青年は、レヒトには気付かず、ゆっくりとした足取りで去って行った。

彼が祈りを捧げていたその墓標には、たくさんの花束が供えられている。

誰が捧げたのかなど——考えるまでもない。

レヒトは墓標の前に膝を付き、手にした花束を手向けた。

「……俺の言った通りだったじゃないですか、マリアンさん。息子さんは、あんなにも貴女を愛してた」

風が、緑の丘を吹き抜ける。

「……どうか、安らかに」

他に言葉が見付からず、レヒトはそうとだけ呟いて。

エンブレシアの街へと戻るために、白い墓標の並ぶ丘を、ゆっくりと下り始めた。

## 第47話 背中あわせの二人

「戻ってきたんだね……」

壮麗な造りの天界城を眺め、レイヴンが感慨深げにそう呟いた。活気に満ちた街の大通りをのんびりと歩き、レヒト一行は天界城へと向かっている。

さすがにヘヴンの中心と謳われるだけあり、天界で揃わぬものはないと言われるほどの豊富な物資。

露店を広げる商人の威勢のいい声が街に響き、通りを行く人々にも笑顔が見える。

しかし、この街に入った瞬間から、レヒトは妙な違和感を感じていた。出発したときと、なんら変わらない平和な光景。だが、その中に潜む、なにか異質な気配。

先を歩く三人は、レヒトとは違いなにも感じていないようで、他愛ない話をしつつ歩いてゆく。

「なあ……なにかおかしくないか？」

レヒトの声で、三人が一斉に振り向いた。

「おかしい……って、なにが？」

「口では説明できない。けど、なにかが変だ」

周囲を見渡して、レヒトは呟く。道の端に並ぶ露店、買い物をする街の人、走り回る子供たち――。

「俺様にはわかんねえが……あんたのそういう類の言葉は、ただの気のせいじゃ済まねえんだよな」

レヒトの言葉を受け、今度は注意深く周囲に視線をやっていたシヤウトが、わからない、とばかりに首を振った。

「……おかしいって言えば、さ」

ぽつりと呟いたのはレイヴンだった。

「レイさん、どうしたのかな。通信、来なくなっちゃったけど……」  
「ああ……それは俺も気になっていた」

旅を始めたばかりの頃、レイはしょっちゅう指輪を使って話しかけてきた。

それは真面目な任務の話だったり、執務にうるさいトゥールに対する愚痴だったり、他愛ない世間話だったりしたのだが。

精霊界でレイに会ったあと、急に通信が来なくなったのだ。

レイヴンが何度か試したのだが返事はなく、それ以来、なんの音沙汰もない。

「それなら、直接本人に確かめてみればいいじゃない。でもレイになにかあつたら、街はもつと大騒ぎになってると思うけど」

確かに、それは快の言う通りだ。ヘヴンの象徴たるレイ「クリスティ」の身になにかあれば、街どころではなく、世界全体が大騒ぎになるはずである。

それがないということは、レイの身になにかあつたとは考え辛い。「悩んでたって仕方ねえさ。とにかく行ってみようぜ。もう目の前まで来てんだ」

「そうだな」

話をしながら歩くうち、レヒト一行は城内へと続く、大きな門へと辿り着いた。

まるで楽園への入り口のごとく、細部に至るまで美しい装飾が施されている。

普段ならば、ここにも見張りの兵士がいるはずだが、今は誰もいない。もとより少ない天界の兵士は、そのほとんどが魔界へと派遣されている。

ヘヴンの象徴とまで謳われる天界最高責任者を、守るべき兵士がいないことに、疑問を感じる人もいるだろう。だが、正直なところ、兵士たちがいようがいまいが、あまり関係はないのだ。

兵士が守るべきレイ「クリスティ」ヌ。その彼こそが、最強の剣であり、また最強の盾でもあるのだから。

一行は、城へと続く大扉を開け――。

「うつ……!？」

突如、その身を襲った強烈な感覚に、息を飲む。

「なっ……なんだ……？」

「……フレッシャー威圧感……!？」

シャウトと快が吐き出すようにそう呟くのと、レイヴンが膝を付くのは、ほとんど同時だった。

「……気持ち、悪い……。なんか、頭の中……掻き回されてるみたい……」

額に手をやるレイヴン。シャウトと快が顔を見合わせた。

「レヒト、やっぱり変だ。ここは一旦戻って……おい、レヒト!？」

シャウトがすぐ側にいたはずのレヒトへと視線を送る。だが、そこにレヒトの姿はない。

「レヒト! どこだ!？」

「あつ、あそこ!」

快が指差したのは、目の前に延びる、赤い絨毯の敷かれた廊下の先。

ふらふらと、なにかに吸い寄せられるように、レヒトは謁見の間へと続く長い廊下を歩いていく。

あの、強烈な威圧感。そこに混じる、懐かしい感覚と、己を呼ぶ声。

(……声。俺を呼ぶ声だ。懐かしい……声……)

背後で、自身の名を呼ぶ仲間の声も、今のレヒトには届かない。

誰か、気付いただろうか。レヒトの瞳から、意思の光が消え失せていることに。

まるで糸に繋がれた操り人形のように、レヒトは歩いていた。

迷うことなく、そして不思議なことに、ときおりすれ違う兵士や召使いに誰何されることもなく、レヒトは謁見の間——その扉の前で歩みを止めた。

「待て、レヒト!」

その後を追ってきた三人が、ようやくレヒトに追い付いた時には、すでにレヒトは扉を開いていた。

「待てつつの……ぐっ！」

足を踏み入れた途端、今まで以上に凄まじい威圧感に襲われる。強烈な、衝撃としか表現できないものに全身を貫かれ、息が詰まる。

「……ようやく見付けたぞ……『CHILD』よ」

色鮮やかなステンドグラス越しに、光が降りそそぐ謁見の間。ヘヴンを統べる者が鎮座するにふさわしい、光満ちる美しい場所——そこに、彼はいた。

悠然と玉座の前に佇む、一人の男。白髪に、金色の瞳。レヒトの夢に、何度も現れたあの男。

「……レヒト？」

快が、呆然と呟いた。外見は、似ても似つかない。だが、なぜか、二人はよく似ていた。受ける印象——そのものが。

男を凝視したまま、レヒトは数歩、前に出る。

「……大いなる意思……」

震える唇が呟いた言葉に、男——レヒトが『大いなる意思』と呼んだ男は微かに笑う。

「ほう……思い出したのか。お前という存在を。私という存在を」  
レヒトは、答えなかった。

心が、その言葉を拒絶する。それを認めてしまったら、己という存在が、脆くも崩れ去ってしまう気がしたからだ。

「レヒト、あんたの知り合いか？」

「……穏やかな関係じゃあなさそうだけどね」

表面上はあくまで穏やかに。内心では油断なく様子を窺う。だが『大いなる意思』は、そんな二人には取り合わず、その瞳をレヒトに向けた。

「心がざわめくを感じるだろう。私という存在に惹かれているからだ。ふたつに分かれた心が共鳴している——それだけのこと」

『大いなる意思』が、数歩だけ前に歩み出る。気付かぬうち、レヒトは同じだけ、後ろに退っていた。

「嘘だ！」

叫ぶような言葉に、『大いなる意思』はすうつと目を細めた。

「嘘ではない。本当はわかっているはずだ。私はお前、お前は私。同一にして別個の存在」

『大いなる意思』の冷たい瞳が、レヒトを射抜く。

彼の言葉が、侵蝕するように胸へと広がる。力が抜け、レヒトはその場に膝を付いた。

(……っ！)

体が、心が——まるで溶け出してゆくように——存在が、揺らぐ。すべてを、思い出した——。

「レヒト！」

尋常でない様子のレヒトに、快とシャウトが声をかける。だが、足が竦んで動かない。

目の前にいるたった一人の男——『大いなる意思』の発する凄まじい威圧感に圧されて。

「私の弱き心が創り出してしまった影……」

「いい加減にしなよッ！」

言葉を遮ったのは、レヒトの前に立ちはだかったレイヴン。

「レイヴン……」

「……『CHILD』」

レヒトと『大いなる意思』が、同時にその名を呼んだ。

「レイヴンは『CHILD』なんて名前じゃないよ！ レイヴン＝カトレヌ！」

スタッフを『大いなる意思』のほうへと向け、レイヴンが言い放つ。そんなレイヴンに『大いなる意思』が向けたのは、哀れみの視線。  
線。

「……やはり『人間<sup>ひと</sup>』を使ったのか。この私が位置を掴めぬわけだ」  
「なに言ってるのか意味わかんないよ！」

声を張り上げたレイヴンに、『大いなる意思』が歩み寄る。レイヴンは彼を睨んだまま、その場を動かない。

広い室内を沈黙が満たす。かなりあつただろう二人の距離は、『大いなる意思』の歩みによって少しずつ縮まり、すでに僅かに残っているのみ。

『大いなる意思』が、その腕をレイヴンに伸ばし——なにかが割れるような小さな音とともに、突如、その体が炎に包まれた。

しかし、『大いなる意思』は動ずることもなく、横手の扉へ——正確には、そこに現れた人物へと、その視線を向ける。

いつの間にか、音もなく開かれていたその扉の前に立つ、水色の長い髪の男性、ガルヴァ・ロザイン。相当急いできたのか、その呼吸は少しばかり乱れていた。

眼鏡の奥で、いつもは優しい微笑みを湛えるその瞳が、今は鋭い光を宿し、『大いなる意思』へと向けられる。

「ガル！」

「お逃げなさい、レイヴン！」

言葉と同時に、未だ炎に包まれたままの『大いなる意思』に向かって投げられた小瓶。しかし、『大いなる意思』はそれを片手で受けとめ、握り潰した。

「……無粋な」

「くっ……」

『大いなる意思』が右手を振るう。生み出された衝撃波が、声をあげることすら許さずにガルヴァを吹き飛ばし、ぶつかった石柱を砕いて、彼の体は壁へと叩き付けられた。

「ガルッ！」

レイヴンの悲痛な叫びが謁見の間に訝する。

「……おとなしくしていればよかったものを」

ぴくりとも動かないガルヴァにその視線をやり、『大いなる意思』が傲然と呟いた。

炎が、一瞬で消え去る。炎に包まれていたはずの体には、火傷の痕ひとつなく、身に纏っている服も、焼け焦げてすらいなかった。  
「なんてことすんだよッ！」

レイヴンのスタッフが、『大いなる意思』に振り下ろされる。だが、もとより力があるとはいえないレイヴンの一撃は、片手で軽々と掴まれた。

「絶対許さないッ！ プチテンペスト！」

その言葉に弾かれ、二人の周囲の空間が歪む。レイヴンを核に生まれた、夜より冷たく暗い闇が、徐々に拡大して二人を飲み込み――。

なにかが破裂するような音が響き渡り、『大いなる意思』が生み出した光の奔流が、黒い闇を打ち消した。

「……『人間』の身に宿るためか。威力は落ちているようだな」

背の低いレイヴンを見下ろしたままそう言い放ち、握ったスタッフごと、レイヴンを背後へと投げ飛ばす。

単純に腕力か、それとも衝撃波かなにかを放ったのか。飛ばされたレイヴンは床を擦り、遠く離れた玉座の側まで転がった。

「教授っ！」

「レイヴン……！」

快とシャウト、二人が声をあげるも、『大いなる意思』の視線と威圧感に、未だその場から動くことすら叶わない。

「『CHILD』よ。私たちの『HEAVEN』を滅ぼさせはしない。お前が完全に覚醒する前に――」

音も立てず、なんとか身を起こそうとするレイヴンの側へ移動した『大いなる意思』の左手に、白銀のレイピアが出現する。

「私が葬ってやろう！」

「あ……」

振り上げられたレイピアを、猫のような、大きなレイヴンの瞳が映して――。

「助けて……レヒトーツ！」

絶叫と、溢れた涙とともに。

血飛沫が、舞った。

## 第48話 ひび割れたセイクリッド・ティア

飛び散った鮮血が、真白い頬に紅い筋を残す。

瞳に映し出されたのは、血に染まった、銀色の煌めきを放つ大剣だった。

「えっ……？」

一瞬、なにがどうなったのかわからずに、レイヴンは小さく声をあげていた。

恐怖に眼を閉じたレイヴンには、『大いなる意思』がレイピアを振りあげたその瞬間、なにが起こったのかはわからなかった。

だが、風を斬る微かな音と、なにかがぶつかるような鈍い音に、恐る恐るその瞳を開き――飛び込んできた光景が、それだった。

『大いなる意思』は、レイヴンが瞳を閉じる前とまったく同じ格好で、レイヴンの目の前に立っていた。

ただひとつ違うのは、その胸から生えた一振りの大剣。

薄紫を基調とした服に、真紅の染みが広がってゆく。『大いなる意思』は表情ひとつ変えぬまま、血に染まった刀身を眺めていた。

自らの胸を貫く、レヒトのセイクリッド・ティアを。

「……」

懇親の力を籠め、体当たりをかけるように突き出された剣は、深々と『大いなる意思』の胸に潜り込んでいた。

剣の切っ先から、ぽたりと鮮血が滴り落ちる。

沈黙が支配する中、獣を思わせる、低く荒い息遣いが響く。

「……レイヴンに……触るな……」

レヒトが、呟く。その瞳に、獰猛な肉食獣のように、鋭い光をたぎらせて。

『大いなる意思』の胸を貫いていたセイクリッド・ティアを、レヒトは後ろに飛ぶ形で一気に引き抜いた。

ずるり、という嫌な音と、床を叩く血の音とが、静寂に包まれた

謁見の間に響き渡る。

自らの胸を貫いていた剣を引き抜かれ、支えを失った『大いなる意思』の体は、ふっと揺らめき――。

それだけだった。

彼は、ただ振り返っただけなのだ。レヒトのほうを。

「なっ……」

驚愕に声をあげたのは、レヒトか、はたまた後ろの二人だろうか。レヒトのセイクリッド・ティアに貫かれた胸の傷は、『大いなる意思』が振り返るまでの一瞬の間に、傷跡さえ残さず癒えていた。

「今の一撃は……驚いたぞ。まさかお前に、それほどの力があるとはな」

「……レイヴンには、指一本触れさせない。俺が守る！」

一度は引いた剣を、レヒトは再び構え直し、床を蹴り、一気にその間合いを詰める。

剣と剣とがぶつかりあう甲高い音が響き渡り、絡みあふたつの刃が、文字通り火花を散らした。

レイヴンの位置からでは、二人の間でどのような応酬が繰り広げられているのかは窺い知れない。

やむことのない剣撃の響きが、その激しさを物語る。

矢継ぎ早に繰り出されるレヒトの斬撃を、『大いなる意思』は片手のレイピアでなんなく受け流す。

シャウトほどではないにしろ、レヒトの一撃にもじゅうぶんの重さと力が乗っている。それを、『大いなる意思』はその場に立ち止まったまま、片手で捌いているのだ。

自分からは、仕掛けてすらいない。

まるで、遊んでいるかのように。

「くそっ……どうして……！」

「……太刀筋が読まれているのか、だろう？ その答えはわかっているはずだ」

震える声で呟いたレヒトに、『大いなる意思』は面白くもなさそ

うに言葉を返した。

「くっ……おおっ！」

烈帛の気合いとともに、剣を振りおろすレヒト。それは、内心の動揺を、隠すためのものだったのかもしれない。

「……そろそろ終わりにしようか」

一方的なレヒトの攻撃を捌き続けていた『大いなる意思』が、そのとき初めて攻撃に転じた。

その表現は、ある意味では間違っている。彼は掴み取っただけなのだ。

レヒトの振りおろしたセイクリッド・ティアを、空いた右の掌で。

「！」

先ほど、『大いなる意思』の身を切り裂いたはずの刃は、彼の手によって——素手で、軽々と掴まれていた。

「……いかに剣が優れていようと」

『大いなる意思』の唇が、静かに言葉を紡ぐ。

「使い手がお前では、私には届かない……」

剣を握るその手に、僅かに力を籠めたようにも見えた。

その瞬間だった。

ぱきん——小さな音を立て、セイクリッド・ティアに無数の亀裂が走った。

「お前では、決して……」

びしり——掴まれていた部分から走る亀裂は、今や全体に広がっている。

「……私には、届かない」

掴んでいたセイクリッド・ティアから手を離し、空いた右手で虚空を薙ぐ。

軽い右手の一振りで、生み出された衝撃波。

周囲の壁に亀裂が走り、かなりの高さがある天井からは、ぱらぱらと欠片が剥がれ落ちた。

「……ッ！」

レイヴンは声にならない悲鳴をあげていた。駆け寄りたいのに、膝が震えて立ち上がることもできない。

放った衝撃波の反対側——『大いなる意思』の背後にいたレイヴンはなんの被害も受けなかったが、前方にいた三人——至近距離でその一撃を浴びることになったレヒトは、まず間違いなく無傷では済まない。

壁にすら亀裂を入れるような破壊力である。人間の体で、それに耐えられるはずがない。

最悪の事態が脳裏をよぎり、レイヴンの瞳を絶望の色が染めあげ――。

「ルウオオオオオン！」

「氷よ、砕け！」

左右から飛来した眩い光と鋭い氷が、『大いなる意思』に襲いかかった。

ようやく金縛り状態から脱した二人が、左右へと回り込んで攻撃を仕掛けたのだ。

シャウトの放った竜の吐息と、快の生み出した氷の刃とが、その体を、ともに直撃するが――。

「……兇技だな」

それが、『大いなる意思』の返した反応だった。

「ちいっ！」

追撃をかけたシャウトが横薙ぎに戦斧を振るうが、『大いなる意思』はあっさりと身をかわす。二度、三度と繰り返されるシャウトの攻撃は、左手に握られた白銀のレイピアによって防がれた。

「焰よ、踊れ！」

シャウトと剣をあわせ、動きのとれない『大いなる意思』めがけ、快の手に宿った、紅蓮の焰が降り注ぐ。

「無駄だ」

迫り来る焰に向け、『大いなる意思』が右手を掲げ――。  
「弾けろっ！」

快の言葉とともに焰が弾け、幾筋もの螺旋を描く。焰は『大いなる意思』の周囲の床に突き刺さって爆発し、細かい破片を舞いあげた。

まさかそうくるとは思っていなかったのだらう。一瞬、『大いなる意思』はその動きをとめる。

「恨むなよ！」

そこを狙い、袈裟懸けに振りおろされたシャウトの戦斧。いかに並外れた反射神経を誇ろうと、これはかわせる間合いではない――が。

風の唸りさえも伴い、吹き飛ばされたのはシャウトのほうだった。大きく体勢を崩しながらも、シャウトはなんとか足から着地する。

しかし、彼は着地と同時に床に膝を付いた。

「なん……だ……！？」

その足元にうつすらと浮かびあがる魔法陣。それが、彼を戒めているのだ。

『大いなる意思』ではない。正面の大扉から現れた、茶色い髪の美しい女性――ティークウエルの街で出会った、シルディール。

近付いてくるシルディールを見上げ、シャウトは呟く。

「おいおい……女とやりあうのは……俺様の趣味じゃねえっつのに

……」

シャウトの言葉に、シルディールはおつとりと微笑んだ。

「ご安心ください。私が貴方の動きを封じるだけ。『やりあう』ことにはなりませんわ」

爆発による目くらましと同時に、レヒトのほうへと駆け寄ろうとしていた快も、シャウト同様、その動きを戒められていた。忽然と彼女の背後に現れた、一人の男によって。

金髪に褐色の肌、琥珀色の瞳――かつて、真魔界で対峙した、名前も知らぬあの男。

「……おとなしくしている」

背後から抱きすくめるように快を拘束する男が、囁く。その声に

——快の瞳が揺らいだ。

「私の邪魔はしないでもらおう。『CHILD』を滅ぼす……誰にも邪魔はさせない」

『大いなる意思』が、首だけを動かして、横目でレイヴンに視線を向けた。

ぞくり、とレイヴンの背筋を冷たいものが伝う。

「くそっ！ 教授に手を出すんじゃない！」

「逃げて、レイヴン！」

レイヴンの瞳から、大粒の涙が溢れ落ちた。

「快……シャウト……！ ごめんね……ごめんね……！」

自分には、なんの力もない。大切な人を、守るだけの力すらない。

——力が欲しい——

力があれば、快も、シャウトも、レヒトも——そしてガルヴァも、守れたかもしれないのに。

大切な人が傷付き倒れてゆくのを、救うことができたかもしれないのに。

——なにもできずに、ただ震えているだけなんて——

「力が……欲しいよお……ッ！」

血を吐くような悲痛な声に、低い呻き声が重なった。

「……まだ生きていたか」

『大いなる意思』が発した言葉に、レイヴンは顔をあげた。その言葉が差す人物——レヒトが、ゆっくりと立ち上がる。

「……死なせは、しない」

ひび割れた聖剣を、両手に携え。

「俺の仲間を……傷付けさせは、しない」

剣と同じように、無数の傷を負った体を引きずって。

「だめ……だめだよ、レヒト！ レイヴンを連れて逃げて！」

「逃げろ、レヒト！」

快とシャウト、二人が叫ぶ。

しかし、レヒトは歩みをとめない。

「……その者たちをガードしてやれ」

シルデイルと、琥珀色の瞳の男に、『大いなる意思』がそう命じる。

「……私は、もう迷わぬと決めたのだ」

小さく呟き、『大いなる意思』は左手を、進み来るレヒトへと向けた。

「お前は……もう必要ない。消えろ、我が弱き心よ！」

レヒトに向けられた『大いなる意思』の左手に、輝く光が集う。

「やめて……もう、やめて……！」

震える声は、なんとか意味ある言葉になった。

「レイヴンが狙いなんでしょう！？　じゃあみんなは傷付けないでよ……！」

溢れ落ちた温かな滴が、床に落ちて碎ける。

「……お願い……だから……！」

「……なんて、無力なんだろう——」

「ぐずつ……助け、られない……」

「大切な人を、守ることすらできないなんて——傷付けてしまうなんて——」

「ふつ……えぐつ……ごめんなさい……」

「……もっと、力が——大切な人を、守れるだけの力があつたなら——」

「ごめんなさい……ごめんなさい……！」

「……誰も、傷付けずにすんだかもしれない——」

「レイヴンのせい……！」

「……傷付けてしまって、ごめんなさい——」

泣き叫ぶレイヴンの周囲に、黒い闇が生まれた。

決して救われることのない、冷たく、哀しい、光なき闇が。

『大いなる意思』が放った光は、レヒトの身を貫く寸前で、彼の周囲に生まれた闇に飲まれ、消滅した。

「なんだとっ！？」

今度ばかりは、その顔に驚愕の色を滲ませた『大いなる意思』が、

レイヴンのほうを振り返り――。  
「うわあああッ！」  
レイヴンの意識が、爆ぜた。

## 第49話 崩壊への道標 - 1 -

黒い光というものが存在するのならば、それは確かに黒い光として表現できないものだった。いや——ひよっとすると、これを闇と呼ぶのだろうか。

黒い光とともに、憎悪、嫉妬、絶望——そういった、生きとし生けるものの心が生む、冷たく暗い感情、そのすべてを溶かし、混ぜあわせたかのような、強烈な衝撃が襲いかかる。

「……！」

耐えることなどできない苦痛に、胸をおさえる。

あげかけた悲鳴は、声にならなかった。発狂しなかったのは、奇跡に等しい。

黒い光に飲まれ——力が抜け、崩れ落ちるように倒れ込む。

床に倒れる寸前で、快の体は抱きとめられた。先ほどまで、彼女を拘束していた男の腕に。

それだけで、苦痛が和らぐ。

（レヒト……？）

背中ごしに見上げれば、自分を見つめる鋭い琥珀色の瞳とぶつかる。そこに、優しいワインレッドが重なった。その唇が、なにか言葉を紡ぐ。

（大丈夫だよ……僕は、大丈夫だから……）

微笑んで——それが、きちんと笑顔になったかどうかはわからないが——みせれば、彼は快から視線を外し、黒い光のほうへと移す。それにつられるように、快も瞳を向け——瞬間、光が掻き消えた。攻撃がやんだ、というわけではない。それは、そもそも攻撃などではなかったのだ。

今まで眠っていたものが、目覚めた。

ただ、それだけ。それだけで、魂と肉体が恐怖に震えたのである。『大いなる意思』でさえ、無数の亀裂が走る床に膝をつき、荒い

呼吸を繰り返しながら——いつの間に移動したのか、ゆつたりと玉座に腰かける子供の姿をしたものへと、その視線を向けるのみ。

ほんの一瞬前までは、レイヴン「カトレーヌ」という子供だったものへと。

「ふうむ……『人間』の身である故か、力が戻らぬ」

声だけは、かつての無邪気な子供のままに。それは両手の感覚を確かめるように、小さな手を握ったり開いたりしながら呟いた。

「『CHILD』……」

『大いなる意思』の声に反応してか、レイヴン「カトレーヌ」の姿をしたもの——『大いなる意思』が、『CHILD』と呼んだものが視線を動かした。

「ほう。主を封じた、忌々しき者たちと同じ存在か。それにしても、ずいぶん弱体化しているようだな。これは好都合」

瞳を向けられ、『大いなる意思』が呻いた。

「感謝するぞ。おかげで永き眠りから覚めた」

「黙れ！」

『大いなる意思』が声を張り上げた。それが、湧き上がる恐怖をおさえるための行為なのだと、快はなんとなく理解していた。

「貴様を野放しにしておくわけにはゆかん！ 私が葬ってくれる！」その言葉に、『CHILD』が瞳を細めた。面白がるように。

「面白い。三人がかりでも、主を封じることが精一杯だったというに。やってみるがいい。たった一人で、主を倒せるというのなら」

左手を『CHILD』へと向け、『大いなる意思』が吠える。

「滅びよ、『CHILD』！」

『大いなる意思』が放った、鼓膜を揺るがす威力の衝撃波。それは、ガルヴァに、そしてレヒトに向けて放たれたそれとは比較にならないものだった。

だが、スタッフを振るうでも、掌を掲げるでもなく。なんの動作もなく。

それは、あっさりと掻き消え——ふわり、と『CHILD』の長

い髪の一房を揺らすだけ。

「ふうむ……」

銀色の髪を指に巻き付け、『CHILD』が呟いた。

「髪が游いだな。完全に打ち消したつもりだったが……この体、まだ使いこなせてはあらぬか」

「……っ！」

今度こそ。『大いなる意思』は言葉を失った。

うるたえている。レヒト一行を歯牙にもかけなかった、あの『大いなる意思』が。

「『人間』の体は扱い難い。そうだな、その者たち。少しばかり主に付き合え。遊んでやろう。体を慣らさねばなにもできぬ」

手にしたスタッフで、肩を軽く叩きながら『CHILD』がそう命じた。

「どういうことだ、そりゃあ……」

意味が掴めなかったのか、シャウトが眉を潜める。

「……自分と戦えと、そう言っているのですわ……」

それに答えたのは、シルデールだった。

「主はまだこの体を使いこなせてあらぬ。慣れぬ体では満足に動くこともできぬゆえ、少し体を慣らしておこうと思つてな」

軽い口調でそう告げる。『CHILD』は瞳を細め、唇を笑みの形に歪めてみせた。

「その対価として、お前たちに機会を与えよう。主と戦い、主を倒す機会を。悪い条件ではあるまい」

とんでもないことを、『CHILD』はさらりと口にした。

『CHILD』が本気になれば、さしたる時間もかけずに一行を倒すことができるだろう。

それは『大いなる意思』の衝撃波を容易く消滅させたこと、そしてなにより『大いなる意思』の態度が証明している。

遊びなのだ、これは。『CHILD』自身が言ったように。「そうか」

声は、すぐ後ろから聞こえた。

快を支えていた琥珀色の瞳の男が、ゆっくりと立ち上がる。その手に、数本の投げナイフを握り絞めて。

「ならばその遊びとやらに、付き合ってやろう。だが、後悔することになるぞ」

「だめ！」

『CHILD』が反応を返す前に、彼を押しとどめたのは、快。

「だめだよ！ あれはレイヴンなんだ！ 戦うなんて……できるはずない！」

「……」

琥珀色の瞳が、困ったように揺れた。

「ふむ……それでは致し方ない。お前たちが本気になれるように、主が手伝ってやろう。どれ……」

悪戯を思い付いた子供のような——それは、レヒトをからかうときのレイヴンと同じ表情だった——笑みを浮かべ、『CHILD』が指を鳴らす。

その瞬間だった。

大地が、蒼穹が、そして世界が脈動し——遠い咆哮が、響いた。

「貴様つ……！」

『大いなる意思』が声をあげる。なにが起きたのか、理解したのは彼だけだろう。

十年前、世界を崩壊の間際までに追いやった大異変が、再来したことを。

「なにを……したの？」

小さな声でそう問いかける快に、『CHILD』が答える。

「主の下僕を呼び出した。お前たちは『魔物』などと呼んでいたようだが」

「魔物……だと？ じゃあ、お前が元凶だったのか。魔物出現、異常気象……全部、お前の……」

「……そうだ」

シャウトの言葉を肯定したのは、『大いなる意思』だった。

「……『CHILD』は……この世界を滅ぼそうとする意思そのもの。あれを倒さねば……世界が滅ぶ」

それは、あまりにも、残酷な宣言だった。

「そんな……！　だめ、そんなこと……レイヴン……レイヴンが……！」

「教授を、倒せつつのかよ……冗談きついで……！」

「……お喋りも飽きた」

二人の言葉を掻き消すかのように声をあげ、『CHILD』が玉座から立ち上がる。その顔が、ほんの一瞬だけ、泣きそうな表情を浮かべたように見えた。

「お前たちから来ぬのなら、主から行くぞ」

一方的にそう告げて、『CHILD』がスタッフを掲げる。

「まずは小手調べだ」

『CHILD』の周囲に、あの黒い光が生まれた。

「くっ！」

固く乾いた音とともに、『大いなる意思』が造りあげた防御壁が一行を包み込む。

黒い光が、解き放たれた。

『大いなる意思』の造った防御壁に弾かれ、黒い光が周囲に散る。弾かれた黒い光は、壁や床などには傷ひとつ付けることなくちぎれ舞うが、あれが人の体に、そして精神にどのような影響を与えるのかは——想像に難くない。

「面白い……それでこそ、殺し甲斐があるというもの！　くっつ……

……ははは！」

哄笑が、響く。

『CHILD』が、その力を強めたのだろうか。

防御壁を張るために、『大いなる意思』が掲げた両手から、鮮血が吹き出した。

「『大いなる意思』……！」

シルディールが悲痛な声をあげる。

『大いなる意思』は、苦痛に歪む顔を、シルディールに向けた。  
「行け！」

突然の台詞だが、彼の言わんとしたことを、シルディールは理解したようだった。しかし、傷を負った『大いなる意思』が気になるのか、シルディールの顔に戸惑いの色が見える。

「しかし……！」

「なにを言っている！ お前たちで、できうる限りのことを……できうる限りの者を……！」

「行くぞ、シルディール」

なおも躊躇うシルディールに、声がかかる。

振り返るシルディールを、琥珀色の瞳が射抜いた。

彼女は、なにかを押し殺すかのように俯いて――。

「……わかりましたわ。ご無事で……大いなる意思……！」

その言葉を残し、背後の大扉へと走り出す。

「あつ……待つてよ！ ねえ、なんなの！？ 全然わかんないよ……っ！」

その後を追って走り出した男に、快はさすがのように言葉を投げる。  
一度だけ、男は立ち止まった。

「……必ず、迎えに戻る」

「っ……！」

再び走り出したその姿は、すぐに見えなくなった。

（待つて……置いて、いけないでよ……！）

溢れそうになる涙を、必死に押しとどめる。

「くうっ……！」

『大いなる意思』の口を吐いた、小さな苦痛の声で、快の意識が覚醒した。

「光よ、護れ！」

快の発した言葉に弾かれ、『大いなる意思』の造り出していた防御壁が、微かに光を帯びる。

「なにを……？」

振り返らぬまま、問いかける『大いなる意思』に、快は小さな声で答えた。

「……貴方が悪い人には見えないから。貴方から見れば微力だろうけど……僕も力を貸すよ」

「そういうことだな」

シャウトの吠え声で、防御壁が再び僅かな光を放った。

「その代わり、ここをなんとか突破したら、ちゃんと説明してもらうぜ、色男さんよ！」

「……」

『大いなる意思』は、なにも答えることはなく——静かに瞳を閉じた。

「ほう……まだ耐えるか？ 滅びに身を委ねれば、楽になるというのに……。だが、もう限界だろう。体が震えているぞ」

悔しいが、悪態を吐くだけの余裕もない。ほんの少しでも気を緩めれば、防御壁は崩壊してしまう。

強い、などという言葉では表せない。

わかった気がするのだ、今更ながらに。『大いなる意思』が、あれほどまでにレイヴン——いや、『CHILD』を葬ろうとしていた理由が。

——圧倒的すぎる。

現に、今も『CHILD』は、わざわざ紙一重の手加減をしているのだ。

辛うじて、耐えられる程度の力。じわじわと、いたぶるように。

「さて、苦しそうなお前たちを見るのも辛くなってきたな」

言葉とは裏腹に、場違いな笑みを浮かべたまま、『CHILD』が囁く。

快は唇を噛み締めた。

（……終わり、か……）

「ふっ……ははは！ 滅びよ……ッ！」

「やめろおっ！」

声が、『CHILD』の哄笑に重なり、静かな謁見の間に、響き渡る。

『CHILD』の手から、スタッフが零れ落ち——軽く乾いた音を立てて、床に転がった。

床に倒れたレヒトが、なんとか身を起こし、その瞳を『CHILD』へと向けていた。

「やめるんだ……レイヴン！」

小さな体が震え、周囲に纏わりついていた黒い光が消滅した。倒れたレヒトに、その眼差しを向けて。

「……あ……レヒ……ト……？」

唇が、小さく彼の名を紡いだ。

第50話 崩壊への道標 - 2 -

さすがに力を使い果たしたのか。『大いなる意思』と快、シャウトが三人がかりで造り上げていた防御壁が消滅したのは、ちょうどその時だった。

「あ、あれ？　なんで？　あれ、あれ？」

それを見て、きよときよと、レイヴンは瞬きを繰り返す。

その様子に、快とシャウトが安堵の息を吐いた。

「もとに、戻ったってわけか……ふう……」

「……今回ばかりは……本気で死ぬかと思ったけど……」

呟き、二人はその場にへたり込む。レイヴンは驚いたように目を見開いた。

「どうしたの？」

「なにも……覚えて、ないのか？」

レヒトがそう問いかけると、レイヴンは小さく頷いた。

「うん。けど……怖かった。あのね、暗くて冷たいところにね、レイヴンだけ一人ぼっちなの。レヒトも、快も、シャウトも……ガルもいなくて」

不安げに、レイヴンの大きな瞳が揺れる。

「……死ぬって、ああいう感じなのかな」

「レイヴン……」

「それに……みんな、傷だらけだよ？　……レイヴンのせい？」

泣きそうな声でそう問われ、レヒトは返答に詰まった。

話すべきなのか。レイヴンの身に起きたことを。

レイヴン——『CHILD』について、『大いなる意思』が語った言葉を、鵜呑みにするつもりはない。

だが、あの変貌、そしてなにより、あの圧倒的な力——彼の言葉は、真実なのだろう。

二人も困ったようで、その視線をレヒトへと向けている。

「いい……いいんだ、レイヴン。なんでもない」

しばし考えた後、レヒトはゆっくりと首を振った。

教える必要は、ない。この無邪気な子供には、現実はいささばかり、残酷すぎる。

「大丈夫だ。レイヴンは一人じゃない。俺たちがいるから……」

レヒトは、ゆっくりと両手を広げる。レイヴンに向かって。

「……レヒト？」

「戻って、おいで」

意図を掴めなかったのか、首を傾げるレイヴンに、微笑み、そう言葉をかけてやれば。

ようやく、その幼い顔に笑顔が戻る。

「……うんッ！」

答えて、彼のもとへと駆け寄ろうとしたレイヴンの体を――光が貫いた。

誰もが一瞬、状況を理解できずに言葉を失った。

「え……？」

純白の法衣が真紅に変わり、周囲の床は血の海と化す。

自分の腹に空いた大穴と、光の飛来したほう――光を放った『大いなる意思』の顔とを、レイヴンはしばし、呆けたように交互に見つめて。

「……あ……」

力尽きたのか、膝を折ったその体を、『大いなる意思』が抱きとめた。

「恨むなら、恨め。私は、それを甘んじて受けよう」

そう呟いた『大いなる意思』に、レイヴンは焦点のあわぬ瞳を向けて――。

「………」

レイヴンの唇が微かに震え、小さな言葉を紡ぎ出す。

その言葉を聞き取ることができたのは、『大いなる意思』だけだっただろう。

そして、それに返すように囁かれた言葉を聞き取れたのも、おそらくレイヴンだけ。

驚愕に目を見開き、動けないレヒトへ、レイヴンはゆっくりと顔を向ける。

「……レ、ヒト……」

痛いだろうに、苦しいだろうに——それでも、レイヴンは微笑んでみせた。

「レイヴン……！」

レヒトはレイヴンに向かい腕を伸ばす。決して、届くはずはないのに。

（いくな、レイヴン……… いったては、だめだ………）

同じように、力をなくして震える腕を持ち上げて。レイヴンはレヒトのほうへと腕を伸ばした。

それは、ほんの一瞬だったのかもしれない。永遠にも近い時間だったのかもしれない。

その体が、完全に力を失い——華奢な腕は、届くことなく床に落ちた。

「『大いなる意思』！」

殺意すらをも滲ませた、レヒトの絶叫が空を裂く。

「レイヴンを放せ！ 放せえっ！」

「無茶するな、レヒト」

今にも飛びかからんばかりのレヒトの肩を掴んで制し、シャウトは『大いなる意思』に視線を移す。

抱いていたレイヴンを床へと寝かせ、羽織っていたマントを外し、その上に投げかける。

左手には、あの白銀のレイピアが握られていた。

「お前は、消しておかねばならん。お前だけは……」

レヒトが言葉を返すよりも早く、シャウトのほうが問いかける。

「ひとつ、あんたに聞きたい。教授——『CHILD』がなんなのかってことは、ひとまず置いておくとして、だ」

そこで一旦言葉を切り、静かに眠っているようにすら見えるレイヴンに視線をやった。

そして再び『大いなる意思』へと視線を戻し、シャウトは言葉を続ける。

「どうしてそこまでしてレヒトを狙う。あんたとレヒトに……なんの関係がある」

『大いなる意思』はなにかを思案するようにしばし沈黙し、やがてゆっくりと口を開いた。

「その男、お前たちにはどう見える？」

「どう見えるって……」

唐突な問いかけに、シャウトと快は顔を見合わせた。

「人間に見えるか？」

二人は、答えなかった。

言葉には出さずとも、薄々感付いていたのだろう。

レヒトは人間ではない。

『大いなる意思』はレヒトへと視線を移す。

「……それは、私の迷い、私の弱き心が生み出した存在。いわば、私の半身だ」

「嘘……だって、レヒトはそんなこと、一言も……。記憶がないって……」

震える声で呟いた快に、『大いなる意思』は瞳を向ける。

「……その言葉に、嘘はない。私たちは……お互いの存在を忘れていた。あの夢を見るまではな」

夢、という言葉に、快とシャウトが息を飲んだ。

二人は知っている。レヒトが不思議な夢を見ることを。

「私はお前の記憶を見た。お前も見ているはずだ。私の記憶を……」  
レヒトの見る不思議な夢——それは『大いなる意思』の記憶だという。

そして『大いなる意思』も、レヒトの記憶を夢に見たという。  
レイヴンが言っていた。精神的、肉体的になんらかの繋がりがあ

る場合、不思議な夢を見ることがある、と。

認めたくはない。それを認めてしまえば――。

「そんな……そんなこと……！」

『大いなる意思』とレヒトが、同一の存在だというのなら。

「それじゃあ……レイヴンを……」

声が震えるのを、レヒトは抑えることができなかった。

「レイヴンを殺したのは、俺だって言うのか！」

「そうだ」

あっさりと。『大いなる意思』はレヒトの言葉を肯定した。

「お前であり――私だ」

それは、レヒトを絶望の底に叩き落とすには、じゅうぶんな言葉だった。

「……そうかい」

うつむき、肩を震わせるレヒトを見て、シャウトがぼつりと呟いた。

「話は、だいたいわかった。レヒトの正体がなんであれ……俺様がやることに、変わりはない」

表面上は、いつもと同じような軽い調子で。その瞳に、鋭い光を宿して。

「そうだね。その半身を、どうして消そうとするのか……気になることはたくさんあるけど……そんなこと、今はどうだっていい」

少々おぼつかない足取りで、二人はゆっくりと立ち上がる。

「レヒトに手は出させない。どうしてもレヒトを倒したいなら、先に俺様たちを倒してからにしろ」

先ほどの『CHILD』との戦闘で、二人は持てる力のほとんどを使い果たしているだろう。

勝敗など――戦う前から決しているというのに。

シャウトに戦斧を向けられ、『大いなる意思』はその瞳を閉じた。今まで、なぜか『大いなる意思』は、快とシャウトを傷つけなかった。

二人の攻撃は避けただけ、『CHILD』の攻撃を防いだときも、あれはどちらかといえば、自分を守るためではなく、二人を守るためだったのではないだろうか。

レヒトを倒そうとした際には、その二人をガードしてやれ、とま  
で言っている。

だが、彼の邪魔をしようとするならば、おそらく『大いなる意思』  
は、二人を倒すことになんの躊躇いも持たないだろう。

「……退け。お前たちでは、私は倒せない」

それが、おそらく最後の忠告。

二人も、わかっているはずだ。『大いなる意思』の尋常でない力  
は、目の当たりにしている。

だが、それでも二人は動こうとはしなかった。

「……。そう、か」

『大いなる意思』が、静かに言葉を紡ぐ。

「そこまでの覚悟があるお前たちに、退けと言うのは失礼だったな。  
全力で相手をしよう」

そう宣言し、『大いなる意思』は一步前に踏み出した。

二人は、動かない。

自分よりも、圧倒的に強い者と対峙すれば、その理由が理解でき  
るだろう。

下手に動けば、命を縮める。

「許せ、などと言うつもりはない。だが、私も道を譲ることはでき  
ない」

張り詰めた空気の中、快とシャウト、そして『大いなる意思』が  
対峙する。

「私にはなすべきことがある。愛する者のために……邪魔はさせな  
い！」

『大いなる意思』が、空いた右手で虚空を薙ぐ。

生み出された衝撃波は、しかし防御壁に弾かれ、周囲に余波を撒  
き散らすのみ。

『大いなる意思』が、形よい眉を片方跳ねあげた。

二人には、防御壁を造り出す力など残っていない。攻撃を防いだのは二人ではないのだ。

「おいおい。俺の留守に、ずいぶんと派手なことやってくれたじゃねえか。修理代は高えぞ」

まるで伝説の英雄のようなタイミングで現れたのは——誰もが羨む美しさと、自身の身長よりも長い金色の髪、そして不敵に輝く蒼穹色の瞳を持つ若い男。

この城の主にして、ヘヴンの象徴とも讃えられる——英雄レイ＝クリスティヌ。

第51話 崩壊への道標 - 3 -

「哀しみの英雄……」

『大いなる意思』の発した言葉に、レイは露骨に眉を潜めた。

「その呼び方は好きじゃねえ。俺の人生が不幸かどうかは俺自身が決める」

レイはレヒト、シャウトの側まで来ると、身を屈め、座ったままのレヒトの顔を覗き込んだ。

絶望からか、それとも自責の念からか。レヒトは呆然と座り込んだまま動こうとはしない。

「……なにがあった」

小さくそう問いかけられ、レヒトは拳を握り締めた。

「………っ」

震える唇が、微かな言葉を紡ぎ出す。

「守れなかった……！」

その一言で、すべてを察したのか。レヒトの頭に、レイは軽く手を置いた。

「……ごめんな」

レイが囁く。優しい声で。

「……咎を負うべきは……俺なんだ。あのときの俺の判断が……身勝手なわがままが、お前たちを傷付ける結果になった」

その言葉の意味を、レヒトは理解することができなかった。

顔をあげれば、綺麗な蒼穹色が映る。蒼穹のように澄んだ、濁りのない瞳。

熱いものが溢れ、視界が滲む。それは頬を伝い、床に落ちて砕けた。

それが涙だと気付くまでに、しばしの時を要した。

「ごめんな……本当に……」

レヒトの頭をくしゃりと撫で、レイは立ち上がった。

「これが、あんたのやりたかったことなのか……」

「哀しみの英雄、お前からその言葉を聞くとはな」

『大いなる意思』は少しばかり意外そうな顔をした。

「この世界に、恒久の平和をもたらすこと——私とお前、目指したものは同じであつたはずだ」

「……ああ、そうさ。その通りだ。確かに、俺は平和を求めてた」  
瞳を閉じて、レイは頷く。

「だがな、俺が目指したのはこんな結末じゃない。なんの罪もない子供を犠牲にして得られる平和に……どれだけの価値がある」

その言葉の奥に滲む、やるせなさ。

「誰かの犠牲の上に成り立つ平和なんてもの……俺は、絶対に認めない」

「純粹、だな」

『大いなる意思』はレイに瞳を向けた。深い、疲れを宿した瞳を。  
「哀しみの英雄、お前の掲げる理想は確かに美しい。だが、そんなことは不可能だ」

レイは、答えない。彼にも、わかっているのだろう。

「あいつらだって……望んじゃいねえよ、こんな結末は……」

絞り出すように、レイはそう呟いた。

「そつ、だろうな……」

ため息を吐いたのは、どちらだったろう。

短いような長いような沈黙の後、最初に口を開いたのは『大いなる意思』のほうだった。

「……言葉など、いくら並べたところで無意味なのだ。所詮、こういった方法しか選べないのだ、我々は」

「最初から、答えは決まっていたわけか。仕方ねえな」

レイは肩を竦め、視線を『大いなる意思』から快へと移す。

「……納得してねえつてのがよくわかる顔だな、快。無理もないか」  
「当たり前でしょ。意味わかんないよ、本当に」

「悪い。けど、もうしばらくは我慢してくれ。後で……事情は説明

する」

いつになく真剣な眼差しで、レイはそう言った。

「快、お前はそいつを……レヒトを連れてアンジェラスから魔界へ降りろ。街の連中にかけられてた妙な技は解いて、避難するようにって指示は出した」

「ミヤの技を破ったのか」

「なかなか面白い技だが……俺には効かねえ」

感心したように言う『大いなる意思』に、レイはにやりと笑って見せた。

「と、その竜。お前は別ルートで魔界に向かえ」

「……というと？」

「この城から東にいったところに魔法研究所がある。そこにいる連中は避難する術がない。お前なら、運べるはずだ。それと……そこに倒れてる男も連れて、な」

気を失ったままのガルヴァを眼で差し、レイがそう言った。

『大いなる意思』は、無関係な人間——レヒトとレイヴン以外は、なるだけ巻き込まないようにしているようなのだ。

本気を出しているようにはみえない。彼がおそらく本気になったのは、『CHILD』との戦闘のときだけだ。ガルヴァにしてみても、彼の持つ力で一蹴すれば終わりだったろうに。

そこだけが、レヒトにはわからなかった。

「……了解。ただし、後できちんと説明してくださいよ」

「ああ。わかってる。魔界へ降りたら兄上を頼れ。兄上は全部を知ってる。お前たちを保護してくれるだろうし……説明もしてくれるさ」

二人は、その言葉に小さく頷いて見せた。

「よし。じゃあ、俺様は先に退散させてもらっぜ」

「魔界で落ち合おう……必ずね」

シャウトは親指立ててウィンクひとつ。倒れているガルヴァを肩に担ぎ、横手の扉から研究所へと向かった。

「僕たちも行くよ、レヒト」

快はレヒトの手を掴んで立ち上がらせる。

『大いなる意思』が片眉を動かすが、彼の動きは前に立ちはだかったレイによって封じられる。

「おっと。そうはさせないぜ。俺の相手をしながら、片手間にレヒトを倒せるってんならやってみな。力を殺がれて弱体化したあんたに、そこまでの力が残ってるなら、な」

そう言つて、レイは意地悪く笑う。

「……ひとつ聞きたいことがある」

「ほお？ スリーサイズ以外なら答えてやろう」

口元に手を当てるレイ。軽く咳払いしてから『大いなる意思』は問いかけた。

「……なぜ、そこまでして私をとめる？」

「愚問だな」

レイは唇の端を吊り上げた。

「自分のため、仲間のため……そしてヘヴンのためだ。俺が命をかけるのに、これ以上の理由は必要ねえ」

「……そうか」

『大いなる意思』が瞳を閉じる。レイは行け、と二人に指示した。快はレヒトの手を引き、謁見の間を飛び出した。

廊下を走りながら、レヒトは一度だけ振り返る。大扉の向こうで『大いなる意思』と対峙するレイが、走りゆく二人を見つめていた。彼が小さく微笑むと、音を立てて大扉が閉まった。

「っ……レイ様！」

「レヒト!？」

突然立ち止まったことで、驚いた快が振り返る。

「レヒト、どうしたの？ 早く逃げないと……」

「だめだ……」

レヒトは首を振った。

「だめなんだ、レイ様を置いてはいけない。レイ様を一人置いてい

くのは……」

理由はわからない。だが、嫌な予感がしたのだ。もう、彼とは二度と会えないような——そんな予感が。

「……戻らないで、レヒト。お願いだから……」

快はレヒトの手を握り締めた。

「あの人が狙ってるのは、レヒトなんだよ？ それに、レヒトが戻ることは、レイの気持ちを無駄にすることになる」

「レイ様の……気持ち……」

「そうだよ。レイはレヒトを逃がすために残ったんだから。それに、レイは僕の伯父さんだよ。むざむざやられたりはしない。だから、今は逃げよう」

もう一度、閉じられた大扉を振り返り、レヒトは頷く。

「……わかった」

その瞬間。突如、凄まじい揺れに襲われ、二人は大きくバランスを崩して倒れ込む。

揺れは、一瞬だけのものではなかった。二人が身を起こすその間にも、激しい揺れが続いている。

「なに……？ 天界で、地揺れなんて……」

「嫌な予感がする……」

「……。急ごう、レヒト」

揺れが続く中を、二人は走り続ける。

城門を通過したところで、不意に快が足をとめた。城下に広がるアンジェラスの街に目をやって、レヒトも驚きに目を見開く。

建物のほとんどが無残に倒壊し、美しかった街並みは見る影もない。

無数の亀裂が走る大地は至る所で崩れ落ち、そこからは遙か彼方に広がる魔界の大地が覗いている。

響く遠い咆哮に、レヒトはふと空を見上げた。

いつの間にか厚い灰色の雲に覆われた空を、無数の黒い影が泳ぐ。大地が、崩れてる……」

快が呆然と呟いた。

天界と魔界を繋ぐ唯一の道は、アンジェラスの中心部に設置された空間移転装置。アンジェラスからロイゼンハウエルへと降りる場合を『地への道』、その逆を『天への道』と呼ぶ。

レイは街の人々に逃げるよう指示を出したと言っていたが、果たして何人が逃げられたのか。天界人であれば、背中の翼で飛翔することもできるだろうが、天界には翼を持たぬ人々も生活しているのだ。

「……なんとか……『地への道』まで行かないと……」

『地への道』が無事かどうかはわからない。だが、今は悲観している暇はない。

考えている間にも、亀裂の走った大地は、脆くも崩れ去ってゆく。「ここはだめ。どこか他の道を……」

周囲を見渡していた二人の瞳が、前方——今、二人が向かおうとしていた方向——かつては大通りであった道から、逃げるように走ってくる幼い姉弟の姿を捉えた。

二人を追い詰めるように、背後の大地が轟音と震動を伴い崩れてゆく。

少年のほうに二人の傍まで来たとき、少し遅れて走っていた少女が、大地の亀裂に足をとられて転倒した。

その間の大地が、無情にも崩れ始めた。

「姉ちゃん！」

駆け寄ろうとした少年を、快が抱きとめた。徐々に崩れた大地は、少女や少年が飛び越えられるような距離ではない。

「だめっ！ 行ったら……だめだよ……！」

姉の名を呼び、届かない手を必死に伸ばす少年。

レヒトの脳裏に、忘れることのできない光景が蘇る。

エンブレシアで出会った、救うことのできなかつた女性と、悲しい瞳をした青年。炎に支配され、崩れ落ちるあの不思議な場所で、見捨ててしまった女性と幼い少女。

そして――。

『助けて……レヒトッ！』

救いを求めるあの声が、耳に残って離れない。

「レイヴン……」

救えなかった人々。見捨ててしまった人々。

「……まだ」

『今なら、まだ……』

「……助けられる……」

レヒトの口から、ふたつの声が交互に滑り出た。

考えるより先に、体が動いていた。

助走をつけ、崩れ落ちる大地を跳躍し、少女のもとへと着地する。恐怖と諦めで動けないのだろう少女を抱き抱え、レヒトは再び跳ぶ。

快と少年の傍へと戻ったレヒトは、抱えていた少女を降ろした。

「まったく……無茶するよ、本当に……」

レヒトは微笑んで見せた。

「とにかく、他の道を探して――」

快の言葉は最後まで続かなかった。レヒトが、彼女の体を突き飛ばしたからだ。

嫌な予感、などという言葉では、到底表現できないような感覚だった。

快と幼い姉弟とを突き飛ばしたレヒトは、次の瞬間、空を舞っていた。

なにが起きたのかは、理解できない。

わかるのは、この身を焦がすような激痛だけ。

「レヒト……！」

快の絶叫。

彼女の姿を捉えようとした瞳が映したのは、崩落してゆくヘヴンの中心たる空中都市と、天から降り注ぐ、幾筋もの黒い光。

世界を滅ぼす、闇の光。

それが、視界が闇に閉ざされる前に見た、最後の光景だった。

## side story 7 〈迷夢〉

「……ん……」

瞳を開いて最初に飛び込んできたのは、見慣れた机と開かれたままの古ぼけた本だった。

いつの間にか、机に突っ伏したまま眠っていたらしい。

陽は、まだあまり傾いていない。それほど長い間、眠っていたというわけではないようだ。

さして長くもない眠りの中で、男は夢を見ていた。記憶をなくした、紅髪の青年の夢だ。

正直、男は驚いていた。

夢を見たことではなく、自分が眠っていたことに、だ。

睡眠も、そして食事も、男の体は必要としない。

生きとし生けるものたちが、命を維持するために絶対必要なそれらの行為——精神的な効果は別として——それが男の体に影響を与えることはない。

かつて『人間』と呼ばれる存在であった頃の記憶からか、それとも習慣からか。以前は味を楽しむために食事をとったり、麗らかな陽射しの下でまどろんだりすることも多々あったのだが、最近ではすっかり縁遠くなっていたため、かなり珍しいことだった。

「……夢など見たのは……いつ以来のことか……」

まだはつきりと覚醒しない頭で、先ほど見た夢の内容を思い出す。なぜか、男は気になっていた。理屈ではなく、本能的に。

今より十年ほど前、ヘヴンを滅亡の危機に追いやった出来事がある。

一般的には『大異変』と呼ばれる事件で、その時の恐怖は、今も人々の記憶に鮮明に焼き付いている。

先ほど男が見た夢は、まさにその大異変当時のものだったようなのだ。

歡喜に湧く人々、破壊された街、そして激しい戦いの爪痕。

そんな中、誰の目にもとまることなく独り彷徨う青年に、差しのべられた腕。

たかだか夢の話、それが実際にあったことかどうかなど、定かではないし、たとえ実際の出来事であつたとしても、男にはなんの関係もないのだが。

『しかし……なぜ……？』

口元に指をあて、男は呟く。

夢に見た青年は、自分の名前すら覚えてはいなかった。そんな彼が一言だけ発した言葉。

それは、この世界では、男以外には三人しか知らないはずの名前だつたのだ。

『……まさか、な』

単なる夢、といつてしまえばそこまでなのだが、男は胸に生まれた妙な感情を捨て去ることができなかった。

十年前の大異変。崩壊の危機からヘヴンを救つたのは、男自身。そのとき失くしたなにかを、見つけたかのような感覚。

愛する者を救うため、この世界——樂園を守るために、なんの迷いもなく、男は今まで行動してきたというのに。

今、男の胸には迷いが生じていた。ずっと昔、そう、十年前に捨て去つたはずの迷いが。

『あれは……いや、そんなことは……だが……』

男は純白の髪を掻き毟つた。

そんな時、ふと目に入った鏡。まだ男が『人間』であつた頃に、男の大切な人が持っていたのと同じものだ。彼女のことを忘れられず、なんとなく同じものを持っていたのだが——そこに映り込む自分自身に、あの紅髪の青年が重なつた。

自分ではどうすることもできないもどかしさを胸に抱き、男は小さくため息を吐いた。

## 第52話 砕けた心

声がする。自分の名を呼ぶ声。

無明の闇の中、ただひたすらに走り続ける。

前に行く仲間の手を捕まえようと、伸ばした腕は届かない。どんなに足を速めても、決して追いつくことはできず――。

（待ってくれ……！ 俺を置いていかないでくれ……！）

前を進む三人の姿は、みるみるうちに遠ざかり――やがて、消える。

（嫌だ……俺を独りにしないでくれ……！ 嫌だ！）

唐突に。闇に閉ざされていた視界が開け、そこに光を映し出す。すっかり闇に慣れていた瞳には、幽かな明かりすらも、刺すように沁みた。

（今のは……夢……だったのか……？）

顔を覗き込んでくる影を、朦朧とした意識の中で捉える。

（快……？）

呟いた言葉は声にならず、レヒトは小さく咳込んだ。

覗き込んだ影が、なにかを囁く。なにを言われたのかは、わからなかった。

その姿は、なぜか相変わらずぼんやりとしていて――そこで、自分の目の焦点があつていないことに、レヒトは気付いた。

しばし瞳を閉じ、ゆっくりと開けば、影は徐々にその輪郭を整えて――。

「快……うつ！」

飛び起きたレヒトは、しかし凄まじい脱力感に、再び寝台へとその身を沈ませた。

「だめです。まだ動いては……」

なんとか身を起こそうとするレヒトに、かけられた声。レヒトは首だけを動かして、その姿を確認する。

一人の女性が、そこにいた。まだ年若い、少女といっても差し支えない年齢だろう。長く伸ばされた桃色の髪をツインテールに結いあげ、動きやすそうな不思議なデザインの衣服を身に纏っている。初対面のはずなのに、なぜかどこかで会ったことがあるような気がする。

「……大丈夫ですか？」

控え目に、優しい声で少女は問う。レヒトが頷くと、少女は安堵したように微笑んだ。

「君、は……？」

少女はレヒトが寝かされている寝台の傍の椅子に腰掛け、レヒトの額に水で濡らした布を載せながら答える。

「私はミオと申します。この村の村長代理を務めております」

ふわりと微笑む。美しいが、どこか儚げな印象を与えるその微笑。「どこか、痛むところはありますか？ 隠者様に、治癒はして頂いたのですが……なにぶんひどい怪我でしたし……岸に打ち上げられていた貴方を見つけたときは……本当に、もうだめかと……」

「……打ち上げられていた？」

意外な言葉に、レヒトは首を傾げた。ぼんやりと霞みがかった記憶を、レヒトはなんとか呼び起こす。

最後に見たのは、崩れゆく空中都市と、天から降り注ぐ破壊の光だった。

そのあとの記憶はない。降り注いだ漆黒の光が大地を砕き、その衝撃で、レヒトは宙へと投げ出されて――。

「そう、そうだ……。俺は、天界から落ちたんだ」

天界は、魔界首都ロイゼンハウエルの真上を浮遊する空中都市。そこから落ちたということは、レヒトはロイゼンハウエルにいるのだろうか。しかし、それでは『打ち上げられていた』という言葉はおかしい。そもそも、あれほどの高さから落ちて、無事でいられるはずはないのだ。

「……ここは、どこなんだ？」

一瞬の沈黙の後、ミオは静かに口を開く。

「『名もなき小島』——天魔大戦で敗れた片翼たちが……流刑にされた離れ小島です」

今更ながらに、レヒトは気付いた。彼女の右肩に、純白の翼があったことに。

「そんなこと……あるはずが、ない」

呟いて、レヒトは首を横に振る。

「……あるはずがないんだ。天界から落ちて……どうして……」

そこで、レヒトは言葉を飲み込んだ。

『片翼たちが流刑にされた名もなき小島は、中央大陸の遙か南東にある、地図にも載っていない小さな島』——そう教えてくれたのは、確か快だった。

魔界首都ロイゼンハウエルの南西には、大きな湖が存在する。湖から流れる大河は、中央大陸を南東に抜け、海へと続くのだと聞いたことがある。

もしも、レヒトが落ちた先が湖だったなら。大河を渡り、海へと流され、そしてたどり着いた先が、この場所なのだとしたら。

そううまくいく確率など、限りなく零に近い。だが——。

「本当……なんだな。本当に、ここは……」

しばし、重い沈黙が落ちた。時を刻む、時計の針が奏でる規則正しい音だけが、言葉をなくした室内に響く。

「……そう、か」

ぽつりと呟き、レヒトは瞳を閉じた。まだ、頭の中は混乱している。だが、いつまでも悩んでいるわけにはいかない。

仲間が、待っている。

「ミオちゃん、もうひとつ聞きたいことがあるんだ。俺がここに流されてから、何日経っている？」

「今日で、二十五日です」

「そんなに……。それじゃあ、なおのこと、長居はできないな……」  
起きあがったその体を、鈍痛が走り抜ける。ずっと横になってい

たからだろうか。体中の骨が、悲鳴をあげた。

「あつ、だめです、レヒト殿。まだ動かないでください……！」

身を折ったレヒトを、立ち上がったミオが支える。動けるような状態でないことは、レヒト自身もよくわかつている。レヒトを突き動かしているのは、魔界で自分を待っていてくれるだろう、仲間の存在だった。

「……仲間が、待ってるんだ。魔界で——ロイゼンハウエルで落ち合う約束をした。連絡もしないで、ずっと寝てたなんて知れたら、きつと怒るだろうし……」

レヒトの脳裏に、仲間の姿が蘇る。きつと、怒るだろう。それでも、二人は、そしてラグネスとレイは——きつと笑顔で迎えてくれる。

それだけが、壊れかけた、レヒトの心の支えとなっていた。

「……早く、戻らないと……」

「だめ、だめです。まだ、体力だって戻っていないのに。それに、魔界はもう……！」

はつとして、ミオが口を嚙む。しかし、そのときにはすでに遅い。その言葉、レヒトに届いてしまった。

レヒトはゆつくりと、彼女のほうへ視線を移す。

「……ミオちゃん？」

「っ……ごめんなさい。なんでも、なんでもないんです……」

彼女を問い詰めるのは、酷かもしれない。だが、聞かなかつたふりをするのは、できそうもない。

今の言葉は、レヒトの心から、そんな余裕を根こそぎ奪い去っていた。

「そういう眼には……見えないな。教えてくれ。魔界は……なん、なんだ？」

声が震える。嫌な予感ほ払拭できない。心に、靄のようにかかったまま。

「……魔界は……」

長いような、短いような沈黙の後。ミオは、静かに話し始めた。  
その言葉の続きを、聞くのが、怖かった。先ほど、夢の中で見た  
光景——闇の中に、独り置き去りにされるような——恐怖が、湧き  
あがる。

「魔界首都ロイゼンハウエルは……天界が崩落したことにより、壊  
滅。いいえ、ロイゼンハウエルだけではありません……。魔界各地  
は、天から降り注いだ黒い光によって……。無事だった街は、数え  
るほどしか残っていないと……。そう、聞きました」

レヒトは、言葉を失った。

「……そん、な……。そんなことが……」

その瞳からは光が消え去り、代わりに宿るのは、悲しみと、絶望。  
「うつ……」

レヒトを支えていた腕を離し、胸を押さえて、ミオが数歩後ずさ  
る。後悔と、なぜか苦痛の表情を浮かべて。

「ごめんなさい……」

レヒトは、なにも答えなかった。

「後で……お水をお持ちします……。今は……。どうか、お休みくだ  
さい……」

そうとだけ、言い残して。ミオは、部屋を出て行った。

「ふっ……ははは……」

独り残されたレヒトは、呆然と虚空を見つめたまま、ただ、嗤う  
ことしかできなかった。

「……快……シャウト……。……レイヴン……」

天界は、崩落したという。ロイゼンハウエルは、壊滅したという。  
レヒトとはぐれた際、天界にいた快は、助からなかっただろう。

先に魔界へと降りたシャウトは、生きてはいないだろう。——レイ  
ヴンはもう、いない。

レイも、ラグネスも。大切な人は、皆、いなくなった。レヒトを  
置いて、いつてしまった。

「……どうして……俺は生きているんだろうな……」

いっそ、あのまま死んでしまえばよかったのに。二度と目覚めなければよかったのに。

涙が溢れた。頬を伝う涙を、拭うことさえ忘れて、レヒトは嗤い続ける。

哄笑だけが、いつまでも、部屋に響き渡っていた。

第53話 穢れなき白翼 - 1 -

レヒトが意識を取り戻した、その翌朝。結局、昨日は一睡もすることができず、そのまま朝を迎えてしまった。

窓から入り込む眩い太陽の光を、レヒトは窓辺に立ち、ぼんやりと見つめていた。

夜遅くになって降りだした雨もやみ、僅かに葉に残った露が太陽に照らされ、美しく輝いている。

たとえレヒトが絶望の淵にしようとも、太陽はいつもと同じように昇り、沈む。

人間など、なんとちっぽけな存在であることが。

皮肉なほどに晴れ渡った蒼穹を、レヒトはただ見上げることしかできなかった。

「あ、レヒト殿」

起き出してきたレヒトのほうへ視線を向け、ミオが微笑む。

「体は、もう大丈夫ですか？」

「……ああ……」

彼女に微笑み返すレヒトの瞳には、相も変わらず光がない。今のレヒトを見て、彼だとわかる者はいるだろうか。

ミオの優しい笑顔に、レヒトは彼女を重ね見てしまう。

全部、忘れてしまいたかった。もう、レヒトが大切に思ってきた人は、誰もいはいないのだから。

しかし、だめだった。ふとした拍子に、思い出す。

どれだけ愛していたのか、どれだけ大切に想っていたのか——いまさらながらに痛感する。

「目え覚めたんだな、ぼーず」

声のしたほうを見ると、そこにはレヒトの知らない男性がいた。見た目には、若い男性だ。二十代後半ほどだろうか。癖の強い髪

質なのか、それとも手入れがされていないのか、金色を基調に、ところどころ銀色のメッシュが入った派手な髪は、あちこち飛び跳ねている。身に纏うのは、ミオと同じ不思議なデザインの衣服。

見た目には、と断ったのは他でもない。彼が外見通りの年齢ではないからだ。

背に頂く、一對の大きな純白の翼。それは天界人であることの証。魔界人と同じ程度の寿命しか持たないという片翼とは違い、天界人の寿命は長い。天界人が造り出されて四百年。未だ寿命で消えた命はない。

ここにいるということは、男性はミオと一緒に住んでいるのだろうが、二人はまったく似ていない。外見も似ていないが、ミオが片翼であるのに対し、男性のほうは天界人である。

親子でないとすると、恋人なのだろうか。ちらり、とレヒトはミオに視線を向ける。

「これが私の父です、レヒト殿」

レヒトの視線を紹介しろ、という意味にとつたらしく、ミオがそう答える。

男性へと目を向けると、彼は唇の端を持ち上げて笑った。

「あのまま目え覚まさねーかとも思ったけどよ。生きててよかったな」

「……おかげさまで」

なんというか、この男性からは、いまいち覇気というものを感じられない。気だるげに椅子にもたれ、煙管をくゆらせている。

煙管独特の甘い香りが、室内に満ちていた。

「ぼーず、名前は？」

「……レヒト、といいます」

男性はそっか、と呟き、煙を吐き出す。

「俺はツァ＝ユエ＝リーシェン」

レヒトは首を傾げて反芻する。

「……ツァ＝ユエ……？ 不思議な、響きですね」

「まーな。俺は異国の生まれよ。ずーっと東のほうだ」

彼やミオが纏っている不思議なデザインの衣服は、東にあるというリーシェンの故郷の民族衣装なのかもしれない。リーシェンが腰に差している二振りの剣も、見たことのないものだ。

「まー、なんだ。座れ」

向かいの椅子を顎で差し、リーシェンがレヒトに声をかける。

「あ、はい」

おとなしく従うレヒト。席を勧めたリーシェンだが、特に意味があつての言葉ではなかったらしい。眠そうな表情で煙管を銜えている。

レヒトは部屋の中を見渡した。部屋一面に、かなりの数の武器や鎧が飾られている。

職業柄、レヒトは武器、防具に関して、そこそこに目が利く。この部屋を埋め尽すほどの武器、防具の数々が、かなりの業物だといふのが見てとれた。

「リーシェンは鍛冶職人なんです。家の裏に、けっこう大きな工房があるんですよ」

ミオが、レヒトにそう説明する。

怠惰な印象を受けるリーシェンだが、職人としての彼の腕は、超一流と称して差し支えないようだ。

「あー、そうそう」

不意にリーシェンが声をあげ、レヒトの背後を指で差し示す。

「ぼーずの剣、勝手に見させてもらった」

レヒトは思わず振り返る。背後の壁に立てかけてあったのは、間違はなく、レヒトのセイクリッド・ティア。

レイより授けられた聖剣——『大いなる意思』との戦いにより、蒼い輝きを放つ美しい刀身は、無惨にもひび割れてしまっている。

「……。レイ様……」

俯いたレヒトが呟いたその名に、リーシェンの表情が微かに強張った。それは一瞬だけのことで、彼に背を向けたままのレヒトが、

それに気付くことはなかったが。

レヒトはセイクリッド・ティアを鞘から抜き放つ。刀身に走るひび割れは、前よりひどくなっているようにも感じた。少し力を加えれば、あっさりと折れてしまうだろう。

「リーシェンさん、この剣……」

肩越しに振り返ったレヒトの言葉に、リーシェンは首を横に振る。「無理だ。その剣は直せない。たぶん、直せる奴はいない」

「そうですか……」

リーシェンほどの職人がそう言うのだ。おそらく、本当に直せる者はいないのだろう。

「ミオ。茶、いれてくれるか」

空になった湯呑を差し出して、リーシェンが声をかける。

「あ、はい。レヒト殿にも、お持ちしますね」

湯呑を受け取ったミオが、奥へと消えてゆく。

「……ぼーず、天界から来たんだってな」

彼女の姿が完全に見えなくなったのを確認して、リーシェンがレヒトにそう問いかける。レヒトは振り返らぬままに頷いた。

「俺の打った武器や防具は、全部天界に納めてる。年に数回、俺は天界に行くんだが……」

大陸との交流を絶っているはずの名もなき小島。そこに住まうミオがなぜ魔界のことを知っていたのか、レヒトは少し気になっていたのだが——その答えが、これなのだろう。

彼女の父親であり、鍛冶職人でもあるリーシェンが、天界との繋がりを持っていたから、ミオは大陸の情報を知りえたのだ。

「ぼーずが寝てる間、一度だけ魔界へ行ってきた」

今度は体ごと振り返る。その瞳に宿るのは、微かな期待と、不安と恐怖。

「魔界の様子を……ご存じなんですね……？」

リーシェンは頷いた。

「あの日……天界、そして魔界を襲った黒いなかは、こっからで

も見てとれた。それからしばらくして、倒れてるぼーずを見付けてな。介抱してるとき、ぼーずがうわ言で言ったんだ。『黒い光が世界を滅ぼす』ってな」

『黒い光が世界を滅ぼす』——思い出すのは、天界で対峙した『CHILD』の存在。だが、レイヴンの体を借りた『CHILD』は、『大いなる意思』によってレイヴンともども葬られたはずなのだ。その瞬間を、レヒトは確かに目撃しているのだから。

しかし、それならば、なぜ——。

「不安に駆られて、俺は魔界まで行った。そこは……」

そこで、リーシェンは一度言葉を切る。煙管から立ちのぼる煙を、ぼんやりと眺めて。

「……そこは、さながら地獄のようだった」

あまり表情に変化を見せないリーシェンの瞳が、僅かに揺れる。そこに、自分と同じ感情が潜んでいるのをレヒトは捉えた。

すなわち、悲哀。

「天界を中心に魔界全土に降り注いだという黒いなにかは、魔界の広大な大地を死の土地へと変えていた。遠く離れた魔界南部でも、あの状態だ。天界の惨状を確認することは、できなかった。怖くてな……」

今まで、過去に何度か体験したことのある死の恐怖。しかし、己に死の瞬間が迫るときでも、ここまでの絶望は感じなかった。

重傷すぎると痛みも感じなくなると、以前聞いたことがある。これも、同じようなことなのだろう。

悲しみが深すぎて、涙も出ない。言葉もない。

それなのに。

頭の中だけは、嫌に鮮明だ。本当に。嫌になるくらいに。

「馬鹿だよなあ、ほんとによ。天界が落ちたって、あの人は逃げられたはずなのに……。あの翼で……。俺とは違う、あの穢れなき美しい翼で……。逃げりゃ、よかったのによ……」

言って、彼は小さく息を吐いた。

「代われるもんなら……代わってやりてーなあ……」  
悲しげにそう呟いたリーシェンに、レヒトは言葉をかけることができなかった。

第54話 穢れなき白翼 - 2 -

家の裏手にあるリーシェンの工房に向かい、レヒトとミオは並んで歩いていった。昼食の支度ができたため、彼を呼びに行く途中なのだ。

リーシェンは毎日、工房へと足を運ぶ。だが、決して剣を打とうとはしなかった。

もう剣は打たないのかとレヒトが尋ねると、リーシェンは、もう剣を捧げる相手がいない、と酒を呷りながら呟いた。

それでも、彼は毎日ここへやってくる。

レヒトが名もなき小島で暮らし始めてから、数日が経過していた。生きる気力をなくしたレヒトを、ミオは快く家に置き、世話をしてくれている。

「ありがとう、ミオちゃん。迷惑だろうに、ずっと置いてもらって……」

「いいんですよ、そんなこと。お心が落ち着くまで、好きなだけいてくださって構いませんから。気にしないでくださいね」

そう言って、ミオはふわりと微笑む。ミオの優しさが、レヒトにとって救いとなっていた。

「レヒト殿。なにか、不自由な思いはされていませんか？」

「大丈夫。村の人たちも、よくしてくれるから……」

長い間、大陸との交流を断っていたわりには、村人はよそ者のレヒトに対して好意的だった。もっとも、それは仲間も家族も失い、独り流されてきたことへの同情からくるものだったのかもしれないが。

この島で生活するうち、レヒトには、いくつか気になることができた。

リーシェンとミオに対する村人の態度が、どこか、よそよそしい。冷たい、というよりは、なにかを恐れている、とでも表現するべき

だろうか。

二人は気にするような様子もなかったが、自らに向けられるそれに、気付いているだろう。だが、二人はなにも言わない。気付かぬふりをして、普通に接している。

村人がよそ者である自分に対して好意的であつたために、レヒトは余計に気になっていたのだ。

そして、天界人であるリーシェンが、なぜ片翼の流刑地である、名もなき小島にいるのかも。

「いないみたいです、ね、リーシェン」

ミオの言葉で、レヒトはふと我に返る。もうひとつ、レヒトが気になっていたのが、これなのだが。

「もう……」

腰に手をあて、ミオは眉を寄せる。

ミオの視線の先——主が不在の工房には、空になつた酒瓶がごろごろ転がっている。

このところ——レヒトが目覚め、二人の家に厄介になり始めたときには、すでにそうだったのだが、毎晩、リーシェンは浴びるように酒を飲み、そして死んだように眠る。彼は、特別酒に強いというわけでもないらしい。ひどい二日酔いに苦しみながらも、それでも彼は酒をやめようとはしない。

「酔つ払つたままでどこに行つたのかしら……。もう、本当に世話が焼けるんだから」

ミオは小さく息を吐くと、レヒトのほうを振り返る。

「私、少し探しに行つてきますね。あれでも私の父親ですから、放つておくわけにもいきませんし」

そう言つたミオも、決して嫌そうではなく。世話の焼ける父親を、彼女が大切に想っていることがよくわかる。

リーシェンが飲む酒を用意し、運ぶのはミオの役目なのだが、その酒瓶の中身が、途中から——リーシェンに酔いが回つたあたりから、水にすり替わっていることをレヒトは知っている。彼女は酒に

溺れる父親の体を心配して、中身をすり替えているのだろう。

飲むな、と言わないのも、彼女の優しさだ。父親が酒に溺れる理由を、彼女は知っているから。

「すみません、レヒト殿。先に戻っていて頂けますか？」

「いや、俺も一緒に行くよ。ミオちゃんとリーシェンさんには、お世話になってるし、俺もなにか手伝いたいんだ。それに、もしリーシェンさんが酔って寝ていたら、ミオちゃん一人では運べないだろう？」

レヒトの言葉に、ミオは苦笑した。決して酒に強いとはいえない父親が、酔うとどうなるかを知っているからだろ。

「そうですね……。じゃあ、お願いします」

「よし、行こうか」

彼女には、父親の居場所はだいたい見当がつくようで、工房を出ると、まっすぐに歩き始める。

ミオとリーシェンが住む家は、村からは離れた場所にある。工房の音がうるさいから、とミオは言っていたが、レヒトには、それだけが理由だとは思えなかった。

二人がリーシェンを見つけたのは、たいして歩かぬうちだった。島の北側に広がる砂浜に立ち、愛用の煙管をくゆらせ、彼はぼんやりと彼方へ視線をやっていた。おそらくは、ここからでは見ることのできない、遠い天界の地を想って。

「……。戻りましょう、レヒト殿」

彼の後ろ姿を見つめたまま、ミオが小さく言葉を発した。

「ああ……」

どちらともなく踵を返し、言葉もなく、もと来た道に戻り始める。「亡くなられた方は、辛かったでしょうね」

歩きながら、ミオがぼつりと呟いた。

「けれど……残された人は、もっと辛いのでしょうか。その哀しみを胸に抱いて……それでも、生きていかなければならないのだから……」

彼女の言葉は、レヒトの心に深く響いた。

「レヒト殿、少しよろしいですか？」

ミオがその声をかけてきたのは、ちょうどレヒトが昼食の後片付けを終えたときだった。リーシェンは、まだ戻っていない。

「どうしたんだい、ミオちゃん。改まって」

「……レヒト殿に、会って頂きたい方がいるんです」

「俺に、会って欲しい人？」

ミオはこくりと頷く。

「私のお仕えする方……隠者様に、お会いして頂けませんか？」

その名は、ミオから聞いていた。永きに渡って名もなき小島に住まい、ミオが仕えている人だという話だった。

村を覗いても、それらしい人は見付けられず、レヒトは少し興味を持っていた。

「すみません、突然。貴方の悲しみを知ってしまったから……なかなか、言い出せなくて……。けれど、やっぱり……貴方のいるべき場所は、ここではないと思ったから……」

「……迷惑、だったかな」

「いえ……そうではないんです。今まで、ずっと黙っていましたけど……」

しばしの沈黙の後、ミオは静かに口を開く。

「私には、わかるんです。貴方のことが、貴方以上に」

レヒトの瞳を見据えて、彼女はそう言い放った。

いつか聞いた村人の言葉を、レヒトは思い出していた。ミオ様に嘘は吐けない、ミオ様はすべてを見通す『眸』をお持ちだ、と。

「貴方は、こんな小さな島にいるべき人ではありません。貴方は、世界に必要な人。危機に陥ったヘヴンを救える、唯一の人だから……」

「ミオちゃん……君は……」

「……行きましよう、レヒト殿。隠者様のもとへ。そこで、すべて

をお話します」

彼女はなにも答えることなく、ただ静かに微笑んだ。

地図にも載らないという名もなき小島は、本当に小さな島だ。数時間もあれば、島を一周できてしまうだろう。

島の中央に鎮座するのは、大きな山。その山の麓に造られた小さな村が、名もなき小島で唯一の集落。山の島の北側には砂浜が広がっており、南側は絶壁になっている。

かつて、レヒトはレイヴンから、名もなき小島にあるという『死の山』の話聞いたことがある。焰を噴く『死の山』——それが真実なのかはわからないが、この大きな山には、なぜか木の一本も生えてはいなかった。

だが、ミオに案内され、レヒトが辿り着いたこの島は、名もなき小島よりもさらに小さい。島の中央に小さな建物、他に目に入るものは樹だけである。

名もなき小島と、北西に存在するこの小さな島は、浅瀬で繋がっているために、歩いて行き来することができる。しかし、それは昼の間だけ。夜になると、浅瀬は沈んでしまうので、この島へ渡ることはできなくなるらしい。

「失礼します、隠者様。ミオです」

建物の前に立ち、ミオが声をかけると、中で気配が動く。

ややあつて、顔を覗かせたのは、一人の青年だった。柔らかそうな若草色の髪、大きな瞳に低い鼻。童顔で、特別整った顔立ちというわけではない。

「ミオ、よく来たのう」

まるで老人のような口調でそう言って、青年は嬉しそうに笑った。「このような辺鄙なところまで来るのは、おぬしかあの馬鹿リーシエンくらいなものよ。まあ、入るとよい」

二人を招き入れ、青年はどっこらしょ、と声をあげ、敷物を敷いた床に座った。ミオは靴を脱いであがり、青年の向かいに膝を折つ

て座る。レヒトも同じようにしてミオの隣に座った。

小さな建物の中は、レヒトの知る家のイメージからはかけ離れていた。壁や床、そして天井まで、そのすべてが黒っぽい木で造られており、どこか温もりを感じさせる。なにに使うのかはわからなかったが、青年とミオ、レヒトが向かいあって座る間の床、その一部が四角く切られ、中には灰が敷き詰められていた。

「隠者様、この方がお話していたレヒト殿です」

ミオに紹介され、レヒトは青年に頭をさげた。

「おぬしがそうであつたのか。このような生活を送っておるゆえに、わしは隠者と呼ばれておるよ」

「俺は、レヒトといいます」

「レヒトか……よい名だのう」

飄々とした青年だが、金色の瞳は、まるで底知れぬ海。普通の人間には、ありえないその瞳。深く、鋭く、それでいて濁りがない。彼の瞳は、どこか『大いなる意思』に近いものがある。だが、この青年の場合、その瞳に宿る輝きは、『大いなる意思』のような冷たさではなく、すべてを包むような穏やかさ。

「わしの名は、ミロスラーフという」

レヒトは一瞬、言葉に詰まった。

「ミロスラーフ様……！？ あ、貴方が……」

驚愕するレヒトに、ミロスラーフと名乗った青年は顎に手をあてる。

「ふむふむ、やはり知っておったか。そうじゃよ、わしがミロスラーフ。三闘神、と呼ばれることもあるのう」

悪戯っぽくそう言って、隠者と呼ばれし青年——三闘神ミロスラーフは、少年のように人懐っこい笑みを見せた。

side story 8 〈思い出のチョコレート〉

男が戻ると、部屋にはまだ明かりがついていた。

巨大なコンピュータの前に座り、一心不乱にキーボードを叩く少年。そうとう集中しているようで、男に気付く様子もない。

『まだやっていたのか』

男が声をかけると、ようやく気付いたらしい少年が、男のほうを振り返った。

『あ、おかえり。早かったじゃん』

早かった、といっても、それは普段と比較してのことで、時刻はすでに真夜中を回っている。とはいえ、ここところは毎日、明け方近くにならねば戻れず——いや、むしろ戻ってくる事ができれば幸運だった。何度、施設で夜を明かしただろう。

『ミロ。アルとヴェンは？』

着替えながら問うと、少年は奥の部屋へと続く扉を指差した。

『寝たよ。ヴェンは戻ってくるまで起きてるって頑張ってたけど』

その様子がありありと浮かんでくるようで、男は小さく笑みを溢す。

『それよりさ、見てよ。あとちょっとで完成なんだ』

少年に言われ、男はコンピュータのディスプレイを眺める。ディスプレイに映るのは、『HEAVEN』の文字。

『『HEAVEN』……楽園、か』

『そう。俺たちみんなの『HEAVEN』ってわけ。俺って天才だけど、ネーミングセンスも最高じゃん』

自慢げに胸を張る少年。その柔らかい若草色の髪を、男はくしゃりと撫でる。

少年は稀代の天才だった。両親の才を、しっかりと受け継いでいるのだろう。

彼の両親は、男と同じ軍に所属していた。二人とも穏やかで、と

ても優しい性格で。ずいぶんよくしてもらったのを覚えている。彼らはその天才的な頭脳で、数々の兵器を開発し、勝利に貢献し続けた。

世が平和であつたなら、心優しい二人の才は、もっと別のことに使われていたはずだ。人殺しのための道具を造らされることもなく、それが原因で命を奪われることもなかっただろう。

二人が殺されたことを知り、男は二人の忘れ形見である少年を引き取ったのだ。

『よかったよ、なんとか間に合いそう。アルが元気なうちに完成させなきゃ、意味ないからね』

『ミロ……』

少年は悪戯っぽい笑顔を見せ、両手を男に差し出した。

『……なんだ、その手は』

『なにつて、決まってるじゃん。俺、頑張ったんだし、ご褒美』  
『有償なのか？』

眉を寄せる男に、少年は当然とばかりに頷いた。

『当たり前じゃん。あ、けど無理か。薄給だし』

『余計なお世話だ』

男はあることに気付いたように、懐を探る。

『『ご褒美』……これでいいか？』

そう言つて、男が取り出したのは小さなチョコレート。両手にいっぱいのご褒美、というわけにはいかなかったが、甘い菓子など、今では滅多に手に入らない。

『うわあ……』

年の割にはしっかりとし、大人びた少年も、大きな金色の瞳を輝かせている。その嬉しそうな顔は、常に仏頂面と称される男の顔をも綻ばせる。

『けど、いいや』

少年は、一度は受け取った包みを、男へ返した。

『どうしてだ？』

『ヴェンとアルにあげなよ。二人とも甘い好きだし、まだ小さいんだし。俺は、もう大きいからいいんだ』

『……優しいな、お前は』

男は少年の手にチョコレートの包みを乗せ、そのまま、その小さな手を包み込む。

『これはお前のものだ。私に希望をくれた、お前に……』

屈んで少年と視線をあわせ、男は微笑んでみせる。

『今は、これしかないが……近いうちに、必ず平和を取り戻して……』

……両手にいっぱい菓子を持って帰ってくる』

『約束だからね』

『ああ……約束だ』

チョコレートを頬張って、少年は悪戯っぽく笑う。

『じゃあ、指きり』

『よし』

なにもなかったけれど、幸せだったあの頃。永き歳月を経た今も、男と少年の心に残る、甘い甘い、たった一枚のチョコレート。

## 第55話 甦れ、輝ける希望

「……ヒト殿……レヒト殿？」

かけられた声で、覚醒する。数回瞬きを繰り返すと、顔を覗き込むミオと目があつた。

「大丈夫ですか？」

「え？ あ、ああ……大丈夫。少し、ぼーっとして……」

誤魔化すようにそう言ったレヒトだが、ミオが返したのは、意外な言葉だった。

「今……誰と意識を同調させていたんですか？ 『人間』では、ないように感じましたけれど……」

それは、レヒト以外にはわからないはずのことである。それも、彼女は断言した。誰かと意識を同調させていた、その相手は人間ではない、と。

「どうして……」

「ミオは、他人の心の中を見ることができ。精神感応能力、とでもいえばよいかのう」

レヒトの問いかけに、ミロスラフが代わりに答える。

「そうか……それで、俺の心の中を……。そういえば、俺は君に名前を言ったことも、ないはずだよな」

「……すみません、勝手に覗いてしまつて……」

申し訳なさそうに頭を下げるミオを、ミロスラフが弁護する。

「ミオの能力は、自身で完全に制御することが難しい。普通に行っているぶんにはよいのだが、相手が強い感情を抱いている場合などは、それに引きずられてしまうのじゃよ」

「そうなんですか。ミオちゃん、気にしないでいいよ」

「すみません……。気持ち悪いですよね……。こんなの……」

悲しげに微笑むミオを、レヒトは不憫に思った。生まれ持った能力のせいで、ミオは苦勞しているのだらう。今の言葉が、それを証

明している。

レヒトはもう一度、気にするなと微笑んで見せた。

「……さて、レヒトよ。おぬしを呼んだのは他でもない。おぬしはどこまで知っている？」

直感的に、彼が『大いなる意思』のことを尋ねているのだとレヒトは悟った。

「ほとんど、なにも。俺が知った——いえ、思い出したというべきでしょうか——ことといえば、十年前のあの日、『大いなる意思』によって、俺が生み出されたということ。それと、俺を生み出したはずの『大いなる意思』が、俺を滅ぼそうとしていること。……それだけです」

「ふうむ……なるほどのう」

顎に手をあて、ミロスラフが唸る。

「彼が動き出したということは……ついに、完全に目覚めてしまったか……『CHILD』よ」

「いいえ……。ミロスラフ様、『CHILD』はもう存在しません。あの日、確かに『大いなる意思』が……」

レヒトは、そこで一度言葉をきる。そして小さく息を吐き、言葉を続けた。

「『CHILD』が依り代としていた子供ともども……滅ぼしてしまっただからです……」

それだけは、間違いない。あのときの光景は、今もレヒトの脳裏に鮮明に焼き付いている。

あの無邪気な笑顔を、レヒトは守ることができなかった。

「っ……」

ミオが胸を押さえるのを見て、レヒトは慌てて心を落ち着かせる。レヒトの強烈な感情——憎悪と絶望とが、流れ込んでしまったのだろつ。

「すまない、ミオちゃん」

「……大丈夫です。普段から、心に鍵をかけるようにはしているの

ですが……」

他人の感情が、彼女の精神にどれほどのダメージを与えるのかはわからないが、苦しそうな表情を見る限り、決して軽いものではないのだろう。

「しかし、それはおかしいのう……」

ぽつりと呟かれたその言葉に、レヒトは首を傾げた。

「おかしい……とは？」

「……あの日、天を震わせ、地を揺るがした黒い光は、間違いなく『CHILD』のもの。おぬしの言う通り、もしも、『CHILD』が『大いなる意思』によって滅ぼされていたとしたら……」

「あつ……」

それは、ありえないこと。

ミロスラフは、あの黒い光を『CHILD』の力だと断言した。だとすれば、考えられることはただひとつ。

「……『CHILD』は、滅ぼされてはいない？」

声が震えるのが、自分でもわかった。今度は、恐怖でも、憎悪でも、絶望でもない。久しく忘れていた、この感情。

「そうなるのう。今の彼に……『CHILD』を葬るだけの力が残っているとは思えぬ。そして、あれから三十日以上が経つというのに、彼がなにも行動を起こさないのがその証拠じゃよ」

「生きている……。レイヴンが……生きている……」

ぽつりとそう呟いたレヒトの瞳に、微かにだが、光が戻る。膝の上で握った拳に、自然と力が籠った。

「……ミロスラフ様。ひとつ、お聞きしたいことがあります」

「『CHILD』について、だな？」

レヒトは頷いた。

「『CHILD』についてを語るには……まず、この世界についてを教えねばならぬ」

そう前置きして、ミロスラフは静かに語り始めた。

「この世界は、今はもうない世界——わしらが生まれ、そして生き

た世界のことだが——その世界のコンピュータに創られた、いわば仮想世界なんじゃ」

不思議なことに、レヒトはそれを理解することができた。ミオに視線をやると、彼女も頷いている。ひよつとすると、ミオは、そのことをミロスラーフから聞いていたのかもしれない。

「当時は、ほんの遊びのつもりだったのだがのう。わしらがこの世界にいた間に、本来いるべき世界が滅んでしまった。その瞬間、なぜこの世界がともに消滅しなかったのかはわからぬが……。わしらは、もとの世界に戻れなくなってしまったということじゃ」

戻れなくなつたということは、今ではわしらにとつてもこの世界が『現実』ということだがのう、とミロスラーフは付け加える。

「それと、その『CHILD』に……どんな関係が？」

「ふむ。ミオにも、そのことは話しておらんかったかのう。『CHILD』とは、要するにウイルスなんじゃよ」

「ウイルス……？」

「簡単に言ってしまうえば、コンピュータに侵入し、その破壊を目的とする、悪意あるプログラムのことじゃ」

これも聞いたことのない言葉だが、レヒトにはなんとなく理解できた。

「……なるほど。それで『大いなる意思』は『すべてを破壊しようとする意思そのもの』と表現したんだ……」

なかなか的確な表現である。

三闘神がヘヴンを創つたというコンピュータの中に『CHILD』が入り込み、その世界が消滅した影響か、はたまた別のなにかが原因なのかは不明だが、『CHILD』までもが、ヘヴンに具現化し、そしてヘヴンを滅ぼそうとしたのだらう。

「わしらは『CHILD』を完全に消すことができず、仕方なしに封印し、それをある場所に眠らせた。永遠に目覚めぬよう、ある一族に託して」

「けれど……『CHILD』は目覚めた……」

「それを、『大いなる意思』と呼ばれる方が、滅ぼそうとしている……。なにか、問題があるんですか？」

ミオの言葉に悪意はない。なにも知らない彼女にしてみれば、それは当然の疑問なのだ。

「……『CHILD』が依り代としている肉体……俺の仲間のものなんだ」

ミオが息を飲んだのがわかった。

「……ごめんなさい……」

「いいんだよ、ミオちゃん」

うつむいたミオに、レヒトは力なく微笑みかける。

「そう……そうなんだよな。レイヴンを救うことは、ヘヴンを……ヘヴンに生きる人々の命を、犠牲にすることになるんだよな……」

本当はわかっていた。だが、わからないふりをしていた。現実から目を逸らして。

「俺のわがままで…… たった一人の子供の命と、この世界とを引き換えにするなんて……」

ゆっくりと、レヒトは首を横に振る。

自分の命なら、喜んで差し出そう。それで、あの無邪気な子供が救われるなら。だが、レイヴンを救うということは、ヘヴンを滅ぼす手助けをするということだ。ここに生きる人々に、仲間のために死んでくれ、などと——言えるはずが、なかった。

「レヒト殿……」

膝の上で握られた拳を、ミオの手が包む。

「その方は……貴方の大切な方なのでしょう？ 私……うまく、言えませんが……。なにか、方法があると思います。無責任な言葉かもしれませんが。けれど……諦めないで、ください……」

「……君は、優しいんだな。彼女も、きっとそう言うと思う」

レヒトは、ミオの薄紫色の優しい瞳の向こうに、あの強い光が宿る、蒼穹色の瞳を見た。

「『やりもしないうちから諦めるな』って……怒られるだろうな……」

……」

彼女はもういない。心に、ぽっかりと大きな穴が開いてしまっている。

小さくため息を吐くレヒトに、ミロスラーフが語りかける。

「生きているぞ、レヒトよ」

一瞬、耳を疑った。生きていると、彼はそう言ったのだろうか。

「……え？」

間の抜けた声をあげたレヒトに、ミロスラーフは静かに告げた。

「レヒト。なぜ、おぬしが無事にここまで辿り着けたと思う？ 単なる偶然、運のよさだと思うか？」

「……」

レヒトはなにも答えられなかった。

正直、それだけでは説明のつかない出来事が多すぎる。

「もちろん、そうではないのじゃよ。おぬしを愛し、おぬしの無事を願う者たちの『想い』が、おぬしを生かしたのだ」

「みんなは……無事、なんですね？」

レヒトの心に、一筋の光が差し込む。思い出すのは、大切な仲間の笑顔。伸ばされたその腕、今度こそ、掴んだ気がした。

「ロイゼンハウエルがあつた場所で、お前の仲間は待っている。忘れるな、レヒト。ここは想いが力になる世界。真に願い、そして心より祈れば、叶わぬ望みなどない」

ミロスラーフは、少年のような笑顔を見せた。

「決して諦めるな。どんなときでも、希望さえ捨てなければ、必ず道は開けるのだから」

「……はい！」

光を失っていたレヒトの瞳に、強い意志の輝きが戻った。

## 第56話 救われぬ魂

「……憎いか、彼が」

それは、唐突な問いかけだった。レヒトの瞳が、一瞬だけ、暗い色に染まる。

「どんな理由があつたにせよ、あの男が……『大いなる意思』が、レイヴンをその手にかけた事実は変わりません。それを……許すことなど……」

呟いて、レヒトはゆつくりと首を振る。

「レヒトよ。憎しみに囚われてはならぬ。憎しみに囚われた心では、見えるものも見えなくなる」

「……」

「それでも、憎しみを捨て去ることは、できぬか？」

無言の肯定。そうか、とミロスラーフは静かに呟く。

「……確かに、致し方ないことなのかもしれないが……」

彼の瞳が、悲しそうに、寂しそうに細められたのを、レヒトは見た気がした。

「わしの言葉、今のおぬしには届くまい。だが、もしもその気になつたならば……アルカディアスに会つとよい。『大いなる意思』のこと……おそらく話してくれるだろう」

「……わかりました」

彼の瞳に宿る感情——その理由がなんなのか、レヒトにはわからなかった。それを察したのか、ミロスラーフが静かに言葉を紡ぐ。

「レヒト……『大いなる意思』は、わしらの——」

続く言葉を掻き消したのは、遠く響いた轟音だった。

「なんだ!？」

レヒトが立ち上がるよりも早く、ミロスラーフが扉へと走り寄り、開け放つ。

顔を見合わせ、二人も彼の後を追う。

ミロスラーフは、扉を出たところで立ち尽くしていた。彼の視線を追って、レヒトもまた硬直する。

「死の山が……焔を……！」

よく見ると、どうやら焔とは違うようだ。山頂から噴き出した、どろどろとした紅いなにかが、山の斜面を伝い流れ、麓の村に迫る。

「そんな……なにも、感じなかったのに……」

ミオの言葉で、レヒトはレイヴンに言われたことを思い出した。

『死の山が焔を噴くとき、精霊が大きく乱れる』と。今、彼女はなにも感じなかったと言っていた。

「嫌な予感がする……ミオちゃん、村へ戻ろう！ なにか……なにかが起きている」

レヒトがそう言うのと、ミオも小さく頷いた。彼女も、それを感じたのか——それとも、レヒトの心を見たのだろうか。

「よし……行こう！」

「待つんじゃない」

走り出そうとしたレヒトに、制止の声がかかる。

「ミロスラーフ様……！？」

「ゆっくりと走っている暇はあるまい。わしはあれをなんとかする。村のほうはおぬしらに任せよう」

その言葉が終わらぬうち、レヒトは一瞬、軽い眩暈を感じた。

思わず閉じた瞳を再び開けると、目の前には先ほどまでとはまったく異なる光景が広がっていた。

「ここは……ミオちゃんの家の前……？」

「隠者様が、送ってくださったんです。それより、今は急ぎましょ  
う」

レヒトは頷き、ミオの後を追って走り出す。

村までは、道なりに東へと進めばいい。村へと急ぐ二人の足が、とまる。

道を塞いで現れたのは、一匹のブラウ・デーモン。

嫌な予感は、どうやら当たってしまったようだ。

「ちっ……！」

レヒトは舌打ちした。今の彼に、武器はない。最下級とはいえ、素手で魔物を倒すことなど不可能と言っている。

やたらと大振りに振り下ろされた爪での一撃を、大きく後ろに飛ぶことでかわす。しかし、いくら攻撃をかわしたところで、倒すことができなければ意味がない。

先を急ぐ今、このような場所で時間を無駄にするわけにはいかないというのに――。

「――レヒト殿。そこを、動かないでくださいね」

耳元で、ミオの声が聞こえた気がした。

レヒトが聞き返すよりも早く、ブロウ・デーモンの断末魔の悲鳴が響き渡る。しばらく痙攣した後に、ゆっくりと倒れ、土煙をあげる魔物の巨体。

その向こうに、レヒトはミオの姿を見付けた。

右手に握られた小さな剣。ナイフかとも思ったが、よく見ると違いがわかる。リーシェンが持っていた、あの不思議な片刃の剣を、そのまま小さくしたような形状だ。

剣など、所持しているようには見えなかった。服の下にでも仕込んでいたのかもしれない。それにしても――。

「……腹を二回、背中へ回って一回……」

レヒトは驚いていた。彼女の技量は、凄まじい。そして、特筆すべきはそのスピード。常人では、その動きを捉えることはできないだろう。

剣を黒塗りの鞘へと戻し、ミオが振り返る。彼女は返り血に濡れた頬を腕で拭いた。

「行きましよう、レヒト殿」

「ああ……急ごう」

村へと続く道を、二人は再び走り出した。

「なっ……」

レヒトは、目に飛び込んできたその光景に、思わず声をあげていた。

ようやく村に辿り着いた二人が目にしたのは、おびただしい数の魔物の死体だった。その数、十か、二十か——いや、もっと多いかもしれない。そのほとんどが、もはや原型がなんであつたのか、それすらもわからないほどに、細切れにされている。

正直、人間の手によるものだとは、思えなかった。

「……これは……」

ぼつりと呟き、表情を曇らせるミオ。

「ミオちゃん……ど、どういふことなんだ、一体……。これだけの魔物を、こんな風に……」

「……。これは……リーシェンが……」

その瞬間。レヒトは大地を蹴り、ミオに体当たりをかける形でその場を飛び退く。

刹那——二人がいたその空間を、白い光が裂き、貫く。

「なんですか、今のは……!？」

言いかけたミオの言葉がとまる。同じく、その光のほうを見たレヒトの体にも、緊張が走った。

「……おいおい……」

声は、なんとか出た。

女性の上半身と、大蛇の下半身を持つ呪われし美しき魔物——ゴーゴン。すべてを石に変えるこの恐るべき魔物と、かつて、レヒトは一度だけ対峙したことがある。あのときは、偶然出会ったレイヴンの魔法で、なんとか撃退することができたのだが。本気で、洒落にならない相手である。

「レヒト殿、私が戦います。下がっててください」

立ち上がり、ミオは一步前へと進み出る。ゴーゴンが、レヒトからミオへと視線を移した。

「この小太刀で、魔物に通用するかどうか……桜吹雪を持ってくれ

ばよかった……。けど、やるしかありませんね……。！」

ミオが魔物に躍りかかる。魔物に届く直前で、彼女は軌道を変え、側面から魔物へと剣を振り下ろす。その刃が、魔物を裂く寸前。

「火炎獄！」

彼女の言葉に反応し、手にした剣が焰に包まれ、切り裂いた魔物の身を焼き尽す。

苦痛に身を震わせながらも、ミオめがけて鞭のような尾が唸る。

ミオはそれを後方に飛ぶことでかわし、再び魔物に迫る。

そのときだった。レヒトの真横を、一陣の風が吹き抜ける。

敵意も、殺意も、悪意も感じなかった。しかし――。

「っ……。！？ 伏せろ、ミオちゃん！」

言葉では表せない、なにかを感じたレヒトが彼女に声をかけるのも、それに反応したミオが行動を起こすのも。

わずかに、遅れた。

白い影が大地を走った。そして、幾筋もの、銀色の光が迸る。

レヒトが辛うじて捉えることが出来たのは、それだけだった。

小さな肉塊となり果てた魔物が、大地に落ちる。断末魔の悲鳴を、魔物は残すことが叶わなかった。もしかすると、自らを襲った『死』にすら、気付かなかったかもしれない。

巻き添えを食らったのか、ミオの体も大きく跳ね飛ばされ、大地を転がった。しかし、傷を負っている様子は見られない。

「くっ……。ひやははは……。！ まあだ残ってやがったか……。いいぜえ……。」

声は、レヒトの真後ろで聞こえた。

慌てて振り返ると、そこには。

「リーシェンさん……。？」

二振りの抜き身の剣を両手に提げた、リーシェンの姿が。普段は穏やかで、そして気だるげな光を宿すその瞳。

そこに覗く、狂気の輝き。獲物を狙う獣のごとく、純粹な、甘美な狂気。

「血が……俺の血が滾る！ もっと、もっと斬れってなあ……」  
彼の瞳に映った己の姿——レヒトは首を絞めあげられたような感覚に襲われた。

（……恐怖だ。……これは、恐怖……）

彼が一步、レヒトのほうに歩み寄る。その瞳に、狂気と歓喜、ふたつの色を滲ませて。

「……斬り、たい……。斬らせろ……もっと……もっとだ！」

リーシエンの姿が掻き消える。レヒトは思わず瞳を閉じた。

「——リーシエン！」

ミオの声。恐る恐る瞳を開くと、リーシエンの剣は、レヒトの喉を裂くまさに寸前でとめられていた。

正気を取り戻した、彼自身の手で。

「……ミオ、か……？」

がくりと膝を折ったリーシエンに、ミオが駆け寄ってくる。

「リーシエン……大丈夫……？」

「……ああ。ミオ、俺はなにをした？　なんで、こんなところに……」

そこで、彼はようやく気付いたようだった。自身の手握られた、二振りの剣に。そして、ゆっくりと周囲に転がる肉塊を見渡して。

「……まーた……やっちゃったか……」

疲れた口調で呟いて、自嘲気味に、嗤う。

「違うわ。リーシエンは……村のみんなを守ったのよ。魔物を倒して……」

瞳を閉じたリーシエンを、ミオは優しく抱き締める。

「貴方は英雄だわ……！」

閉じられた彼の瞳から、一筋の涙が零れ落ちた。

## 第57話 記憶をなくした天使 - 1 -

宵の口から降りだした雨は、時を追うごとにその激しさを増していた。

この雨で、大地を真紅に染めた血は、綺麗に洗い流されたことだろう。僅かな痕跡さえも残さずに。

名もなき小島を襲った魔物は、たった一人の男の手により全滅。

『死の山』も三闘神ミロスラーフの力で鎮められ、島は静寂を取り戻していた。

あれだけの騒ぎがあつた後にしては、いやに静かな夜だった。もちろん、それは平和がもたらす静けさなどではなく、未だ冷めやらぬ恐怖によるものなのだろうが。

また魔物が現れはしないだろうかかとレヒトが問うと、ミロスラーフは、今夜は大丈夫だと断言した。理由を尋ねても教えてはくれず、勝手にあれこれと考えて、さすが三闘神と思うほかなさそうだった。

「外……すごい雨ですね」

椅子に腰かけ、ずっと黙りこくっていたミオが、小さくそう呟いた。

あの後、少し遅れて村に現れたミロスラーフとともに、レヒトたちはミオの家へと戻ってきていた。

「雨は嫌いかい？」

「……わかりません。けれど、雨の日は……不思議な気持ちになるんです。どう、言えはいいのか……」

思案するように、しばし窓を叩く滴を見つめて。ミオはややあつて言葉を続ける。

「懐かしいけれど、寂しい……そんな感じです」

「なにか、雨の日に特別な思い出がある、とか？」

「……そう、かもしれませんね」

それ以上をなにも語ることなく、ミオは静かに微笑んだ。

「レヒト殿は、雨……お好きですか？」

「そうだな……少なくとも、嫌いではないかな」

この言葉、ミオには意外なことだったようだ。

戦いを生業とする者は、総じて雨を嫌う。レヒトのような、相手がプロの暗殺者などである場合はなおさらに。

雨は視界を遮り、微かな気配や物音、息遣いなどを消し去ってしまふ。攻める側にとっては有利に、守る側にとっては不利に働く。

無言の問いかけに気付いたようで、レヒトは少しばかり躊躇ったあと、小さく付け加えた。

「俺は園芸が趣味なんだ。だから、雨は嫌いじゃない」

案の定、目を丸くするミオに、レヒトは苦笑する。たいていがこの反応だ。

「そんなに意外かな？」

「少し。けれど、素敵なご趣味だと思います」

ラグネスに拾われてから一年ほどは、庭師の真似事をしていたこともあるのだ。その後、ひょんなことからレヒトの武術に対する天才的な素質と、例の不思議な力の存在が明らかになり、レヒトはラグネスの護衛役を務めるようになった。

剣を握って命を刈り取るより、土をいじって花を愛でるほうが好きだと言ったら、似合わないと思われるだろうか。

今も、屋敷を囲む庭には、レヒト専用の一画がある。様々な種類の花が咲き乱れる中、その一画だけは、いつも決まって紅い薔薇。

レヒトはなにより、紅い薔薇の花が好きだった。

以前、レヒトはラグネスに、どんな女性が好みかと問われたことがある。それに対して、レヒトは手塩にかけて育てた薔薇を見つめ、こう答えたのだ。

この薔薇のような女性が好きです、と。

そんな女性を見付けるのは大変だ、とラグネスは笑った。レヒトもそう思っていた。

しかし、レヒトは出会ったのだ。

誰かれ構わず魅了する美しさは、甘い芳香と朝露に濡れる花弁のよう。誰も踏み込ませない心の奥底は、影に隠された刺のよう。無垢なようで、それでいて、人の心を掻き乱す。

光と影、その双方をあわせ持つ、強くも儚い存在。

そう、まさに――彼女は薔薇のような人。

「――レヒト殿？」

ミオの声で、レヒトはふと我に返る。そこで初めて自分の顔が緩んでいることに気付き、レヒトは慌てて表情を引き締めた。

「……花にとって、雨は天の恵みだからな。だが、この雨は……」

レヒトは立ち上がり、窓辺に立って外を眺める。雨粒が窓にあたっては砕け、いくつもの筋を残し消えてゆく。

「まるで……泣いているようだ」

レヒトがそう呟くと同時に、僅かな音さえ立てずに扉が開く。顔を覗かせたのは、リーシェンとともに別室にいたミロスラフである。

「隠者様……あの……」

思わず椅子から立ち上がったミオに近付き、ミロスラフはその肩に手を置く。

「案ずるな、ミオ。今は落ち着いておるよ」

ミロスラフが優しい笑みを見せると、不安げに揺れていた彼女の瞳に、ようやく安堵の色が浮かぶ。

「よかったな、ミオちゃん」

「……はい。本当に……よかった……」

そう笑いかければ、ミオは指先で滲んだ涙を拭い、微笑み返す。

リーシェンのことを、レヒトはなにも聞かなかった。

「レヒト、おぬしはこれからどうする？」

やおらミロスラフがそう切り出したのは、真夜中を過ぎた頃だった。なんとなく眠る気にもなれず、やむことのない雨をぼんやりと見つめていたのだ。

なかなか言い出せずにいたレヒトに、気を利かせてくれたのだらうか。

「俺は、仲間のもとへ帰ります。いつまでも、ここでリーシェンさんとミオちゃんの世話になるわけにもいきませんし……それに……レイヴンを、見捨ててはおけませんから……」

これから自分がなにをするべきなのか、レヒトは明確な答えを見つけたわけではない。ただ、帰らなければと強く思っていた。

「……行ってしまうるんですね、レヒト殿」

そう声に出したのはミオだった。

「ああ。今までありがとう、ミオちゃん。俺が生きていられたのは、君のおかげだ。君がいなければ、俺は死んでいただろう」

一度は、本気で生きることをやめようとも考えた。だが、今は生きていてよかったと思える。

生きていたからこそ、仲間と再会できるのだから。

「君にはいくら感謝しても足りない。本当に、ありがとう」

「そんな……お気になさらないください。……レヒト殿」

「なんだい？」

レヒトの眼をしっかりと見据えて、ミオは静かに言葉を紡ぐ。

「私も、一緒に連れて行って頂けませんか？」

レヒトに向けられたミオの瞳は、痛いほどに真剣だった。

「軽い気持ちで、付いていくわけではありません。それに、リーシェンから剣術の手解きは受けています。足手まといにはなりません。お願いします……」

「ふうむ……そう言い出すとは思っていたがのう」

困惑するレヒトに代わって言葉を発したのは、ミロスラフだった。

「隠者様……」

「わしは賛成も反対もせん。すべてはミオ、おぬしが決めることじやよ。まあ、仮に連れて行ったとしても、ミオが足手まといになることは、おそらくあるまい」

その点に関しては、レヒトも同意見だ。だが、レヒトが心配しているのは、そういうことではないのだ。

一緒に行きたいというその理由がなんなのか、レヒトにはわからない。彼女が生半可な気持ちでないのは、よくわかった。

だが、これからレヒトがどう己の道を選択するにしても、彼が――『大いなる意思』が関わってくるのは避けられないだろう。『大いなる意思』が、レヒトを放っておくとは思え辛い。となれば、一緒にいる者も、巻き添えになることは目に見えている。

「……なにか、俺と一緒に来たい理由があるんだね？」

レヒトが問うと、ミオはこくりと頷く。

「私は……自分が誰なのかを探しています」

そう話すミオは、どこか寂しそうで、普段よりずっと幼く見えた。十年ほど前、魔界の辺境でのことです。偶然その場所を通りかかった旅人が、道端で倒れていた子供を拾いました。その子供は記憶が混濁していて、覚えていたのは自分の名前と、少し前まで一緒にいてくれたという『誰か』のことだけ

その日は、雨だったのではないかと、レヒトはなんとなくそう思った。

「親を探そうにも、なんの手がかりさえなく……。旅人は子供を連れ帰り、自分の子として育てたのです」

「……それが、君とリーシェンさん……」

父親であるはずのリーシェンを、ミオは名前で呼ぶ。

レヒト自身、ラグネスに『私を父親だと思えばいい』と言われたことがある。

だが、レヒトはついに彼を父と呼ぶことができなかった。血の繋がりなどない他人を、家族と思えないのかと問われれば、違うとはつきり言える。

ラグネスは大切な人だ。あのままでは死んでいただろうレヒトを救い、彼は温かい食事と部屋、そして仕事まで与えてくれた。だからこそ、これ以上、甘えることができなかった。

深い愛情と優しさに触れるたび、怖くなる。自分はなにもできないのに、と。自分の素性が知れない、自分の過去がわからないというのは、本当に、耐えがたいこと。

だから、レヒトにはミオの気持ちがよくわかるのだ。

「……わかった」

彼女の願いを無碍に断ることなど、レヒトにはできなかった。

「ただし、いくつか条件がある。まずひとつは、リーシェンさんの許可をもらうこと。これだけは譲れないよ。もしリーシェンさんが認めなかったら、連れては行かないからね」

「……はい」

優しい薄紫色の瞳を閉じて、ミオはそう答えた。

「もうひとつは、条件というよりは、覚悟しておいて欲しいこと、かな」

「覚悟……ですか？」

「……記憶を取り戻したい気持ちは、よくわかるよ。けど、取り戻した記憶が、必ずしも幸せなものだとは限らない。知らなければよかったと、後悔するかもしれない。それでも……前に進む勇氣はあるかい？」

レヒトの問いに、ミオは神妙な面持ちで頷いた。失われた記憶がどんなものであれ、きっとミオは、それを乗り越えてゆけるだろう。

「……君に、その覚悟があるのなら、俺が反対する理由はないよ」

「ありがとうございます、レヒト殿……」

「いや……」

レヒトは視線を窓の外へと移す。降り続く雨の勢いは、弱まることを知らないかのよう。

「記憶がない、自分が誰なのかわからないっていうのは……本当に、耐えがたいことだからね……」

雨音に掻き消されてしまうほどの小さな声で、レヒトは呟く。その声は、ひどく疲れたものだった。

## 第58話 記憶をなくした天使 - 2 -

飽くことなく降り続いた豪雨もすでにやみ、ゆつくりと水平線の彼方から顔を出した太陽が、大地に残る水たまりと、葉についた滴とに、強くも優しい輝きを与えていた。

レヒトが目を覚ましたのは、まだ夜も明けきらぬ早朝のこと。昨日、真夜中過ぎまでミロスラーフと他愛ない話をしていたような気がするので、あまり長く寝ていたわけではないようだが、不思議と目が冴えてしまっている。これではもう一度眠ることはできないだろう。

希望と不安、その双方を胸に抱き、レヒトは寝台から飛び起きた。  
「……ふう」

軽く深呼吸して、気分を落ち着かせる。

魔界へは、今日、ミロスラーフが送ってくれることになっているが、出発までは、まだかなり時間があつた。

「どうするかな……」

とりあえず簡単に身支度を整え、レヒトは澄んだ朝の空気と日差しを求めて部屋を出る。その途中、居間を通りかかると、そこには  
「よお、ぼーず」

椅子に腰かけて煙管をくゆらせていたリーシェンが、レヒトのほうを振り返る。

「ずいぶんと早いな」

普段と変わらぬ気だるげな口調、覇気のない眼差し。だが、昨日まで確かにその瞳の奥にあった、悲しみの色は、今はない。

「リーシェンさんこそ、お早いですね」

彼がこれほど早く起きてくるのは珍しい。少なくとも、レヒトが居候するようになってからは、初めてのことだ。

「昨日、寝てねーんだ。ぼーずも、似たようなもんか？」

「ええ、まあ……。どうにも、気持ちが昂ってしまって」

そう返すと、リーシエンは唇の端を持ち上げた。

「感動の再会だろ？　気が急くのも無理はねーさ。俺は寝られなかったっていうか、寝かせてもらえなかったっていうか……」

なにかあったんですか、とレヒトが問うと、じーさんに大喝一声された、とうんざりしたような口調でリーシエンは返す。

「簡単に希望を捨てるんじゃない、とか色々とな。じーさんの説教は無駄に長いんだよなあ……」

リーシエンはそう言って苦笑した。彼が信愛の念を抱く人は、生きていくという。リーシエンも、それを聞いたのだらう。

「今日、発つんだろ？」

レヒトが頷くと、リーシエンはそっか、と呟く。

「とはいえ、そのままの格好で行くわけにもいかねーだろ。そうだな……」

なにかを探すように部屋を見渡し、部屋の隅を指差す。

「あのあたりか。ぼーず、そこに鎧があるだろ。……そう、それだ」  
リーシエンが示したのは、部屋の隅に置かれていたひとつの鎧だった。といっても、実際には、彼の指し示す方向には、大量の鎧が置かれているわけだが、その指示に従ってレヒトが探し当てたのは、今までレヒトが身に纏っていたのと同じような銀色の鎧だ。

ほぼ全身をガードするタイプのものだが、決して重装備ではなく、動きやすさを重視した形状となっている。

「ぼーずが着てたやつは、血まみれの傷だらけだったからな。そいつをやる。それと……この剣も持っていけ」

リーシエンが一振りの剣を机の上に置いた。レヒトが振るっていたセイクリッド・ティアよりも、いくぶん小振りな剣で、細部に至るまで、美しく繊細な装飾が施されている。

「綺麗な剣ですね」

「まーな。本来は儀礼用につて献上したんだが、実戦で使えることも確認済みだ。そこれらのなまくら剣よか、よっぽど使える。そいつで斬られると痛てーぞ」

レヒトは剣を鞘から抜き放つ。セイクリッド・ティアほどでないにしろ、そこそこの大きさがある剣だが、驚くほどに軽く、扱いやすい。

「なかなかいい剣だろ。銘は『ホーリィ・クロス』——俺が打った中で、最高の逸品だ。持って行きな」

「ありがとうございます」

レヒトはリーシェンの好意に甘えることにした。セイクリッド・ティアは刀身がひび割れ、鞘から抜くこともできない状態だ。魔法の使えないレヒトは、武器がなければなにもできない。

「そういえば……リーシェンさんやミオちゃんが使っている剣は、東方のもですよ」

「ああ。俺の故郷の剣だ。扱いは難しいがな、威力のほどはかなりのもんさ」

リーシェンが、腰に差した二振りの剣を外す。黒塗りの鞘から抜き放たれた片刃の剣は、なんとも言えず美しい。

「大陸の剣は重い。斬ることより、重みで叩き潰すことに重点を置いて造られてるからだ。威力は高いが、どうしても一撃が大振りになる。それに比べ、これは軽い。刀身は薄く、切れ味は群を抜く。ただし、かなり扱い辛い。力任せな一撃じゃ、あっさり折れちまう」

剣を鞘に戻し、リーシェンは再び煙管に手を伸ばす。

「南方にも珍しい剣がある。『獣王の尾』って名前なんだがな。刀身がこう……反り返った剣だ。あとは……そうだな、西から伝わったのがレイピアだ。あれは分厚い鎧の繋ぎ目から刃を突き刺すために、ああいう形状をしてる。まー、一括りに剣って言っても、実際には様々ってことだ。だが、変わらねーもんもある」

「変わらないもの……？」

リーシェンは、そうだと頷く。

「肉を裂き、骨を断つその感触——それを快感と捉えるか、それとも嫌悪と捉えるかで、剣士って職業への適性が決まる。ばーずはどつよ」

「……俺は、正直に言えば、好きではありません。昔——剣をとったばかりの頃は、奪った命の重みに耐えられなくなり、吐いたことも何度か」

今でも、決して慣れてはいない。剣に付いた血を拭うとき、指先が震えることもある。

「それでも……俺は剣を捨てようとは思いません。俺は自分で、剣となり、盾となる道を選んだのですから」

守るべき人のために。大切な人のために。そのためならば、この身が血で濡れようが構わない。

「情けないと、思われますか？」

「いや。いいと思うぜ、そういうの。すごく、いい」

手にした煙管から立ちのぼる煙を見つめ、リーシエンは何度も、いいな、と繰り返した。

「なんの疑問も持たず、なんの痛みも感じず、ただ人形のように人を殺す奴より、ぼーずは強い。いいぜ、やっぱりな」

「……そう、でしょうか……」

彼の言葉の意味することがわからずに眉を顰めると、リーシエンがふつと遠い眼をした。

「ぼーずに昔話をしてやろう。遠い遠い昔の話——天魔大戦と呼ばれる、四百年前の戦の話だ」

瞳を細め、リーシエンが静かに語り始める。

「天魔大戦が始まる少し前、ロライザ・クリスティー又は天界人として新たな人種を造った。それが、ただ単純に己の手駒とするためだったのか、それとも他に目的があったのかは——今となっちゃあ、闇の中だな」

今では悪魔のように語られているロライザ・クリスティー又という男は、本来、少々気弱なところもあるが、優しく穏やかな性格だったという。彼が狂う原因となったもの、そして彼が抱いていた野望——それがなんであったのか、知る術はすでない。

「天界人の製造——その実験体として選ばれたのは、一人の男だっ

た。囚われた精霊人の悲鳴と苦悶の呻きとが響き渡る部屋で、悪魔の実験が行われた」

レヒトは激しい吐き気を覚え、胸を押さえた。囚われた精霊人がどんな目にあつたのか、その末路を知らぬほど、彼は無知ではない。「ロライザはそいつに、生身の体で耐えうる極限の力を注入した。そんな時のこと、俺は詳しく知ってるわけじゃねーが……凄かったらしいぜ。まさに拷問よ。ま、奴にとっちゃあ、そいつが死のうが生きようが別に構わなかったんだろぅからな。代わりはいくらだっているんだ」

そう話すリーシェンの瞳は、怖いほどに穏やかで。

「実験は成功だった。そいつは大きな純白の翼と、強大すぎる力とを手に入れた。だがその代償に……」

しばし、彼は押し黙る。それは、ともすれば溢れそうになるなにかを、必死に押しとどめているようにも見えた。

「その代償に……そいつは人の心を失った」

その時、なんの感情も見ることができなかった彼の瞳の向こうに、一瞬だけ、激しく燃え上がる焔のようなものを、レヒトは捉えた。

「湧き上がる衝動を抑えられず、ただ欲望を満たすために、そいつは多くの命を奪った。男も女も、年寄りも子供も……歯向かう者も、逃げ惑う者も……。手にした二振りの剣で、そのすべてを肉塊へと変え、緑の大地を血に染めた」

彼の瞳の中に見た焔。それが、彼が初めて見せた怒りの表情なのだと思いつくまでに、しばしの時を要した。

「やがて、そいつは神の剣を振るう少年——そいつがまだ『人間』であつた頃に、剣を捧げた少年の手により倒され、ようやく悪夢から解放された。後遺症は残つたがな。まー、辛うじて、まともな生活が送れる程度にまでは回復したってわけだ」

「リーシェンさん……それは、まさか……」

「……遠い、昔の話さ……。なんで、ばーずにその剣をくれてやる気になつたのかは、わかんねーがな……」

そう呟いて、リーシエンは静かに瞳を閉じた。

「さあて、準備はよいかのう？」

ミロスラフの問いかけに、レヒトは大きく頷いた。ミロスラフとミオ、そしてリーシエンが、魔界へと戻るレヒトを見送りに来ていた。

太陽は、だいぶ高い位置にまで昇っている。昨晚の豪雨が嘘のように、すっかりと晴れ渡った蒼穹。

レヒトはリーシエンにもらった銀色の鎧を着込み、その上から、白地に紅いラインの入った薄手のコートを纏っている。これはミオが用意してくれたものだという。

『なんとなくわかってたんだろうな。ぼーずがいつかは行っちゃもうってこと』——レヒトにコートを手渡しながら、リーシエンはそう言っていた。

ミオの同行を許可するかどうかについて、リーシエンはついに明確な答えを出さなかった。

「気を付けていけよ、ぼーず」

愛用の煙管を銜え、相変わらず気だるげな表情のリーシエン。

「それと、ミオ。……まー、なんだ、その……」

あちこち飛び跳ねた髪を掻き、視線を逸らして。

「……いつでも帰って来いよ。ここが、お前の家なんだからな……」

レヒトも、ミオも、そしてミロスラフまでもが驚いたようにリーシエンを見た。レヒトも、許可は出さないだろうと思っていた。

「リーシエン……!」

その顔に満面の笑みを湛えたミオが、リーシエンに抱き付く。

「うわっ……ミオ!」

頬を染めて動揺するリーシエンに、レヒトとミロスラフは顔を見合せて笑った。

「ありがとう。……行ってきます、リーシエン」

「ミオ。『行ってきます』って言ったら、ちゃんと『ただいま』も

言わないといけないんだからな」

「はい……」

ミオをもう一度だけ抱き締めて、リーシェンはレヒトに、ミオを頼む、と言葉をかける。レヒトは静かに頷いた。

「行きましよう、レヒト殿」

「そうだな。けど、その前にひとつ」

「なんでしようか」

「その……レヒト『殿』ってやつが、どうにも慣れなくなてな」

そう言って頬を掻くレヒトに、ミオは小さく微笑んで見せた。

「わかりました、レヒトさん。それじゃあ、私のこともミオと呼んでください」

「ああ。よろしく頼むよ、ミオ」

レヒトはミロスラーフのほうを向き直る。

「そろそろ準備はよいな。おぬしの行きたい場所を思い浮かべ、強く想えばよい。おぬしの道行きに、幸多からんことを……」

ミロスラーフの言葉が終わると同時に、二人の姿が掻き消えた。

「あー……行っちゃったなあ……」

「うむ」

それを見届けたミロスラーフとリーシェンは、どちらともなく踵を返す。

「……ミオが戻ってくるまでに、考えとかねーとな」

「ほう。おぬしが考えることは珍しいのう。して、なにを考えると  
いうんじゃ？」

興味津々といった様子のミロスラーフに、彼はこう言い放った。

「プロポーズの言葉」

## 第59話 ただいま

魔界首都ロイゼンハウエル。

瓦礫の街と化した故郷を、レヒトは重い足取りで進む。

仲間との再会に胸を躍らせていたレヒトにとって、変わり果てた街の惨状は、覚悟はしていたとはいえ、やはり見るに堪えないものだった。

この街にも、かつては多くの人々が、ささやかながらも幸福に暮らしていた。人々は記憶をなくしたレヒトにも優しく、レヒトはこの街を故郷と思い定めて生きてきた。

だが、その痕跡は、もはやなにひとつ残ってはいなかった。

黙々と歩き続けていたレヒトが、足を止める。街の中心部、広い敷地に、それなりに大きな屋敷が建っていたことがわかる。この場所で、レヒトは彼に拾われてからの十年余りを過ごした。

「ここが、ラグネス様の屋敷跡。俺が住んでいたのもここなんだ」  
そう声に出して、レヒトは瞳を細めた。

この街のどこかで、皆はレヒトを待っているという。とりあえず街を一周して見たが、ほとんどの建物は大破し、道も塞がれてしまっていた。人の姿などもまったく見えず、この広い街、一体彼らはどこにいるのだろうか。

「レヒトさん。……なにか、聞こえませんか？」

ミオが声を落とし、囁く。レヒトも耳を澄ますと、確かに、なにかが軋むような音が聞こえた。

「なんだ……？ 建物が軋むような……音だな」

周囲にある建物は、いつ倒壊してもおかしくない状態である。その音だとすれば、不思議はない。だが、レヒトは直感的にそうではないと感じていた。

「……なにかが変です。崩れ落ちるのではなく……押し上げているような……」

その言葉と重なって、倒壊した屋敷が、内側から吹き飛んだ。衝撃で、二人の体は跳ね飛ばされるが、空中で体勢を立て直し、少し離れた場所に着地する。

「魔物、か」

突如現れた魔物を見据え、レヒトは腰の剣、ホーリイ・クロスを抜き放った。

それは、三頭の四足獣だった。その体のあちこちから、鞭のような長い触手が伸び、怪しく蠢いている。

魔物の咆哮。風を裂き、魔物の触手が二人を襲う。

僅かにタイミングをずらした連続攻撃を、レヒトは後ろに跳び、剣で打ち払ってなんとかかわす。触手の数本を切り落とすも、それは微かに震えるとおっさり再生した。

隙を見て、後ろに下がりつつあったレヒトは、体勢を低くし、逆に魔物に向かって突っ込んでゆく。

執拗に迫る触手を数本切り落とし、レヒトは魔物の本体を間合いに捉える。

剣が魔物を裂く寸前。

レヒトのほうを向いたひとつの頭が、口から炎の弾を吐き出した。  
「っ！」

閃光と爆音。思い切り吹き飛ばされたレヒトは数度大地を転がるが、すぐに身を起こす。

追撃をかけてきた触手は、駆け付けたミオの振るう刃に切り落とされた。

「レヒトさん……！」

心配そうに声をあげるミオに、レヒトは大丈夫だと片手をあげて見せた。

「……触手を攻撃しても、無駄なようですね」

「ああ。だが、迂闊には近寄れない。……なにか手は……」

そのとき、レヒトの耳に、鎖が触れ合うような音が聞こえた。

「少し、下がっているんだ」

かけられた声に、二人が反応するよりも早く。

軽い破碎音とともに、魔物の頭が真横に吹き飛んだ。それも、すべての頭がほぼ同時に。

その一瞬、視界を掠めた武器に、レヒトは眼を見開いた。

チェーン・ウィップ

（鉄鎖鞭……！）

その名の通り、鉄製の鞭の先端に小さな刃を付けたもので、相手を打ち据えてダメージを与えろという武器である。単純なようだが、扱いにはかなりの熟練を要する武器で、手だれた者が使えば、先ほどのように凶悪なまでの威力を発揮する。

この武器を得意とする者を、レヒトは一人だけ知っていた。

「いつかは戻つてくると信じていたよ」

地響きを伴い、大地に沈んだ魔物の体の向こうから聞こえる、懐かしい声。

右手に先ほど魔物を倒した鉄鎖鞭、左手にはモーニング・スターを携えて。

「やあ、レヒト。怪我はないかい？」

物騒な武器を軽々と両手に抱え、ラグネス「クリスティー」又はおっとりとした微笑んだ。

「ラグネス様……！ よくぞご無事で……！」

「君のほうこそ、無事でなによりだよ。天界から落ちたと聞かされたときは、もう駄目かと思っただけだ。なんとなく、君が死んだとは思えなくてね」

いつも変わらない、優しい微笑み。レヒトは胸が熱くなるのを感じた。

「と、そちらのお嬢さんは？」

ラグネスがミオに視線を移すと、ミオは丁寧に頭を下げた。

「申し遅れまして、失礼致しました。私はミオと申します」

「ラグネス様、俺は彼女に救われたんです。名もなき小島で……」

「……そうかい。なにか込み入った事情がありそうだね。こちらも、

いろいろと話さなければならぬこともあるし」

レヒトは頷く。聞きたいこと、話したいことはたくさんあった。「まずは、私たちがいる隠れ家に案内しよう。ついておいで」

ラグネスに導かれて辿り着いたのは、街外れにあるひとつの教会だった。ステンドグラスは砕け、壁にも亀裂が走っているが、辛うじて原型を留めている。

「ここは……？」

「そうか、名もなき小島にはなかったな。ここは教会、三闘神様を奉る場所だよ」

物珍しそうに視線を走らせていたミオに、レヒトはそう説明した。「新たな命の誕生、死者との別れ、永久の愛の誓い——すべてこの場所で行うんだ」

生まれてくる新たな命に、神の加護があるように。

旅立っていった親愛なる者に、神の慈悲があるように。

そして、愛しあう二人に、神の祝福があるように。

人々はこの場所で神に祈り、願う。

「ラグネス様。ここが、その隠れ家ですか？」

レヒトが問うと、先を進んでいたラグネスが振り返る。

「そうだよ。もう少し先へ進めばわかる」

おっとりとした笑みを見せ、ラグネスは再び歩き出す。

礼拝堂を抜け、様々なものが散乱する小さな部屋をいくつか抜けると、教会の裏手に出た。

「ここ、お墓なんですね……」

たくさんの白い墓標が並ぶ、街の共同墓地。普段であれば芝などもきちんと手入れをされ、逝ってしまった魂を慰めに來た人々の姿が、ぼつりぼつりと見える——そんな光景が広がっているはずだ。

だが、今では手入れをされない芝は好き放題に伸び、十字架を模していたと思われる墓標は倒れ、地に落ちて砕けてしまっている。

廃墟となった街の墓地。吹き抜ける風は、悲嘆と慟哭。

「ここだよ」

ラグネスがそう言つて足をとめたのは、墓地の最奥。そこには、三闘神を模した神像が建てられている。

「……これは、なんですか？」

人の背丈を軽く凌駕する巨大な三体の象を見上げて、ミオが首を傾げる。この像、ヘヴンに生きる者であれば、おそらく知らぬ者はいないだろうもののだが、記憶喪失のミオには、なにかもが珍しいのだろう。

「三闘神様を模して造られた神像だよ。これだけ大きいのはあまり見ないけど、どこの教会にもあると思うよ」

「これが隠者……いえ、三闘神様の像ですか。……あまり似ていませんね」

ぽつりと呟いたミオが可愛くて、レヒトは思わず笑ってしまった。「まあ、実際に三闘神様にお会いした者は少ないからね。想像で造られたものなんだろう」

「……この神像に、なにか秘密があるんですか？」

「そうだよ。見ていてごらん」

ラグネスが神像に手をかけると、それはゆっくりと動き、その下から、地下への入口がぽつかりと顔を見せた。

「これは……地下遺跡！？」

驚きの声をあげるレヒト。長い間、この街で生活していたが、こんなものがあるとは気付きもしなかった。

「そうだよ。さあ、レヒト。先に降りてくれるかい？」

ラグネスに言われ、レヒトは内部へと身を滑り込ませる。入口は狭いが、内部はそこそこの広さがあり、立ったままでも十分に歩けそう。続いてミオが、最後にラグネスが降りてくる。最後尾のラグネスは、二人が降りたことを確認すると、下から蓋になっている神像を動かし、入口を隠した。

三人は壁に灯された松明の明かりを頼りに、薄暗い階段を下りてゆく。

「すごい……地下に、こんな場所が……」

興味津々といった様子で周囲を見渡すミオに、ラグネスは足もとに気を付けて、と微笑む。

「ここはね、四百年前の天魔大戦のとき、天界の圧政に苦しんだ魔界の民が、反乱軍の本部として造り上げたものなんだよ」

「そうなんですか……すごいですね……」

「ロイゼンハウエルは南西に、大きな湖があるのを知っているかい？ その湖の側には、いくつもの洞窟があつてね。中にはこのように、ロイゼンハウエルの下にまで続いているものもあるんだ。ここは、その中でも最も大きかった洞窟を利用して造られているんだよ」

ラグネスの説明を聞きながら歩くうち、一行はひとつの部屋に辿り着く。扉の両脇には見張りだらう、二人の兵士が立っていた。

「ご苦労様」

敬礼する二人の兵士に労いの言葉をかけ、ラグネスは扉を開けて部屋の中へと足を踏み入れる。レヒトとミオもそれに続いた。

部屋の中はかなり広く、大きな机が中央に置かれ、数人の兵士と見知った顔が何人か。

「やあ、戻ったよ」

「あ、お疲れ様です。外の様子……」

そこまで言いかけ、彼は硬直した。ラグネスのほうを向き——正確には、彼の隣に立つレヒトを見て。

「なっ、なん……そっ……」

なにやら意味不明な言葉を呟く。

「遅れて悪かったな、シャウト。……快は？」

挨拶もそこそこにレヒトがそう問いかけると、硬直から脱したシャウトが苦笑を見せる。

「あんたなあ……二言目にはそれかよ。まあ、とにかく座んな」

「そうだね。レヒトの傷の手当てをしなければならぬし」

シャウトとラグネスに言われ、レヒトはおとなしく椅子に腰かけた。先ほどの魔物との戦いで、手に軽い火傷を負っている。

直撃を受ければ、ただではすまなかったかもしれない。あの一瞬、レヒトは焰の弾を剣で叩き潰し、爆風に乗る形で大きく後ろへ飛び、破壊力を殺いだのだ。

「姫はいないぜ。外回りに行ってる。とはいっても、もうすぐ戻ってくると思うけどな」

手に包帯を巻かれるレヒトを眺めながら、シャウトが言った。

「……そうやら、レヒトは相当、運に恵まれているようだよ」

苦笑混じりのラグネスの言葉が終わると同時に、再び扉が開いた。「ごめん、ちょっと遅くなっちゃった。お客さんが来てるって聞いたけど……」

そこで、彼女は言葉をとめた。思わず立ち上がったレヒトを見つめた瞳が、数度、瞬きを繰り返して――。

ふわっと、微笑む。

「……ずいぶんと遅かったじゃない」

「ああ……」

立ち上がったレヒトは、吸い寄せられるかのように、扉の前に立つ彼女に近付く。

「……おかえり、レヒト」

「ただいま……快……」

レヒトは、快の体を強く抱き締めた。

第60話 堕ちた太陽 - 1 -

「おーおー、お熱いこつて。けど、そういうのは誰も見てないこ  
でな」

からかいを含んだシャウトの声で、レヒトは我に返り、慌てて快  
から身を離す。

「あつ……そ、その……これは……」

「なに？」

「え、あ……と……その、つまり……」

意地悪く見上げてくる快から視線を逸らすこともできず、レヒト  
は言葉を濁す。

救いを求めてちらりと視線をシャウトたちのほうに移すと、シャ  
ウトはにやにやと笑い、ミオは驚いたように瞳を見開き、ラグネス  
はものすごく嬉しそうな顔をしていた。

「レヒト！　なんてことだい、レヒトもついに……ああ、私は嬉し  
いよ。浮いた噂のひとつもないものだから……」

「な、ラグネス様、泣かないでください！　お、俺は別に……！」  
「……別に？」

快に詰め寄られ、レヒトは半歩後ずさる。

「うつ……つまり、その……申し訳ありませんでしたっ！」  
思わず、レヒトは思い切り頭をさげていた。

部屋に落ちる沈黙。しかし、それも一瞬だけのこと。

今までどことなく重い空気が漂っていた室内に、楽しげな笑い声  
が響いた。快やシャウト、ラグネスに、ミオや兵士たちまで。

「あはは！　あー、もう。レヒトって本当におもしろいんだから。  
からかいがいがあるなあ」

目に涙まで浮かべて笑わないで欲しいとレヒトは思う。口に出し  
ては言えないが。

「……そんなに笑わなくても」

さすがにレヒトが落ち込むと、快は浮かんだ涙を指先で拭う。

「ごめん、ごめん。レヒトがあんまり遅いから……ちょっといじめてみたくなっただけ」

そう言つて、快は悪戯っぽく笑う。拭ったはずの蒼穹色の大きな瞳は、僅かに濡れているようにも見えた。

「とにかく……おかえりなさい、レヒト。みんな、待ってたんだよ……」

「少し……いや、だいぶ、かな。遅くなつて、すまない」

その場を集った仲間たちに、優しい笑顔を向けられて。レヒトの顔にも、自然と笑みが溢れた。

とりあえず、その場を集まった者同士、簡単な自己紹介を終えて、レヒトは今までのことを皆に説明したのだった。

ミオのことは、名もなき小島での恩人、というふうに紹介した。

天魔大戦に参加した天界人の中には、片翼である彼女に好奇の視線を送る者もいたが、ミオは気にする様子もなく平然としていた。

「……そんなことがあったのか。それにしても、あんたはどこまで運がいいのか……」

レヒトが説明を終えると、声に若干の苦笑を滲ませてシャウトが呟く。

「偶然だろうとなんだろうと、無事で帰ってきてくれたことが、僕は嬉しいけどね」

瞳を細めて、快がふわりと笑った。照れたレヒトが頬を掻くと、それを隣で見ていたシャウトがにやりと笑う。

とりあえず咳払いをして、レヒトは改めて問いかけた。

「俺も聞きたいことがある。……俺がいない間になにがあったのか、説明してくれないか？ それと、世界の情勢についても、知っておきたい」

「そうだね。とはいっても……僕たちがレヒトに説明できるのは、ほんのちよつとだけなんだよ」

「……それは、どういう？」

首を傾げるレヒトに対し、言葉通りだよ、と返すラグネス。

「私たちは、そのときのことを覚えてはいないんだ。……誰一人として、ね」

「覚えていない？」

「そうなんだよ。あの日、レイが突然やってきてね。レヒト、君たちが降りてくるはずだから、君たちを匿い、知っていることをすべて話してくれと……そう言っ、レイはトウルを私のもとに残し、自分は一人で天界へと向かった」

レイはあのと、なにが起きているのか知っていたのだろうね、とラグネスは小さく付け加える。

「……その後、私は屋敷にいたのだけれど……君たちやレイがなかなか姿を見せないからね。不安になってトウルとともに『天への道』へと向かい——空が一瞬、暗く輝いたのを見て……意識を失った。そして、私たちが意識を取り戻したときには、すでに……街は文字通り廃墟になっていたということなんだよ」

「俺様と姫も、似たようなもんだ」

レヒトが反応するより早く、シャウトが口を開く。

「俺様は、ちょうど研究所に向かった。空が、ほんとに一瞬だけ妙な色に染まったのは、見た。けどな、そのあとの記憶がねえんだよ。気付いたときには、あの兄ちゃんと一緒に、ロイゼンハウエル の街の中でぶっ倒れてたってわけだ。天界にいたはずなのに、な」

そう言っ、彼はひょいと肩をすくめて見せた。

「……まあ、そういうことなの。信じられないかもしれないけどね……」

確かに、助かった者が全員、その当時のことを覚えていないというのは、かなりおかしい話だ。

しかし、それをいえば、レヒトが助かったことも、信じられないような話なのだ。

これが単なる偶然だとは思えない。しかし、考えても明確な答え

は得られないだろう。

気になりつつも、レヒトは話題を変えた。

「……それじゃあ、世界の情勢は？」

「壊滅的な被害を被ったのは、どうやら天界と魔界だけであるようだね。特に、ここ中央大陸の中央部、天界を中心に、円を描くような形で被害が広がっている」

その問いにはラグネスが答え、そのあとをシャウトが続ける。

「レヒトの言ったように、それが『CHILD』の力だって言うなら説明がつくさ。あのとき『CHILD』は天界城にいた。そこを中心に力が降り注いだって考えれば、被害が天界、魔界に限られてるってのも納得がいく」

「……ということは、精霊界と真魔界、竜谷に大きな被害はなかったんですね？」

ミオが確認するように問うと、快が小さく頷いた。

「それほど大きな被害はないみたいだけど、今度はまた魔物が出没するようになったの。中でも一番たくさん目撃されてるのが、廃墟になったこの街付近なんだ」

「だから、俺様たちがここに残って片っ端から魔物を討伐してるわけだ」

「……生き残った人々は？」

それは、レヒトがもつとも気にしていたことである。ここにいるのは天界の兵士ばかり、数にしても、おそらく五十に満たないだろう。魔界の民は、どこか別の場所にでも避難したのか、それとも――

「大丈夫だよ、レヒト。魔界の受けた被害は、決して軽いものではなかったけど……生き残った魔界の民は、精霊界、真魔界、竜谷がそれぞれ受け入れてくれた。ことは天界、魔界に限ったものじゃないもの。こんなときは、ね」

レヒトの胸をよぎった一抹の不安を察したらしい快が、レヒトにそう説明した。

これも皮肉な話だが、世界が危機に陥ったことにより、種族を超えた協力関係が築かれたということだ。

レイは、どんな顔をしているだろう。

「……そういえば、レイ様は？ 姿が見えませんが……いないんですか？」

ラグネスがここにおり、この場にはいないが、どうやらトウルもいるようだ。とすると、当然レイもいるだろう。

レヒトは部屋を見渡して、軽い口調で問いかけたのだが。

何人かが、小さく息を飲んだのがわかった。

「そっか。レヒトは……知らないんだよね」

しばしの沈黙の後、快がぼつりと呟いた。

「なにか……あつた、のか……？」

快はなにも答えず、困ったようにラグネスに視線を移した。

「レヒト。さつき、シャウト君が言っただろう。私たちがこの街にとどまるのは、現れる魔物を退治するためだと。……本当は、それだけではないんだよ」

しばし考えたあと、ラグネスはそっと席を立った。

「……レヒト、それからミオさんも。ついておいで。……君たちには、真実を教えなければならぬ」

「真実、ですか？」

ミオの問いかけにも、言葉を返す者はなく。

「……行こうか」

立ち上がり、二人に背を向けたラグネスが、ため息とともに、小さくそう呟いたのが聞こえた。

第61話 堕ちた太陽 - 2 -

ところどころに灯された松明の明かりだけを頼りに、無言のまま歩き続ける。反乱軍の拠点であったというこの地下遺跡、天然の洞窟を利用したものだと言いたが、かなり広く、入り組んだ造りをしているようだ。

広がった通路も、進むにつれてだんだんと狭まり、一行が、この地下遺跡の最奥部を目指しているのだということがわかる。

どのくらい歩き続けたか、定かではないが、黙々と歩き続けていた一行の前に、ようやく終点が現れた。

真っ直ぐな通路の先に、扉がひとつ。その扉を背にして、一人の兵士が立っていた。

「ラグネス様、面会でございますか？」

「そうなんだ。様子はどうだい？ なにか、変化は……」

扉の前に立つ兵士は、ラグネスの問いかけに、悲しげな眼差しで首を振った。

「……そうか。わかった、ありがとう。……私たちが出るまで、誰も入れないで欲しい」

「了解致しました……」

兵士は瞳を伏せたまま敬礼し、一行を通した。

「……この部屋の向こうだ。私たちが、隠さねばならなかったものは……」

ラグネスに導かれ、レヒトは部屋へと足を踏み入れ――。

「――」

その足が、止まる。部屋の中、大きな椅子に腰かけた人影を目にして。

一瞬、レヒトの顔を安堵の表情が横切った。

しかし、それは本当に一瞬だけで、感じるその違和感に、彼の顔を、今度は不安の色が染め上げる。

「嘘でしょう……？」

呟いて、ゆつくりと一步、前に出る。

「……嘘ですよね？」

嘘だと言って欲しかった。

なにしろ、彼は三度の飯より人を驚かせるのが好きな人物である。きつと、悲鳴をあげて近付いたら、彼はにやりと笑って起き上がり――冗談だ、驚いただろう、と。そう、言うに決まっているのだ。「……嘘だと、言ってください……」

誰に対する言葉だったのかは、レヒト自身にもわからない。しかし、誰にともなく発せられたレヒトの問いかけに、否定の言葉は、誰からも返ってはこなかった。

また一步、レヒトは前に出た。

たいして広くもない部屋の中。もう、手を伸ばせば彼に届く。

三対六枚の純白の翼、身長より長い金色の髪、そして蒼穹色の瞳。レヒトが最後に見たあのときと、同じ。

唯一、違うことと言えば。

力なく、椅子に身を委ねた体。

薄く開かれた瞳に、光はなく。

もともと白い肌は、今や死人のように蒼白で、壁にかけられた古びたランプの仄暗い光が、端正なその顔に、色濃く影を落としていた。

「……どう、して……」

レヒトは、そう口にするのが精一杯だった。

「私が見付けたときには……すでに、この状態だったんだ。体中、酷い怪我を負って……翼も、飛ぶこともできないほどに傷付いていて……」

ため息とともに、ラグネスがそう言葉を吐き出した。

体から力が抜け、レヒトはレイが座る椅子の前に膝を付いた。

「けど……綺麗だろう？」

しばしの時を置いて、ラグネスは静かに言葉を紡ぐ。

「……傷跡のひとつだつて残つてはいない。怪我は、もう完全に癒えているんだよ。呼吸もする、瞬きもするんだ。それなのに……」  
その声が、震える。

「なぜだろうね。私が、こんなに呼んでいるのに……」  
見えなくとも、彼が目元を覆ったのがわかった。

「……なにも、答えてくれないんだ……」

レヒトは手を伸ばし、血の気を失った頬にそつと触れてみた。まるで精巧に造られた人形のように、美しいがどこか人を拒絶するレイの肌は、彼があのととき、あの扉が閉まる前にほんの一瞬だけ見せた笑顔と同じように、温かくて、優しくて。その当たり前の温かさ、胸が締め付けられた。

レイに出会つたのは、ラグネスに連れられ、レヒトが初めて天界を訪れた日のこと。

あの日、レヒトはレイに、変わり者と有名なカトレー又教授を説得するという面倒極まりない役目を押し付けられ、なぜかそのまま旅をすることになった。短い間にいろいろなことが起こり過ぎたせいで、時間の感覚が少々おかしくなっているが、実際には、まだ、あれからたいして経ってはいない。実際に顔をあわせたことなど、片手の指で足りてしまう程度なのだ。

それなのに、なぜだろう。胸に宿る、この言いようのない感情は。  
「……そうだ。俺、すっかり忘れていました」

しばしの沈黙のあと、ふと思ひ出したように声をあげ、レヒトは懐から、二通の書状を取り出した。

「……真魔界のウィンドリヒ皇帝陛下、そして竜谷の長老シユリーク、フリユ様より、預かってきた書状です。ここに……貴方の署名が必要なんです」

彼の脚に二通の書状を置き、その上に、力を失い、ぐつと重くなつた彼の手を載せて。

「いろいろあつたけど……これだけは、ちゃんと頂いてきたんですよ?」

喜んでください、とレヒトは微笑んでみせる。

この書状を見たら、彼の蒼穹色の瞳はどんな表情を見せるだろう。よくやった、と喜ぶだろうか。遅い、と怒るだろうか。

これだけ待たせたのだ。どちらかといえば後者のほうが、確率的にはかなり高そうだが。それでも、きっと彼は笑うはずだ。

そして、休息を求めるレヒトに対して、無慈悲にこう宣告するのだ。

次はどこに行け、なにをしろ、と。厄介極まりない面倒事を。

「ここに貴方の署名がないと、無効になってしまっんです」

俺の苦勞が水の泡になってしまいますよ、とレヒトは苦笑混じりに言ってみるが。

レヒトがなにを言おうと、そんなものはどこ吹く風。

「……眼を、覚ましてください」

わがままで、自分勝手に、面倒くさがりで、人使いが荒くて。

それでも、いつだって民のこと、ヘヴンのことを考えて、そのためになら己の身さえも厭わない。

そんな、型破りな世界の象徴。

「貴方が、あんなにも求めていた同盟、あんなにも願っていた平和じゃないですか」

四百年前、誰もが希望を失ったとき、彼が人々の光となり、人々には彼に見失っていた希望を見出したという。

いつの間にか、レヒトも、彼に希望の光を見るようになっていた。彼ならば、きっと、世界に真の意味での平和を与えることができる、と。

「やっと、ほんの僅かだけど前に進んだ。だから、お願いします。

眼を……覚まして……」

それなのに――。

「レヒト！」

肩を、強く掴まれた。

「ラゲネス様……」

「大丈夫かい？ …… すまない、帰ったばかりだというのに……」  
自分を労わる優しい声。それを心地よいと感じながらも、レヒトの胸の奥に、鋭い棘のようなものが突き刺さる。どうせなら、大声で罵倒してくれたほうが、遥かに楽だ。

ふがない部下のせいで、彼はなにより大切にしてきた弟を――。  
レヒトは立ち上がり、背後に立つラグネスのほうを向き直る。

「…… 申し訳、ありませんでした」

辛うじて、喉の奥から絞り出す。

「すべて、俺の責任です……」

レヒトは、その場に膝を付く。

「どんな罰をも受けます。…… ラグネス様…… 俺を……」

続くはずだった言葉は、噛み殺した単なる嗚咽にしかならなかった。

「…… し、て…… くだ……」

ラグネスが膝を折り、レヒトの傍に屈み込む。

跪いたレヒトに、ラグネスがどんな表情をしているのかは窺い知れない。

「…… レヒト」

かけられた言葉に、肩が震えた。罵倒されたほうが楽だ、などと言っておきながら、実際、彼に拒絶され、嫌われるのは怖かった。主であり、父親代わりでもあるこの人に――。

「君が無事で戻ってきたことを、私はレイに感謝したというのに……」

……

相変わらず優しい、穏やかなその声に。僅かに、諫めるような響きが含まれていることを感じた。

「…… 『殺して欲しい』だなんて、言うべきではない」

「…… しかし…… 俺には、他に…… 償うことは……」

「生きなさい」

レヒトの声を遮って、強い口調でラグネスが告げる。

「…… 責任を感じているのなら、安易に死を選ばずに生きなさい」

顔をあげると、彼の優しい蒼穹色の瞳に、映り込むの自身の姿が見えた。

「それにね、レヒト。君は、私の息子なんだよ？ 父親に、そんなことを言っではいけないよ」

「……ラゲネス様……」

幼子をあやすように頭を撫でられる。優しい瞳の向こうに、レヒトは、別れる間際の、レイの微笑みを重ね見た。

## 第62話 堕ちた太陽 - 3 -

太陽の光も届かない地下にいても、時間の経過というのはなんとなくわかるものらしい。地平線の彼方に太陽は沈み、気の早い一番星が瞬いている――地上ではそんな光景が広がっているはずだ。魔物の動きが最も活発になり、また凶暴になる時間帯でもある。

レイに会った後、レヒトとミオはラグネスとともに、二人が最初に案内された部屋へと戻ってきた。

円形の大きな机とたくさんの椅子が置かれたこの部屋は、かつて天魔大戦時代には、主だったメンバーが集まる会議室代わりに使われていたらしい。

二人をこの部屋に残し、ラグネスは快、シャウトと兵士たち数人を連れ、街の見回りに出て行った。

同行を申し出たのだが、今日一日くらいはゆっくりしなさいと諭され、二人はここに残っているのだが。

どうにも落ち着かなかった。余計な考えばかりが頭を巡り、暗い感情に胸が押し潰されそうになる。

「レヒトさん」

机の上で組んだ両手に顎を載せ、ぼんやりとしていたレヒトに、向かいの席に座るミオの声がかかる。

「うん？」

「大丈夫ですか？」

はは、とレヒトは誤魔化すように笑って見せる。

「そんなにひどい顔、してるかい？」

「さつきから、ずっと眉間に皺が寄っています」

ミオは自身の眉間に人差し指を当てる。思わず苦笑したレヒトに、ミオは深刻な顔で問いかけた。

「……死にたい、と？」

「いや。ラグネス様の言葉が応えたからね。もう、安易に死を選ば

うとは思わないよ。ただ……」

ふっと、レヒトの顔に影が差す。

「……『大いなる意思』が言ったことを、ね……」

『大いなる意思』——その名を口にするだけで、レヒトは言いよ  
うのない感情に支配される。暗く、冷たい感情に。

「あいつの手で、俺の仲間の一人が傷付けられたとき……あいつは  
俺に言ったんだ。……半身である俺も、同罪なのだと。仲間を傷付  
けたのは、俺でもあるのだと……」

天界城の謁見の間で、対峙したレヒト一行を圧倒的な力で捻伏せ、  
レイヴンをその手にかけた『大いなる意思』が、絶望にうちひしが  
れるレヒトに向かって発した言葉。

忘れた日などなかった。

「だから、レイ様をあんな目に合わせたのは……俺でもあるんだ」

「……。大丈夫ですよ、レヒトさん。きっとレイ様は良くなります。  
だから、元気出してください」

明るい口調でそう言って、ミオはふわりと微笑んだ。自分を元気  
付けようとする彼女の優しさに、レヒトも少々ぎこちないながら笑  
顔を作った。

「私、レイ様にお会いするのを楽しみにしていたんですよ。ずっと  
お会いしてみたいと思っていました」

「レイ様に、かい？」

意外な言葉だった。驚いたレヒトが聞き返すと、ミオはこくりと  
頷く。

「はい。不思議ですか？」

「あ、いや……片翼を追放したのは、レイ様だという話だったから。  
君はレイ様を恨んでいるのかと、勝手に思っていた」

「そうですね……」

穏やかな微笑みを湛えたまま、ミオは薄紫色の瞳を細めた。彼女  
はときおり、ひどく大人びた表情をすることがある。

「けれど、もし、レイ様が片翼を追放せず、あの場で処刑していた

ら……私は産まれませんでした。苦しいことも、辛いこともたくさんあったけれど……産まれていなければ、それに倍する幸福を感じることなかった。大切な人に、会えることもなかった」

レヒトに瞳を向けて、ミオはふわりと笑った。

「それに、レイ様は私の父——償いきれないほどの罪を犯したりーシエンを……救ってくださったんです」

「……そうだったな」

「はい。感謝しこそすれ、恨むことなどできません」

レヒトは眼を閉じた。彼女と話していると、自分がとても小さな人間に思えてくる。『大いなる意思』を恨み、憎しみに囚われている自分が。

「……少し、歩いてくるよ。外には行かないからさ」

「はい」

ミオの声を背中で聞き、レヒトは部屋を後にした。

なんとなく部屋を出たレヒトだが、彼はこの地下遺跡の構造に詳しいわけではない。それでもぼんやりと歩くうち、辿り着いたのはレイの部屋だった。先ほどと同じ兵が、見張りに立っている。

「貴方はラグネス様の……」

「ええ。その……いいですか？」

特に用はないんですが、と控え目に言えば、兵士は微かに笑みを見せ、どうぞ、とレヒトを通した。

扉を潜ると、そこにはすでに先客がいた。

「トウールさん……？」

人影が、ゆっくりと振り返る。黒髪に真紅の瞳。鉄面皮と称されるほどに感情を見せない彼の冷たい瞳は、彼が忠誠を誓う者の前でのみ、優しい光を宿す。

「お見舞いですか？」

レヒトが問うと、トウールはそつと首を振った。

「レイ様に食事を。召し上がって頂けないのはわかっているのだが

……」

机の上には、彼が持ってきたと思われる新しいランプと、まだ湯気の立つ食事が載せられたトレイとが置かれている。

「トゥールさん……。レイ様、早く眼を覚ましてくださるといいですね……」

レヒトがその言葉をかけると、彼は小さく頷いた。

「……そうだな。私個人としては……早く、目覚めて欲しい。しかし……ふと、思う。……このまま、眼が覚めないほうが……レイ様にとっては、幸せなのではないか、と……」

「え……」

トゥールは切れ長の瞳をレヒトに向けた。瞳の奥に、深い悲しみを潜ませて。

「レイ様は、今までずっと苦しまれてきた。民のため、世界のためと……ろくに食事も睡眠もとらず、激務に追われ……。私は、あの方が幼い頃よりずっとお仕えし、レイ様の苦しみも、哀しみも、常に傍で見してきた」

ふう、と彼は深いため息を吐いた。

「……もう、楽にして差し上げたい」

視線をレイへと移して、呟く。その声に、その瞳に。敵意も、悪意も、ましてや殺気も感じなかった。だが、レヒトは反射的に彼の腕を掴んでいた。

「だめだ……」

「……レヒト殿？」

「だめですよ、そんなの。死ぬなんて、だめです。レイ様は、生きていなければだめなんです」

レヒトからは視線を外したままのトゥールの表情に、はつきりと嫌悪の色が滲むのが見てとれた。

「……それは、レイ様が世界の『象徴』だからか。レイ様に、まだ犠牲になれということか」

「違いますよ。その逆です」

掴んでいたトゥールの腕を離し、レヒトはレイの前に膝を付く。

焦点のあわない瞳の奥、微かに見える意思の光。

「俺は、レイ様に幸せになって欲しい。レイ様がどれだけ苦しんで、辛い人生を歩まれたのかはわかりません。死を選べば、確かに楽にはなれるかもしれませんが……」

死なせることが優しさなのだとすれば、これは単なるエゴでしかない。だが――。

「だったらなおさら……生きていくべきだと思います。生きて、幸せになって欲しい。辛いことも、苦しいこともたくさんあるけれど……それ以上の幸せが、あるはずだから……」

俺も、ラグネス様にそう諭されたんです――レヒトが苦笑混じりにそう言つと、トゥールの唇が笑みの形を作る。

「私も……幼き日のレイ様に、似たようなことを……言われたことがある」

どこか遠くへと向けられた瞳。過去を懐かしむように、トゥールはそつと微笑んで。

「ありがとう、レヒト殿。少し、弱気になっていたようだ」

「いえ、俺はなににも……ミロスラーフ様から、俺はこう聞きました。ここは、想いが力になる世界だと。だから、レイ様に、生きていて欲しいと願う人々の想いがあれば……きっと」

「そうだな。それに……誰よりも生きたいと願っているのはレイ様ご自身だろう。私は自分の考えばかりに囚われて、レイ様のお気持ちを察することができなかった。ふふ……従者失格だ」

それは、先ほどよりも、ずっと明るいい口調だった。

「貴殿のおかげだ、レヒト殿。それと……今、私が言ったこと、レイ様には、くれぐれも内密に願いたい。怒らせるとしばらく口を利いてもらえなくなる」

「わかりました。けど……もう、バレてしまったと思いますよ？」

そう悪戯っぽく囁けば、生ける人形と化したレイが、微かに笑ったようにも見えた。

### 第63話 歓喜の誘い

目に入るものといえば、剥き出しの岩肌が続く通路と、ところどころに灯された松明の明かりのみ。

行けども行けども、同じような景色ばかり。どうにも地下遺跡というのは面白みに欠ける。

そして当然のことながら、方向感覚も掴めないのだが――レヒトがそれに気付いたときには、すでに手遅れの状態だったのである。要するに。

「……言えない」

はあ、と小さく息を吐き、レヒトはガツクリと肩を落とす。

「また迷子になったなんて、絶対に言えない……」

そう。レヒトはまた道に迷い、妙な場所に入り込んでしまったというわけなのだ。

幸い、目の前には扉がある。この扉の向こうに人がいれば、少し恥ずかしい思いをするだけで済むのだが。

しかし、目の前の扉には、大きく赤字で『関係者以外立ち入り禁止、入ったら殺す!』と書かれた紙が張り付けられていた。

「……入ったら殺すって物騒な。これ、まさか血文字じゃないだろうな……」

本日二度目のため息を吐き、扉に体重を預けて頭を掻く。勝手に開けるわけにはいかないだろうし、なによりまだ死にたくはない。

開けるべきか、開けざるべきか。扉を背にしてレヒトがブツブツ呟いていると。

突然、扉が開いた。

「うおっ!?!」

どうやらこの扉、部屋の内側に引くタイプのものだったらしい。ということは、扉に寄りかかっていたレヒトは、当然のごとく、仰向けのまま、床の熱烈な抱擁を受けることになる。

かなり痛そうな音が響いた。

「だ、大丈夫ですか？」

部屋の主の驚いたような声が降ってくる。想像していたより、穏やかな声だ。

しかし、どこかで聞いたような気がする。

「ええ……大丈夫です。頭、固いんで……」

倒れたまま、思いきり打ち付けた頭を擦る。すると、部屋の主だろ？男性が、レヒトの顔を覗き込み――。

「ガルヴァさん！」

「ええと、レヒトさん？」

二人は同時に声をあげていた。

「あはは。そうでしたか。確かにこの遺跡、かなり入り組んでいますからね」

「いや、もう……この年で迷子だなんて……」

恥ずかしい、と顔を赤くするレヒトを見て、ガルヴァはおつとりと笑う。扉に張られていた例の『入ったら殺す！』という張り紙については、なにも聞かないことにした。

「ここって、救護室だったんですね」

招き入れられた部屋はかなり広く、簡素な造りの寝台が、ところ狭しと並べられていた。

「ええ、そうですよ。天魔大戦時代のを再利用しまして。まだ、ここに運び込まれた人はいませんから、私は暇なんですけどね」

「ガルヴァさん……お医者様だったんですか？」

レヒトが問うと、ガルヴァはいいえ、と首を振った。

「私は学者です。生体科学が専門ですので、こうして医師の代役も務めているというわけです」

「あ、そうですよね。レイヴンと一緒に、魔法研究所に……」

そこで、レヒトは口を噤んだ。

「……すみません」

「謝る必要はありませんよ。レイヴンのことについてはすでに聞いていますし……あの場にいなから、なにもできなかったのは、私も同じですから」

言葉に滲む無力感。瞳を閉じて、ガルヴァはしばし沈黙し、やがてゆっくりと口を開く。

「……レヒトさん。あの男は、『CHILD』を倒すために、宿主であるレイヴンを手にかけたのでしょうか？」

レヒトが頷くと、ガルヴァは、やはりそうですか、と小さく呟いた。

「……だとすれば、貴方が気に病むことはありません。レイヴンに罪を負わせたのは、この私なのです。いいえ、レイヴンだけではありません。すべての罪は、一人の愚かな男が引き起こした天魔大戦——あの戦いの大罪を背負わされ、今もなお、多くの人々が苦しんでいる」

その悲しげな微笑みに、隠されたものがなんであるか、レヒトには、わからない。

「レイ、ラグネス、そしてレイヴン……私が大切に想ってきた家族は、償うことなどできないほどの大罪を背負わされた。……それだけではありません。翼を与えられた者、奪われた者、死んでいった人々——その苦しみのすべて、その咎のすべてを負うべきは、この私一人だというのに……」

「……ガルヴァさん。貴方は——」

その言葉が、ガルヴァに届くことはなかった。なにかが爆発するような音が、レヒトの言葉を掻き消したからである。

「！？」

レヒトが立ち上がると同時に、再び先ほどの音が響いた。地上ではない。間違いなく、この遺跡のどこかで。

「どうやら……招かれざる客人がいらしているようです。まったく、こんな時間に不躰な方ですね」

ガルヴァは金色の瞳をすうと細める。レヒトも襲撃者の気配を掴

み、やはり同様に瞳を細めた。

襲撃者の正体は、魔物ではなかった。気配が、まったく異なっているのだ。

魔物が発するそれは、極めて純粹でわかりやすい。敵意や悪意など――生きとし生けるものたちの生む、暗い感情、そのすべてを混ぜ合わせたかのような、冷たい殺気とでも表現すべきもの。

だが、この招かれざる客人のものであるう気配には、ひとつだけはつきりと、異質なものが混ざっていた。魔物には決して持ちえない感情。

すなわち、歡喜。

「急ぎましょう。あまり穏やかな人ではなさそうだ」

レヒトは頷き、部屋の扉に手をかけ、開く。開け放った扉の向こう、微かに漂う火薬の香り。

「……この匂い……」

「ええ、火薬です。あの爆音、魔法ではなく爆弾だったようですね。……それほど遠くはないでしょう」

そう断言して走り出すガルヴァの後を追ひ、レヒトも部屋を飛び出した。

この入り組んだ地下遺跡の構造を、ほとんど知らないレヒトをガルヴァが先導する形だが、彼もまた襲撃者の居場所を正確に掴むことができないのだろう。分かれ道に差しかかる度に立ち止まった。

ここが地上であれば、爆発音を頼りに進むという手段もとれるが、この遺跡はやたらと入り組んでいる上に、音が反響して、正確な場所を特定することができない。

二人が音のするほうへと急ぐその間にも、数発の爆音が響き、遠い足音が行き交う。

「また、爆音……。なにを考えているんだ。こんな場所で爆弾なんか……。下手をすれば、遺跡が崩れて全員が下敷きだぞ。……まさか、それを狙って……？」

「それはないでしょう」

呻くようなレヒトの言葉を、ガルヴァはやりわりと否定した。

「ここは仮にも軍事拠点ですから、それなりの強度はあるでしょうし。爆弾程度で崩壊するような構造ではないと思いますよ」

天魔大戦は爆弾などという可愛らしいレベルのものではありませんでしたし、とガルヴァは笑う。

それを聞くと妙に納得してしまうのだが——この際、爆弾での奇襲が可愛らしい部類に入るかどうかは、置いておくことにしよう。

「私たちを全滅させることが目的であるなら、もっと簡単に楽な方法がいくらかでもあったはずです。飲み水に毒を混ぜたってよかった」  
「確かに……」

「天界が崩落しても崩れなかった遺跡を、爆弾程度で崩せるとは、この爆発を起こした張本人も思っていないでしょう。それなのに、わざわざ爆弾という方法を選んだ」

見た目は派手だが効果は薄い。それも、襲撃者は移動することなく、最初に現れた場所に留まったままである。

となれば、考えられることは、ひとつだけ。

「なるほど……誘っている、ということですか」

「ええ、おそらくね。その理由についてはわかりませんが……まあ、本人に直接話して頂きましょうか」

そう言つて、ガルヴァはひとつの扉の前で足をとめた。そこが、例の会議室であることにレヒトが気付くのと、ガルヴァがその扉を蹴り開けるのとは、ほとんど同時だった。

## 第64話 桃色の協奏曲 - 1 -

部屋に飛び込んだレヒトは、驚きに眼を見開いた。

炭化した机や椅子の残骸が散らばる部屋の中には、何人もの兵士が倒れ伏していた。気を失っているだけなのか、それとも命まで失っているのかは、わからなかったが。

障害物のなくなった広い部屋、その中央に、襲撃者は立っていた。背中で緩く結ばれた長い桃色の髪に、まだ少年っぽさの抜けない大きな薄紫色の瞳。片側にのみ頂く翼は、レヒトの知る少女と対になる左側。右手に巨大なボウガンを携え、左手で数個の小さな丸薬を弄んでいる。

肉体こそ、年若いとはいえ男のそれだが、まだ若干の幼さを残しており、少年の中性的な顔立ちも、どこことなく、彼女と通じるものがある。

「……君は……」

「久しぶりだね、お兄さん。エンブレシアの街で会ったとき以来かな」

突然扉を蹴破って現れた二人に視線を移し、片翼の少年は驚くでもなく、むしろ嬉しそうににっこりと笑った。

「……あの『片翼』の少年……レヒトさんのお知りあいですか？」

少年からは視線を反らさずにそう問いかけるガルヴァに、レヒトは小さく頷いて見せる。『片翼』という言葉を発した瞬間、横目で捉えたガルヴァの顔に、形容しがたい感情がよぎった。

「君も……『大いなる意思』の仲間だったんだな」

「そうということ」

こくりと頷く少年には、殺気もなく、隙だらけ。

だが、それがかえって不気味だった。

「まあ、僕としてはお兄さんを殺す理由はないんだけどさ。『大いなる意思』がそれを望んでるんだ。だから、悪いけど死んでね」

まるでちよつとした頼みごとをするかのように、軽い口調で死を宣告する。

それだけの自信の表れなのだろうが、『大いなる意思』や、琥珀色の瞳の男と対峙した瞬間のような、身が強張るような恐怖は感じない。

要するに、単純な力だけなら、レヒトのほうが上なのだ。武器の相性があるので、確実にレヒトが勝てるという保証はないが、それでも、少年にとってはかなり分の悪い戦いだということに変わりはない。

「……そう言われて、俺が素直に頷くと思うか？」

身構え、腰の剣に手をやりつつそう言えば、少年は場違いな笑みを張り付けたまま、すつと瞳を細めた。

「アハハ。まあ、そうだろうね。いいよ、それじゃあ遊ぼうか。『大いなる意思』に言われて、最近はずつと魔物ばかり相手にしてたし、そこに転がってる雑魚なんかじゃ、僕つまらないし」

倒れた兵士たちに軽蔑の眼差しを送り、少年はレヒトに向けボウガンを構える。鋭い銀色の矢が、凶悪な輝きを見せた。

「……せいぜい楽しませてよね、お兄さん」

くすりと少年が笑う。今までの無邪気な笑顔ではなく――獲物を狙う、獣の眼差し。歓喜の色が滲むその瞳に、映り込んだ自身の姿を捉えたとき、レヒトは神経が痺れるような感覚を受けた。そして、瞳に映ったその姿が、ぐらりと揺れ――。

その瞬間。

「ま、待て……貴様……」

静寂を裂いた小さな声で、少年がレヒトから視線を移す。すると、あの神経の痺れが嘘のように消えた。

視線の先には、折り重なるように倒れた兵士のうちの一人が、辛うじて身を起こし、少年に苦々しげな眼差しを向けていた。

「我々が……雑魚、などと……。貴、様……汚……れ、た……片……翼の、分……際で……」

「……汚れた、だと!？」

少年が反応を返す前に、そう怒鳴り返したのはレヒトだった。兵士に歩み寄り、その胸倉を掴みあげる。瀕死の者に対する態度ではないが、レヒトにそんなことを考える余裕はない。

レヒトは知っている。かつて、悪魔と恐れられた男に仕えた人々の子孫である片翼たちは、皆、優しい人だった。

いわれのない差別に苦しみ、今もなお、彼らは罪を負わされている。決して、彼ら自身が悪いわけではないというのに――。

「片翼だとか、天界人だとか……そんな、そんなことで、人を判断するな! それで、ミオがどれだけ……!」

怒りを抑え、なんとかそう言葉にしたレヒトに向けられた彼の瞳には、ありありと、侮蔑するような色が滲んでいた。

「……ふん……片翼が、なにをしたか……お前は、知らないからだ……あの娘も……所詮は……汚……しい……存、在よ……。おお

かた、貴様に……この場を教えたのも……あの娘……」

その言葉で、彼はせっかく助かった命を失うことになった。

思わず拳を振り上げたレヒトに、少年の制止する声がかかり。

その時、少年がなにをしたのか、レヒトにはまったく理解できなかった。ただ、細められた少年の瞳が、ひどく冷たい光を宿し――。

「ガッ!？ ……アウ……ガアアア……ッ!」

胸を押さえ、獣の断末魔のような、苦痛の叫びをあげる兵士を、

少年は相変わらず口許に笑みを湛えたまま見つめていた。無邪気な表情の向こうに隠された、暗く冷たいその感情。

恐怖と絶望とに染まった兵士の瞳から、唐突に、光が失われた。

彼の胸倉を掴んでいた手を離せば、その体は力をなくし、床に倒れる。そのまま、ぴくりとも動くことはなかった。

命の鼓動が失われたことを、レヒトは悟った。

同情してやる気にはならない。レヒトは妙に冷めた眼差しで、命をなくし、肉塊となった兵士の骸を見つめていた。

天魔大戦を戦った天界人にしてみれば、片翼が敵であったという

事実は変わるものではない。それでも——今の言葉だけは、許せない。

「アハハ。いけない、いけない。またやっちゃった。けど、僕のと怒らせるから悪いんだよ。僕のことだけならともかくとしても。

……彼女まで」

そう呟いた少年の顔には、やはり笑みが浮かんでいた。

そして、まるでなにもなかったかのように、少年は立ち上がったレヒトのほうへと視線を戻す。

「『大いなる意思』には内緒ね。無関係な人間は傷付けるなっていうのが『大いなる意思』の口癖だからさ。ほんと、煩いんだよね」

それは約束しかねる、とレヒトが答えると、少年は、意地悪だなあ、とまた笑った。

「それはそうと。名前もわからない相手に殺されるんじゃ可哀想だからさ、名乗っておいてあげるよ。僕の名前は、ミヤ。さつきも言った通り、お兄さんを殺しにきたよ」

「……それにしても、ずいぶん遅かったな。俺がここにいないこと、知っていたのか？」

レヒトがこの地下遺跡に立ち入るのを偶然目撃した、ということも考えられるが、そうであれば、なぜ地上にいる間に攻撃を仕掛けてこなかったのだろうか。あのときはラグネスとミオが一緒だったとはいえ、拠点となっているこの遺跡に入ってしまったえば、相手にしなければならぬ人数はむしろ増えると容易に想像できるはずだ。

ミヤと名乗った少年の得物はボウガンである。それも、かなり巨大な。威力のほどは高そうだが、このような狭い場所では小回りの利かない武器は扱い辛く、ミヤのように遠距離系の武器であるならば、必要な間合いをとることも難しく、さらに動きは制限される。それも、たった一人であればなおさらに。

その危険を冒してまで、ミヤはわざわざここに乗り込んできたのだ。

他に、なにか目的でもあるのか、それとも——。

「アハハ。違うよ。単なる偶然、かな」

「偶然？ 俺がここに来るのを見たってことか？」

「違う、違う。実際に見たわけじゃないよ。ここにお兄さんがいるって、教えてくれた人がいただけ」

隣に立つガルヴァが息を飲んだのがわかった。ミヤの言葉に動揺したのだろう。

ミヤは言った。ここに、仲間と思っていた者の中に、スパイがいるのだ、と。

そのスパイより、ミヤはレヒトがここにいることを知ったというのだ。

（まさか――）

一瞬、頭をよぎったその考えを、レヒトは慌てて否定した。

「アハハ。気になる？ 僕に情報をくれたのが誰なのか。けど、おおかた想像はついてるでしょう？」

そんなはずはない、と。レヒトは首を横に振る。

少年が面白そうにその瞳を細め――。

そのとき、レヒトとガルヴァが入ってきた扉から、一人の少女が現れた。ツインテールにされた桃色の髪に、穏やかな薄紫色の瞳。異国の衣服を纏い、同じく異国の剣を腰に差して。

少女と、少年。まるで、鏡に映った幻影を見ているような感覚に襲われた。

「レヒトさん、大丈夫ですか？」

扉があつた場所に立ち尽くしたまま、ミオはその顔に驚愕と戸惑いの色を浮かべ、部屋の中央に立つ人影に瞳を向けていた。

「やあ、ミオ。久しぶりだね」

自分と瓜二つの少女に向けたミヤの瞳には、とても優しい光が宿っていた。

第65話 桃色の協奏曲 - 2 -

「こうやって会うのは何年振りかな。別れたときはお互い子供だったけど……綺麗になったね、ミオ」

構えたボウガンを降ろして右肩にかけ、言葉を失い、立ち尽くすミオに微笑みかける。

「『大いなる意思』に言われて、ずっとこの付近で魔物の討伐を続けてただけだよ。ミオと会えるとは思わなかったよ。生まれて初めて、心の底から神様に感謝したね」

「？　どういうことだ？　君は……ミオと会っていたんじゃないのか？　君に、俺の居場所を話したのは……」

向かい合って立つ二人に交互に視線を移し、レヒトがそう問いかけると、ミヤは顔だけをレヒトのほうに向けた。

「アハハ。誰もそんなことは言っていないよ。僕は確かにミオから、お兄さんがここにいることを教えてもらった。けど、別にミオはお兄さんたちを裏切ったわけじゃないし、僕と接触したわけでもない」  
だからミオは責めないでね、と続け、レヒトが頷くと、ミヤはにこりと無邪気な笑顔を見せた。

「僕が勝手に情報を手にいれただけさ。……ミオと精神を同調させてね」

「精神を……同調させた……？」

「そう。ミオが他人の心を読めるのは知っているでしょう？　なら、僕にそれと同じか、それ以上の力があるってことくらい、想像できない？」

レヒトから視線を移し、まっすぐにミオを見据えて。

「僕は、ミオの家族なんだから」

その言葉に、ミオが瞳を見開いた。もちろん、驚いたのはミオだけではない。

「家族？　君と、ミオが？」

レヒトが聞き返すと、ミヤは頷きつつも首を傾げた。

「そうだけど……ミオから聞いてないの？ お兄さんとミオが一緒にいたからさ、てっきり僕のこと、ミオから聞いて知ってるかと思っただけだ」

「……ミオには、記憶がないんだそうだ」

沈黙したままのミオの代わり、レヒトが答える。

「記憶がない？ あ……そっか。あのときに『大いなる意思』が消したんだな。もう……記憶を消すのはわかるけど、僕のことくらい思い出すようにしてくれればいいのに。気が利かないなあ、ほんとに」

「ま、待ってくれ。『大いなる意思』が……ミオの記憶を消した？」

「そうだよ。もう、どのくらい前のことになるのかも、わからないけど……。僕とミオが小さい頃、心ない人間たちのせいで、死にかけていたところを、『大いなる意思』が救ってくれたんだ。たぶん、そのときに『大いなる意思』がミオの記憶を消したんだろうね」

そのとき、レヒトの脳裏に、いつか見た夢の光景が蘇った。雨の中、救いを求める片翼の幼い兄妹と、二人を救った白髪の男。あれが、幼き日のミオとミヤなのだと思えば――。

レヒトはミオのほうへと視線を移す。状況を理解できないのだろうか。ミオはやはりその場に立ち尽くしたまま、ただ呆然とミヤを見つめていた。

「……どう、して……」

しばしの沈黙の後、ミオは小さく言葉を紡ぐ。

「どうして、私を置いて行っただんですか？ ……一人ぼっちで、自分が誰なのかもわからなくて……」

うつむいたミオの頬を、一筋の滴が伝った。

「……本当に、寂しかった……！」

ミオの傍に移動したミヤが、流れる涙を指で拭い、うつむいたままに涙を溢すミオの肩に、その右手を置いた。

「ごめんね。僕も、ほんとと一緒にいたかったんだけど……。けど、

ミオを巻き込みたくなかったんだよ。ミオはなにも知らないまま、どこかで平和に暮らせばいいって思ったんだ」

ホーリー・クロスの柄に手をやったまま、レヒトはガルヴァと顔を見合わせた。命を狙われている以上、油断はできないのだが——ここで仕掛けるほど、レヒトもガルヴァも無粋な神経は持ち合わせていない。

「『大いなる意思』が、ミオの安全は保障してくれたし。目的を果たしたら、ちゃんと迎えに行くつもりだったんだよ」

「目的を……？」

「うん。あの頃は、ただ『大いなる意思』に恩返しがたくて、僕は『大いなる意思』について行った。僕はまだ幼くて……どうしようもなく、無知だったから。けどね、今は違う」

その顔には、やはり笑みが浮かんでいたが——瞳には、ごりつとした冷たいなにかが潜んでいる。

「『大いなる意思』から、いろいろなことを聞いたよ。僕たちが、どうして迫害されなければならなかったのか。どうして逃げ続けなければならなかったのか……いろんなことを、ね」

「ひとつ、聞きたいんだが……」

レヒトが声をかけると、ミヤはレヒトに顔を向けた。

「君とミオは、名もなき小島には、いなかったのかい？ 片翼は、レイ様によって流刑にされて……大陸との交流を、断たれていたんだろっ？」

「まあ、ね。けど、事実はそのじゃない。それだけがすべてじゃないんだよ、お兄さん」

ミヤの言葉に、レヒトの無知を嘲笑するような響きはなかった。ただ、寂しそうに、悲しそうに細められた瞳だけが、レヒトの心に残った。

ミオが時折見せる、悲しげな微笑みと、同じ。

「レヒトさん。片翼は、名もなき小島にいただけではないのです」  
隣に立つガルヴァが、瞳だけは油断なくミヤに向けたまま、レヒ

トにそう言った。

「天魔大戦で敗れた片翼たちは、確かに、レイによって名もなき小島に流刑にされました。しかし、刑が執行される前に、逃亡した人々がいたのです。……おそらく、それが……」

「そうだよ。僕たちの先祖さ。僕とミオは魔界で生まれた。辺境の山奥で、身を寄せ合って、ひっそりと隠れるように暮らしてたんだ」  
「それじゃあ……私の、本当の両親は……今も、そこに？」

小さな声でそう問いかけ、自分より少しだけ背の高い兄を見つめるミオ。失われた記憶の中の両親——期待に胸躍らせる妹に、しかしミヤは、視線を逸らして、もういない、と呟いた。

「いない？　どういうことですか？　どこか、別の場所に……？」

「違う。……魔界へ逃れた片翼たちは、僕とミオを除いて、もう誰も生き残ってはいない」

「え……？」

声に出したのは、誰だったのだろう。ミオだったかもしれないし、レヒトだったかもしれない。

「あの悪夢の日——偶然、僕たちの住む隠れ里の存在を知った人間どもは、魔界の辺境にあつた里を襲い、そこにいた片翼を皆殺しにしたんだ。僕とミオは、なんとか逃げる事ができたけど……それからどうすればいいのか、僕にはわからなくて。過労と栄養失調で倒れたミオを、僕は人間の村まで連れて行った。あの頃は無知だったから……きっと、助けてくれると思っただ」

ふう、と小さくため息を吐き、ミヤは首を横に振った。

「実際はどうだったかなんて、説明するまでもないよね。……誰も、ミオを助けてはくれなかった。助けを求めた僕を、足蹴にして嘲笑った。……どうして、そんなことをされなきゃならないんだ？」

嫌な思い出が蘇ったのか。左の拳を握り締め、唇を噛み締め——ミヤは必死に感情を抑えていた。

「おかしいと思わない？　罪を犯したのは、ずっと昔の先祖だっというのに……どうして僕たちが、その罪を負わなければならないん

だ？」

その問いに、レヒトも、ガルヴァも、答えることはできなかった。言葉に詰まった二人に構わず、ミヤは一方的に言葉を続ける。

「僕とミオがなにをした？ 片翼の子孫として生まれただけ。ただ、それだけだ。人間どもは、偶然、人間として生まれただけじゃないか。望んで片翼として生まれたわけじゃないのに。どうして僕たちだけが、ただ片翼として生まれただけで、辛い目にあわされなきゃならないんだ！？」

「……それで、復讐を？」

意外にも、冷静な口調でそう問いかけたのはミオだった。

「そうだよ、ミオ。……となれば、わかるだろう？ どうして、僕がここに来たのか」

瞳の中、激しく燃え上がる憎悪の焰。それを見たミオが辛そうに胸を押さえた。

抑えきれなくなったミヤの激しい感情が、ミオの心に流れ込んだのだろう。ミヤが、ずっと感情を抑えていたのは、妹の身を気遣ったのことだったのだと、レヒトはこのとき、初めて悟った。

「……僕はすべての元凶——僕たちが苦しむ原因を作った、レイ＝クリスティーヌを殺しに来たんだ」

「なんだって……？」

「アハハ。人間どもはあいつを崇め奉っているからね。打ち砕いてやるのさ、そのくだらない希望とやらを！」

ミヤが吠える。憎悪と歓喜、相反するふたつの感情を、その瞳に宿らせて。

第66話 桃色の協奏曲 - 3 -

「……なるほど。貴方の目的は、よくわかりました。しかし、少々疑問が残ります」

長いような短いような沈黙の後、最初に口を開いたのはガルヴァだった。

「話を聞けば、貴方はレヒトさんよりも、むしろレイを狙っているようだ。ここにレイがいることを事前に掴んでいたのなら……なぜ、もっと早くに乗り込んで来なかったのですか？」

ガルヴァが疑問に思うのも無理はない。ミヤは、ここにレイがいることを知っていた。だが、今まではなにも仕掛けてはこなかったのだ。事情を知らない者に見れば、ミヤの行動は納得しがたいものだろう。

だが、『大いなる意思』の性格を知っているレヒトに見れば、それは当然のことであった。

「アハハ。お兄さんは、わかるよね？」

「……『大いなる意思』が、無関係な者を傷付けることを嫌うから……だな？」

『大いなる意思』は、レヒトとレイヴン——『CHILD』以外は、傷付けないよう徹底している。目の前に立ちはだかる者に対しては別だろうが、それでも命を奪うような真似はしなかった。

快、シャウト、ガルヴァ——そして、おそらくはレイも。ましてや、無抵抗の相手に対してなど、絶対に手は出さないだろう。

部下であるミヤにも、そう命じてあるはずだ。ああいう男は、決して自分の信念を捻じ曲げない。

レヒトの予想通り、ミヤはこくりと頷いた。

「大正解。だから、ここにレイ・クリスティーヌがいることを知っていて……僕は手を出すことができなかった」

悔しそくに、ミヤが唇を噛む。

「もどかしかったよ、本当に。殺してやりたい相手がすぐ傍にいるのに、僕は手をこまねいて見ているしかないんだもの。けど、お兄さんがここに来てくれたからね。僕が『大いなる意思』から受けた命令は、魔物を討伐することと、お兄さんを殺すことだったから……」

「……それで、ここに乗り込んできたのか。俺と、レイ様の命を狙って」

「そういうこと。お兄さんがここにいることを『偶然』に突き止めた僕が、『大いなる意思』の命令を忠実に遂行しようとしてここに乗り込んだ。こっそり侵入するつもりだったけど、見付かって乱闘騒ぎになり……僕が放った一本の矢が、自力では動くこともできないレイ・クリスティーヌを、『偶然』に射抜いてしまったとしたら――」

ミヤの顔には、相変わらず笑みが張り付いていた。その仮面の下、憎悪に歪む心を隠して。

「……仕方ないよね？」

「それが、貴方の狙いですか。お粗末な計略もあつたものですね」  
ガルヴァの皮肉にも、怒つたような素振りもなく、ミヤはただ笑うだけ。

「アハハ。いいんだよ。要は、僕がレイ・クリスティーヌに近付くだけの大義名分があれば、ね」

「……『大いなる意思』は、君の嘘など容易く見破る。それに、君は『大いなる意思』に仕えているんだろう？ 主の望まないことを、君はやるうとしているんだぞ？」

ふっとミヤの顔から笑みが消えた。レヒトの言葉に気分を悪くした、というわけではないようだ。

「まあね。……僕は『大いなる意思』には感謝してるし、尊敬もしてる。けど、これだけは譲れないんだよ。これだけはね……」

真面目な顔でそう言って、心を隠す仮面のごとく、その顔に笑みを張りつける。

「レイ・クリスティーヌを殺して、その後でお兄さんの命ももらうからね」

まっすぐにレヒトを見据える瞳に、冷たい殺意が宿る。

確かに殺意だった。間違えようもない。職業柄、レヒトはこの手の感情に慣れているし、常人よりも遥かに敏感だ。しかし、たった今、ミヤから感じた『殺意』、と表現すべきものは、レヒトが今まで感じてきた『殺意』と、明らかに違うものだった。

それは、ひどく不思議な感覚。

強烈な、しかし、敵意のない、殺意――。

「……お咎め覚悟の上か」

首を振って、余計な考えを打ち消す。

「残念だが、俺は殺されてやるつもりもないし、レイ様を殺させる気もない。……どうしても、というのであれば、それなりの覚悟はしてもらおう」

「アハハ。僕をとめる？ 無理だと思うけどな」

腰にさしたホーリイ・クロスを抜き放ったレヒトに視線を向け、ミヤはすう、と瞳を細める。面白がるように。

「お兄さんたちには、僕をとめることはできないよ。……試してみる？」

細められたミヤの瞳が、不思議な光を宿し――。

「！ う……うあぁっ！？」

その瞬間、あがった悲鳴に、レヒトとミオは同時に振り返る。

「ガルヴァさん！？」

一瞬、自分から注意がそれたその瞬間に、ミヤは二人の間をすり抜け、部屋から飛び出した。

「っ……！」

追わなければならない。しかし――。

「うつ……レイ、ヴン……なぜ……？」

がくりと膝を折り、その場に座り込むガルヴァの肩を掴む。

「ガルヴァさん……！ しっかりしてください！」

呼びかけても、肩を揺すっても、彼はまったく反応を返さない。その瞳から光が薄れつつあるのを見て、レヒトの背を冷たい汗が伝った。

先ほど、ミヤに葬られた兵士も、これと似たような状態に陥り、命を失った。

「だめですよ！ ガルヴァさん！」

「ど、うして……レイヴン……私は、貴方の……」

レヒトがどんなに呼んでも、今の彼には届かない。

「ガルヴァさん！」

「レヒトさん、私がやってみます。……なんとかなるかもしれませ  
ん」

「……。頼む……」

レヒトにはどうすることもできない。

ミオは座り込んだガルヴァの前に膝を付き、頭を抱えて震える彼の肩に、そつと両手を置いた。

それだけだ。魔法を使ったようにもみえない。

だが、その直後、ガルヴァの体がびくん、と一度大きく跳ね――

彼の瞳に、理性の光が蘇った。

「あ……わ、私は……？」

事態が把握できないのか、周囲を見渡して、ガルヴァは呆然と咳く。そして、自分の両手を広げ、なにかを確認するようにじっと見つめた。

レヒトとミオは顔を見あわせ、安堵の息を吐く。

「なんとか、なったな」

「……大丈夫ですか？ お顔が真っ青です」

「え、ええ……。私は……大丈夫です……」

混乱しているのか、ガルヴァはそう答えたきり、青ざめたまま黙り込んだ。

もう、心配はいらないだろう。精神的なダメージはともかく、少なくとも、命に別状はない。

むしろ、レヒトが側にいないほうが、彼の身は安全だ。ミヤの狙いは、あくまでレヒトとレイ。それ以外の者は、ミヤの眼中にはない。彼の邪魔をしない限りは、狙われることもないだろう。

レヒトは立ち上がり、ミヤの消えた薄暗い通路を見つめた。耳を澄ませば、ミヤのものだろう遠い足音が聞こえてくる。

急がなければ。

「……ガルヴァさんは、ここにいてください。ミオ、君もここに残るんだ。俺は彼を追う」

「いえ、私も行きます」

「しかし……」

正直なところ、ミオにはここに残っていて欲しかった。敵とはいえ、ミヤは彼女の家族なのだ。ミオのことを考えると、どうにも戦い辛い。

そして最悪、この手でミヤを倒さねばならないという状況にもなりかねない。

「私は大丈夫です。急ぎましょう、レヒトさん。レイ様をお救いしなければ」

レヒトを見据えるその眼差しは、相も変わらずまっすぐで。

「……ああ。わかった、行こう！」

「はい！」

ガルヴァを残して部屋を飛び出し、二人は通路の奥に消えたミヤを追った。

第67話 桃色の協奏曲 - 4 -

追跡は容易かった。足音が遺跡内に反響し、それだけでは正確な位置までとは特定できないものの、ミヤ自身の放つ、強く、そして異質な感情が、確実にレヒトとミオを彼のもとへと導く。

遺跡の構造に詳しくないレヒトは、ほとんど直感に従って道を選んでいるのだが、こういう時、レヒトの直感はおそろしいまでの的中率を誇る。

ミヤも、それほどこの遺跡には詳しくないのだろう。彼の放つ感情に、僅かな焦りと苛立ちとが見え――。

唐突に、それが掻き消えた。終始ばたばたと響いていた足音も、今やふつとりと聞こえなくなっている。

レヒトとミオが、目的の場所にたどり着いたのも、まさに、その瞬間のことだった。

長い長いまつすぐな通路を、ゆつくりと歩く後ろ姿。右手にボウガンを携え、左手でなにかを弄びながら、ミヤはゆつくりと歩いてゆく。なにかを噛み締めるように、一步一步。その向こうでは、槍を手にした一人の兵士が、扉の前に立ち、その行く手を塞いだ。

「何者だ。この部屋に立ち入ることを許されるのは、限られた者のみ。まず、武器を下ろせ」

「……」

ミヤはなにも答えぬまま、左手を振る。手に持っていたなにかを、放り投げたのだ。足元に転がったそれを、怪訝な顔をした兵士が拾いあげる。一見すると飴玉のようにさえ見える、小さな丸薬――それを捉えたレヒトの背に、悪寒が走る。

「！ 逃げろ！」

レヒトの声に重なって。視界が一瞬光で閉ざされ、同時に鼓膜を破るほどの破壊音が響きわたった。

己の身になにが起きたのか、彼は理解できなかっただろう。その

一瞬の後には、その体は砕け散り、炎に巻かれて一握りの灰となつてしまったのだから。

ミオを抱えて地に伏せていたレヒトの上に、ぱらぱらと壁や天井から剥がれ落ちた破片が降り注ぐ。

「っ……」

破片を落としながら立ち上がり、レヒトは重い頭痛に顔をしかめた。とつさに耳を塞いでいなければ、鼓膜が破れていたに違いない。「やっぱり追ってきたね」

振り返ったミヤが、そう言つて笑う。普段から張り付けている作り物の笑顔ではなく、心からの歓喜を見せて。

「ミヤ……なんということを……」

小さく呟いたミオの声は、震えていた。

ミヤの背後——小さな部屋へと続く扉は、今の爆発で完全に破壊され、側の壁も崩れ落ち、もはや原型をとどめてはいない。

さして広くもない部屋だ。あれだけの爆発を、至近距離で受けたなら——。

「レイ、様……」

レヒトはたとえようのない感情が心に溢れるのを感じた。

「アハハ。お兄さん、本気で怒つたみたいだね」

行き場をなくしたなにかが、心の中で荒れ狂っている。熱くて、冷たい。混乱して、なにも考えられないはずなのに、ひどく冷静だ。「剣を抜きなよ、お兄さん。斬りかかってくればいい。そんなにレイ・クリスティーヌが好きなら、すぐに後を追わせてあげるよ」

「だめです、レヒトさん。挑発に乗っては……」

剣の柄に手をかけたレヒトを、ミオが制する。

二人がやつと通れるほどの広さしかない通路は一直線で、間に障害物となるものは、なにもない。

ミヤの得物は連射機能のついたボウガンである。ここが広い屋外であつたなら。あるいはミヤが並の弓使いであつたなら。レヒトにも、勝機があつたかもしれない。

純粋な戦闘能力だけであれば、ミヤの力は、彼の仲間のシルディールにも、琥珀色の瞳の男にも、そしてレヒトにも及ばないだろう。だが、決して並の腕というわけではない。ミヤは、確かに強い。

そして、この狭い通路、障害物の有無、武器の相性と、条件はすべてミヤに有利に働いている。

なおかつ、レヒトがミヤの矢をかわそうものなら、背後のミオが危険に晒される。ミオを、彼とは戦わせたくはなかった。

レヒトは唇を噛み締めた。なにもできない自分が、ひどく惨めで情けない。

「それじゃあ、さよなら。お兄さん……」

ミヤの指が引き金にかかり——その時、彼の背後で響いた微かな物音に、弾かれたように振り返る。

ミヤの視線の先には、爆弾で破壊された扉の向こう、原型をとどめていないだろう小さな部屋。

「っ……！ そんな、馬鹿な！ あれだけの爆発で、どうして……！」

ミヤが珍しく動揺を見せた。

「どうして生きているんだ！？」

彼が驚いたのも無理はない。部屋の中は、爆発が起きる前と、なら変わらぬ状態だったのだ。

力なく椅子に腰かけたレイが、焦点のあわぬ虚ろな瞳を、ただミヤのほうへと向けていた。

「……なるほどね、魔力障壁か……。こんな状態になっても、魔法が使えるとは思わなかったよ。さすがは『哀しみの英雄』ってところかな」

ミヤが肩にかけたボウガンをレイに向け、構える。

「生きようとするその執念には感服するけどね。……それも、これで終わりだ」

「よせっ！」

「……来るな！ 来たら……すぐに、この引き金を引いてやる。僕

のボウガンは特別製なんだ。さつきは魔力障壁で防がれたけど、この矢は防げないからね……」

走り出そうとしたレヒトを、ミヤがそう牽制する。レヒトが止まろうが止まるまいが、レイを殺す気にいるミヤは、躊躇うこともなく引き金を引くだろう。

だが、レヒトはそれ以上、動けなかった。

「やめるんだ、ミヤ。レイ様を殺しても、なにも変わりはない。それどころか、人間はますます片翼を憎むようになってしまう」

「ミヤ……お願いします。武器を、捨ててください……」

片翼を追放すること。当時、レイが下した判断——それが正しかったのかどうか、レヒトにはわからないし、過去——そして今現在のレイにも、そしておそらく、他の誰にもわからないだろう。

だが、わからないなりに、レヒトは思うのだ。片翼が迫害されているという現状を、一番嘆き悲しんでいるのは、判断を下したレイ自身なのではないか、と。

それ以上、かける言葉が見付からず、黙り込んだまま、二人はボウガンをレイに向けたミヤを、緊張した面持ちで見つめていた。

「……わかってるさ、そんなこと」

長い、沈黙の後に。二人には背を向けたまま、ミヤはそつと口を開いた。

「お兄さんの言う通りだよ。僕がレイ・クリスティーヌを殺したところで、なにも変わらない。けどさ……もし、お兄さんが僕の立場だったら？ 目の前で家族を、友達を殺されたら……。不毛だからやめろって言われて、簡単に憎しみを捨てられる？」

「……」

レヒトのほうを振り返り、ミヤがそう問いかける。瞳に、深い深い、悲しみを宿して。

「一度吹き出した憎悪は、簡単には消えない。僕の家族を奪った奴、僕を認めようとしなかった奴、そしてその原因——あの戦いを起こした過去の奴……全部、全部皆殺しにしてやりたいって……」

ミヤの瞳から悲しみが消え失せ、彼が乗り込んできた時からずっと感じていた、例の異質な感情——すなわち、狂気にすら似た歡喜が顔を覗かせる。

「復讐はとづくに始まっていたんだ。最初に殺したのは、僕たちの里を襲った人間。次は、僕とミオを嘲笑った人間……。けど、まだ終わらないよ。すべての元凶——レイ・クリスティーヌを葬るまで、全部を壊して、壊して……」

「だめです、ミヤ！ そんなこと……！」

「どうして？ いいじゃない。僕はこの世界に未練なんてないもの。こんな世界、全部壊してやり直せばいい。そうすれば『大いなる意思』が、もつといい世界を創るよ」

無邪気な笑みを浮かべ、ミヤは再び二人に背を向け、ボウガンを構えた。

「さあ、お別れの時間だよ。貴方の悲鳴が聞けないのは、少し残念だけだね」

「っ！ やめろおっ！」

「アハハ！ 死ねえっ！」

その顔に笑顔を浮かべた死神が、引き金にかかった指を引いた。打ち出された銀色の矢は、彼を死者の国へと導く死神の鎌か。

「っ……レイ様ぁーっ！」

狂気じみたミヤの洪笑と、レヒトの絶叫。

伸ばした腕は、また、届かなかった。

## 第68話 守るべき者

風を切り裂く銀の矢が、彼の身を貫く、まさにその瞬間。

歡喜が、驚愕に変わった。

残像を残し、矢を打ち払った一筋の銀。破壊され、半ば崩れかけた壁の向こうから、レイの身を守った人物が姿を見せる。その右手に、矢を叩き落としたものだろう、鉄鎖鞭を携えて。

彼によつて弾かれた矢が、ミヤの足元に転がった。

薄紫色と、蒼穹色。冷たい焰と、熱い氷。ふたつの瞳がぶつかり、静かに燃え上がる。

「ラグネス様！ どうしてここに……？」

レヒトがそう尋ねると、ラグネスはレヒトに顔を向けて苦笑した。

「まあ……これだけ大騒ぎしてくれば、ね。嫌でも気付く」

そして、立ち尽くしたままのミヤへと視線を移し、ラグネスは言葉が続ける。

「……ここに乗り込んできた以上、狙いはレヒトかレイだと予想がついたからね。この遺跡のことは、私もそれなりに知っている。悪いが先回りさせてもらったよ」

異変に気付いたラグネスは、隠し通路かなにかを使ってこの部屋まで先回りしたのだろう。

再び、ラグネスはレヒトへと視線をやった。

「快とシャウト君は、君のほうを助けに行っただけど………どうから会えなかったようだね」

レヒトと出会う前に、二人がミヤに倒されたとは考え辛い。となると、二人は今もこの遺跡のどこかで、レヒトを探しているのだろう。

別に、二人が方向音痴だというわけではない。前述した通り、この遺跡はかなり広く、また複雑な造りをしているため、たった一人、それもあちこち移動している者を探すことは、たとえ遺跡の構造を

熟知していたとしても、容易なことではないのだ。

対して、レイの場合はレヒトと違って居場所がはっきりしているため、ラグネスは簡単に先回りできたというわけだ。

「ふーん……さっき、魔力障壁で僕の爆弾を防いだのはおじさんだね？」

声に余裕の色を滲ませたミヤが問う。レヒトの位置からでは、背を向けたままのミヤが、どんな表情を見せているのかは伺い知れないが、おそらく、相変わらず笑みを浮かべているのだろう。

「ああ、そうだよ。ずっとこの部屋の中に潜んでいたんだ。来なかったらどうしようかと不安に思っていたところだよ」

「へえ。ずいぶん暇なんだね」

「年寄りになるとね」

作った笑みを崩さず、二人は意味など持たない、皮肉混じりの言葉の応酬を繰り返す。戦意を喪失したわけでも、なにか策があるというわけでもない。ただ、きっかけがないから、二人とも動いていないだけだ。

その証拠に、二人は無防備を装っているが、その実、決して相手からは視線を逸らさず、緊張の糸も緩めてはいない。

張りつめた空気の中、対峙するラグネスとミヤ。一触即発とは、まさにこのことを言うのだろう。

ミヤの背後を奪うレヒトとミオも、迂闊には仕掛けられないでいる。レヒトたちがミヤを挟み撃ちにする形だが、状況が不利であることに変わりはないのだ。

ミヤが二度——一度目は兵士に対し、二度目はガルヴァに対して——レヒトの前で使って見せたあの不可思議な技。対処法がわからない以上、あの技を使われればレヒトたちに勝ち目はなくなる。

ふと、レヒトはレイと『大いなる意思』の会話を思い出していた。ミヤの技を破ったのか、と感嘆する『大いなる意思』にレイが返したのは、あの技は俺には効かない、との言葉。

レイはミヤの技を無効化する術を持っていたということだ。そし

て、ミヤに技をかけられた街の人々を正気に戻すことにも成功している。彼が参戦していれば、ミヤの技にも対処できるのだろうが――

張り詰めていた空気が弾け、レヒトの意識が覚醒した。

慌てて二人へ視線をやれば、問答無用でしかけたのは、ミヤのほうだった。打ち出される銀の刃のことくを、ラグネスは扉のあった場所に立ち止まったままで捌く。しかし、このままでは、ラグネスのほうが先に消耗する。

「アハハ。いつまで続くかな」

「試してみるかい？ 昔に比べれば衰えたといえ……私も天魔大戦を戦い抜いた一人。遅れはとらないよ」

ミヤの放つ矢を、ラグネスは鉄鎖鞭を自在に操り、方向を変え、ミヤに向けて弾く。弾かれた矢を、ミヤは軽いフットワークで難なくかわし、なおも矢を打ち続ける。彼の武器がボウガンである以上、矢が尽きれば攻撃を封じることができるのだが、それを待っていては、どれだけ時間がかかるかわからない。それに、ミヤにはあの不可思議な技がある。あまり戦いを引き延ばすわけにはいかないのだ。なんとか援護したいところだが、レヒトが下手に手を出せるような状況ではない。

「……手出しは無用だよ、レヒト」

いつもと同じ、穏やかな微笑みを湛えたまま。細められたラグネスの瞳が、強い光を宿す。

「ここは私がなんとかしよう。レイは必ず、私が守る。私は『弟』を見捨てるような真似はしない」

その言葉に、ミヤの動きが一瞬とまり――狙いが逸れた矢は、ラグネスのマントを貫いただけ。

一瞬、生まれた隙を逃さず、ラグネスが初めて攻撃に転じた。鉄鎖鞭は、狙い変わらずミヤの胸を打ち据える。

「くっ……！」

次の矢を打ち出そうとしたミヤが、慌てて身をかわした。まさに、

光のごとき速さで、彼の傍へと移動したミオの振るう刃を避けて。

「ミオ、どうして……！」

「……これ以上は、許しません。私が相手になります、ミヤ！」

ミオに剣の切っ先を向けられ、ミヤが唇を噛み締める。

深い深いため息を吐き、彼はミオ、そしてレヒトの横をすり抜け、通路の奥へと走りゆく。

「ミ……！」

「やめなさい、レヒト」

後を追おうとしたレヒトを、ラグネスが押しとどめる。

「行かせて、あげなさい」

ミヤの消えた通路の奥を見つめたまま、ラグネスは静かにそう言った。

「……とにかく、お二人がご無事で——」

レヒトの言葉が最後まで続くことはなかった。突如、真横から凄まじい襲撃を受けたからである。

「あーっと、見付けましたよ、ラグネス様。それが、レヒトの奴、どこにもいなくて……」

壁——もとい、隠し通路へと続く扉であつた場所から、ひょっこりと顔を覗かせたのはシャウトだつた。

「……レヒトなら、ここににいるけど」

やや面食らつたような表情のラグネス。

「なんだ、こっちにいたんですか。こちとらずつと姫と二人で探し回つてたつつのに。で、どこです？」

「んー……君の目の前にいるよ」

「眼の前、ですか？ んー……お！」

きよろきよろとあたりを見回すシャウトの視線が、ある一か所で止まる。

隠し通路の真横に立っていたレヒトは、当然、中から誰かが扉を開ければ、その直撃を受けることになる。もし、扉を開けたのが快であつたなら、レヒトは多少痛い思いをするだけで済んだだろうに。

少なくとも、吹き飛ばされることは、なかったはずだ。

シャウトが自慢の馬鹿力で勢いよく開けた扉に弾かれ、レヒトは反対側の通路に、思い切り頭をぶつけることになったわけである。

「おいおい、なに寝てんだよ、レヒト。こっちは大変だったんだぜ？ お前はどこにもいねえし、どっかで戦ってるような音はしてるし……。レヒト、聞いてるか？」

「レヒトさん！ 大丈夫ですか！？」

倒れたままのレヒトの傍にしゃがみ込んだシャウトの問いかけにも、心配そうなミオの言葉にも、レヒトが答えられるはずもなく。

「おやおや……。だいぶダメージが大きかったようだね」

「そうみたいね、伯父様」

シャウトに遅れて顔を見せた快とラグネスが顔を見合わせ、くすくすと笑った。

## 第69話 君に踊る紅 - 1 -

顔を赤くしたレヒトと、笑いを堪えるような様子の快が救護室から出ると、外ではシャウトとミオが待っていた。

「よお、どうだった？」

「レヒトさん、大丈夫ですか？」

頷くレヒトの頭には、真新しい包帯が巻かれている。

あの後、レヒトは頭の怪我を診てもらうために快とラグネスに伴われて救護室を訪れていた。恥ずかしさもあり、レヒトは大丈夫だと固辞したのだが、もしものがあつたら、とラグネスに強く言われ、仕方なしに承諾したのだ。

救護室には、あの騒ぎで怪我をした兵士たちも運ばれてきていたのだが――。

事情を知らない兵士たちは、レヒトの頭の怪我を見て、襲撃者からレイを守った際に負ったものだと思ったのか、騎士の鑑ですね、などと言っていたりもしたが。当然、これはそんなに格好のよいものではない。

レヒトは恥ずかしさで顔から火が出る思いだった。

どうしたのかと尋ねるガルヴァに、ラグネスが馬鹿正直に、実は壁に思いきり、などと言い出したときには、思わず大声をあげてしまったのも、無理はないと思う。

結局、レヒトの怪我は、戦闘中に強打した、という風に説明した。とりあえず、嘘は言っていないのでよしとしよう。

ちなみに、ラグネスも中で治療を受けている。ミヤに攻撃を仕掛けた際に、腰を痛めたらしい。

例の『入ったら殺す』という紙の張られた扉を閉め、レヒトはふう、と息を吐いた。まだ顔が赤い。

「……恥ずかしかった」

レヒトがそう呟くと、シャウトが豪快に笑った。

「鍛え方が足りねえな！」

そもそも、こうなったのはシャウトの馬鹿力が原因なのだが。レヒトはなにも言わないことにした。

第一、シャウトと比べれば、レヒトだけではなく、ほとんどの人間がひ弱に分類されるに違いない。

「さあて、レヒトも戻ったことだし、俺様は行くぜ」 一頻り笑った後、シャウトが唐突に声をあげた。

どこへ行くんだ、と問えば、シャウトはにいつと笑みを浮かべて天井を指差した。地上、という意味だろう。

「あ、見張りか？ だったら、俺も……」

そう声をかけると、シャウトは、あんたは生真面目だな、と苦笑した。

「そんなんじゃないさ。星を見ながら寝るだけだ。……どうだい、その嬢ちゃんも一緒に」

シャウトに視線を向けられたミオはきよろきよろと周囲を見渡し、嬢ちゃんという言葉が、自分をさすものだと思いいたらしい。

「え？ ……あ。はい、私も一緒にいきます。外を探検してみたい」

「お、ロマンがあるなあ」

こんな真夜中に、廃墟と化した街を探検することに、ロマンがあるのかどうかは、この際、深く考えないことにしよう。

「怪我人はゆっくり休んでな。姫、そいつが無茶しないように、しっかり見張っててくれよ」

レヒトは快と思わず顔を見あわせた。

すると、シャウトが振り返り、レヒトへと視線を向けて唇を動かす。

『うまくやれよ』——意味を掴んで、レヒトは顔がまた赤くなるのを感じた。

「私は嬢ちゃんじゃありません、ミオです」

「そっかい。わかったよ、嬢ちゃん」

「……もう！」

そんな言い合いをしつつ、二人は通路の奥へと消えて行く。

「……ねえ、レヒト。少し付き合わない？」

二人の姿が見えなくなったのを確認してから、やおら快がそう切り出した。

「うん？」

快はウインクすると、グラスをあおるような仕草をして見せる。

「いいのが残ってるんだ。どう？」

「もちろん、喜んで」

少しばかり芝居がかった動作で頷くと、快は似合わないよ、と笑った。

二人ぶんのグラスを、レヒトの髪と瞳を思わせる、深いワインレッドの液体が満たしてゆく。

「いい香りだな」

レヒトは酒の匂いだけで酔えるほどだが、これはそうでもない。酔うためにあるような酒——いわゆる安酒に多い、鼻を突き刺すような強烈な匂いがないのだ。

たとえるなら、もぎたての果実のような、爽やかな香り。

「なかなかいいでしょう。遠い異国の品なんだ。滅多に手に入らない貴重なものなんだよ」

なるほど。よく見れば、確かにボトルに巻かれたラベルには、レヒトには読めない文字が描かれている。

「いいのか？」

「なにが？」

首を傾げる快に、レヒトは頬を掻いた。

「いや……貴重な品なんだろう？俺は、酒にはあまり強くないから……一緒に飲んでも、楽しくないかもしれないぞ？」

「いいんだよ。僕はレヒトと飲みたかったの」

「快……」

その言葉に、レヒトはちょっとした優越感を覚えた。彼女が、滅

多に手に入らないという、上等な酒の相手に、シャウトではなくレヒトを選んだという、たったそれだけのことでだ。

「だって、シャウトなんかと一緒に飲んだら、急がないと全部飲まれちゃうじゃない。味とか香りとか楽しむ余裕がないんだもの」

「……そ、そうですか」

嬉しいやら、悲しいやら。それでも、彼女が一人で飲むのではなく、自分を招待してくれたことに違いはないと、レヒトはなかば開き直って相手を努めることにした。

「けど……よかった」

グラスのひとつに酒を注ぎ終えたところで、快がぽつりと呟き、ボトルを傾けていた手をとめた。

「レヒトが、無事に戻ってきてくれて」

微笑みを湛えていた快の瞳に、ふっと影がさす。

「あの時はね、もうだめだっと思って思った。僕も死ぬんだ、みんなも死んじゃったんだ。また……僕は大切な人を失ってしまったんだって

……」

その言葉が、レヒトの心に引つ掛かった。しかし、レヒトは問うことができなかった。彼女の悲しげな瞳の向こう、今でも彼女を縛り続けるものを、見てしまったから。

「僕は助かった。シャウトとも、伯父様とも会えたのに……レヒトはいなかった……」

ふう、と快が小さく息を吐く。ボトルをテーブルに置くと、ワインレッドで満たされた片方のグラスを手にとり、くるくると揺らす。グラスの中で、ワインレッドの波が踊った。

「けど、ね。シャウトも、伯父様も……レヒトが死ぬはずはないって言うんだ。絶対に生きてる、絶対に戻ってくる。だから、諦めちゃだめだっ」

「……快……」

「一度は、諦めてしまったけど……もう一度、僕も信じてみようって思ったの。そしたら、本当に戻ってくるんだもの」

快は手にしたグラスを、レヒトに差し出す。ふわりと甘い香りが漂った。

酒の香りか、はたまた彼女自身の香りか——レヒトには、わからなかったが。

「……僕を許してね、レヒト。一度は、希望を捨てた僕を……」

立ち上がり、彼女からグラスを受け取って。

「……俺も、同じだ」

レヒトはそっと、歩み寄る。

「俺は一人、名もなき小島に流された。俺が気付いたときには、あれからすでに二十五日が過ぎていたんだ。そこで、天界が落ち、ロイゼンハウエルが壊滅したと聞かされて……」

レヒトは、そこで言葉を切った。

あの時の悲しみを、表すことのできる言葉をレヒトは知らない。あれは、言葉などでは、到底表現できるようなものではなかった。

一人、生き残ってしまった自分を、恨むほどに。

「初めて、絶望を知った。君が……死んでしまったと思って……。生きることも、一度は放棄しようとした。けど……俺はこうして戻ってきた」

レヒトは小さく微笑むと、テーブルに置かれたボトルをとって、空のグラスに酒を注いだ。

「君に……会うためにな」

「レヒト……」

それを彼女に手渡し、自分の手にしたグラスを掲げる。

「みんなの無事と、再会を祝して……」

生きていてくれて、ありがとう——グラスをあわせる小気味よい音が、小さく部屋に響いた。

## 第70話 君に踊る紅 - 2 -

別れてからの出来事を、レヒトは酒を酌み交わしながら快に話した。

名もなき小島での生活、そこで出会ったミオと、彼女の父親のリーシェン、そして三闘神ミロスラーフとの語らいなど。レヒトが話す間、快はただ静かに微笑んで聞いていた。

「……と、俺からはこのくらいだな」

「ふうん…… 大変だったんだね」

「そうでもないさ。こうして、君にも会えたしな」

快がおかしそうに笑い、レヒトは照れ隠しに頬を掻いた。

普段はかなり早いペースでグラスを空ける快だが、今日はあまり進まないようだ。ボトルには、まだ半分以上、ワインレッドの液体が残っている。

（……俺に、あわせてくれているのかもな……）

グラスを傾け、その香りを楽しみながら、レヒトはぼんやりと考えていた。

「ねえ、レヒト……」

「なんだ？」

「僕も……レヒトに、話しておかなきゃならないことがあるんだ」

グラスの中のワインレッドを見つめたまま、快はそう話し始めた。

「……僕ね、声を聞いたの。あの日、気を失う前に。……レヒトが落ちて、僕、混乱してたし……。幻聴だったかもしれないから、他の人には話してないんだけど……レヒトにだけは、話しておかなきゃならないって思ったの。だって、あれは……」

快は、そこで言葉を切った。そして、しばしなにか思案するように沈黙する。

レヒトは黙って、彼女の言葉を待った。

「あれは、『大いなる意思』の声だったから……」

『大いなる意思』——レヒトの半身にして、今も執拗にレヒトを始末しようとする謎の男。そして、レイヴンを奪った男。

半身であり、創造主とも呼べる『大いなる意思』に対して、レヒトは憎悪にも似た感情を抱いていた。しかし——。

「あ、でも……僕の勘違いかもしれないし……」

知らぬうちに、苦い顔をしていたのだろうか。慌ててそう付け加えた快の言葉を遮り、レヒトは静かに口を開いた。

「……君が聞いたという声は、おそらく『大いなる意思』のものだったんだろ。……あの日、世界の崩壊を救い……君たちを助けたのも……」

そう。怒りや憎しみに囚われず、素直な気持ちで考えれば——それは、当然のことだったのだ。

『CHILD』によって、世界が崩壊の危機に瀕した時、この世界を、そしてこの世界に生きる人々を救えたのは、誰なのか。

「それ以外に、考えようがない。だが、疑問も残るな」

「うん。……『大いなる意思』は、どうして僕たちを助けたんだろ」

快がぼつりと呟いた言葉に、レヒトは答えられなかった。

「そう、なんだよな。それが、わからない。……俺は『大いなる意思』のことを、なにひとつ知らないんだ。半身だと言われながら、俺は『大いなる意思』のことを知ろうとはしてこなかった」

憎しみに囚われ、レヒトはずっと目を背けてきた。

確かに、レヒトにとって、『大いなる意思』は悪であり、敵だ。彼の目的がなんであれ、レイヴンを傷付けたことに変わりはない。

だが、レヒトは知ってしまった。レイヴンの中に封じられていた存在を。世界が崩壊の危機に瀕した時、世界を、レヒトの仲間を、そして多くの人々を救ったのが、『大いなる意思』であることを。なにも知らなかった頃は、ただ単純に憎んでいることができた。しかし、今は違う。知ってしまった以上、もう目を剃らし続けることはできない。

「知らなければならぬ。『大いなる意思』のこと、そして、『大いなる意思』の目的を。それが、きつとレイヴンを救うことに繋がるはずだ」

グラスに残った酒を一気に飲み乾し、レヒトは立ち上がる。透明なグラスの底、僅かに残るワインレッド。

「名もなき小島で、ミロスラーフ様はおっしゃった。憎しみに囚われた心では、見えるものも見えなくなる、と」

あの時は、理解できなかった。だが、今ならわかる。

「行くのね、レヒト」

快のほうへと視線を移し、レヒトは頷いた。

「ああ。……会いに行く。三闘神アルカディアス様に。……そこで、なにかが……」

会って、それでどうなるのかなど、わからない。だが、なにもせずに、ここで燻っているなど、自分らしくない。そう思う。

「そういう人だよね、レヒトは」

苦笑混じりに、快がそう呟いたのが聞こえた。

「すまない。これは、俺のわがままみたいなものだから……。無理に付き合って欲しいと、言うつもりはない」

「なに言ってるの。一人じゃアルカディアス様のもとまで、たどり着けもしないくせに。どうせ場所だって知らないんでしょ？」

「うつ……。そ、それは……」

痛いところを突かれて言葉に詰まると、快はやっぱりね、と楽しそうに笑った。

この計画性のなさというか、行き当たりばったりというか——そこも、レヒトの愛すべき性格である。

「僕と一緒に行ってあげるよ。もう、置いてきぼりはごめんだからね。わかった？」

「快……。ああ、もちろんだ」

レヒトがそう答えると、快はよろしい、と頷いた。

「シャウトも、きつと一緒に来てくれるよ。レヒトのこと、ずっと

気にしてたし」

「そうか……。世界がこんな風になってしまつて、シャウトもケアルちゃんや長老様が心配だろうに。長々と付き合わせてしまつているな」

今はまだ直接的な被害を受けていないとはいえ、これからもうであるという保証はどこにもない。愛する人々が不安な日々を送っていると聞けば、それこそ飛んでいきたい想いだろうに。

「……だからこそ、だよ。大切な人のためにも、早く平和を取り戻して、そして胸を張って帰るんだつて。中途半端なままじゃ、長老様に殺されるとか言つてたつて」

「ははは……」

その光景が浮かぶようで、レヒトは思わず苦笑した。格好悪くて帰れない、というより、むしろ怖くて帰れないというのが真実だろう。

「けど、レヒト。あの子は……？」

レヒトは、快がミオのことを言っているのだと悟つた。

「……そういえば、まだミオのことを詳しく話していなかったな。ミオには記憶がないんだ。自分の失われた記憶と、家族の手がかりを求めて、俺と一緒に魔界に来たんだが……」

レヒトはゆつくりと話し始めた。

先ほど、レイとレヒトの命を狙つてきた襲撃者が、彼女の実の兄であり、彼が『大いなる意思』に仕えていること。そして過去に起きた事件と、ミオの記憶を封じたのが『大いなる意思』であること――。

「……そう」

快が瞳を伏せた。かける言葉が見付からず、レヒトはただ頷くだけだった。

「レヒト、どうするの？ このままじゃ、いずれ……」

「……ああ。わかつている。少なくとも、俺の側にいなければ、彼女は『大いなる意思』とは無関係だ。そうすれば、直接狙われるこ

とも、実の兄と敵対することもない。だが……」

ミヤが『大いなる意思』に仕えている以上、そして、『大いなる意思』がレヒトを始末しようとする以上、レヒトがミヤと戦わずにすむ可能性は、かなり低い。かといって、レヒトもおとなしく倒されてやることはできない。

「……難しいね」

「ああ。……俺は、ミオに任せようと思う。彼女がどちらに付くかあるいは名もなき小島に戻るか……それは、俺たちが決めることじゃない」

辛い選択をさせることになってしまった。だが、これは彼女自身が決めるべきことなのだ。それによって、彼女がレヒトの側を離れ、あるいは敵対することになってしまっても……それは、仕方ないこと。レヒトには、それを受けとめることしかできない。

「……すべては夜が明けてから」

ぽつりと快が呟き、空になったレヒトのグラスに酒を注いだ。

「もう少し、僕に付き合わない？」

「ああ……そうしよう」

そう答えて、レヒトはグラスを傾けた。

「気を付けていくんだよ」

翌朝。内心恐れていた二日酔いに見舞われることもなく、レヒト一行とラグネスは、例の三闘神の神像の前で別れの挨拶を交わしていた。

「はい。ラグネス様も、どうかお気を付けて。……俺がいなければ、『大いなる意思』に関わる者が、ここを襲うことはないと思われます」

ミヤがこの遺跡の場所を知っていた以上、また襲撃がないとは言えないが、ミヤはわざわざレヒトがいるときを狙い、理由付けまでして仕掛けてきたのだ。となれば、レヒトがここを離れれば、ラグネスやレイの身は安全だろう。

「そうだろうね。私たちはここに残り、魔物の討伐を続けるつもりだ。これからどこへ行くんだい？」

「とりあえず、アルカディアス様にお会いするために精霊界へ向かいます」

三闘神のうちの一人、アルカディアスは、精霊界にいるという。

一行は、快の案内で精霊界へと向かうことにしていた。

「そうか……わかったよ。私たちはここにいるから、いつでも戻ってくるという。快、レヒトを頼んだよ」

「任せて、伯父様」

「ラグネス様、それでは立場が逆です……」

レヒトが呟くと、皆の間に笑いが起きた。

「くす……それでは、行きましようか」

ミオの言葉に、レヒトは頷いた。

結局、ミオはレヒトたちと行動をとみにすることを選んだ。この先、辛い思いをすることもあるかもしれない。しかし、彼女はきつと乗り越えていけるだろう。

レヒトはそう思っていた。

「よし、出発だ」

燦然と降り注ぐ朝陽を受け、一行はラグネスに見送られ、精霊界へと旅立った。

火の燃え爆ぜる微かな音に青年が目を開くと、焚き火を挟んで向こう側に腰をおろす、一人の男と目があつた。

『目が覚めたか』

ぶっきらぼうな口調で声をかけ、男は手にした木の枝で焚き火を突く。白髪に、金色の瞳。整った顔立ちだが、人を威圧するようなその眼差しが、魅力を半減させている。

青年はなにも答えず、ゆっくりと身を起こし——自分の体に起きた変化に気付き、その瞳を僅かに細めた。

なくしたはずの右腕が、ついている。折られたはずの両足が、動く。そしてなにより、潰された瞳が、光を映している。だが、その冷たい肌に、人としての温もりはなく。命の鼓動も、消え失せている。

『……まだ動かないほうがいい。体に馴染むまでは』

青年は、やはりなにも答えなかった。

『ずいぶんと愛想のない男だな。せつかく私が助けてやったというのに』

男がそう言うと、なにかを確かめるように体を動かしていた青年が、唇の端を吊り上げた。笑ったのだ。

『お前の名を聞きたい』

『……名前など聞いてどうする』

そう言葉を返すと、男は唇をへの字に曲げた。それを見て、青年は喉の奥で笑う。

『……疾風、だ』

『そうか。私は『大いなる意思』と名乗っている』

『お前……俺に本名を名乗らせておいて、自分は偽名か？』

小さく笑って見せる男。青年は、それ以上を追及しなかった。

『……なぜ、俺を助けた？ わざわざ、このような方法をとってま

で……救う価値のある男か、俺は？」

男が、金色の瞳をすう、と細めた。

『そうだな。私はそう思った』

手に持った木の枝を、男はふたつに折って火に投げ入れる。

ふと、闇の中から現れた、小さな蛾。浮かび上がる炎に、誘われたのか。

その姿は、吸い寄せられるように炎の中へと消え、すぐに散って見えなくなった。

『……酔狂な奴だ』

青年の言葉に、男は唇を笑みの形に歪めた。

『酔狂、か。そうだな。……お前に、これを返しておこうか』

男が指先で弾いたものを、青年は虚空で掴み取った。それがなんであるかを確認し、猛禽類を思わせる青年の瞳に、優しい光が宿った。

『お前が握り締めていたのでな、それを媒体としたのだが……』

指輪に注がれていた青年の視線が、男に移る。

『なんということをしてくれたんだ。これは俺のものではないんだぞ』

『そのようだな。お前の無骨な指には、その指輪は小さすぎる。それに、そこに刻まれた愛の言葉は、お前が彫ったもののようなからな』

『……読んだのか、これを』

男はにやりと笑い、指輪に彫られた誓いの言葉を、詠うように諳んじた。

『なかなかいい言葉だとは思うが、声に出すには少しばかり気取り過ぎだな。お前が考えたのか？』

『……三日ほど、寝ずにな』

指輪を握り締め、青年は立ち上がった。

『行くのか』

男の問いに、青年は無言のままで頷いた。

『そうか。娘であれば、殺されるといふ可能性は低い。……慰み者にされるか、金持ちに売られるか。後者のほうが、可能性としては高そうだ』

『……場所だけ、聞きたい。ここは、どのあたりになる？』

『南に三日ほどの場所になるが……まあ、待て』

聞くなり歩きだそうとした青年に制止の声をかけ、男は右手を軽く振って火を消した。

『案内してやる』

『……そこまでしてもらふ義理はない。場所だけ聞ければ十分だ』  
そう言って走り出す。男が慌てて付いてくるのがわかったが、走る速度は緩めない。

『待てと言っているだろう！ まったく……私も手を貸してやる！』  
『理由は？』

『愛する者のために、命をかけるお前が気に入った。それだけだ！』  
妙な男だ、と。青年は笑った。そして琥珀色の瞳を細め、夜の闇が支配する天空を仰ぐ。

彼女が、どうか無事であるように——祈るような思いで、青年は誓いの指輪を握り締めた。

## 第71話 記憶の中のパールセフォン - 1 -

舗装されていない細い道を、泥と水とを撥ねあげながら、長い外套をはおったよつつの人影が駆け抜けて行く。

魔界首都ロイゼンハウエルから遙か東、精霊界へと続く、精霊の森にほど近いこのあたりは、魔界でも辺境と呼ばれる場所である。

朝方までは心地よいほどの快晴だったというのに、昼を過ぎたあたりから降り始めた雨は、日暮れには雷まで伴う豪雨へと変化していた。

強い風のせいで、吹き付けるようなこの雨では、はおった外套もあまり役にはたたない。上着どころか鎧の下に着ている衣服にまで水が染み込み、レヒトは気持ち悪さに顔をしかめた。

「あーん、もうっ！ だからさっき通った街で雨宿りしようって言ったのに！ ねえ、レヒト？」

豪雨の中を走りながら愚痴を溢す快に、少し遅れて走るシャウトが、言葉を掻き消すほどの豪雨に負けまいと大声を張り上げる。

「街ってありや廃墟だったじゃねえか。あんなところで野宿なんて冗談じゃねえ。なあ、レヒト？」

「……ははは。まあ、な……」

レヒトは言葉を濁した。ちなみに、ミオはずっと我関せずを決め込んでいる。かなりナイスな判断だと言えよう。

「仕方ないじゃない。黒い光が降り注いだせいで、魔界の街はほとんど壊滅しちゃったんだから。あ、シャウトってば、ひよつとしてこの間の……」

「ち、違うつつの！ んなわけねえだろ！ おい、レヒトからもなんとか言ってくれよ！」

「ムキになるところが怪しいよね。レヒトもそう思わない？」

二人から外套の裾をぐいっと引つ張られ、軽く首が絞まる。

（……神様。いっそのこと二人に天罰を与えてくださいませんか。

少しは静かになるでしょう……)

雨にも負けず、雷にも負けず、ぎゃあぎゃあとうるさい二人の声を背後に聞きながら、レヒトが物騒なことを考えていると。

「あつ」

不意にミオが声をあげた。別にレヒトの念が通じて、雷が落ちたというわけではない。

二人に雷が落ちれば、当然、側にいるレヒトも巻き添えになる。こんな至近距離で食らえば、それこそ即死か黒焦げだろう。それは正直、ごめん被りたい。

「どうした？」

「見てください。あれ……街じゃありませんか？」

ミオが指差したのは、一行から見て左手側。豪雨のせいで視界は非常に悪いのだが、立ち止まり、よく目を凝らして見れば、確かに彼女が指差す方向に、遠い街並みが見てとれた。

「……パールセフォン」

そう呟いた快のほうへと視線を向けたレヒトは、フードの下から覗く彼女の瞳に、一瞬、深い悲しみの色を見たような気がした。

「パールセフォン？」

レヒトが聞き返すと、快はこくりと頷く。大きな蒼穹色の瞳の中に、一瞬だけ見た悲しみの色は、もう消えていた。

「……あの街の名前だよ。パールセフォンはね、精霊界にもっとも近い魔界の街なんだ。……十年前に、住人は誰もいなくなってしまうだけだね」

そう説明して、快は隣立つレヒトに瞳を向ける。

「少し、寄っていかない？ 雨宿りくらいはできるよ」

「……そうだな」

レヒトは濡れた前髪を掻きあげた。

水を吸った衣服は体に重くまとわりつき、それだけで余計に体力を消耗する。日没とともに気温もさがり、このままでは確実に風邪をひいてしまうだろう。

「快。精霊の森までは、まだ長いのか？」

「うーん、なにしろ徒歩だからね……早くて半日、かな。こんな雨だし、実際にはもつとかかると思うよ」

「そうか……。よし、今日はあの街で一泊しよう」

レヒトがそう宣言すると同時に、暑い雲に覆われた空に稲妻が走った。雨は弱まるどころか、ますますその勢いを増している。

「……こりゃあ、さすがにまずいな。この際、廃墟だろうが仕方ねえ。とにかく、雨宿りできる場所を探そうぜ」

「ああ、急ごう」

一行は進路をやや北に変え、パールセフォンの街を目指して走り始めた。

廃墟を予想し、街へと続く南側の門をくぐった一行の目に飛び込んで来たのは、ほとんど無傷な街並みだった。

十年もの間、うち捨てられていたらしいが、被害らしい被害といえば、民家の壁や屋根の一部が壊れていたり、窓ガラスが割れていたりする程度で、街としての原型はとどめている。

被害の大きかった魔界中央部からは離れているため、この街は壊滅を免れたのだろう。

パールセフォンは、中央部に広場があり、その周囲に家々が立ち並ぶという、円形状の造りをした街だ。このような魔界の辺境にあるにしては、かなり大きな街である。

この街をよく知るといって快に連れられ、通りがかった、街の中央部にある広場。そこに安置されていた石碑に、レヒトは目を奪われた。

『人間と精霊人、その絆が、未来永劫続くことを願って』——石碑には、そう刻まれていた。

ここは、人間と精霊人——ふたつの種族が、ともに暮らしていた街だったのだ。

街の西側にある、一軒の小さな民家。生活の痕跡などは見られないが、不思議と掃除は行き届いているようだ。

「……つくしゅん！」

口許に手をあてて、かなり控え目なくしゃみをしたのはミオである。それも続けて三度ほど。

「おいおい。大丈夫か、嬢ちゃん」

「あ、はい。大丈夫です」

出会ったばかりの頃は、『嬢ちゃん』という呼び名を訂正させようとしていたようだが、シャウトには『あだ名で呼ぶのは親愛の証だ』などと言われ、快には『僕もあだ名だよ』と諭され、今ではすっかり諦めたようだ。慣れたのかもしれない。

しかし、それでは名前で呼ばれている自分はどうか、とレヒトが問うたところ、返ってきた答えは『適当なのが思い付かなかった』とのこと。

「ふふ……くしゃみ三度は美人の噂って言うんだよ。待っててね、タオルと着替え、持ってくるから」

そう言って、快は迷うことなく二階へ続く階段をあがって行った。「美人の噂、だとさ。ま、確かに嬢ちゃんは可愛い顔してるからなあ。こりゃあ引く手あまただろうな」

「そ、そんなことはありません。私は、そんな……」

もし、これが快であれば、彼女は慣れた様子でさりとかわすのだろうが、ミオはあまり慣れていないのか、頬を赤く染めてうつむいた。

こういう真面目で純情な女の子をからかうのが大好きなのだ。このシャウトという男は。

案の定、シャウトはにやりと笑い、うつむいたままのミオに問いかけた。

「嬢ちゃんには好きな男とか、いないのか？」

「えっ……好きな、人……ええっ!？」

弾かれたように顔をあげたミオの頬が、また赤くなる。

「はーん、その様子だといるな？ 嬢ちゃんの心を射止めた男の顔が見てみたいもんだな」

「だ、だめですっ！ だって、だってそんな……わ、私……私は……あ、あうあう……」

耳まで真っ赤になつて意味不明な言葉を発するミオ。シャウトはその様子をにやにや笑つて見ている。

「あまりミオをからかうなよ、シャウト」

「わかつた、わかつた」

ミオは、十六歳だという。シャウトが故郷に残してきた、彼が大切に想う少女と、同じ年なのだ。だから、シャウトはミオが放つておけなかつたり、ついつかいかいたくなつたりするのだろう。

「くくつ、悪かつたつて」

屈み込み、シャウトはミオの頭を大きな手でぽんぽんと撫でる。

どこか父親を思わせるようなその仕草に、ミオが瞳をすつと細めた。彼女もまた、帰りを待っているだろう父親を思い出したのだろうか。

「しっかし、まずは着替えねえと気持ち悪……つくしよいつ！」

続けて二回のくしゃみをして、シャウトは鼻をすすった。

「シャウトは二回か」

「二回ですね」

顔を見あわせて頷く二人に、シャウトは怪訝な眼差しを向ける。

「……なに妙なカウントとつてんだ、二人して」

「いや。さっき快から、くしゃみ三回のときは『美人の噂』だって聞いたから、なんとなく……っ！」

レヒトはくると二人に背を向けた。

「四回。……あんたのくしゃみ、猫みたいだな。男らしくないぞ」

「うるさい、くしゃみに男らしいものにもあるか。仕方ないだろう」  
「それも四回たぜ。せめて二回くらいにしとけよ。俺様を見習つて控え目に」

レヒトが言い返そうとすると、タオルと着替え一式を抱えた快が二階から降りてきた。

「なんの話で盛り上がったのかと思ったら、くしゃみ談義？ あ、僕がさっき言ったから？」

そうなんだ、とレヒトが頷くと、快はやっぱりね、と苦笑した。

「なあ、姫。くしゃみ二回ってなんだ？」

「悪口」

「うわっ！ …… 兄貴か？ 兄貴だな！？ 絶対に兄貴だっ！」

一人で吠えているシャウトに視線を向けつつ、竜谷ではシュリークのほうがくしゃみをしているのではないかとレヒトは思った。

「本気にしちゃって。ただの言い伝えよ、言い伝え」

快はくすくす笑うと、二人分のタオルと着替え一式をレヒトに手渡した。

「はい、これ。レヒトにはちよつと大きくて、シャウトにはちよつと小さいかな。まあ、着られるとは思うんだけど」

「ありがとう。…… それと、聞いてもいいかな？」

「なに？」

レヒトは頬を掻いた。

「…… くしゃみ四回って、なんだと思う？」

「うーん…… なんだろうね。三回までは聞いたことあるけど……」

快はしばらく悩んだあと、名案を思い付いたときのように、ぱんつと手を打った。

「風邪、かな」

そう言ってウィンクして見せる。それを聞いたレヒトとミオは、顔を見あわせて笑った。

## 第72話 記憶の中のパールセフォン - 2 -

「へえ……あんた、着痩せするタイプなんだな」

借りている民家の二階にある部屋を、男女に別れて使うことになり、レヒトとシャウトはあてがわれた部屋へと移動し、暖炉に火をいれた。

鎧を外し、中に着ていた衣服を脱いだレヒトに視線を向け、シャウトがそう声をかけてきたのである。

「まあ……俺も一応、戦いを生業にしているからな」

そう答え、レヒトは部屋にあった鏡に、自身の体を映した。

レヒトは決して華奢ではない。彼が細く見えてしまうのは、レヒトが着痩せするというのもあるだろうが、並んで立つ男がシャウトだからというのが大きい。

同じ男として少し悔しい気もするが、こればかりはどうしようもない。生まれ持った体格というものだ。

「傷だらけだなあ」

寝台に腰かけ、頬杖をついたシャウトが言う。レヒトは苦笑した。「それは仕方ない。戦いに従事する以上は」

胸、背中、腕——衣服に隠されていたレヒトの体に存在する、たくさんの傷跡。露出されている上半身だけではなく、下半身にも目立つ傷跡がいくつも残っている。痕が残らないような怪我など、それこそ数えきれないほどだ。

「誰かを守るための戦いじゃ、余計傷は増えるわな」

そう。レヒトは攻めの戦いではなく、守りの戦いを基本としている。襲いくる敵を倒すという点では変わらないが、戦い方はまったく異なる。

これが攻めの戦いであれば、レヒトはふたつのことだけを考えていればいい。いかにして敵を倒すかと、いかにして自分が生き残るかだ。だが、レヒトの戦いはそうではない。レヒトには、なにより

優先させなければならぬことがある。主である、ラグネス・クリスティヌの身の安全だ。

魔界評議會を束ねる議長であり、天界最高責任者レイ・クリスティヌの実兄でもあるラグネス。その命を奪おうと、または拉致しようとして、企み狙う者は多い。そしてレヒトは、彼を守るためであれば、自分の身は厭わない。

シャウトの視線が、レヒトの腹部でとまる。

右脇腹に走る、真新しい傷跡。竜谷で、レヒトが自ら、セイクリッド・ティアで貫いたときの傷だ。すっかり塞がり、痛みもないのだが、この傷跡は一生、消えることはないだろう。

「……なんつーか、悪いことしたな。俺様のせいだよ」

レヒトはシャウトのほうを振り返り、首を横に振った。

「気にするな。俺が勝手にやっただけのことだ。それに、俺は女性じゃないしな。体の傷なんか、気にしない」

「そう言ってもらえると、ありがたい」

口元に笑みを湛え、シャウトが氷色の瞳をすう、と細める。レヒトもなんとなく微笑み返して、窓際の長椅子に腰かけた。

言葉が途切れ、静かになった部屋に、雨の音が響く。少しは、弱まっただろうか。

(……レイヴン……)

レヒトはレイヴンのことを思い出していた。今、どこにいるのかなにをしているのか。

これまでも、何度か魔物と遭遇した。魔物が現れるということとは、『レイヴン』CHILD』が無事であるということだ。苦しめられている人々に申し訳ないとは思いつつも、魔物と遭遇すると、どこか安心する自分がいる。

レイヴンの中に封じられていた存在——それがなんであるかを知った今も、レヒトはレイヴンを救いたいと思っている。

それが、本当に正しいことなのかどうか。どれほど悩んでも、答えが見つかることはない。

しかし、それでも、レヒトはレイヴンを諦めることができなかった。レヒトにとって、レイヴンは大切な仲間であると同時に、生まれて初めてもった、かけがえのない友人であつたから。なんとしても、救いたかった。

ロイゼンハウエルを出発して、二十日が過ぎた。馬をとばせば十日ほどでたどり着くが、レヒトたちは徒歩で移動している。これでも、かなり強行軍で進んできているのだ。

日に日に募る、焦り。突き動かされるように、レヒトは進む。自分一人のわがままで、仲間に無理を強いていることを、レヒトは申し訳なく思っていた。それでも、仲間は文句も言わずレヒトに付き合ひ、支えてくれる。それが、レヒトはただ嬉しかった。

長椅子から立ち上がったレヒトは、ふと興味をひかれ、部屋の隅に置かれた本棚に近付いた。僅かな隙間もないほどに、ぎゅちりと詰め込まれた本。かなり古いものだが、やはり埃はあまり積もっていない。

レヒトはなんとなく、そのうちの一冊を手にとった。

ヘヴンに生きる種族について書かれた本だ。種族の分類、そして歴史などが、事細かに記載されている。しかし、この本はどうやら誰かに読ませるといふ目的で書かれたのではなく、著者の研究の成果をまとめたもののようなのだ。お世辞にも丁寧に書かれているとはいえず、書かれた文字を二重線で消し、その上に新たに書き込まれたりしている。他の本も数冊開いて見たが、すべて同じ筆跡だ。この部屋の主のものだろうか。

その中で、レヒトの興味をひいたのは、この一文だった。

『——分類上は精霊族、竜族だが、能力の面で見ると、干渉系魔法を使う精霊人と、変化系魔法を使う魔精霊、竜族と分類するのが正しいのではないかという者がいる。だが、それは間違いだ。なぜなら——』

その後に続く文章は、滲んでしまつて読むことができない。以前、レイヴンがこれと同じようなことを話してくれたが、どうしても思

い出せない。

「……シャウト」

「ん？ どうした？」

快に渡されたタオルで濡れた髪を乾かしていたシャウトが、本棚の前に立ち、手にした本に視線を落としたままのレヒトの声に反応して顔をあげた。

「……竜族と魔精霊は同じ系統の魔法を扱うんだろ？ どうして同じ種族として扱われないんだ？」

首だけを動かして、シャウトのほうを見てそう問いかけたレヒトに、シャウトは驚いたように瞳を瞬かせた。

「いきなりどうしたんだ」

「この本に、書いてあった。……答えになってる肝心な部分が、潰れてしまつて読めないんだ」

「どれ、見せてみな」

頭にタオルを載せて近付いてきたシャウトに本を手渡し、レヒトは問題の箇所を示した。

シャウトが文字を追いつつ始め、しばし流れる沈黙。ややあつて、シャウトは感嘆の息を吐いた。

「……すげえな。この著者は相当、魔法や精霊なんかに関して深い知識を持つてたんだろ」

「そんなに凄いのか？」

そういつたことに詳しくないレヒトには、さっぱりわからない。

「ああ。……さて、あんたの質問に答えると、魔精霊と竜族の扱う魔法はまったく別物だ。確かに見た感じは似てるかもしれないが、実際には違う。魔精霊は肉体を変化させて身に宿った動物の力を使うが、俺様たち竜族は反対だ。竜の姿を隠すために、肉体を変化させて人間の姿に近付けている」

「つまり……もともと竜族は竜の姿をしているのか？」

「そういうことだ。俺様がまだ物心つく前は、竜族は本来の姿で生きていたらしいぜ。だがな、昔……これも、俺様は覚えてねえんだ

が……ある事件があった。兄貴が言うには、その後、人間に竜族だつてことを悟られないようにするために、姿を変えて生き始めたんだとさ」

その言葉に、レヒトが思い出したのは、竜谷でシュリークが語った悲しい過去の物語。覚えていないとはいっても、自身の両親が、その事件で心ない人間たちに命を奪われたことは知っているだろう。レヒトはこれ以上、その話題に触れないことにした。

「そうか……ありがとう。なんとなくわかった気がする。要するに、魔精霊と精霊人は、もともと人間と大差ない外見をしていて、竜族は本来の姿を変えて、人間に近い姿をとっている……だな？」

「そういうことになるな。しかし……この著者は何者だ？ そんなことまで知ってるなんぞ。竜族ならとにかく、これを書いたのは精霊人だぞ」

「どうしてわかるんだ？」

首を傾げるレヒトに、シャウトは開いた本を指でとんとんと軽く叩いた。

「文字に、癖がある。今でこそ、ほとんどの種族が同じ言葉を使ってるが、昔はそうじゃなかった。話す言葉は同じでも、文字に記すとなると、それが顕著に表れる。この文字は人間の言葉だが、精霊人の文字の癖が残ってる」

なんとなく読み辛いと感じたのは、字が汚いなどという問題ではなく、慣れていないからだというわけだ。

「よっぽど研究熱心だったんだな。……さてよ、そういえば……」  
「シャウト？」

「兄貴のダチに、精霊人がいた。珍しいと思ったんだ、あの兄貴に……俺様は、あんまり興味もなかったし、ドラゴン・リバティにすることも少なかったからな。実際に会ったことはねえが……十年前の精霊狩りの犠牲になったって話は聞いた」

その言葉が、レヒトの心に引っかかった。まさかな、とレヒトは首を振る。

手にした本を戻そうとすると、本の間に挟まれていたのだろう、ふたつに折りたたまれていた一枚の紙が、ひらりと舞った。

レヒトはそれを拾い上げ、なんとなく、折りたたまれた紙を開いてみた。

そして、レヒトは言葉を失った。

「どうした、レヒト。それは？」

同じように、レヒトが手にした紙を覗き込んだシャウトが、瞳を細める。

それは、一枚の肖像画だった。だいぶ色褪せてしまった、古いものだったが。そこに描かれていた人物は、二人のよく知る人だったから。

「……姫？」

悪戯っぽい笑顔で、隣に立つ男に腕を絡ませているのは、快だ。

そして、その隣で、微笑んでいるのは――。

「……琥珀の瞳……」

「天界で会った奴か」

「……ああ。その前に、真魔界でも会っている。……そうか、あのときも……」

レヒトは、彼がなぜ魔物に襲われた自分たちを助けたのか、理解できずにいた。だが、ようやく謎が解けた。あの男はレヒトたちを助けたわけではない。快を助けたのだ。

「……しかし、だとすれば、なぜ？」

そう呟いて、レヒトは瞳を閉じた。混乱している。考えれば考えるほど、答えが逃げていくような気がした。

### 第73話 錯綜する想い - 1 -

普段であれば気にもならない雨音が、今夜はやけに耳についた。昼過ぎから降り始めた雨は、未だやむ気配もなく降り続いている。少しは、弱まっただろうか。

長椅子に横たわったまま、妙に冴えた頭で、レヒトは一人、ぼんやりと物思いに耽っていた。

眠ってしまいたいと思う時に限って、睡魔は襲ってこなかった。体は、疲れているはずなのに。

頭に浮かぶのは、あの肖像画のことばかりだ。

精霊狩りの犠牲になって死んだという、快の恋人。鋭い琥珀色の瞳と硬い金色の髪が、どこか猛禽類を思わせる。確か、疾風といったか。

向かいの長椅子で眠るシャウトを起こさないように、レヒトはそっと身を起こし、机に置かれたランプを手に取り、部屋の隅の本棚へと向かう。

あの肖像画は、見付けたときと同じように、折り畳んで本の間に挟んでおいた。ランプの仄暗い明かりを頼りに、レヒトはその本を見付け出す。

目的の本を引き出すと、その隣に置かれていた本が、大きな音をたてて床に落ちた。

響いた音に、慌ててシャウトのほうを振り返るが、彼は熟睡しているのか、起きる気配はない。

レヒトは安堵の息を吐き、落ちた本を拾いあげた。

『魔法研究』と題された分厚い本を、レヒトはぱらぱらと捲った。細かい字で、隙間もないほどにびっしりと書き込まれている。

シャウトの言う通り、彼は魔法に関して並々ならぬ知識を有していたのだろう。

ふと、レヒトは頁を捲くる指をとめた。開いた頁の一番上に、『

禁断魔法・死者蘇生』と書かれている。

レヒトは持っていたランプを本棚の上に置き、その本を読み始めた。

書き殴られたような特有の文字は、そのあちこちが二重線で消され、上書きされており、解読は難解を極めた。それでも、レヒトは読むのをやめなかった。知らなければならぬと、そう思ったのだ。それだけで数十頁にも及ぶ膨大な研究記録。それをなんとか読み終えたレヒトが理解できたのは、ほんの僅かなことだけだったが――

レヒトは首を振り、本を閉じた。最後の頁に、後から付け加えるように書かれた言葉と、この街にたどり着く少し前にレヒトが見た夢の内容とが、すべての謎を解いてくれた。

レヒトは本を棚に戻し、もう一冊の間に挟まれた肖像画を取り出した。

肖像画に描かれた二人は、幸せそうな笑顔を見せている。もう二度と戻ることのない、幸福だった過去の時間。そして訪れる悲劇を、肖像画の中、笑う二人はまだ、知るよしもない。

「……君は……すべてを知っているのか……？」  
手にした肖像画に語りかけるも、答えは返ってこなかった。

部屋を出たレヒトは、階下から漏れる僅かな明かりに気付いた。音をたてないように、階段を降りる。

「……快？」

レヒトに背を向ける形で椅子に座っていた快が、驚いたように振り返った。

「どうしたの、レヒト？」

微笑んで見せるその瞳に、影が落ちたように感じるのは、背にしたロウソクのせいだけではないだろう。

「……なんとなく、寝付けなくてな。君は？」

「うーん、僕もそんな感じかな。いろんなこと、思い出しちゃって

ね……」

レヒトへと向けられた眼差し。だが、その瞳はレヒトを映してはいない。レヒトを通して、過去をもにした男の姿を見ているのだ。あの肖像画の中で笑う快も、そして今、レヒトの目の前で微笑む快も、レヒトのことを見ていない。彼女が見ているのは、彼女が求めているのは、いつだって、レヒトではないのだ。

なぜだろう。たったそれだけのことなのに、なぜか無性に腹がたった。

「あ、なにか飲む？」

「いや……」

短く答え、レヒトは数歩、彼女に歩み寄る。快はレヒトから、机に置かれた小さな口ウソクたてに視線を移し、積もった埃を指で拭いた。

「あんまり戻ってこれないから、すぐに埃がたまっちゃうんだ」

快はときおり、どこか寂しそうに微笑んで見せる。人を拒絶する、美しい微笑。

「君は……ここに、住んでいたんだな」

「……まあ、ね。ずっと、昔のことだけど……」

「恋人と？」

快はなにも言わない。しかし、僅かに細められた瞳が、それが答えだとレヒトに告げる。

寂しそうな、彼女の横顔。レヒトの胸に、暗い感情が渦巻く。

「……君は、俺に言ったな。人を探して旅をしていると。……その人はもう、いないんだろう？」

レヒトがそう問いかけると、快の顔から微笑みが消えた。

「そんな話……誰から聞いたの？」

「……精霊王様からさ。君と一緒に精霊界へ行つたときに。君が探している人……疾風という人は、十年前の精霊狩りで……犠牲になったと聞いた」

「そう……。パパってば、そんなこと言っただ……」

ぼつりとそう呟いて、快は瞳を閉じた。

「確かにね、僕と疾風は精霊狩りにあつた。この街で……」

そう言いかけ、快は首を横に振る。十年前、自身と恋人とを襲った悲劇を、思い出したのだろうか。

「けど、レヒトも見ただしよう？ ……彼は、生きてた。死んでなんか、いなかったんだよ……」

再び開かれた快の瞳の中に宿る、深い深い、悲しみの色。

「快。君は……本当は、すべてを……」

「嫌！ 聞きたくない！」

「聞くんだ、快！」

耳を塞ごうとした彼女の両手を掴み、レヒトは声を荒げる。

レヒトはただ、突き動かされていた。自分でも理解することのできない、暗く冷たい感情に。

「過去を悲しまず、未来へ進めと言っていたのは君だろう！」

うつむき、顔を背けた快が、唇を噛み締めたのがわかった。

「快……どうして現実を見ようとしない。君は知っているはずだ。

彼は、もうこの世には……」

「やめて！」

顔をあげた快の瞳には、涙が溜っていた。まっすぐにレヒトを見据える、その瞳の鋭さに、レヒトは言葉を失った。

「なにがわかるっていうの！？ なにも知らないくせに……わかったようなこと言わないでよ！」

「快、聞いてくれ。俺は……」

「もう嫌！ 離してよ！」

掴んでいた手を、振りほどかれる。

その瞬間、抑えきれなくなった感情が、一気に溢れ出したのを、レヒトは感じた。

「……いつまでも……」

彼女に振りほどかれた手を、レヒトはぎゅっと握り締める。

「いつまでも、死んだ人のことを想い続けていたって、仕方ないだ

ろう！」

快が瞳を見開き、息を飲んだ。

それと同時に、頬に感じた衝撃。

叩かれたのだと、レヒトがようやく理解したときには、その場から彼女の姿は消えていた。

「っ……………」

ふらふらと椅子に座り、レヒトは両手で顔を覆う。

「……………最低だ。俺は……………なんてことを……………」

レヒトの心を支配していた、暗く冷たい感情は消え失せ、代わりに胸に湧き上がるのは、激しい後悔と自己嫌悪。

開け放たれた扉から、雨が吹き込んでくる。未だやむことのない雨の中、飛び出して行った快。

いまさらになって、叩かれた頬がひどく痛んだ。

## 第74話 錯綜する想い - 2 -

悲しみの雨が降る街を、快は独り、ゆっくりとした足取りで歩いていた。

雨雲に月が隠れた夜でも、この街は薄ぼんやりとした、どこか幻想的な光に包まれている。それが、この街が『闇に光る真珠』——パールセフォン——と呼ばれる理由のひとつなのだ。

街を包む光の正体は、精霊界でしか採掘できない、希少な鉱石である。この鉱石が、街のあちこちにちりばめられているために、街全体が微かな光を放っているように見えるのだ。

パールセフォンが造られたのは、三百年ほど前のことになる。天魔大戦で失われた、精霊人と人間の絆。それを取り戻すべく、一人の精霊人が立ち上がった。他の誰でもない、快のために。

混血児である快は、精霊人からも、人間からも、認めてはもらえなかった。精霊王となった父親と、天界最高責任者に就任した伯父のおかげで、迫害を受けたり、追放されたりといったことはなかったが、居場所はどこにもありはしなかった。

物心つく前に母親を亡くし、公務に追われる父親とも離され、幼い頃から、快はずっと寂しさを抱いて生きてきた。そんな快にとって、ときおり旅から帰ってくる父親の友人だけが、唯一の遊び相手であり、理解者でもあった。

そして、その想いが愛に変わったある時、快は彼に付いて精霊界を旅立った。彼とともに世界各地を旅し、快は知ることになったのだ。世界には、自分以外にも、多くの混血児がいるのだと。

天魔大戦が起きる前までは、精霊人と人間は親しかったのだ。他のどの種族よりも、関係が深かったと言っている。そのため、多くの混血児が生まれた。

精霊人と人間との混血児は、その多くが魔界人の血を受け継いでいる。快のように、天界人の血を引く一部の者は別として、命の長

さも人間とほとんど変わらず、また外見も人間と大差ない。

人間と異なることといえば、ほんの少しだけだが魔力を持ち、精霊を感知できるということくらいだ。それも、弱すぎて魔法は扱えない。天候の変化や、大きな自然災害を知る程度の力しか、持たないのだ。

混血児たちは、そのほとんどが魔界と精霊界の境である、パールセフォン周辺を生活の地としていた。

しかし、天魔大戦で双方の関係が悪化すると、混血児たちは住み慣れた土地を追われ、迫害を受けた。どちらの種族からも、認められることはなく。

そんな悲しい現実があることを知った快は、ふたつの種族の間に絆を取り戻すため、彼とともにパールセフォンを造り上げたのだ。居場所をなくした混血児を迎え入れるため、そして、いつか精霊人と人間が、再び手を取り合い、ともに生きてゆけるようにとの願いを籠めて。

長い年月をかけて、たった二人で造り上げた小さな街。やがて、この街にもぼつりぼつりと人々が集まり始め、地図にも載らない小さな街は、精霊人と人間、ふたつの種族が共存する、楽園となった。取り戻した、絆。それは、まだまだ弱いものだったけれど。それでも、快は信じていた。この街に笑顔が増えるたび、嬉しくなった。精霊人と人間、異なる種族は、理解しあえるのだと。ともに、生きることができるとのだと。

幸せだった。あの忌まわしい事件が、起きるまでは――。

街の中央部にある広場、その石碑の前で、快は足をとめた。微かに光を放つ石碑に背を預け、その場に座り込む。

快はこの場所が好きだった。この街を見渡せる、お気に入りの場所。この街に住んでいた頃は、それこそ毎日のように足を運んだ。

買い物ついでに、会話に花を咲かせる女性たち、広場で遊ぶ子供たち、露天商の威勢のいいかけ声が響く、活気に満ちた街――そのすべてを見渡せるこの場所で、快は飽きもせず、一日中その様子を

眺めていた。

やがて日が傾き、一番星が空に見えた頃、人々は愛する人の待つ家へと帰っていく。ちょうどその時間に、彼が迎えに来るのだ。なにも言わずにそっと近寄り、快の隣に腰をおろして。

彼が短く発する一言に、快は小さく返事をして、立ち上がり、歩き出した彼の数歩後ろを追いかける――。

そんな平和で幸福な毎日が、永遠に続くと思っていたのに。

「……どうして、だろうね。どうして、こんなことに……」

数えきれないほどに、繰り返した言葉。探し求める答えは、未だ見付かつてはいない。

「ねえ、疾風。見てる？」

闇にぼんやりと浮かび上がる街並みに目をやって、快は静かに語りかける。

「貴方と僕の楽園は……あの頃と、なにも変わってないんだ。……この広場も、あの家も、この街並みも……ずっと、変わらない。記憶の中に残る、パールセフォンそのままだよ……」

刻の流れに取り残され、この街は幸せだった過去の記憶を見ている。なくしたものを、忘れられず。

「だからね、余計に信じられないんだ。あれから十年も経つのに。

……僕はまだ……」

快は小さく頭を振った。

「あの日以来、僕の心はとまったままだ。この街と同じように……僕も過去の世界を生きている。……貴方は、怒るかもしれないね」

そう呟いて、快はふつと微笑むと、だいぶ弱まったとはいえ、まだ雨が降り続く空を仰ぎ、その瞳を閉じた。

閉じた瞳の奥に、別れ際のレヒトの眼差しが映る。

「……いつそ、この街が壊れてしまったなら……僕は、すべてを忘れることができたのかな……」

「忘れたかったのか？」

背後から響いたその声に、快は瞳を見開いた。急ぎ振り返るも、

目に映るのは微かな光を放つ石碑だけ。

「誰……」

「俺を忘れたのか、快？」

今度の声は、姿をもって現れた。

快が背を預けていた石碑の向こうから、一人の男性が姿を現す。

赤銅色の肌に、硬い金色の髪。そして鋭く澄んだ琥珀の瞳。

「なにを驚いた顔をしているんだ。幽霊だとも思ったか？」

そう言つて、驚愕に動けずにいる快に、彼は小さく笑いかける。

彼が歩を進めるたび、金属製のブーツが音をたて、雨に濡れた髪

や衣服から、雫が滴った。

「……僕、今すぐ都合のいい夢を見てるのかもしれない……」

「夢、か。そうだな、そうなのかもしれん。だが……」

そこで言葉を切り、男性は座り込んだ快に、そつと手を差し延べた。

快はしばし躊躇い、恐る恐る、彼の手をとった。

これは自分の記憶が作り出した都合のいい幻で、手を伸ばしたら、跡形もなく消えてしまうのではないかと、快は一抹の不安を抱いていたが、しっかりと掴んだその手は、夢でも、幻でもなく。

彼が力強く快の手を引き、さしたる力をいれていなかった快は、反動で彼の胸へと飛び込むことになった。

「……これが夢であるなら、このまま目覚めなければいいだけだ。

……違うか？」

胸に抱いた快に向けるその眼差しは、幸せだった過去の時間と同じように、優しく。腕に抱かれるその感覚も、心の中に眠る甘い記憶と同じ。

「うん。……けど……」

快を抱くその胸に、その腕に、あの頃は確かに感じるこのできた、温もりはない。

「……冷たいよ、疾風……」

震える声で呟き、それでも彼を求めるように、彼の背に腕を回す。

疾風はすう、と瞳を細めた。

「……。雨の中を、ずっと歩いて来たからな……」

「うん、そうだね。……そうだよね……」

「……ああ、そうさ……」

お互いの姿を映す瞳の中に、優しい嘘を滲ませて。刻のとまった箱庭の中、気付かぬふりをして、その甘さに酔いしれる。

「……疾風……」

「うん？」

「……ずっと……会いたかった……！」

琥珀の瞳に、悲しい微笑みを見せて、疾風は雨に濡れた快の体を掻き抱く。あわせた唇と、背にまわされた腕、そして、その胸の冷たさが、快はひどく悲しかった。

第75話 錯綜する想い - 3 -

「……変わらん、ここは」

薄ぼんやりと光る街を眺めて、疾風が呟く。この街で過ごした日々を、思い出しているのだろうか。

「うん。ここは昔のまま。あの頃と、なにひとつ変わらないよ」

瞳を閉じれば、優しい思い出が、色鮮やかに蘇る。

「……この街にいるのは、僕と貴方だけになってしまったけど」

「なに、構わんさ。もともと、ここはお前のために造った街だ」

視線を快のほうへと戻し、唇を笑みの形に歪める。

「俺とお前がいれば、それで問題はあるまい？」

快は数回瞬きを繰り返し、蒼穹色の瞳をずっと細めて微笑んだ。

「……そうだね。ふふ、なんだか昔に戻ったみたい」

「昔？」

「覚えてない？ この街が完成したときのこと……」

瞳を閉じて眉間に手をあて、記憶を探っていた疾風が、どこか苦笑にも似た表情を見せた。

「ああ、あの時か」

「そうそう。誰もこなかったらどうしようかって僕が言った時も、貴方は同じことを言っただよ」

「……そう、だったな。覚えていたのか」

「もちろん。忘れるはずないでしょ。ずっと覚えてたよ。だって疾風ってば……」

快は口許に手をあてた。疾風の眉が僅かに跳ねる。

「あんな気障な台詞……」

笑いを堪えながら言うと、疾風はふいと視線を逸らした。暗くてよく見えなかったが、彼の頬が微かに赤いことに快は気付いていた。

「……忘れる」

「えゝ？ 嫌だよ、あんな疾風、滅多に見られないもの」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、快はなにかを思い付いたように、ぽんと手を打った。

「確か、ちょうどこのあたりだったよね。それで、僕の手をとって……こうやって……」

快は片膝を付き、正面に立つ疾風の右手をとる。女王と傳く騎士、とでもいった風に。

「……おい」

「うーん……なんか変な感じ」

「当たり前だ。まったく……」

小さくため息を吐き、疾風は手を貸して快を立たせる。

しばし見つめあい、どちらともなく微笑んだ。

「……少し、痩せたか？」

快の頬に触れ、琥珀の瞳を細める。貴方のせいだよ、と返せば、疾風は喉の奥で笑った。

「……ずっと、俺を探していたのか。十年もの間、お前は……」

「いつまでも過去に縋るなって……怒る？」

「……いや」

そうとだけ答えると、疾風はなにかを思案するように、その瞳を伏せた。

「十年。そっか……あれから、まだ十年しか経ってないんだっけ……」

……

すべてを失ったあの日——もう、ずいぶんと過去のことのように感じる。それでも、あの日に感じた絶望は、今でも心に、深い傷跡を残している。思い出すだけで、胸が押し潰されそうになるほどに。

悪夢にうなされ、眠れなかった夜など、それこそ数えきれない。

それまで一滴も飲まなかった酒を、浴びるように飲み始めたのも、悪夢から逃げるためだった。

「……不思議だね。貴方と一緒に過ごした時間のほうが、ずっと長いはずなのに……。たった独りの十年間は……長かったよ……」

幼い頃から、慣れていたはずなのに。孤独を抱いて、生きてきた

のに。

いつからだろう、独りの寂しさに、気付いてしまったのは。

「もう、僕のこと置いて行かないで。……独りは、嫌だよ……！」

決して叶わぬ望みだと、わかっていても。そう願わずにはいられない。

それ以上のことは望まない。他にはなにもいらないのに。

その願いが、叶うことはない。

「……快」

疾風は快の頬に触れた手を顎へと移し、そっと持ち上げて。そして、ふっと微笑んだ。

「……俺も、そのつもりできた。いまさらなにをと、お前は思つかもしれないが……」

瞳を細め、もう一度だけ口づけ、囁く。

「俺と、ともにきて欲しい。これからは、ずっと一緒だ。……永久に、な」

「……疾風……」

優しい琥珀の瞳の奥に、なにか、強い決意の光を宿らせて。その瞳の向こうに、快はレヒトの姿を見たような気がした。

「……優しいね」

「快？」

「……ありがとう、疾風……。けど、一緒にはいけないよ」

そう呟き、快は数歩、後ろへ退く。

まだ、手を伸ばせば届く距離だ。だが、その手が届くことはない。二人の間に横たわる悲しい現実が、それを許してはくれないから。

「……これはきつと夢なんだ。僕の弱さが創りだしてしまった優しい夢。……もう、眼を覚まさなきゃね」

優しくかった過去に縋って、ずっと現実から目を逸らしてきた。それではいけないと、そう教えてくれたのは――。

「……僕は、もう……」

「あの男か」

「え？」

聞き返す快に、疾風は琥珀の瞳を向けた。普段は穏やかなその瞳に射抜かれ、身が竦む。彼にそんな冷たい眼差しを向けられるのは、初めてだった。

「お前の心を縛るのは、あの男なんだな？」

「……なにを、言ってるの……？」

言葉の意味を理解できず、快は眉を顰める。

「俺と一緒にはいけないと……お前はそう言ったな」

「……言ったよ。だって、貴方は……」

言いかけた言葉は、声にはならなかった。

「……昔のお前であれば、俺と来ることを望んだはずだ。……あの男だろう、お前の心を縛っているのは」

「疾風……」

「俺はお前を連れていく。その邪魔になるのであれば、誰であろうと殺すだけだ。誰にも……邪魔はさせない」

静かな殺気を身に纏い、疾風が動く。動けずにいた快の横をすり抜け、疾風はまっすぐに歩いてゆく。

「！……待つて！」

彼の手を掴む。振り向いた疾風の瞳が、ほんの僅か、驚愕の色を滲ませた。

自身の胸へと向けられた、快の銃口を映して。

「……本気とは思いたくないが？」

「そうだね……まさか昔の恋人に、銃を向けることになるとは思わなかった」

疾風がすう、と瞳を細める。無意識のうちに、快は掴んだ疾風の腕を握り締めていた。

「快……自分がなにをしているか、わかっているのか？」

「……わからないよ。頭の中、ぐちゃぐちゃだもん……」

快は瞳を閉じてうつむいた。

「銃をおろせ、快。お前と戦う理由はない」

「貴方にはなくても、僕にはあるの。貴方が、僕の仲間を傷付けようとする限りは……この銃を、おろすことはできない」

「……変わったな、快。昔は、魔法の訓練でさえ嫌がっていたというのに」

魔法が苦手な父親に代わり、快に魔法の扱い方を教えたのは疾風だった。

父親とは違い、快には天才的な魔法の才があった。並外れた魔力を有していた、母親に似たのだ。

快は師である疾風ですら舌を巻くほどの才を惜しみなく発揮し、数多い魔法の中でも難しいとされる治癒魔法までも難なく習得した。しかし、どうしたことが、快はそれより遙かに難度の下がる、攻撃系統の魔法を一切扱えなかったのだ。精霊人のほとんどが扱える基本ともいべき魔法である。

これではなにかあった時に、己の身すらも守れないと、憂慮した紅蓮が、彼女に銃を与えた。天魔大戦時代、彼が三闘神から与えられたものである。しかし、快は得意の魔法でそれをペンダントに変えてしまったのだ。

思わず顔を見合せて苦笑した疾風と紅蓮に、まだ幼かった快は言ったのだ。

誰かを傷付けるのは怖い、と。

「そうかもね。ううん、今だって好きなわけじゃない。……けど、もう嫌なんだ。僕の弱さのせいで、誰かが犠牲になるのは……もう、嫌だよ……」

瞳を閉じた快の脳裏に、仲間の姿がよぎる。

シャウト、ミオ、レイヴン——そして。

(……レヒト……)

優しく、いつだって快を気遣ってくれたレヒト。そんな彼が見せた、厳しさ。

それは、快にとって衝撃で。けれど、彼のおかげで、快はようやく気付くことができたのだ。自分の弱さと、正面から向き合うこと

ができたのだ。

「たとえ貴方だろうと、僕の仲間を傷付けることは絶対に許さない。

……僕が相手になる」

「倒せるのか、この俺を」

「……倒してみせる。僕は現在いまを生きてる。ようやく、それを認めることができた。……レヒトが、それを思い出させてくれたから。

……僕はもう、逃げない」

溢れそうになる涙を、必死に堪え。震えそうになる腕に、ぎゅっと力を籠め。嗚咽を押し殺し、唇を噛み締めて。

「……この手で、過去を断ち切る！」

まっすぐに疾風を見据えた快の瞳には、哀しくも美しい光が宿っていた。

第76話 過去との決別 - 1 -

向かい合って対峙する二人の間を、一陣の風が吹き抜ける。

「……そうか」

琥珀の瞳を伏せ、疾風はため息とともに、小さくそう呟いた。

「それがお前の答えか」

その言葉が、終わると同時に。

快は掴んでいた疾風の腕を離し、真横に飛んでいた。そのすぐ横を、銀色の残像が過ぎる。

「今のは……」

疾風の右手に輝く数本の投げナイフを視界に収め、快は小さく苦笑した。

「……本気で殺す気だったね」

「ああ。言ったはずだ、お前を迎えに来たのだと。……俺にはもう、時間がない」

そう言って、疾風は胸の前で両手を交差させた。彼が本気になったときにだけ見せる、特有の構え方だ。

覚悟はしていたはずなのに。最初に彼に銃口を向けたのは、間違いなく快のほうであったのに。

こうして実際に刃を向けられると、心が締め付けられるように痛んだ。

（……弱いな、本当に……。けど、僕は……！）

心を、押し殺して。

快は瞬時に頭の中を切り替える。

状況は、圧倒的に不利だった。

疾風は強い。稲妻にもたとえられるほどの俊敏さを活かした体術、そして特筆すべきは、魔法に関する並外れた知識と、その応用力――どれをとっても、快では到底敵わない。

しかし、武器と、魔力に関しては、快のほうやや有利ではあつ

た。

疾風の得物は、近接戦闘にも使用可能な投げナイフで、その切れ味もかなりのものだが、快が扱うのは、彼女の父親が三闘神より与えられた、伝説の武器。

一発でもその身に受ければ、致命打となるほどの威力を秘めている。だが、彼がそれを受けてくれるかは、厳しいと言わざるを得ない。

となると、やはり魔法の使いどころが重要となるのだが――快に魔法を教えたのは、他ならぬ疾風なのである。いかに快到魔法の才があるうと、簡単に超えられるような相手ではない。

純粹に魔力だけを見るならば、快のそれは疾風を凌駕しているだろう。

魔力とは、簡単に言ってしまうえば、産まれながらに備わった、精霊を感知し、行使する能力のことを指す。この魔力が高ければ高いほど魔法の威力が増し、そしてより高度な魔法をも扱えるというわけだ。

実際、快は疾風が扱えない魔法を、いくつか扱うことができる。

しかし、魔法を行使する上で重要となるのは、魔力の高さだけではない。

重要なのは、魔法に対する深い知識。魔法の特性をよく理解することが大切なのだ。

疾風は魔法研究を趣味としていた。魔法に関する彼の知識は、並々ならぬものがある。とすれば、当然、魔法の特性やそれに対する対応策なども、知り尽していると考えたほうがいい。

下手な小細工など、通用しないだろう。とすれば、なんとか隙を見付けて、一撃必殺になるような攻撃を叩き込むか。あるいは避けにくい広範囲型の魔法で手堅く攻めるか。そのどちらかだ。

体力で劣る快は、持久戦になれば勝ち目はない。やはり、一撃必殺での短期決戦を狙うしかないだろう。

長いようで短い睨みあいの中、快が攻撃方針を決めた、そのとた

ん。

それを待つていたかのように、疾風が口を開いた。

「もう少し穏便にいく予定だったが、仕方あるまい。……無理矢理にでも連れていくぞ！」

言葉と同時に大地を蹴り、疾風が迫る。

胸を抉る形で振られた右手のナイフを後方に飛んでかわし、それを見越して放たれた左手のナイフを銃で弾く。

「大地よ、飲み込め！」

疾風の言葉に弾かれ、大地がうねり、たゆたう。大きく盛り上がった大地は、彼女を飲み込もうと左右から迫るが、快は呪文を唱えつつ、大きく後方へ飛ぶ。

「風よ、羽ばたけ！」

風の翼を纏い、快は虚空へと舞い上がった。波のように流動する大地は風に阻まれ、快を傷付けることなく崩れ去る。

虚空を舞う快の姿を捉え、疾風は琥珀の双眸を細めた。

「飛翔魔法……」

その名の通り、風を行使して、使用者を空中に飛ばす魔法である。使用者は風の結界に包まれるので、魔法に対してだけではなく、直接的な攻撃に対しても防御壁となる、かなり高度な魔法だ。

しかし、使用中はずっと魔力を消耗し続けるので、よほど魔力の高い者でなければ、長時間飛び続けることは難しい。この魔法で空中散歩などしようものなら、五分とたたずに力尽きることうけあいである。

そして、これは他の魔法にもいえることだが、この魔法を扱っている間は、別の魔法は使えない。明かりを生み出す程度の簡単な魔法であれば別として、基本的に複数の魔法を同時に行使用することはできないのだ。つまり、こうして虚空を飛翔している限り、快は魔法による攻撃を封じられているということになる。

虚空を飛翔したまま、快は手にした小型の二挺拳銃を、連射の利く巨大な銃へと変化させた。

一瞬、上空を見上げ、動きのとまった疾風に照準をあわせ、快は引き金にかけた指を躊躇うことなく引いた。だが、身を貫かれるその瞬間、疾風は瞬間移動のごとき速さで身をかわし、身を低くして疾走する。

快も疾風の軌道を読み、的確に狙いを定めるも、疾風はそれを難なくかわすと、確実にある一点を目指し、まさに風をも超え、地上を駆け抜けた。

快が疾風の狙いに気付き、飛翔魔法を解除すると、疾風が魔法を発動させるのは、ほとんど同時だった。

「焰よ、踊れ！」

快の真下に移動した疾風が、上空の快に向けて魔法を発動させる。飛翔魔法には、ある致命的な欠点がある。機動性の低さと、真下からの攻撃に対する防御能力がないことだ。

それを知っていた疾風は、快の攻撃を避けつつ、気付かれないように接近し、真下から魔法を放ったのである。機動性の低い飛翔魔法では、真下から放たれた魔法を避けられないことを確信して。

飛翔魔法を解除し、落下する快を、疾風の放った焰が襲う。

「風よ、舞え！」

焰は快の身を焦がす寸前、風に弾かれ、その軌道を変える。たつた今、魔法を放った疾風自身へと。

しかし、疾風は避けようともせず——焰は彼の姿を飲み込み、大地を叩いたその影響か、周囲に真白い煙を巻き上げた。

快は再び風を行使し、未だ煙の立ち込める地上へと、静かに着地する。焰が直撃したからだろうか、大地は煮沸し、周囲には凄まじい熱気が立ち込めていた。

「……どうして」

あの時、疾風は避けようともせずに、ただじつと快のほうを見上げていた。

あれで確実に快を仕留められたと、思っていたわけではないだろう。快が飛翔魔法を解いた瞬間に、彼女が反撃に転じるだろうこと

は、簡単に予測できたはずだ。

そして、疾風が焰に焼かれるその瞬間、彼が笑みを浮かべていたように見えたのは――。

「そんなはず、ないか……」

快がそう呟き、自身の周囲に纏わりつく風を解き放った、その刹那。

「氷よ、砕け！」

その言葉に弾かれ、周囲を漂っていた真白い煙――霧が、無数の鋭い氷の欠片と化し、解き放たれたばかりの風に乗って快を襲う。魔法を使っている暇などない。快はとっさに両腕で顔を覆った。氷の欠片は肌を裂き、快の白い肌を鮮血で彩る。快は身を折り、激しく咳込むと、少量の血を吐いた。僅かに吸い込んでしまった氷の欠片が、喉の奥を裂いたのだろうか。

風に煽られた氷の欠片は大地に突き刺さり、煮沸していた大地を冷え固まらせた。

晴れた霧の向こう、その姿を見付けて、快は銃を再び二丁拳銃へと変化させる。

「……これでわかっただろう。お前では、俺には勝てない」

「悔しい、けど……そう、みたいだね」

擦れる声でそう答え、快は慎重に間合いをとる。

先ほど疾風が使ったあの魔法、殺傷能力は微々たるものだったようだ。体も動かし、出血もたいしたことはない。

だが、問題なのは、思考を邪魔するこの痛み。

これは、事実上、快の魔法が封じられたことを意味する。

（僕じゃ……勝てないの……？）

快は唇を噛み締め、少し離れて立つ男を見据える。

焰に直撃されるその瞬間、疾風は水を行使し、焰を打ち消すと同時に、周囲に霧を発生させたのだろう。ぎりぎりまで避けなかったのは、焰が大地を叩いた際の土煙と判別できないようにするためだったのか。

風を行使している快は、自身も纏わりつく風によって視界を遮られ、霧は風に阻まれてしまい、実際に風を解き放つまでは、それが霧なのか土煙なのか、判別するのは難しい。冷静でなければ、なおのこと。

そして、快が風を解き放つと同時に、霧を氷へと変化させた。解き放ったばかりで、彼女の周囲を舞っていた風が、結果的に氷を集め、彼女自身を傷付けることになった――。

「……そろそろ、終わりにするか」

疾風が快に向け、右手を掲げた。

「風よ、弾け！」

殺傷力など皆無の、強風を生み出すだけの魔法である。本来、術者を中心に発生させ、飛び道具などを迎撃する目的で使われるのだ。疾風はこれを快に向け、一直線に放ったのだ。

横に飛んでかわそうとした全身を痛みが駆け抜け、快の動きが一瞬间、とまる。風の唸りが、耳元で聞こえ、視界が反転した。

そして、感じた衝撃と、激痛。それでも、意識を手放すまいと、傷を負った肌に爪をたて、身を起こす。

朦朧とした意識の中、歪む視界に映ったのは、先ほど快が手放した二丁拳銃の片方を構え、引き金に指をかける疾風の姿。

刹那の時間が無限のごとく――。

（ああ……僕、死ぬんだね……）

動くこともできずに、ただぼんやりと、自身に死を与えるであろう男に向けていた快の瞳に、深いワインレッドの残像がよぎった。

（……レヒト）

過去に縋り、現実から目をそむけ続けてきた快を、彼は叱ってくれた。彼のおかげで、気付くことができたのに。ひどい言葉を、たくさん投げ付けた。

きつと嫌われただろうな、と快は寂しそうに苦笑した。

それでも構わない、許して欲しいなどとは言わないから。せめて、もう一度だけ会って、直接、伝えたい。

ありがとう、と。ごめんなさい、を。

瞳を閉じた快に届いたのは、身を貫く熱さでも、死に落ちゆく冷たさでもなく。

そっと抱き締められるような、あたたかさ。

その感覚に、恐る恐る瞳を開いた快に、ワインレッドの瞳が微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0539b/>

---

HEAVEN～大いなる意思編～

2010年10月9日15時24分発行